対なる剣～光と闇の狭間で何を見るか？～

蒼雷のユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
対なる剣～光と闇の狭間で何を見るか？～

【Ｎコード】
Ｎ２２５１Ｗ

【作者名】
蒼雷のユウ

【あらすじ】
☆現在の最新話　第二十二話「山紅猫団」。（作者急病により一時休載）

邪神と魔剣使いという存在によって、世界エクスペリアが滅亡しかけた。聖騎士の活躍により、その戦いに終止符を打った時代から約千年。

相反する二人の人間が数奇な運命で出会った。

安定した生活を得る為に騎士登用試験へと志願し、冷静沈着で強い現実主義を持つ元傭兵、ゼス。全ての人を救う、そんな騎士物語によくある理想を体現する為、鍛え上げた実力で騎士になろうとする貴族令嬢、シェリー。

戦術、性格、思想に至るまでの真逆な二人が、次第に国の巨大な陰謀の波に巻き込まれていく。

これは現実の深い闇を知る青年と理想の眩い光を目指す少女との間で織り成す、二人が行き着く答えを見つける物語。シリアス≧コメディ≧恋愛の要素をその比率で語る、異世界ハイファンタジー奮闘記。

※本作品は私が小説家としての原点であるサイト「ＳｔａｒｔＬｉｎｅ」様にも投稿しています。

プロローグ（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

※読みにくい場合は、感想か作者の活動報告にコメントを頂ければ対応いたします。

プロローグ

降りしきる雨。
天を覆う灰色より暗い雲は時折鋭い雷を落とす。
辺りは薄暗く、散乱している資材は建築用のものだ。
点在する残骸は全て人が住まえる広さと高さを持っていた。ここはつまり、一つの集落だった場所だ。
今は人が住んでいる気配がなく、全て破壊尽くされ廃墟と化している。その傷跡は様々で、なにか巨大な物に押し潰されたものや、壁そのものを何か鋭利なもので根こそぎ抉られたような痕まである。
その数ケアオリュ（＝ｋｍ）先にある場所では、元々荒野だったのか、凸凹の地面へと塗り固められ、一部は雨の水が吸収しきれずに水溜りを作りだす。

その一つに、一つの足が着地し、激しい波を生み出した。その華奢な片足は直ぐに後ろに飛び跳ねるように水溜りから離れる。

「――――くっ！」

同時、凛とした女の声が水溜りに届いた直後。
鼓膜に響くような破砕音と共に、大きな赤黒い武器が水溜りごと地面を大きく抉った。
絶大な圧力と風圧が、まるでそこが爆弾でも爆発したかのような錯覚を起こすその破壊力。しかし、それは錯覚でも幻でも無い。実際、周囲にある廃墟の傷跡も、地面がクレーターのように抉られているのも、その大きな赤黒い武器の破壊力が起こしたものだ。

その破壊に巻き込まれないように後退し続ける女は、その武器より二周り以上も小さい剣が握られている。

剣は既にボロボロに刃こぼれを起こしており、汚れていた。名匠によって造り上げられた剣も、まるで長年の闘いの後のように壊れかけている。だが、その剣を造ったのは一年も前なのだ。その造りたての剣が、ここまで剣としての体が崩壊する筈がない。

女は剣以外にも、白い盾、蒼い衣、白銀の甲冑を身に付け、彼女が伸ばす長い黒髪の先を、リボンで束ねて流している。小麦色の綺麗な肌は傷や土で汚れており、頬からは紅い血が流れ落ちる。

荒い息をし、破壊から難を逃れた女は、剣を構え直し――

「っ――――ふぁっ！」

右足で地面を蹴り、疾走する女。

目指す先は、先ほど地面を抉った赤黒い大きな剣。その人間の様な大きさをし、形は何かを斬る体を成しておらず、それどころか鈍器すらない。例えるなら、工具のようなモノだ。しかし、それはまごう事なき剣であった。

眼を瞬きすれば肉薄している女の速力で、流石の赤黒い武器も防戦に回らざるを得ない。

振り回されることを封じ込め、まるで疾風怒濤のように細い剣を振う黒髪の女は、一切の隙も、妥協も見せない。

例え対峙する赤黒い武器を持つ人間を相手にしても、手加減など全く無い。

もし手を抜けば、女の身体は、先ほど地面が消えたその瞬間へ辿る運命に至るだろうからだ。

触れたものを悉く削り取る嵐のような女の剣技は、その追随を許さない。眼に留まることの無い、幾重もの銀閃が赤黒い武器、ひいてはその主に襲う。

しかし、相手はかなりの手練れだったのか、赤黒い武器の僅か動

きだけで、疾風の剣を凌ぎ切る。女の剣をただ一瞬たりとも赤黒い武器の後ろに通らせる事も無く、弾く。

遂には疲労を蓄積され、僅かに鈍った剣を弾き返した赤黒い武器は大きな一振りで女を吹き飛ばす。

「っ――――かはっ！？」

一瞬で白い盾を前に出して事なきを得た女だったが、衝撃を殺しきれずに地面に転がり、うつ伏せに倒れる。

激しい剣戟音と破砕音も止み、ただ雨音と女の息遣い、そして赤黒い剣を持つ主の足音が響き渡る。

「くっ……ううっ」

腕を振るわせ、女は起き上がろうとする。しかし、今までの戦闘による損耗がここにきて体中を巡り、意識を刈り取ろうとした。歯を食いしばって訴える痛みに耐え、決して倒れないようにと身体を起こす。

改めて女は、赤黒い大きな武器を地面に擦りながら迫る、相手の姿を認識する。

雨で張り付いているのか、汚れた明るいの髪が眼を覆って表情を窺う事は出来ない。服装全体も汚れ果て、もはやそれは纏っているとしか言いようがない。口元を切っており、滴る血が顎まで伝っている。白い歯を剥き出しにして、今にも咬み付かんばかりだ。

その彼が赤黒い武器の持ち主。歯から漏れる息と唸り声も含めるなら、その姿は例えると、獣。人の形をしている獣であり、獣の姿をした人である。

女は変わり果てた姿をした男に、心が乱れる。苦悶の表情を見せ、

どうしてこうなってしまったのか、と自問する。

「――それが、――が望んだ事なの……？　強さを求めた先にあった答えは、その姿なの？」

荒れた息と共に、女の声が雨の隙間を通る。激しい雨音で、彼女の言葉が塗りつぶされそうな勢いだ。

どうしてこうなってしまったのか、いや問うまでもない。それは自身の所為なのだ。あの時留めていたら――少しでも彼を認めていたら、違った結果になったかもしれない。彼を、独りにしなければ――――。

しかしそれより上回るのは、ふ抜けた彼の姿への怒りと悲しみだ。眼に映るものを破壊し、拒絶し、殺しし尽くす鬼神の如き彼の強さは、誰にも手に負えないだろう。しかし、そうではなかったはずだ。彼が目指したのはこのような独りよがりの強さではなかったはずなのだ。

もし、そうでなければ――――。

「……――が――――になろうとしたのは、そういう事じゃなかったの？　――は、護りたいものがあったから――――になろうとしたんじゃないの？」

女が顔を上げ、凛とした眼差しを男に突き刺す。

剣の柄を握る手の圧力を強くして、上段に構える。

「誤った答えで――――を辞めるなんてこと、そんなのは絶対に許さないッ――――！」

疾走再び。

女は剣を確実に男を貫く勢いで構え、一秒後には肉薄する。

その女の姿を余所に、男は剥き出した歯の隙間から雄叫びをあげる。

「――――ジ……リィイイイ……ァアアアッッッ！！！！」

――この地、エクスペリア。蒼き天より女神見守りし魔の大地

其なるは地を持ち上げる血の脈動
其なるは空を輝かす黄金の明滅

あらゆる輪廻転生と共に　血で定められる運命
いざ無よ　いざ立てよ　いざ貫けよ

それでよは繰り返される
それがエクスペリアの避けられぬ　女神の啓示――

聖騎士の遺言より抜粋

時は古の時代。
人は魔働（まどう）という女神より与えられた不思議な力によって繁栄を極めていた。
それによって照明を灯し、物を冷やし、あるいはそれが燃料になって動かしたりできた。その力を攻撃手段として、術者に備わった魔力を放出することで、魔力の塊を相手にぶつける魔働術というのも実現された。
人はそれらの力を使い、富を得、名声を得、人を護り、あるいは人を殺した。彼らは争いの最中、魔働術を物理的な武具に付加する手段も身につけ、戦士達はさらなる力をつけていき、さらなる繁栄と平和を甘受しながら、世界は発展を遂げていく。
しかし、それは唐突に終焉を迎える――――。

その名は邪神。
邪神はその場に居た、世界を絶望していた人間に魔剣を与えて走狗とした。

人の欲を利用し、魔剣使いと共に圧倒的な破壊を撒き散らして、国が次々と滅びた。
絶望を抱く人間たちで、希望を捨て切れなかった一部の者たちは捨て身で魔剣を調査し、女神に救済を求め、その時を待ちながら徐々に邪神と魔剣使いによってその数を減らしていく。

遂に一つだけの国家が生き残り、邪神がそこを滅ぼすことで無に

還り、世界は支配されるという時、かくして希望は降臨した。
その王国内で根強く信仰されている女神の威光である、蒼い光を放つ剣と盾を持つ一人の聖騎士が現れ、迫りくる邪神の軍勢を蹴散らし、破壊の化身である魔剣使いを無効化せしめたのである。
邪神は怯み、撤退を余儀なくされるがしかし、聖騎士が追いすがる。既に度重なる激戦と魔剣との戦いで瀕死の状態だった聖騎士は、捨て身の突進で魔剣を打ち破ったその聖剣を邪神の身体に突きたてた。直後、彼らから強い光が発せられ、聖騎士と邪神は光と共に消え去った。
その光景を見た多くの人々は光の中で女神の姿を見たと言われ、世界は静寂に包まれたのであった――。

以後、それから邪神は現れることなく、健在であった王国は約千年という長い時の中で古の歴史と伝統、そして魔働の血を持つ聖王国として名を馳せた。

――後に“邪魔戦争”と呼ばれたその出来事から約千年後、様々な国家が再建、あるいは新たに興国し、再び世界は繁栄を見せ始めていた。

プロローグ―2（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

この話はプロローグの続きになります。

プロローグ―2

――聖欧歴１９１２年、９月１０日９時

――「壊れた槍の担い手」まで、後３か月２１日、１５時間。

「――よぅ、兄ちゃん。やたら大荷物だが、これからどっか行くのか？」

ひたすら客引きをしていた露店を営む男が、ある青年の姿を目にして呼びとめた。

立ち止まった青年は、ただ視線だけで応えた。

「この国では見かけん顔だな。それに、剣も持っているようだし。何より、その風貌は目立ってな。つい職業柄、声をかけたんだ」

露店の男はそんな事を言いつつ、改めて青年の姿に注目する。

青年は精悍（せいかん）な顔立ちであるが、その碧（あお）の鋭い瞳には確固たる意志が宿っている。見事な銀髪を首まで伸ばしているが整えてなく無造作、長身のせいでスマートに見えるものの、よく見るとかなりがっちりとした体躯。

黒のパンツに、同じく黒いシャツ、その上に足まで伸びる薄汚れた長袖コートを羽織っている。所々に煤けているコートには、今まで彼がどれほどの修羅場を潜り抜けたのか、悠然と物語っているようにも見える。右手には保護するためのガントレットが取り付けられており、全体的に見た目よりも機能性を重視した装いだった。

しかし、それよりもありありと存在感を放っているのは、彼の背中に背負う別のモノだった。麻袋に覆われ姿形は把握できないが、上から覗く拵(こしら)えのある取っ手でそれの正体が剣であることが分かる。大きさを見る限り、彼の身長と同じぐらいになると思われた。その先端が彼の足まで伸びているので、相当な大剣のはずだ。

それを背負いながら悠然とここまで歩いてきた彼の姿は、付近の民にとっては若さに似合わぬ力の持ち主だと思ったことだろう。

実際まだ若く、最近成人したばかりの年頃だ。かなり前から、成長期の段階から筋肉がつき、その剣を振ってきたため筋力は成熟している。

「それに、その立つ雰囲気……あまり見かけんが、傭兵かい？」

そんな姿の青年に、露店の男が質問すると。

「……いや、違うな。今から騎士に成りに行くただの現在無職だ」

一言だけを残して、青年は露店の前を後にする。

彼が目指す先は、この国“聖王国レイザーランス”が擁する騎士団の本部。

銀髪の青年は、露店の男の言う通り、昔は傭兵だった。世界各地を放浪とし、金になる仕事を請け負って依頼者の兵となり、武力によってそれを達成する者として生きていた。

彼は、今居るこの国の人間ではない。流れ着いた放浪者だ。

僅かに生計を立てていたものの不安定な生活だった為、安定した仕事を探していたのだが、とある事情からあまり居て不自然だと思われる場所に行く気はなかった。特に彼は背負う剣を肌身離さず持ち歩くため、嫌でも悪目立ちするのだ。噂を立てられ、あまり有名

に成りたくなかった彼は、ここぞという働くところがなかった。
そんな彼は、ある噂に導かれて長い旅路を越えて入国してきた。

本来の目的地に向かいながら、青年は手に持つこの国に関するガイドブックを開く。

「――――“かつて、邪魔戦争で唯一残った古の王国は、その後興国した国々によって、『聖』の名を冠されたという”」

千年以上の歴史を持つここ、聖王国レイザーランスは伝統と魔働の知識を重んじる国家であり、魔働エネルギーを有して動力、燃料、個人の魔力回復など日常生活と軍用品で様々な用途に使用される鉱物資源、“働石（どうせき）”の豊富な産出国である。技術力は他の二大国家に比べて低いものの、洗練された空気と魔働の実力、そして国民の連帯力はかなり高いと言っても良い。
長年大きな国家間との戦争も無く、確固たる独立と平和を享受している国の民衆は、自分の生きる道を釈然と決めてひたすらに忙しくしている。
この国の国立図書館は長年の歴史が詰まった、知識の宝庫として国内外の歴史学者が足しげく通っている。学校の授業も、国の生い立ちから読み書き、そして魔働の実力を高める為のカルキュラムも充実している。

「……そして、なおかつこの国にはある軍隊が存在していた。それが、“蒼衣（そうい）の騎士団（きしだん）”」

千年前、邪神の軍勢がかつての聖王国に攻め入って来た際、自らを引き換えに撃退したと言われる聖騎士。
彼の者が羽織っていたとされる蒼い衣に由来して組織された“蒼衣（そうい）の騎士団（きしだん）”は、聖王国が誇る最高の軍隊だ。

国民がまさに輝ける騎士の集まりであることに、尊敬の念を向けるのは無理ない。彼らの錬度は凄まじく、また高い魔力と戦闘力を持ち、人を護る覚悟と意識、そして誇り高く存在する彼らは、国の子供たちが口を揃えて将来なりたい職業なのだった。

彼らの仕事は実に国内の隅から隅まで多岐にわたる。定期的に辺境の村にまで巡回に来るほどの誠意ある行動に、誰しもが称賛する。山賊や凶暴化した魔物が現れて襲われても、連絡する方法がつけさえすれば馬を飛ばしてでも騎士団が飛んで来てくれる。

まさに安全と安心を保障してくれる彼らの理想は、太陽となって民達を輝かせてくれるのだ。

むしろ民は今の生活になんとか付いていくだけで精いっぱいなので、こうして自分の仕事に集中できるのである。

「うむ。確かに、今まで見てきた他国の中でも、かなりの活気だな……」

銀髪の青年は、ガイドブックから目を離し、自身が歩く街並みと光景を観察する。

あらゆる喧騒の中心地、聖王国の聖都は伝統ある街並みを残しつつも、働石によって働く街灯や噴水、あらゆる生活用品が充実した場所だ。人口密集は国内最大を誇り、商業の中心でもあるのは当然のこと。

城下町から北方面にある王が住まう高く聳えるフェード城は、聖都のシンボルであり、国政を取り仕切っている場所だ。

やがて、青年に纏わり付く喧騒は離れ、精練された空気が漂ってくる。

“蒼衣の騎士団”本部が所有する地区へと入ったのだ。

騎士団本部は、城の真横に位置している。それ故、城へと目指せ

ば、自然と騎士団本部へと辿り着くのだ。

「ここか……」

長い壁を伝い、ようやくその終点へと辿り着いた青年は、遥かに高い厳かな門の前に立ち止まり、見上げた。

門の鉄格子の間から中を見ることができるが、詰め所の入り口が見えるだけで後は芝生が広がっているだけだ。

城と同等の面積を誇る騎士団本部は、大規模な訓練も考えられて訓練場を広く作っている。また、詰め所はあらゆるデスクワークや交流も考えて設計されており、詰める為に寮も完備されている。

中から僅かであるが、騎士たちの掛け声が一定のペースで聞こえてくる。

「ここが、俺が探し求めた唯一の職。安定な生活を得る場所……」

傭兵しか仕事がなく、他の真っ当な職は就けなかった彼は、ある噂に頼った。

聖王国が擁する“蒼衣の騎士団”は国と王に忠誠を誓い、命を賭す覚悟を持つなら来る者拒まずの制度を持っている、と。

無論、それは国民に限った話ではあるが、男はこの剣を持っても不思議ではなく、尚且つ安定した生活が得られるというこの条件に、僅かでも希望を見出した。

忠誠など形だけで済ませられるし、戦いに赴く以上人は死ぬものだ、と考えている男は騎士団の制度に関してなんら問題はないと考え、こうして遠路はるばる訪れた、というわけだ。

そうして聖王国にようやく辿り着き、前もって騎士登用試験の受験申請を済ませ、そして試験当日の今日、彼は今この門を叩こうとして立っている。

「……行くか」

ポツリと口を動かした後、男は門を開いて騎士団本部へと直行した。

入り口で見張りをしている騎士に指示されて、目的地である試験会場に向かう男。

第一試験は面接であり、前もって渡している書類審査の後、それを元に試験官との質疑応答が行われる。

詰め所の中は広いので、初めて来た者は建物の見取り図を持ってしても迷いやすく時間通りに来られる保証がないため、最初の試験は時間を決めていない事になっている。

男にとって時間を決められていないというのは非常に助かっており、こうして余裕を持って来ることができた。

見張りから渡された見取り図を見ながら、右、左、左、上、右と曲がりくねった通路を進む。

こんな面倒な作りをしてて大丈夫か、と男は思いつつも、見取り図から現在地を確認しながら壁伝いに歩いていく。

その状態が続いていたので、少し注意力散漫になってしまった男は、曲がり角から人影が出てきても気づくのに遅れてしまった。

「っと……！」

「きゃっ……！」

向こうも気づかなかったようで、曲がり角での鉢合わせに止まることもできずに衝突する二人。

男は長身だった為に倒れることはなかったが、もう一人は衝撃を抑えきれずに尻もちをついた。

「……いたた……」

尻もちをついたその人は、尻を撫でながら何が起こったかを把握したようだった。

男は直ぐにその人に手を差し伸べる。

「すまない。前方不注意になってぶつかってしまったようだ。……大丈夫か？」

男はその時になって、ようやくぶつかった相手の姿を認識することができた。

腰まで伸びる黒いストレートヘアーが印象的な女だった。

歳は男と大差ない、むしろ少し年下の成熟した少女。日焼けしていない端正な顔立ちで、華奢な体格をしているが、腕っ節は鍛えているようで多少の筋肉が垣間見える。

肩に甲冑の肩当てを付け、衝撃吸収の白い拵えをした軽鎧に、その下にはグレーのタートルネックを着こなしているのが分かる。下は軽くスリットの入ったタイトスカート、それに脚を覆う黒いタイツで多少堅苦しい印象で纏められている。また、腰の左側には純白の盾とその下にブロードソードをぶら下げている。

男から差し出された手を、女が気づいて取ると、ありがとうとお礼を告げて身体を起こした。

「こちらこそ御免なさい。私も考え事をしていて良く前を見ていなかったから」

礼儀正しくお辞儀をして、背筋をピッと伸ばして男を見る女性。

その瞳は凛々しく少し生真面目な印象を与えていた。先ほどの装いと握った彼女の手が剣を持つ独特の痣を感じたので、もしかしたら騎士団の関係者かと、男は見つめながら思った。

「それはお互い様だ。ここに来るのは初めてなものでな、見取り図を見ながら目的地に向かっていたのだが、図を見るのに夢中になったからな。怪我が無いなら良いのだが」

男は慇懃な口調で言葉を返し、見たところ怪我を負わせなかったので時間をそれほど取られない事に安堵していた。

「そうだったの……。私は大丈夫だし、そちらも平気そうだからお互い様というものね。ところで、ここは初めて来たと言ったみたいだけど、何か用事でもあるのかしら？　見たところ騎士団の方ではないようだけれど」

「ああ。これから騎士登用試験を受けるところなんだ。面接会場に向かうところでな」

手短に男は理由を伝えると、女は驚いた表情で「まぁ」と返した。

「あの騎士登用試験？　ということは、貴方も受験者なのね」

「……も？　ということは君もか」

意外な接点があった二人はお互い驚きの色を見せていた。

特に男は表情には出さないが、内心戸惑いがあった。確かに彼女の格好は騎士団の詰め所で行動するには好都合な格好だった。

しかし、こうして腰に剣と盾をぶら下げて騎士団に入ろうと志している女性を今まで見たことが無かった。無論、男は騎士と関わった事は多くはないが、それでも道中に見かけた騎士団の中に女性が居たことは皆無だった。

圧倒的に実力のある女性が少ないからだろう。しかも嫁入り前であろう少女が男所帯の騎士団に入ろうということ自体、理解できない事だったからだ。

驚きながら見つめ合う二人だったが、先に口にしたのは女だった。

「私もついさっき面接を受けてきたところなの。貴方と同じ、騎士登用試験のね。見えないかもしれないけれど、私も騎士になるつもりなの。それなりの戦闘は自信もあるし、度胸だってあるつもり。何より、私は騎士団に入って果たしたい目標もある。驚くのも無理ないけれど、これはれっきとした事実よ」

男が驚いている理由を、彼女も悟ったのだろうか、自分が試験を受ける理由を説明した。

「目標？　騎士団でしかできない事なのか？」

「勿論よ。貴方も、同じ理由なのでしょう？」

そう女性に尋ねられて、咄嗟に男は答えることができなかった。まさか安定した生活を求めて、とはこの生真面目そうな女性に対して言えるような理由であるかどうか怪しかったからだ。

沈黙は肯定と受け取ったのだろうか、女性は嬉しそうに話を続ける。

「でも嬉しいわ。貴方みたいな若い人が皆と同じ志を持って国を護る立場に立とうとしている事。見たところ、貴方もそれなりに腕が立ちそうだし、きっと最終選考でも行けるかもしれないわね。……えぇ～と――」

「……ゼスだ」

女性が男の名前を言おうとして、まだ聞いてなかったから歯切れ

を悪くしたと悟った男――ゼスは、端的に名乗った。

「私の名前はシェリー・アイオライト＝ブランシェ。長いからシェリーで構わないわ」

黒髪の女――シェリーは未来の同志に軽く微笑んで続きを紡いだ。

「ゼスさんにも、緊張せずに実力を発揮できる事を祈ってるわ。願わくは、私と一緒に騎士になれると良いわね」

と、突然シェリーは何かを思い出したように、頭を軽く下げた。

「あ、御免なさいゼスさん。長く引き留めてしまったわね。試験があるんでしょう？　私もこの後用事があるから、そろそろ行かないと……」

「……ああ、構わない。今度は気をつけろよ」

「ええ、有難う。そっちも試験頑張って」

お互い会釈して、シェリーはゼスが来た道へと歩き始める。

ゼスも彼女を横目で見つつ、お互い横切って別れたのであった。

――この時、シェリーがゼスを横切った瞬間、彼の背中に背負っていた大きい袋が僅かに震えたのを誰も気づくことはなかった。

＊　＊　＊　＊　＊

シェリーと別れたゼスは無事に面接試験を受け、これに見事合格した。

他の受験者と比べると外国人であるため、態度と半ば面接官の偏見から忠誠を誓う云々に対して評価は底辺だったが、冷静な判断と戦略眼を買われ何とかラインを越えることができた。

むしろそれは、他の考査で優秀な成績を収めなければ途端に不合格になりかねない事であった。

「それでは、考査を開始する。始めっ！」

翌日の第二考査は場所を訓練場に移動し、村に山賊が襲撃し、広場に子供が取り残されているという想定で行われた。

剣をもった山賊達は少なかったが、厄介なのは遠距離から狙撃してくる弓を使う山賊が、それよりも大勢居たことだ。援護として味方側にいるのは、魔働術を使う術者一人のみ。

多くの受験者はまず子供を安全な処に逃がし、術者と協力して山賊達を撃退した。しかし、失念してはならないのは、子供を逃がしている最中に援護の術者が集中砲火にさらされて、援護の手を無くしてしまうということだ。

その一瞬の判断が遅れて、子供を逃がしても術者が倒れる結果を招き、不合格になった受験者も少なからず居た。

護衛対象者を無傷で護りきり、味方の被害は最小限にさせることがこの試験の本質なのである。

これをゼスは、まず術者に子供を任せ、自分はその援護に回った。子供を逃がした後に自分が囮となって弓兵の注意を牽き付け、術者にはたった一発の術式で彼らの前に立つ櫓（やぐら）を倒すことを指示した。建築物を利用することで、大半の弓兵を沈黙させて残りは各個撃破する。

村の建築物を壊して山賊を倒す乱暴な戦法に眉をひそめる試験官は居たが、子供と術者を無傷で助けて、尚且つ迅速に山賊達を撃退したその判断に異を唱える者など皆無だった。

「……まぁ、傭兵なら常套手段だったがな」

ゼスはそんな感想を漏らして、次の考査へと進む。

第三考査は勇気と忠誠心を試す試験だった。

主君が住まう居住区に次から次へと襲いかかる敵兵を撃退し、一人も通さない事が前提とされた。

援軍はなく、多勢に無勢な状況で戦い続けることはかなりの難易度である。いくら体力があろうとも、その状況の最中では受験者は時の流れを遅く感じてしまう。その精神的な疲れから身体を鈍らせ、スタミナが尽きていくのだ。やがて苛烈になっていく侵攻に鞭を打って立ち塞がっても、一人を通せばそこで失敗になる。例え堪え切れても、強力な魔物が最後に姿を現し戦意を挫けさせにかかるのだ。

後方に居住区があり門が絶対守護圏になる。それでもかなりの広さがあり、そこで戦っては隙を突いて突破する者が少なからず現れる。受験者達は敵が必ず桟橋を通る為に、そこで敵を食い止めることを主流の戦法にしていた。

中には魔働術を使いまとめて薙ぎ倒す受験者も居たそうだ。

ゼスはあえて絶対守護圏で戦い、なぎ倒す戦法でスタミナ消費を受験者達より軽減させていた。体力が十分残っていた状態で、狙ったように強力な魔物が現れると。

「悪趣味なやり方だな」と、思いながら撃退することに成功たのだ

った。

こうして受験者数はゼスを含めて、残り八人となって最終選考を迎えることになる。

プロローグ―２（後書き）

‥ゼスがパーティに加入しました。ゼスは「銀狼」の称号を得た。
ゼスは大剣「銀狼の牙（仮）」を手に入れた。
＝＝＝

こんばんは、蒼雷のユウです。
対なる剣、プロローグを御拝読頂き、深く感謝いたします。

元々二次創作を書いていた時代からオリジナル作品、それもファンタジーモノを書きたいな、と思っていました。
しかし、ファンタジーモノは数が多く、そのどれもが高レベルな作品ばかり。私の作品のような低レベルが中に入っていいものか、おこがましい気持ちもありました。それでも、どうしても書きたかったのです。
私の好みを反映させた、完全なオリジナルを作っていこう、と長い時間をかけて設定を重ね、今現在の形へと作られました。
プロローグは謎の場面から始まり、世界観の説明と主要な舞台の紹介、そして主要登場人物のお披露目へと続き、以後彼らの活躍に繋がります。
これから彼らがどのように動き、語り、そして世界へと関わっていくのか、僅かな間ではありますがどうか最後までお付き合い下さい。
また、あとがきの一番初めには、私の単なる趣味でＲＰＧ風のリザルト画面を設けてあります。それで、話のまとめになったりならなかったり……（笑）

第一話　「最終選考」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第一話　「最終選考」

第一章　騎士登用試験

――9月12日9時――

厳しい選考の中で残った八人は、詰め所の屋内訓練場に召集された。

訓練場といっても倉庫や体育館のような広さで、中には木箱や樽、鉄棒などが散乱している場所だった。元々ここは大規模な訓練施設ではなく、組み手や自主訓練場として開放している処だ。

ここと同じような部屋は他にも数多くある。

彼らが召集されたのは、第一個人訓練施設である。

ゼスがこちらに到着すると、既に他の七人の受験者が横一列に並んでいた。

その片隅には、先日に彼と会ったシェリーの姿も見受けられる。

彼女も最終選考まで残った実力者のようだった。

彼も直ぐに彼らの横に並ぶと同時に、後ろから試験官達が現れて受験者達の前に立つ。

ここの主任試験監督者は、壮齢の男性騎士だ。

「全員、揃っているな？　ではこれより、騎士登用試験の最終選考を開始する」

その言葉を受けて、受験者達はビシッと姿勢を正した。
ゼスは普段通りの姿勢であったが。

「君たち八人は、厳しい選考を乗り越え遂に騎士になる一歩手前まで辿り着いた実力者揃いだ。これまで騎士に必要な様々な素養を見せてもらった。必ずやこの面々でもいつか立派な騎士になれるだろう。さて、最後の選考内容だが――」

男性騎士は手元にある書類に一旦目を落とすと、溜めの後に続けた。

「トーナメント形式で一対一の対抗試合をしてもらう」

一部の受験生達がギョッとした表情でざわざわとざわめくが、試験官がいる手前長くは続かない。
そのざわめきが静まり始めた頃を見計らったように、凛とした美しい声が発せられる。他でもない、シェリーの声である。

「あの、それはつまり、ここに居る八人で騎士としての実力の優劣を決める、という事ですか？」
「その通りだ。君たち八人は騎士として必要な戦闘力、知恵、勇気、忠誠心、そして覚悟を兼ね備えていると言っても良い。だが、その総合力で誰が優っているのか、今後の配属先を決める上で重要なファクターとなる。それで、こういった趣向を行わせてもらうというわけだ。無論、順位を決めさせてもらうし、一回戦で負ければ落ちることもあり得る。各人、気を引き締めて事に臨むように」
「はっ！」

全員胸に手を当て敬礼をする。ゼスもそれに倣った。
ここが一番の正念場だと、ゼスは考えた。

今までの選考で認められた実力者との直接対決。当然、一筋縄ではいかないだろう。一定のレベルでの対決は戦闘と呼ばれ、拮抗することは分かる。そして一瞬の油断が敗北に繋がるのだ。

一回戦で負ければそこで騎士になれる道は途絶え、今までの苦労が水泡に帰す。勝利するためには、試験官の言葉通り総合力がいかに相手より優るかによる。

正直言って、面倒くさい事この上ないことだ、とゼスは内心愚痴ったのだった。臆面にも出さないが。

受験生の返事により、試験官は満足そうによろしい、と頷いた。

「では、早速第一回戦を始めさせてもらうが、質問はあるかね？」

試験官の言葉に、ゼスが手を挙げる。

「ここが試験会場と判断するが、ここにある備品を含め、全て我々の自由に扱って構わないだろうか？」

「ふむ……君は確か、ゼスと言ったか。第二選考で櫓を利用して敵を一網打尽にしたという。それで、対戦中にここにある備品を扱って良いか、ということだな？」

「はい」

試験官は考え事をするために、顎に手を添える。そして直ぐに結論を出した。

「……うむ、構わん。今回は受験生達の総合力を見るテストだからな。ここにあるものは、自由に使ってくれたまえ」

「……了解した」

そう言ってゼスは一歩下がって姿勢を整える。

内心、彼はほくそ笑みたい気分になっていた。
備品を自由に扱っていいということは、戦闘の最中に破壊されても文句はない、ということだ。自分の持つ大剣を思う存分振うことができることで、本気を出せそうだ、と感じていた。
他に質問者が居ないために、試験官は先に進むことになった。

「ではこれより第一回戦第一試合を始める。呼ばれた者は得物を持って、中央に来るように。――シェリー・アイオライト＝ブランシェ、並びにゼス」

その発言で、ゼスは僅かに驚いた。
一回戦は必ず勝たなければならないところで、まさか女性のシェリーが相手だとは露とも思っていなかったのだ。
女性相手では力の差は歴然と思われた。もしかしたら、本気を出すまでもなく勝てるのではないか、と。だが、騎士になりたいと嬉しそうに語った彼女の純粋な願いを潰して良いものか、とも思った。

「ゼス、どうした？　早く前に出ないか」
「……は」

試験官に促され、ゼスが苦い顔で部屋の中央に向かって歩きだす。
既にシェリーは中央に立って待っていた。
向かい合う男女。その中央に試験官が立つ。

「ルールは無制限の模擬戦闘だ。基本的に自由ではあるが、騎士になろうとするなら騎士にあるまじき行為は慎むようにせよ。試合の判定は試験官が担当する。判定があるまで気を抜かないように」
「はっ！」
「……了解」

試験官が説明を終え、踵を返して壁際まで歩き去る。
その間に、シェリーがゼスに向かって話しかけてきた。

「先日以来ね、ゼスさん。まさかここで戦うことになるなんて思わなかったわ」
「……そうだな」

ゼスは素っ気ない返事を返す。
全く気にせず、シェリーは話を続けた。

「どうやらあの時の“一緒に騎士になろう”という言葉は果たせそうにないのが残念だわ……。きっとこの戦闘で全てを左右すると言っても過言ではないわけだし」
「……それにしては緊張した面持ちではないな？」
「当然よ。この試合、勝つのは私で、騎士になれるもの」

それを臆面もなく、微笑んで言える彼女はまさに自分の実力の自信の表れであったのか。
それは、男性と戦ったことがある経験から言えることなのか、とゼスは内心ツッコミを入れた。

「随分大きく出たな……。既に俺に勝つ気があるってことか」

その言葉に、シェリーはふふん、と自信ありげな笑みを浮かべた。

「勝つ気があるのではなくて、勝つのよ。勿論、この勝負の勝敗がどうなろうと二人とも騎士になれるのならそれに越したことはないけれど、私は絶対に騎士になるのよ。だから、負けるわけにはいかない」

そして彼女は少なくとも、と続け。

「私を普通の女性として甘く見ている貴方相手に、負ける保証なんてないから、勝てるわ」

彼女はゼスの雰囲気が、戦士としての闘志が感じられないと見抜いていたのだろう。明らかな挑発を仕掛けて焚きつけようとしている。

だが、それに乗せられるゼスではない。戦士が負ける時は、怒りに我を忘れた人間になった時なのだ。

「フ……。まるで先日のキャラとは違うな。騎士になる覚悟を持っているだけの事はある。それなりに敵に対する情けというのを持ち合わせていないと見える」

「あら、幻滅したのかしら？　よほどお淑やかなレディと見えたのかしらね？」

「いいや、むしろ感心したところだ。直接武器を持って戦う女騎士など見かけなかったからな。君がこの場に居るのは半信半疑だったが、成程、事実だったらしい」

ニヤリと笑みを浮かべたゼスは右腕のコートの袖を一回捲りあげる。彼が戦う時の癖だ。

「俺も当然負けることができない戦いだ。最初からやる気がなければ、元々騎士になるためにここまで来ることなど有り得んだろう？」

直後、彼から噴き出す闘志にシェリーは驚いて一歩身を引いたが、直ぐに立て直して剣の柄に手をかける。

彼女のソレは名のある鍛冶職人の力作であるのか、手触りのいい拵えと時折見せる刃は、細身ながら切れ味が鋭い形状をした片手剣

である。

「それが貴方の力ね。ここまで来た実力のほどを、是非見せてもらうわよ！」

遂に彼女の剣が引き抜かれ、臨戦態勢へと入る。

それが準備完了の合図となったのか、試験官が抑揚あって「では」と発して。

「試合開始！」

しかし、開始の宣言があったにも関わらず、ゼスとシェリー、両者は全く動かずに睨み合いを続けていた。

ゼスは徒手空拳のままで、左手を伸ばす。

「……どうした？　早くかかってこい。どこからでも相手になる」

挑発して誘うゼスだが、シェリーは全く動かない。

彼女はゼスを、正確には彼が背負う大きな袋に視線を向けていた。

「……ねぇ、貴方。自分の得物は抜かないつもりなのかしら？」

「得物？　なんのことだ」

ゼスはこれでもか、という程に眉を吊り上げる。

だが、それはシェリーにとって癇に障ったらしい。

「とぼけないで。聞いた話だと、貴方はこれまでの考査で大型の剣を使って通って来たらしいじゃない。貴方の背負うその袋の中身が得物じゃないのかしら？」

「ああ……これか。確かにこれは俺の得物だ。だが、こいつはデカ

イから重さも半端なくてな。一度振うと加減が効かない。下手をすれば、当たり所が悪く命を奪ってしまうかもしれん」

肩を竦めてやれやれだ、と見せる。

シェリーはその途端肩を僅かに振わせたが、誰もそんな機微には気づかなかった。

「……それはつまり……その武器は抜かずに、私相手に素手で戦う気なのね」

彼女の声は今までの凛とした声音はなりを潜め、暗い声へと変わっていた。

ゼスは構わずに続ける。

「何、俺は格闘術の心得もあるつもりだ。拳一つでも十分戦えるぐらいだ。心配はない、本気は出すしこの剣なしでも――」

瞬間、ゼスの言葉を遮るように風が吹き荒れた。同時に、何かが彼の面前を通った感覚を受ける。それが剣の切っ先だということを瞬間的に理解し、微動だにしない。

はらりっ、と前髪がひと房、ゼスの鼻を掠めて落ちた。

「――まさか一瞬で距離を詰めて剣を振い、しかも後退することができるとは」

ゼスの目の前に居るシェリーは半分ほど距離を詰めた位置に立っており、端正で上品な顔立ちからは、凛々しい瞳が彼をじっと見つめている。その剣の切っ先も、彼を捉えている。

「まだ分からないのかしら。私をただの女だと思って甘く見ていた

ら……死ぬわよ」

まるで剣を抜かないことは不敬であるかのように、戦いの誇りを侮辱されたかのように、彼女の声には怒りの色が含まれていた。

「剣を抜きなさい、ゼスさん。敵に剣を抜かせずに敗れるなんて、騎士の誇りを汚すようなものよ。私はその愚行を断じて許すことができないわ」

「……それはすまなかった。出すぎた真似だったな」

そう言ってゼスは、今度こそ背負っている袋から伸びる柄に手をかけた。

「ならば、この剣の重さを存分に味わってもらおうか」

僅かに手を捻ることで袋の縄が解き、その全貌を露わにした。

彼の手に握られているのは、異形の大剣だった。身の丈ほどもある重剣で、刀身が真っ黒に染められており、切っ先と刃の二か所に半円状に欠けている箇所がある。だが、そんな形状でも重さを加えた切れ味は抜群のモノだ。それをゼスは片手で振り回せるほどの筋力を備えている。

それが、彼の主な武装で、それだけであらゆる物を切り裂く力を持つ。ゼスは自らの称号を取って「銀狼の牙（仮）」と呼称しているが。

大剣を初めて見るシェリーを含め、受験生達は驚きの眼差しを向けた。

「なんだあれは……。形は歪だが、どこの名匠が作り上げた剣だ？」

「あれを一振りだけでも、壁すら壊せるぞ」

流石は騎士を目指して最終選考まで残っただけはある受験生達。ゼスの剣から放つ威圧感を感じ取り、その威力を予想できたようだった。

そして、それはシェリーも同感だった。

ゼスの闘志、改め殺気はその剣を露わにしてから明確に感じ取れるようになっていた。並みの戦士なら、目にするだけで戦意を削がれ、腰を抜かすほどの強力なものだ。

だがシェリーはそれで戦う気が失せるほど、腑抜けなつもりは毛頭ない。むしろ、これからの闘いに気分が高揚するぐらいだったのだろう。

意味ありげな笑みを浮かべ、真っ直ぐに見つめ返す。

「これで、本気の貴方を知れるわね。さぁ、かかってきなさい。それで負けたとしても、後悔はないわ！」

持っている剣は肩を上げて肘を引き絞り、切っ先を向けて振う準備をするシェリー。

表情に一人の戦士としての顔が浮かんでいる。

それを見たゼスは、肩に担いでいる大剣の柄を両手で掴んだ。

「行くぞ……。止めきれないから、そのつもりで防げ……！」

ゼスが駆け出し、大剣を持ち上げる。大剣の刃は、面前に居るシェリーを噛み砕こうと牙を剥いた。

対するシェリーは僅かに剣を下し。

「防ぐつもりは無いわ。――――当たらなければ、意味がないもの」

大剣の牙が到達する前に、彼女は掻き消えた。

「――っ！」

次の瞬間には、シェリーの剣がゼスの真横から振り下ろされていた。

第一話　「最終選考」（後書き）

‥シェリーは剣「ブランドソード」を手に入れた。
ゼスの先制攻撃！　シェリーに「スマッシュインパクト」！　しかしかわされてしまった！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ちなみに、この小説執筆は趣味でもありますが、大半の理由は文章を書いて文章力を高める、という練習です。「てにをは」には意識的に気をつけているのですが、誤字脱字などの指摘や意見があれば頂けると為になります。

　また、キャラの台詞に違和感がある、設定が矛盾しているんじゃないか、という指摘も大いに受け付けております。何か純粋な意見がありましたら遠慮なく申しつけてくださいませ。

第二話　「牙と疾風」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第二話　「牙と疾風」

――――同日9時２０分

ゼスの大剣がシェリーの剣を叩き割ろうという勢いで振り下ろす。
しかし、その直前に面前の敵は消え、次の瞬間には彼の真横に剣の存在が感じられた。

「――――ふぅっ！」

辛うじてその剣を、今までの戦闘経験から身に付けたものである敵の剣が流れる気配と風を感じ、身を捻って避けるゼス。
しかし、直後には剣は背後から迫りつつあった。
ゼスは大剣を背に移動させて、刃を盾代わりにするしかない。
シェリーは、逐一別角度からの位置で剣を振ってくる。
彼は、彼女の速力を活かした撹乱戦法に対して、防戦に回らざるを得ない。例え大剣を真横に振るって、広範囲を薙ぎ払おうにも、シェリーはそれを早めに感知して後退し、全く命中しない。

二人の実力は完全に互角だった。このまま戦闘が継続すれば、長期戦になりえる。
ゼスは思考する。彼女に勝つには撹乱戦法をさせないに限られた。
その為には、どうしても彼女の足を止める必要があった。

「さて……どうするか？」

独りぐちるゼス。
相も変わらずの速度で、移動しながら時に袈裟(けさ)斬り、時に薙ぎ払

い、時に刺突、ありとあらゆる方法で剣を振うシェリー。遠目から見れば、何人もの彼女がゼスの周りに現れて一斉に攻撃している風にしか見えないであろう。
その速度に付いて行けるゼスの反応速度と大剣の扱いも流石と言えた。

場にいる全員が魅せられた剣の乱舞は長くは続かない。
遂にゼスが動き出す。
まず右足で現在シェリーが居るであろう真横に蹴りを放つ。当然、彼女は確実に回避する。それで、大剣を真横に構え車輪のように薙ぎ払う。周囲にいたシェリーの残像が大剣によって次々と払われる中、彼女自身はゼスから離れた位置に現れた。
一度も敵に当たることが無い大剣をゼスは肩に担いで、シェリーから離れるように後退を始める。
必然、シェリーは彼を追撃する選択をした。

「フ……。流石に、相手が移動しては真横に一気に移動できるわけがないか」

ゼス自身が移動すれば、自身に優る速度を持つシェリーでも辛うじて捉える事が出来ていた。彼女は真正面から追って来ており、既に肉薄しつつあった。
近づけまい、としてゼスは大剣を上から振り下ろしてシェリーを牽制する事で対応した。
無論彼女は前進を止めざるを得ない。
彼はそうしてもらうことで、これから起こす行動を実行できる余裕を作ったのだ。

「ふむ、これが良い――――では、早速役立ってもらおうかな」

目に付いたのは腰までの高さと両手を広げた広さの、木箱がある。結構な大きさで、男二人で持ち上げないと堪えられない重さのソレを、ゼスは一人で両腕を持ち上げた。それを間髪いれずに、離れたシェリーの方角に天井に向かって放り投げた。

それにシェリーは強気の視線をゼスから離さなかった。

「そんな木箱では、私には当たらないと知ってのことかしら？　それとも、視線を逸らすための工作？」

ゼスはその言葉には答えない。代わりに、その空中に舞っている木箱に向かって。

「――――ふんっ！」

渾身の一振りで、自らの大剣を木箱に追随する速さで投擲（とうてき）した。

「なっ！？」

シェリーはこれには驚かざるを得なかった。

無理もない。木箱の大きさと重さに物を言わせて攻撃の手段とするつもりなのかと思えば、自らの武装すらを棄てる意味で投げたのである。あれなら木箱に命中して、大剣の威力で木端微塵にするのだろう。その結果、ゼスはあらゆる攻撃手段を失うのだ。

この奇抜な行動に驚かない人間は、行動した者しかいない。

大剣は案の定、回転しながら木箱に命中して破砕し、勢いは削がれずそのまま貫通した。

破砕した木箱は、数多の木の板の破片となって、シェリーへと落下しつつあった。中には鋭利な破片もあり、当たれば裂傷を被る物の数々だった。

「――っ、そういう」

ゼスの思惑に気付いたシェリーは、自然と身体が反応する。数多くの破片がシェリーに殺到する前に、後方に移動して回避する。

破片は彼女には当たらず、全て地面に散らばるのみだ。

「残念だったわね。こんな小細工に私が――――！？」

きっとゼスは狙いが外れて悔しがっている様子に嫌味でもぶつけようかと思ったシェリーが顔を上げると、先ほどまでそこに居た彼の姿が消え去っていた。

その直後、右横に微かな気配を感じて、反射的に剣を立てる。

剣身に重い衝撃と鋼が打ち合う甲高い音。シェリーが咄嗟に防いだのは、あの一瞬の隙に奇襲をかけたゼスの左の拳打だった。

彼の手にはガントレットが装備されており、甲部分に打撃力を強化するために装甲を付けている。これがあることで、拳一つで剣相手に戦える打撃を発揮できる仕組みだ。

あまりの重たさに、これをまともに受けてはいけないと判断したシェリーは、受け流す方法を取る。

片方の拳を警戒して後方に下がったシェリーを、右拳で追撃するゼス。だが、それを拒むように拳を剣で受け流され、退かれていく。

蹴打も加え、滑らかな流水の如きの、下段から垂直方向へ放たれる膝。そして靴先。

そのことごとくを、柔軟な骨格を持つシェリーに避けられ、回避され、受け流されて凌がれる。

成程、どうやらここまで死に物狂いで鍛えて騎士を目指したのか、とゼスは納得する。

そして放たれた中段蹴りも剣で防がれて終わる。

＊＊＊

Ｓｉｄｅ：Ｓ（シェリー）――

衝撃でシェリーはゼスとの間合いがやや開いた。
いくら格闘術を極めていないとはいえ、ゼスの攻勢は並みの相手なら短時間で打ちのめすことができる技量だった。それをシェリーは必至にそれを防ぎきれた事は、彼を十分に驚かせることだ。

しかし、片やシェリーも苦難を乗り越えたソレの形相であった。
全て何とか防ぎきったとはいえ、油断をすれば拳や脚に肉薄され、右腹に決まったことだろう。ゼスの格闘術は、大剣に頼った力任せの戦法とは真逆の、手数の多いものだ。
流石に予想をしていなかった戦法に、シェリーは自らの侮りを恥じる。最初は大剣を主な得物として使わなかった事に憤怒したものだが、成程、確かに彼は格闘術に心得があるようだった。
だが、それを差し引いても、彼の格闘術の速さは自分の速度と同程度で何とか防ぎきるし、あの大剣も一振りされたらひとたまりも無いが、振らせないように素早く攻勢すれば脅威でも何でもない。

この仕合、シェリーの勝利への確信はまだ揺るぎないものだった。
何より、彼女はまだその理由を披露していない。

「ふぅ……。やるわね、ゼスさん。まさか木箱を破壊して破片を降

らせ、それを目暗ましにして奇襲をかけるなんて。格闘術も中々のものだったわ。私が侮っていた。貴方の実力を卑下したことを心からお詫びするわ。

だけれど、これで貴方の戦術は失敗した。大剣も自ら棄てて丸腰当然。大剣があればあるいは勝てる要素があったものの、格闘術だけでは私を破る切っ掛けにすらならないわよ」

「……チッ、クソ。行けると思ったんだがな……クソ！」

彼女の一言で、ゼスは今までの冷静さを欠いたような態度で地団駄を踏んだ。まさに先ほどシェリーが思ったように、思惑を外されて非常に悔しがっている様子である。

その様子にシェリーの中のちょっとした加虐心が満足した。

「さて、そろそろこの闘いも終わらせましょう。貴方には悪いけれど、私は騎士にどうしてもなりたいの。だから、ここで倒れて頂戴。得物が無い相手に斬りかかるのは本意ではないけれど、自ら手放したんですもの、騎士の風上にも置けないわね？」

未だに悔しそうに足を地面に打ち付けるゼスに対して、シェリーは自らの剣の切っ先を彼に向けて構える。今まで鍛えてきた風の剣で一気に勝負を決める気であった。

それにしても、まるでゼスは態度が激変したかのようなキャラの変貌ぶりに、意外な一面を見た、と感じるのは歳相応の感想を抱いた少女は少し微笑ましく思えてしまった。

――その為、彼女だけは気付かなかった。遠目から見る試験官と受験生達は気付いているものの、試験中に無用な口出しは厳禁だから何も言わないのである。

ひときしり暴れたゼスは急にその態度を静まらせ、首を垂れてこう呟いた。

「……あぁ、終わらせよう。君の言うとおり、俺は最初から大剣で勝つしかないからな――――」

急に静かになったゼスに、シェリーが不審に思ったその時、肩に上から降って来た小石のようなものを感じた。

何気なく視線を小石が降って来た真上の天井を見上げると――――

「……え!?」

そこには先ほどゼスが木箱を破壊するために投擲した大剣が、天井に刺さって宙づりになっていた。しかも刃の切っ先だけがめり込んでおり、非常に不安定な刺さり方である。

僅かな振動だけで、簡単に剣の重さに耐えきれず、天井は離婚するであろう。

ゼスは僅かに微笑を浮かべ、思いっきりの足踏みを地面に打った。

地面の振動は訓練場の壁を伝い、天井へと伝播する。その振動で、大剣の刃は天井から離れた。

重力に逆らい切れず、大剣はその重さを物語るように、真下に居るシェリーに向かって回転しつつ落下する。木箱の破片とは違い、落下の速度とその破壊力はケタ違いである。

突然の事に流石のシェリーも回避が間に合わなかった。

大剣はそのままシェリーの位置に落ちて、その破壊力で地面を抉って粉塵を起こし、彼女の安否がどうなったか定かではなかった。

「なっ……!?」

「おいおい、ここまでやらんでも……。シェリーさんは無事なのか？」

流石の光景に、既にシェリーを評価していた受験生達は不安の表情で事を見守っていた。
事の成り行きを静観する試験官は表情を変えずに評価する。

「しかし、良い戦術だ。大剣がそもそもの狙いだったわけか。あの悔しがる態度も、相手を油断させ尚且つ地団駄することで、天井に振動を伝える……。ゼスという青年、中々どうして、期待を裏切らない戦略眼の持ち主と聞いたが、まさにその通りだな。騎士としての評価は別として、だが」

そして、この光景を観戦していたのは彼らだけではなかった。
受験生達が目立たない訓練場の二階に、上から模擬試合を見降ろせるように席が設けてある。主に、上層部の人間が秘密裏に期待の新人を探す用途として設置されたものだ。
そこに、黒い布地の服を着こなす年若い男が居た。歳は三十代前半ぐらいだが、童顔なため若く見られることが多い。黒い服と同じ漆黒の艶やかな髪で、男性としては華奢な体躯な、まさにインドアな印象の人物。胸には、この聖王国の宰相の証である、星を中心に描かれた盾のバッジが輝かしく光っていた。

彼こそが聖王国宰相のディル・エンメイス。
国王に任ぜられて君主を補佐し、宮廷で国政を担う、いわば政治家の首相である。
政治家である彼が、なぜこのような武人の集まりに顔を出しているかというと、彼も勿論、これからこの国を護ってくれる優秀な人材を見極める為に騎士団本部へと訪れ、この模擬戦闘を開始からその二階席で静かに観戦していた。

彼は無言で事の成り行きを目立たないように見降ろしている。勝負が決まったとして、帰る様子は全くなかった。

＊＊＊

Ｓｉｄｅ：Ｚ（ゼス）――

そしてゼスも結果とシェリーの安否の為にその場に留まって居た。

「……全く、これが決定打になるはずだったんだがな。そちらはもう一方の手札を出したか」

巻き起こる粉塵を見つめて、語りかけるようにして肩を竦めるゼス。

やがて粉塵（ふんじん）が薄まり、そこから現れたのは、純白の盾である。それを目の前に立てていたのは他でもない、シェリーだった。

ゼスの大剣は盾の前に地面を抉って突き刺さっている。それも、予想していた落下地点から僅かに離れた位置で。

大剣落下の瞬間、シェリーは腰の左側に下げていた盾を即座に左手で取って、大剣の衝撃を受け止め、尚且つ軌道を逸らしたのである。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ……」

大剣の落下衝撃に耐えかねて、盾のお陰で無傷でも荒い息を吐き出すシェリー。未だに受け止めた左腕は震えている。

余裕の足取りで、シェリーの前に佇む大剣を取りに歩くゼスは声をかけた。

「驚いたぞ。今のが本当の戦術だったんだが、ここまで凌ぎきるとは思わなかった。こちらこそ、済まないな。俺も、君の実力を侮っていた。ここまで上手くいかなかったのは君で二度目だ」

やがて大剣の前に立つと、それを右手で引き抜いて肩に担いだ。

「俺に言わせれば、もうドローとして二人とも二回戦に進出したらどうか、と思うのだが如何だろうか？　優秀な騎士が二人この場で確保されるのだから、騎士団としても悪い話ではないと思うのだが……これ以上やると、無傷では済まない闘いになる。いくらなんでも、女子供をこれ以上一方的に傷つける事はできないな。……あ、これは騎士道精神を全うしていないだろうか？」

「――――も……も……」

ゼスの言葉に反応したように、盾を持って跪いている少女がうわ言のように呟いた。

怪訝に首を傾げるゼスはその言葉を反芻（はんすう）する。

「……も？」

「もぅ許さないんだからぁあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

大声で叫びながら、今ある力を全て注ぎ込んだように、盾を前に構えながらシェリーは突進した。

あまりの彼女の豹変ぶりに呆気に取られたゼスは、その不意打ちに態勢を崩された。

「くっ……！」

直ぐにシェリーの剣が迫り、ゼスは大剣で弾き返しながら大きく後退した。

弾き返されたシェリーは足をふらつかせながらも荒れた息を整えながら立ち上がり。

ゼスは、今までの彼女の態度の激変ぶりに冷静さを欠いたらしくない動揺をして大人しく見つめていた。

同様、今まで彼女の事を凛々しく気品ある強くて美しい淑女だと思っていた受験生達も、これには口を大きく開いて顔を青ざめていた。

訓練場には荒れた息を整えようとするシェリーの息遣いしか響いていない。やがて、息が規則的になった彼女が顔を上げた時、今までよりさらに凛々しい瞳がゼスを捉えた。

「もう許さないわよ！　確かにあの戦術は舌を巻いたわ。もしかしたら、私より強いかもしれない、負けるかもしれないと一瞬は思ったわよ。でもね、貴方は聞き捨てならない言葉を口にした……。まだ私を女子供として扱った貴方は私に対する侮辱よ！　不敬よ！　もう絶対許さない、手加減なんて要らない。ボ……私を、私を見下した事を恥と思いなさい、恥！」

あまりの怒りに頬が上気して赤くなっている。

彼女の大声は大音量で既に訓練室全体に響き渡っている。下手をしたら、その声が詰め所まで届くかもしれないと言った高い声音だった。

流石のゼスも、これには落ち着け、と言わざるを得ない。

「……お、おい」

「そう。良いわ、貴方がそれを貫くというなら、騎士の誇りの評価は失格よ！　騎士になる資格なんてない、前言撤回、貴方は成るべきじゃない！　私は勝つ、貴方に絶対勝つ！　貴方は私を見下すという勘違いをしたまま、私の実力をその身に刻まれて永遠に後悔すると良いわ！」

ゼスの言葉を聞く前に切り捨て、ひときしり喚いたシェリーは剣を自らの顔の前に持ってきた。

そしてゆっくり息を吐き出した彼女は瞑目した。

「“―Ｔｉｏｕ　ｄｅ　ｒａｂｕｒａｓｈａ　ｗｉｅ　ｂｈａｒａｄ　ｇｒｈａｔ…《天　から　見守る　炎の　神子　よ…》”」

独特の言葉を紡ぎ、彼女の周りに猛りの風が吹く。その長い黒髪は風の流れで揺れる。

彼女が語る言語は今では誰にも意味を理解できないが、一説によ

れば古の時代に用いられた古代ラルク語だ。かつて魔働を世界中で活用された創世時代で語られた言語であり、魔働はその時代の魔働士によって考案され、実用化されたのだ。とある一定の法則の古代ラルク語を発声する事と、イメージをその頭の中に浮かばせる事によって、初めて魔働を行使できる物だ、と伝えられる。

それを語るという事は、シェリーが今ここで何をするのかゼスは直ぐに理解できた。

「魔働術(まどうじゅつ)……！？」

魔働術。

魔働を攻撃手段として、術者に備わった魔力を放出することで、その塊を相手にぶつける術である。古代ラルク語をキーに、自らの血の特殊な成分を媒介にして魔力として行使する物。

これはその成分が強いことで魔力の大きさそのものとなる。術式によってその種類と強弱が決まるが、魔力が大きいことで例え初級魔法でも高威力を発揮する。

その見分け方が、術者の周囲に発生する風の強さである。

魔力が弱い者は微々たる風が吹くだけだが、魔力が強い者は猛々しい暴風が吹き荒れる。シェリーの魔力は、まさに後者に分類される。

シェリーの家系は、聖王国の中でも1，2を争う強さの魔働の血を持っている。それ故、彼女に匹敵するほどの魔力を持つ者など王族を除けば、騎士団内でも騎士団長シュナイダーくらいのものだ。

彼女の魔働術は初級魔法でも高威力を発揮することだろう。少なくとも、彼女が今唱えている炎属性魔働術でゼスの身体が消し炭になるくらいの威力は誇るはずである。

これが彼女の勝利への確信、その理由だったのだ。

そんな魔力を持つ彼女の魔働術を防ぐ術など、受験生達を含めゼスが持つことなど有り得ない――。

「“――ｙｅａｌ　ｔｕ　ｒｏｕ　ｓｉｏｎｅｓ　ｔｉｅ　ｑｅｒｙ　Ｄ　ｏｌｅ　ｌｉｇｅｒ　ｅａｓｒ　Ｋ　ｒｏｏｌ《祈り　と　共に　我が　怒り　と　同調し　給え　地の守り人　敵を　焼き　焦がせ》”」

詠唱と共にシェリーの目の前に、虚空から赤色の陣が浮かび上がる。

シェリーは目を開いて、その陣に剣を持つ右手を重ね合わせて――

「――“ファイアボール”！」

魔法陣から放たれた、大砲から発射されたような砲弾並みの大きさをした火球が、容赦なくゼスへと襲いかかり。

「チッ――」

ゼスは大剣を盾代わりとして防ごうとする。

しかし、魔働術は物理的なもので防ぐ道理は無いと言われるもの。

火球を避けようとしなかった彼に馬鹿野郎と叫ぶ受験生が居た。

鼓膜に響く爆発音が訓練場内で反響し、火炎はゼスを覆った。

第二話　「牙と疾風」（後書き）

・・シェリーの奥義「アサルトブレードライト」発動！
ゼスは木箱を使った！　ゼスはアイアンガントレットを手に入れた。
「銀狼の牙（仮）」の攻撃！　シェリーはガード！
シェリーは魔働術「ファイアボール」を唱えた！
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

第三話　「結果発表」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第三話　「結果発表」

Ｓｉｄｅ：Ｓ（シェリー）――同日９時２６分

火球魔働術（ファイアボール）によって引き起こされた爆裂さと煙の量は、直撃したゼスを完全に覆っていた。

あの威力では、無傷とは縁遠いものだろう。

流石に魔働を行使して、気分が悪くなったシェリーは一瞬眩暈（めまい）を起こしたが、何とか踏ん張って立ち続ける。

「ふぅっ……ど、どう？　一応命だけは助かるように初級魔法を、使ったけれど、これで、私の勝ちは、決まったも同然、ね」

ゼスは爆発時の煙により姿を確認する事が出来ないが、僅かな気配からまだ息はあるとシェリーは感じ取れている。

自らの実力を認めさせるために本気を出したは良いものの、それで勝負が決まってしまうとは皮肉なものね、と彼女は喜びと残念な気持ちを抱いた。

誰もがシェリーの勝利、と思ったことだろうと思い、ふと怪訝そうに考えた。

（試験官がいつまで経っても判定を出さないなんて変ね……？　もしかして、私の華麗な魔働術に目を奪われたのかしら）

それを裏付ける為に彼女は試験官と受験生達の顔色を窺うことにした。

確かに彼らはこの光景に呆気に取られていた。

しかも、今までの称賛できる戦法を見た時も、シェリーの態度が激変した時も、受験生程の表情の変化をしていなかった試験官ですら、信じられない、と言いたいように口を開けていた。

だが、シェリーは自身の魔働術は確かに初級魔法だが、その威力に驚かれる事ではない、と自覚している。試験官は騎士だし、それ以上な威力の魔働術を数多く見てきたはずだ。

勿論、彼らはシェリーを全く見ていない。

さらに言えば、その魔働術の爪痕である煙を見ているわけでもない。

彼らの視線は、その後方へと向けられていた。

「……ま、まさか――――」

これほどの状況で、その結果を考え付けない程、シェリーは愚かではない。だが、それは有り得ないことだった。試験官と同じく、そんなことは信じられない、と心中で連呼して煙が晴れるのを注視する。

煙は晴れていき、その中心に居た人間の輪郭が現れる。

「……やれやれ、危ないところだった。俺以外だったら完全に大火傷でミイラ暮らしだったぞこれは」

悠然と冷静至極で言う、主武装の大剣、その剣身を前に突き出したまま、ひょっこりと顔を出す、まさにゼス本人だった。彼は先ほどの魔働術の威力を見据えながら、達観な物言いで語る。

彼の顔には煙によって片頬が黒く煤けていたが、それ以外に火傷や怪我などは一切見かける事はできなかった。

その光景に、シェリーが無意識に一歩退いた。

「――――嘘。む、無傷ですって……？　わ、私の、私の全ての実力

が、無傷……？」

先ほどの凛とした態度はどこへやら、シェリーの声はだいぶ裏返っていた。

混乱の極み。これで冷静になれ、というのは無理なことだ。

確かにファイアボールは直撃し、そしてその威力は申し分なくゼスに向かって炸裂したはずだ。その威力を物語っておきながら、相手は火傷一つないなんて事は有り得ない。

元々魔働術は物理的な武装で防げるものではない。それは数多くの歴史が証明している。

それなのに、ゼスは完全に魔働術を防ぎきった。

シェリーも、そして試験官も同様の反応を見せるのは当然と言えた。

「おぉ、驚いているようだから説明しておくと、残念ながら俺はあらゆる魔働術が効かないんだ。何故かは知らんが、そういう性質らしい」

「……なん、ですって！？　まさか、反魔働障壁（アンチマジックフィールド）かその類の呪文を！？」

反魔働。

その名の通り、魔働を唯一無効化する事が出来る魔働理論だ。ある高名な魔働術者が長年の実験を重ねて、実用する事に漕ぎ着けたが、元は難しい論理であり、それを行使するのも専門の魔働術士ですら、非常に困難とされている。

しかし、聖王国ではおろか、その理論を一剣士である者があの短期間で簡単に行使出来るなど聞いたことが無い。彼は外国人らしいと聞いた事があるが、もし国外でそんな理論が実用化されたとすれば、既に魔働の強さは聖王国に優っているのではないか、と考えて

しまうだろう。
いや、そんなキリが無い想像はどうでもよかった。
ただ一つ言える事は、シェリーに万に一つも勝ち目が無くなった、ということだけだった。

＊＊＊

Ｓｉｄｅ：Ｚ（ゼス）――

「わ、私の自信が、こうも簡単に……う、嘘、嘘よ。そんな事は有り得ないわ！」

あまりの混乱に、力なく退かざるを得ない状況のシェリー。
全く未知の存在の彼に、本能で畏怖すら抱いている結果の行動だった。

「そう言われてもな。有り得ない、なんてことは無い。今目の前に起きている光景がそうだぞ」

ゼスは溜め息を吐きながら、大剣を構え直す。
判定が出ていない以上、仕合は継続されている。そこに油断も隙もない。
しかしシェリーは既に混乱によって、戦意喪失気味であった。
頻りに嘘と呟いている彼女に、果たしてこのまま斬り込んで良いものか、と悩むが、動かない以上仕合は終わらないという考えに至ったゼスは膝を屈めた。

「不意打ちのようだが、悪く思うな。武装を自ら棄てるなんて騎士の風上にも置けない、そういうのを教えたのは、君だからな？」

一気に跳躍するように、シェリーに肉薄する。

しかし流石に騎士を目指しているだけあって、彼女も咄嗟に半ば無意識で盾を構えて迎え撃った。ゼスと彼の大剣から流れる殺気を感じ、生存本能が働いた結果だったが、足まで力が入らなかった為にまともに大剣を受けて、態勢が崩れないわけがない。

重い大剣の横薙ぎな一撃が、シェリーの盾へ直撃する。

「きゃぁっ……！」

案の定、衝撃を殺しきれず、盾ごとシェリーが態勢を崩して仰向けに倒れ込んだ。

唯一のチャンスをゼスは見逃すはずがない。

ここぞとばかりに彼女の上を跨いで、その大剣を振りかぶり、一気に一撃を放とうと――

「――――――」

だが――――やはり彼女の言う通り、結局は終始女子供として見ていただけだった。

ゼスの腕は振り下ろされていた。

「――――そこまでっ！」

厳格な声音が訓練場に響く。
試験官の仕合終了の合図だった。

足音を響かせて、ゼスとシェリーに近づく試験官。その視線は鋭く、事の顛末を見通し、有無を言わせぬものだった。

「……ふむ。どっちが勝ったかは、言うまでもないな？」

彼の視線の先には、倒れ込んだシェリーと彼女を跨いで見下ろすゼス、両名の姿。
シェリーは緊迫した表情で息を吐き出している。彼女の左手は身体を交差し、右上側へと盾を構えていた。その盾表面に沿うように、シェリーの頭上に大剣があり地面を抉っていた。
対し、ゼスはまるで達観した面持ちでこの状況を見直している。彼の両手は大剣の柄に握られており、彼の首にはシェリーの右手に握られた剣の切っ先がピタリと着いていた。

「ゼス。お前の攻撃はシェリーの盾によって阻まれ、それは当たる事がなかった。いや、そうなったと言うべきか。私の目の錯覚でなければ、お前は何を思ったのか大剣の軌道にブレを生ませていたぞ？
対しシェリーは不利な体勢であれど、自らの剣をゼスの首に当てている。どちらかが早く動いても、少し力を加えるだけで先に首が飛ぶのは誰か、分かっているだろう」

試験官の推測は当たっている。
ゼスはトドメの一撃の際、大剣に手心を加えたのだ。そのブレた軌道をシェリーが見逃すはずはなく、盾を使って素早く軌道を変えて回避し、同時に剣を彼に突き出したのが、あの一瞬の攻防の顛末

だった。

「よって、この第一試合の勝者は、シェリー・アイオライト＝ブランシェとする！」

この宣言はまさに絶対の言葉だった。

事の成り行きを見守っていた受験生達は、白熱した戦いを見せた二人に称賛と、勝者のシェリーに祝福の拍手をした。

拍手の中、ゼスは大剣を引き抜いて肩に担いでシェリーから離れる。彼女が身体を上げてゆっくりと立ち上がるのを見届けた。

「……流石だったな。最後の最後まで君は騎士だと思う。決して諦めず、この俺の首を取った。俺の完全敗北だな。おめでとう」

何の感慨も暗さも無く、ゼスは祝福の言葉を口にしてシェリーに手を差し出した。

お互いが健闘した、それを称える握手だ。

シェリーは若干それに反応したが、顔は上げなかった。彼の手を見つめたまま、口を悔しそうに見せた。

「……く――――」

そんな声が漏れた途端、パァン、と乾いた音が響いた。

シェリーが乱暴な手つきで、差し出されたゼスの手を弾いたのだ。

「な、何よ……。それは、言い訳のつもり？　それでさっきの手加減を無しにするつもりなのかしら？」

シェリーは肩を震わせて、顔を上げようともせずその怒りを吐露し始める。

「私が勝った？　ええ、勝った、勝ったわ、勝ちましたとも！　でも、私は勝った実感は無いわ、むしろ負けたと思っているくらいよ。あんな状況なら、明らかに私が負けるところだったのに……。結局、貴方は最後の最後まで私を弱いと決めつけていたのね……。そうやって、さも自分が弱いから負けて当然と振舞って、身を引いて、私の夢を後押しして、満足かしら！？」

「……」

彼女の言葉に、ゼスは何も言わずに受け止めていた。

確かに手加減したのは事実だ。明らかに迷いなく大剣を振り下ろせば、確実に勝てていた。だが、最初にゼスも口にした通り、自らの相棒は加減が効かない為、当たり所が悪く命を奪ってしまう可能性が非常に高かった。

何より、相手は女性だ。彼女たちはか弱いという事実を、彼は身を持って知っていた。否、むしろ既に本能の深いところまで根付いてしまっているのかもしれない。最早修繕できぬ真相として。

結局は自らの攻撃をシェリーがその盾で防ぐ事が出来るということを、信じなかっただけなのだ。

「……折角、折角ボクは、貴方を本気にさせることで、自らの力で戦って、前に進める事ができるのを証明する間近だったのに……」

その言葉は非常に小さく、聞き取れた者は居ない。

やがて、顔を上げたシェリーは、何かに耐える表情をしていた。

「貴方は強い。それこそ、貴方の言う通り、二人とも勝ち上がって騎士になっても申し分ない総合力の持ち主だった。それは評価するわ。……でも、失望したわ」

心中を吐き出したのがきっかけだったのか、シェリーは僅かに溜まっていたソレを出してしまった。
彼女の右目から出てくる滴。
それを間近に見たゼスは、ある過去を重ね合わせる。かつて、ゼスと関わった女性が浮かべていた表情だった。

「君は……」
「……ふん」

ゼスが今までにない反応を見せたからか、シェリーは自分がどんな状態かを気付いて顔を背ける。仕舞った剣を整えようするのを見せるように、右腕を不自然に挙げて顔を拭った。

「――っ、祝福、ありがと。私はこのまま騎士になる。だから、もう会う事は無いでしょうね。……さようなら」

そう言い残して、シェリーは一度もゼスを見ないまま、訓練場を後にした。
ゼスは、彼女の後姿に声をかける事ができなかった――。

＊＊＊

二階席で、その光景を一貫して観戦していた聖王国宰相ディル・エンメイスは戦後の成り行きは興味がないように、物思いに耽っていた。
彼は、シェリーが放った魔働術をゼスによって無効化されるとこ

ろを勿論試験官同様に驚愕していた。その頃から、何かを必死に思い出すようにブツブツと呟いている。

「……漆黒で異形の剣身……身の丈ほどの大剣……果てしない重さ……そして、反魔働効果……」

そして、彼は雷に打たれたかのような衝撃を受けた。

「……そうか！　成程、アレがそうなのか……」

自らの推測がその通りだとするなら、これほど面白い事は無い、と笑みを浮かべた。

「フ、フフフ、ククククク……。とうとう見つけたぞ……！　まさかこんな所に……早速、知らせなければ。手負いの獣は、今のうちに鎖に繋がなくては。これで――――フフフ……！」

ディルは微かな笑いを抑えきれぬまま、二階席から身を翻して姿を消した。

＊　＊　＊　＊　＊

その後、最終選考は恙無く進められていった。

残り六人の受験生達が一対一で死力を削り、次々と数が減らされていく。

シェリーは午後の二回戦では何事も無く、ゼスと初めて会った時

のように凛々しい態度で仕合に臨んでいた。以前より、幾分キレを増していたようで、難なく勝ち進んでいた。
そうして、最終選考の全ての日程が終了し、登用試験結果は翌日に控えられた。

――――9月14日13時

そして、登用試験結果当日。
最終選考を受けた八人全員が召集され、試験官の事務室に整列していた。

「それではこれより、騎士登用試験の結果を発表する。呼ばれた者は、前に出るように！」

受験生全員が待ち望んだ瞬間、その中で唯一の人物のゼスは、なんら感慨を抱いていない。
一回戦で負けたとあっては、合格はほぼ不可能なのだ。ただでさえ、外国人は面接で色々な偏見を抱かれやすい。
最善を尽くしたものの、手が届かなかっただけのことだ、と。心の中は冷静だった。

――――（仕方ない。所詮安定した暮らしを求めていただけだ。いつも通りに戻るだけだろうと思えばいい）

ふぅ、と何かに区切りを付けるように、溜め息をひとつつく。

「まず、最終選考で優勝者、シェリー・アイオライト＝ブランシェ！」
「はっ！」

試験官の言葉に、凛とした声が続く。
あの後、まるで敵なしと他の受験生を圧倒したシェリーは総合力で最も優秀だと証明された。生真面目な性格で、自分なりの誇りを持っている彼女が選ばれるのは道理と言えた。
凛々しく応えたシェリーはこの結果が出るまで、緊張したり安堵の息を吐いたりしない。むしろ、選ばれて当然と堂々とした様子だった。
続いて、予想通りに選考で二位、三位だった受験生の名が呼ばれ、騎士の道を歩み始める事になった。

「そして最後に……」

既に三名の新人騎士が生まれている中、試験官はさらに手に持つ書類に目を落として口を開いた。

「――ゼス。前に出ろ」

その言葉に、誰もが時が止まったように硬直した。
無論、ゼスは試験官を見つめる。まるで言い間違えた、という言葉を待っているかのように。

「どうした？　早く前に出ろ」
「……は」

だが、その言葉はいつまでも言わず、むしろ促してくる。

とりあえず命令に従い、ゼスは怪訝な顔で一歩踏み出した。
前に出た彼に、試験官はその書類を差し出した。

「おめでとう。お前も晴れて蒼衣の騎士団の一員だ」

降ってくる言葉に、ゼスは渡された書類に手にし、それへと目を落とした。
内容はこう書かれている。

『ゼス殿
この度開かれた聖王国レイザーランス管轄下、蒼衣の騎士団の登用試験において、その才能を発揮し、騎士としての素質を証明した。よって、ここに蒼衣の騎士団の団員であることを認定し、許可するものとする。
――蒼衣の騎士団　団長　シュナイダー・アウグスト』

いわゆる、騎士に選ばれた事を証明する許可書であった。
団長の直印まで押されており、どうやら本物のようだった。

「――ちょ、ちょっと、待ってください！」

これに異を唱えたのは、他でも無いシェリーだった。
先日、もう会う事がないと言われたその相手がまさか同じく騎士に選ばれた、という事に混乱するのも無理ないことだったからだ。

「何だ？　シェリー・アイオライト＝ブランシェ」
「あ……あの、その……。か、彼は最終選考の一回戦で私に負けたんですよ？　試験官殿も、一回戦で負けたら落ちるだろう、と仰っていたではないですか。騎士総合力を見る試験で、彼は明らかに劣っている筈です」

試験官はふむ、と顎に手を添えて頷いた。

「確かにそう言ったな。彼はお前に負けた、確かに記憶しているよ。だが、お前は辛うじて勝ち取った結果だったとも記憶している。一概に劣っているとは言えないのではないかね？」

「うっ……」

痛い所を突かれた、と呻くシェリー。

試験官はゼス採用の理由説明を続ける。

「しかもここまで見れば、シェリーは最終選考の輝かしい優勝者だ。そんな彼女に苦戦を強いたゼスも評価を改める要素はあるだろう。さらに、その冷静な判断力とその戦術の合理性、尚且つ第二と第三選考を優秀な成績で通過した彼に好評価な試験官も少なからず居たことも起因する。そして、偶然最終選考の仕合をご覧になった軍上層部の方が一般人にしておくには惜しい人材だから是非にと、彼を推薦してな。それにより審査委員会が判断した」

ざわっ、と受験生達がざわめく。

軍上層部からの強い推薦。これはよほどの実力者でなければ、不可能な事柄だ。しかも、その人物が認め、中立の存在である試験審査委員会に干渉できる権力者は一人しか思い浮かばないからだ。

シェリーが代表でその人物の名を口にする。

「もしかして、シュナイダー・アウグスト騎士団長閣下ですか？」

「そうだ。閣下直々に推薦された事だ」

きっぱりと宣言する試験官。

騎士団長の命令は将軍権限の行使である。それに異を唱える騎士

候補はこの場には居ないも同然だ。
これにはシェリーも納得がいかない様子ながらも、引き下がった。
試験官はよろしい、と頷いてゼスを見た。

「さて、ゼス。お前はどうだ？　このような形だが、無論辞退する権利はある。だが、騎士になろうとして受けた試験だ。よもや、辞退する気は無いはずであろう？」

ゼスはその言葉に今一度考える。
確かに辞退する権利はある筈だった。それも良い。これは諦めかけていたところだったが、最後の機会が訪れたようなものだ。断れば今まで通り、傭兵をしながら不安定の暮らしを送る。この話を受ければ安定した暮らしが手に入る。
自分の人生は闘いしかない。それしか知らない人生を送って来た。だから、ここでしかない。ここで引けば、態々面倒な試験を受けた意味がない。
様々な事を考え、結論を出す。

「――了解した。その任命、しかと承る」

まずは何事も経験が重視だ。騎士になる事で、また新たな視野を広げられるかもしれない。その未知への探求が主に彼を動かしたのだ。

「では、発表は以上だ。騎士になる者も、なれなかった者も今以上の精進を期待する。なお、新人騎士諸君についての今後の予定は追って通達する。解散――――！」

こうして、ゼスは騎士になった――

第一章　騎士登用試験　ＥＮＤ

第三話　「結果発表」（後書き）

‥シェリーの魔働術「ファイアボール」！　しかし、ゼスにはきかなかった！

ゼスは「蒼衣の騎士団従騎士」の称号を得た。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

こんばんは、蒼雷のユウです。

ここで第一章が終り、続けて第二章が始まります。

シェリーの自信の元であった、強力な魔働術。初級魔法とは言え、ゼスが無傷であった理由、それは後に自ずと分かってくると思います。それまでは、彼の動向を是非とも見守ってあげて下さい。

試験に合格した新人騎士は、これから二ヶ月間の研修、という新人育成期間があります。そこで騎士に必要な一通りの事を学び、修了してから初めて本格的に配属となります。

新人騎士は従騎士――軍隊で言う一般兵相当――から始まり、一小隊へと本部からの通達で配属し、任務をこなしていきます。

第二章は、ゼスが研修期間を終えた二ヶ月後から始まります。

第四話　「邂逅」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第四話　「邂逅」

聖王国レイザーランスの聖都郊外にある、オンボロアパートは家賃が激安の場所だった。主に世界中を放浪とする旅人か、この付近に住む貧困層の人々しか利用しない。

窓という窓は壊れ果て、風通しも悪く、木製で作られた壁の一部も腐り始めており、しまいには建物自体が２％ほど傾いているという、快適さとは程遠い。

そこの一室で、卵を割ってフライパンに乗せて焼き始める、ゼスの姿があった。

「……あ。卵の殻が入った……」

割り方が悪かったのか、殻の欠片が黄身の上にポトリと落ちていた。

そのままプルプルと揺られながら、殻の欠片はその頂点で存在を誇示している。

「……」

ぷるぷる。

音も無く何故か震えている。欠片が落ちた拍子で、だろうか。

「……」

ぷるぷる。

プルプル。

「……かつて読んだ女性の肌を見せる雑誌の中で、似ているな……」

真顔でとんでもない事を呟いた。
そこで不意にフライパンの下を見てみると、そこに赤い色の焔はいつの間にか消えていた。

「……あ。火が消えている。通りで焼く音が聞こえんわけだ。どの樹から伐採してきたんだ……所詮は最安値か」

家も古ければ、火を起こして料理する為の材料の質も悪い。これまでも焼いたり煮たりしている最中に、唐突に火が薪の湿った部分に到達して、弱った事も何度もある。
ゼスはここに来ても、ここに来るまでも、このような生活をしているので、愚痴は零すものの慣れていた。
傭兵稼業で利益を得ても、この生活だけで±0リオ――――リオとは、この世界エクスペリアの共通通貨――――に結局はなってしまう程、極貧生活は逃れる事が出来ない事を過ごしてきた。

「……だが、それも今日で終わりだな。明日から騎士寮に寄宿することになっているしな」

再び、摩擦によって火を起こしたゼスは、部屋中を見回してみる。
ベッドではなく、スカスカ布団。テーブルは無く、普通に床で食事。窓はひび割れており、ヒューヒュー風が通る。温かく寝れるかどうか判らない有様の三畳一間である。
正直、ここでの生活は殆ど印象がなかった。朝食と寝るとき以外は酒場に入り浸ったり、騎士団訓練施設に缶詰めにされていた。

騎士登用試験結果から二カ月が過ぎた。
騎士の道を歩み始めたゼスは、新人騎士としてまず、二ヶ月間の騎士基礎訓練を受ける事を義務付けられている。

試験に受かって直ぐに任務に付けるわけではなかった。
馬術、剣術、弓術、盾術、礼儀作法に言葉遣い、そして魔働術に関する心得を厳しく叩き込まれる。それらを一定のレベルで修了しない限り、部隊に配属はされない。
騎士団はそれなりの厳格な存在であるように、と訓練を受けさせるのは当然のことである。
幸い、ゼスは剣術と格闘術、馬術やその他の戦闘技術は特筆して優秀だった。その代わり、礼儀作法などを四苦八苦する事になったのだが、現在はこうして訓練を修了することができた。

訓練を終えた後は、初めて従騎士――軍隊の中での一般兵相当――の立場となって、配属先の小隊で仕事をこなし、給料を貰うことになる。
また、仕事に付くと寮も用意されるため、このオンボロアパートからおさらばできる、という事になっているわけだ。

目玉焼きを焼き終えたゼスは、木製の皿に乗せて床に置く。
同じ木製のコップにミルクを入れてから、麻袋から食パンの一片を出して、それを半分にして支度した。

「……」

手に取った食パンをジッと見る。
パンの耳に碧い胞子が生え始めている。所謂、カビが生えていた。
この食パンを買ってから既に一週間が経過していた。新しい食パンを買うお金も無く、一日ごとに半分にして食べるという節約志向だった為、残った最後の食パンにカビが生えるのは当然のことだった。
それをゼスは、至極冷静な表情で臆面もなく、食パンを口の中に入れた。

これまでも彼はこういった食物を、勿体ないからと食べてきていて慣れていた。いつ食べれなくなるか判らない、それに早めに食べたほうが広がれる前に消化できる、というのは本人の弁だ。

しかし、それも今日で終わる。給料が入ったら、このような不安定な生活から抜け出せる。

ゼスは内心、気分が高揚し始めていた。

「……だが、旨いな」

――彼の舌も常人と感覚が異なっていた。

第二章　第十七小隊

――11月15日8時12分――残り、1か月と16日、15時間48分

蒼衣の騎士団本部、詰め所に訓練終了の際に渡された書類の指示に従って出頭したゼスは、窓口に直行する。

そこで騎士団に指定されている制服と甲冑を初めて支給され、そのまま更衣室で着替えてから配属先の小隊会議室で着任挨拶をすることになっている。

ゼスは渡された地図に従って、配属先の小隊用の更衣室に向かっていた。

道中、彼は制服を受付嬢に渡された際の態度を、怪訝に思い返している。

――『はい、ゼス殿ですね。承っております。……あ。配属先は第十七小隊、ですか……。あぁ、いえ御免なさい！　新設されたばかりの小隊なので、きっと少数精鋭になるのだろうと思っていただけですから。えぇ～と……は、はい、こちらがゼス殿の騎士制服です。こちらの地図に各小隊専用の更衣室があるので、そちらでお着替えください。……あの、頑張ってください、ね？』

彼女の態度は露骨に慌てていて、ゼスに向ける視線は同情的なものだったからだ。

（……俺が何かした、わけじゃないよな。明らかに十七小隊という名で動揺していたしな。……何かあるのか？）

ゼスは改めて渡された辞令書を開き、その内容を確認する。

『ゼス殿
貴殿を蒼衣の騎士団第十七小隊に従騎士として配属を命じる。指定された日時までに窓口で制服を受け取り、更衣を済ませた上で第十七小隊会議室に出頭せよ』

人事部の印が押されており、特に不審な部分が書かれているわけでもない。

そういえば、新設された小隊だと、受付嬢が言った。また、少数精鋭にする予定の小隊だと。つまり、彼女が頑張れ、と同情を送ったのは、ゼスの働きが惜しみなく発揮されるような場所だからだと思ったのだろう。

確かに少人数ならゼスは、嫌でも前線などに駆り出されるだろう。

面倒な事この上ないが、活躍する場が広がるのは、正直受けて立つところである。
早速、幸先が良いかもしれないな、とゼスはさらに気分が高揚していた。

――しかし後に、受付嬢のあの態度は悪い意味での同情だったのだ、とゼスは思い至ることになる。

地図の印に従って、ゼスが辿り着いた場所は第十七小隊隊員専用の更衣室である。
支給された制服に着替えてからでないと、会議室に出頭できない。また、態々家に戻って着替えるのも時間がかかりすぎるので、用意されている部屋で着替えようとして足を運んだのだ。

「さっさと着替えるとするか」

荷物を抱えた左手を腰に回し、右手で更衣室のドアノブを握って捻る。ガチャ、という音と共に扉が開いてゼスは中へと足を踏み入れた。

「……ほぉ、ロッカーまであるのか。持ってきた荷物はここに保管できるな」

更衣室の中を見回して使い心地を実感しようとした時。

「……え？」

耳に、普通ならここに居る筈がない裏返った声が聞こえた。
ゼスが咄嗟に声がした方角に顔を向けると、入り口から死角になっている場所で、黒い長髪の少女が支給されたばかりの真新しい騎士制服に着替えようと、下着姿で立っていた。

「あ……」

ゼスはその光景を見て硬直し、尚且つ冷静に状況を分析する。
ここは彼女がいるような女性更衣室ではないことは、入り口を見た時に確認している。ここは第十七小隊専用の更衣室ではあることは確実だ。故に、自身がここに居る事は不思議ではない。
問題は、何故ここに彼女がいるのか、だ。

シェリー・アイオライト＝ブランシェ。
二か月前、彼女とは騎士登用試験の際に出会い、その最終選考にて仕合をした経験がある。
そこで彼女の不興を買って、以来顔を合わせても会話した記憶が無い。そして、部隊に配属されればこれからも会話をする機会は一切無いと思っていた。
だが、シェリーは何故第十七小隊専用更衣室で、騎士制服に着替えようとここに居るのか。
答えは単純だ。彼女も、第十七小隊に配属を命ぜられてここにいるのだ、と。
男所帯の騎士団に、更衣室を男女別にする想定はしていない。同じ隊で固まって着替える部屋を用意されれば、時間が悪ければ男女が着替え中に遭遇するという光景は有り得る事だ。
要するに、今の状況はそういうことだろう。

状況は理解した。そして次は彼女が本物のシェリーである確認を

取る。
傍に置かれているのは、試験時に彼女が来ていた服と同じ物であり、ここに来た時は着ていた服を脱いで、支給された騎士制服に着替えようとした。
きちんと手入れしているのか、ストレートヘアの黒髪が綺麗で、普段の凛とした眼差しを見せる彼女は鋭いほど美しい、まさに見る者が感嘆するほど称賛される美少女だ。晒している日焼けをしていない小麦色の肌は、健康的な躍動感を感じさせる。鍛えているためか、多少の筋肉はあれど無駄な肉は付いていない。スタイルは全体的にバランスが取れており、女性らしいやわらかな曲線を包む二つの下着は、色だけでセクシーと思わせる黒だ。
その見覚えのある体格で、彼女はシェリー本人と断定。
誤差は無く、全て情報通りに事は動いた。
ただ、唯一誤算があるとすれば、彼女のその女性特有の体つきだった。

（……以前会った時は軽鎧を着こなしていたから判らなかったが、意外と着痩せするタイプだったんだな）

情報収集した全ての観点から、ゼスは内心判断した。
ゼスが状況判断している間、見つめ合う二人は硬直し無言。ゼスは無表情で見つめており、対しシェリーは制服に腕を入れた態勢のまま驚いた表情で固まっている。

「……あ、あぁ……あああああ……！」

やがて、徐々にシェリーの驚愕した表情が大きくなり、同時に顔色が赤く染まっていく。
その頃は、ゼスも判断を完結しており、とりあえず偶然出会った

“同僚”に対して社交辞令的な挨拶をすることにした。

「……久しぶりだな。何度か訓練期間に会ったが、声を聞くのは二カ月振りか？」

それがきっかけだったのか。シェリーがなにやら傍に掛けてあった剣を手に取って――――。

「いやぁぁああっっっ！！」

かつて彼女がキレた時と同様に、アノ声で悲鳴を轟かせた。

悲鳴を上げながら、涙目で半狂乱に剣を振り回したシェリーは用意されたロッカーをほぼ斬り壊すという暴挙に及んだ。本来はゼスを斬り倒そうとした所業だったが、彼が難なくそれを避け続けたため、ロッカーがとばっちりを受けたのである。

その応酬が続けられる内に、ようやく混乱した頭を整理できたのか、荒い息で呼吸しながら、剣を振うのを止める。

ゼスは彼女が再び暴走するのを回避するため、窓側まで退避している。

そしてようやく、呼吸を整えて顔を上げたシェリーだったが、睨みを不躾な男を向ける辺り、まだ怒りは抜けきって無いらしかった。

「ゼ、ゼス……！？　あ、アンタ……なんでここに居るのよ！？」
「以前と言葉遣いが変わっているな。前は淑やかさが出ているものだったのにな」
確か前は、「ゼスさん」とか「貴方」と言われていた筈だったが。
「当然よ！　アンタの事が嫌いになったんだから、礼儀なんてやるだけ無駄と思えているのよ！　だからもう『さん』付けなんてしないわよ！　で、なんでここに居るのかって訊いてるのよ！」
「考えていないのか？　ここは第十七小隊専用の更衣室。俺は君と同じ、第十七小隊所属になった」
その冷静な答えに、シェリーは驚いた表情を見せた。
「う、嘘！？　な、なんでアンタがボクと同じ小隊に配属されるのよ！？」
「そんなことは知らんな。それに、そんな嘘をついてどうする？俺がここに居る理由は、それ無しでは有り得んぞ」
「うっ……。で、でも、そんな堂々と入ってきて、しかもノックもしないなんて……。ボクみたいな女性が入って着替え中だったらどうするのよ！」
「そもそも、男所帯の騎士団詰め所の更衣室で女性が着替えている事自体、おかしい話だ。配属先の小隊に女性が入るという考え自体しなかったからな。確認せず入るのはむしろ仕方が無い。そちらこそ、着替え中なら鍵ぐらい閉めておけば良い筈だろう？」
「くっ……うぅ。そ、それは……少数精鋭の小隊だと聞いていたから、てっきり女性だけを集めた特殊な部隊なのかな、と思ったのよ。それで、更衣室が男女別に分けていないと判っていても、そう推測した途端急に安心しちゃって……」

頬を赤く染めながら、モジモジと手を擦る。
ゼスの容赦ない口撃に、次第に消沈するシェリー。その仕草は、普段見る凛々しい姿とは打って変わっての、歳相応の少女らしい姿だ。
だが、直ぐに顔を下していた彼女が、今の自分の姿がどんなのかを思い出し、剣を持った手で自らを守るように身体を抱いた。

「そ、それよりも……！　……み、見たの？」
「何をだ？」

と、上目遣いでシェリーの質問に、質問で返すゼス。なんのことだ、と心底分からないように首を傾げている。
僅かに落ち着いてきたシェリーが、声を静かにさせて言う。

「な、何って……とぼけないでよ！　そ、その……わ、私の……今の……す、姿を、み、み、見たかって言ってるの！」

最後はやや語気が強められた。
あぁ、とゼスはようやく納得がいったと頷いた。
今のシェリーは着替え中の下着姿。それを見られないように、両腕で恥じらうように隠している。まるで本当に先日の彼女とは違う姿に見えて仕方が無いのだが、とりあえずゼスはありのままを伝える。

「……ああ、見たな」
「なっ……！？」

再び顔面が真っ赤になって驚愕するシェリー。
ゼスは構わず続けた。

「そもそも、お互いの姿を認識する為に見続けたんだ。見ていない方がどうかしている。何、今回はお互いの不注意だったんだ。別に君の桃のような尻を見ても、俺は何とも思わんから、安心しろ」
「な、な、なんですってぇえええええ!?」

ゼスはとりあえず怒りを鎮めるつもりで宥めたつもりだったのだが、どうやら火に油を注いでしまったらしい。どこで彼女の怒りを買ったのか、彼自身訳が分かっていない。
再び剣を構えたシェリーは、ゼスに襲いかかる。

「み、見られただけじゃなく、ボクの綺麗な姿を見て何も感じなかったですってぇ!? なんていう不躾な男なのよ! もういい、斬る、斬る、斬って斬って斬り倒してやるから逃げるなっ、この変態男!」
「斬ると言っている人間から逃れるのは当然のことだろうに。何を怒っているんだ?」
「う、五月蠅い! そ、それにアンタ……最初の第一声で、『着痩せするタイプだったんだな』って言ったわよね!? それって、ボクが太っているように見えた、ってことでOKよね!?」
「……聞こえてたのか」

ちゃんと頭の中で思い浮かべた筈なのだが、無意識で口にしていたらしかった。
だが、シェリー本人はどうやら別の意味で捉えたようだったが。

「こ、このボクに向かって何たる無礼な! 大体、女性に対して太っているという発言は世の女性たちを敵に回す発言なのよぉ!」
「そうなのか。それは知らなんだ」

むきぃー、と言いそうなぐらい暴れるシェリーは、剣を振り下ろしてゼスを遂に捉える。しかし、その剣の切っ先は片手での白刃取りで完全に止められた。

「あ！　ちょ、ちょっと離しなさいよ！　このままじゃ斬れないじゃない！」

「まぁ待て。落ち着け。俺に無礼があった事は素直に詫びよう。それで、訊きたい事があるんだが」

「……ふ、ふん！　謝ったって許されない所業よ！　今までボクのやわ肌だって、一度も父上以外の男に見せた事も無いのに……！」

「さっきから、君の言葉遣いに妙な違和感を抱いている。先ほどの質問で確信したが、君は自分の事を『ボク』と呼ぶのか？」

「……あ」

今頃気づいたかのように、シェリーはカチンと硬直した。

また何か怒らせたか、とゼスは思ったが、彼女は怒らずに逆にバツが悪そうな表情を浮かべた。

「なんだ。訊いては悪い質問だったか？」

「……いえ。そうね、もうかなり無意識で言った気がするし、少し事情を説明する必要はあるわね」

ハァ、と溜め息を吐いてシェリーは渋々と語り始める。

「想像通り、ボクは普段『ボク』と呼ぶのよ。『私』としてのボクは、ただの演技に過ぎないわ。本来は、今のようなのがありのままのボクだけど、私は淑女になっているわけなのよ」

「……面倒な事この上ない分け方だな。何故ありのままの自分を表現しない？」

「それも面倒な事情があるわ。ボクの家系はこの聖王国でも高貴な

家なの。父上は厳格な方で、ボクのこの振舞いはあまりよく思われていないのよ。所謂、家庭の事情ね。『アイオライト家の娘ともあろう者が、己をそのように振舞うのは、淑女として悪い目で見られる』ってね。だから、今は私なのよ」

自らの立場に苦笑するシェリー。

別に無理して演じているわけではない。自ら進んで淑女を演じている。その事を理解したゼスは、成程な、と呟いた。

「つまり、君はお嬢様なわけか」

「まぁ、そういうことになるのかしら？　普段はこの態度は宴の場では控えているしね。できれば、騎士団内でも私でいれれば良かったけど、その事は少なくなりそうだわ」

「しかし、そんなお嬢様が何故騎士団に入る必要がある？　父親に言われて入ったのか？」

純粋な疑問をぶつけたゼスに、シェリーは首を横に振った。

「そんな事は無いわ。前にも言ったけど、私は騎士団でやる事があってここに入ったのよ。貴族の子は騎士になって戦績を上げる事で、家の地位を高める事はなんら不思議ではないわ。私の家系は元々騎士の家ということもあって、父上は乗り気じゃなかったけれど了承してくれたわ」

「待て。父親が乗り気じゃなかったというのはどういうことだ？」

「ああ、それはね……まぁ、なんて言うのかしら？　父上はその……私の事をとても大切に思ってくれているのよ。本来、父上は私を普通の貴族の息女としての生活を送らせたかったみたいだけれど、私が無理を言って受け入れてくださったのよ」

「……そういうことか」

察するに、シェリーの父親は親バカということか、とゼスは理解した。

「まぁ、今はどうでも良いのよ。問題はそこでちゃんと戦績を上げないと何時呼び戻されるか分からない事なのよね……。だから常に優秀な実力を発揮する必要がある、というわけ」

「……理解した。それであれほどに実力を発揮できて、真面目に振舞うわけか。それで、ボクお嬢様」

唐突の変な呼称に、シェリーは眉を潜めた。

「……何、その呼び方？」

「本来はボクと言うのに、私と言う猫かぶり淑女では長すぎるから、ボクお嬢様、ピッタリだろう？」

ゼスはなんの疑いもない物言いに、シェリーは呆気に取られた。そして、改めて呆れ返った。

「それは私がボクというお嬢様みたいに見られるから、一生言わないで……。それで、何か言いたい事でもあるの？」

シェリーは首を傾げて訊ねる。

ゼスが何か言いたげにして、彼女をあんな風に呼んだ筈だからだ。

「ん？　大したことじゃないが、何時までそんな恰好をしているんだ。服ぐらい着ないとお嬢様には合わんぞ」

「……え？」

彼に言われて改めて自分の姿を見る。身体を包む黒い下着からは、剣を持つ両腕によって寄せて上げられた桃の谷間が覗いている。

シェリーの顔は再び赤くなってヤカンの様に沸騰した。

「あ、あぁ……こ、この……全てはボクの姿を見たいがために……じ、時間稼ぎを……！　このクズ男、バカァアアアアアアアッ！」

剣の柄を離した左手で魔働陣を一瞬で組んだシェリーは詠唱無しで発動させた。

その絶叫の直後、更衣室の窓ガラスを破って炎が飛び出したのであった。ゼスは軽く避けたが。

――結局は剣の一閃でゼスの頬に傷を付けて、ひとまず怒りが収まったシェリーは集合時間間近なのを思い出し、ゼスを強引に追い出してから素早く着替える事になった。

第四話　「邂逅」（後書き）

・・ゼスとシェリーは「蒼衣の騎士団用制服」「蒼衣の騎士団用甲冑」を手に入れた。シェリーは「セクシーな黒の下着」を手に入れた。

シェリーは魔働術「ファイアボール」を発動！　ゼスはかわした！　ロッカールームが半壊した！　その後、ゼスとシェリーの給料から４割ほどさっ引かれた！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

こんばんは、蒼雷のユウです。

さて、これで物語は本格的に始まっていくわけです。

既にシェリーが仲間になる、という事を予想していた人もいたようですが、私は王道を地で行こうと思います。と言うと、このなろう小説では意外と王道物って少ないように感じられるのです。

無論、意外性を富んだり、邪道だったり、奇抜な物も好きですが、やはり王道も悪くは無いと思う訳なのです。

ならば、作ればいいじゃない？　ということが切欠でこの作品が生まれたと言っても過言ではないのです。

さて、なんともお色気から始まりましたこの第二章。ゼスには是非とも「ラッキース〇べ」とか「むっつりス〇べ」の称号を与えたいところなのですが、それはまぁ後の方が面白そう（爆

第五話　「不精な騎士」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第五話　「不精な騎士」

――同日9時

第十七小隊会議室。
ひと悶着あったものの、どうにか落ち着いて着替え終えたゼスとシェリーは共にその扉を開き、中に踏み入れた。

「……従騎士、ゼス。只今参上した」
「同じく従騎士、シェリー・アイオライト＝ブランシェ。参上致しました！」

ゼスは変わらない口調で、シェリーは凛とハッキリとした口調で挨拶をして、敬礼する。
しかし、彼らの先でこの会議室の議長席に座る、ここの小隊長からの返事は来ない。
いや、それどころか。

「……ぐぐぐ……ぐぅうううう……」

机に突っ伏していびきをかいて、爆睡していた。
出鼻を挫かれた形、冷や汗を流すシェリー。
まさか肝心の着任挨拶の時に小隊長が昼寝をしていようとは、露

とも思わなかったのだろう。

「ま、まぁ……。騎士は昼夜問わず忙しい方だから、昼寝をするのも無理ない事だけれど。指定日時にギリギリよね？」

苦笑いのシェリーが取りだした銀時計を見ながら、ゼスに確認を取る。

「ああ。俺の辞令書にもそう書いてあるな。丁度時間だ、間違いない」

「そうね、私も同じだわ……。普通なら、私たちが遅れたとか、来るまで昼寝をしているなら気持ちはわかるけど……」

よもや、小隊長は自分たちが来ることも忘れて、ここでずっと寝ていたわけでもあるまい。きっと寝不足で寝てしまったのだろう。

シェリーが軽い咳払いをし、銀時計をポケットに仕舞って歩き出す。

「とりあえず、お休みのところで悪いけれど、着任報告と何か任務がないか確かめるくらいはしないと。流石に指定日時を過ぎてまで寝かせておくわけにもいかないわ」

会議テーブルを迂回して、小隊長が眠る議長席に進むシェリー。

ゼスも、彼女の後に続く。

席の前に立った二人はうつ伏せになって眠る小隊長を見下ろす。

「ぐぅうううううう……ご、ごごごごごご……」

全く起きる気配がない小隊長。

このような公共部屋で堂々と眠り、二人の人間が傍にまで来たの

に起きない彼は、騎士にしては不用心だった。
シェリーは、手を伸ばして肩を揺する。

「小隊長、起きてください。着任報告しに参りました」
「がぁあああああ……ぐぅううううう……」

優しく軽く揺すったのは流石に効果が無かったらしく、相手は目を覚ます気配が無い。
今度は加減なしで、激しく揺すった。

「起きてください。この第十七小隊に配属になりました、シェリーです。起きてください小隊長！」
「うぅ～ん……むにゃむにゃ……あと五分、な……」

大声で呼びかけてみたのに、シェリーの奮闘叶わず、小隊長は起きない。

「あと五分寝かせろという言葉はどこの寝坊主人公か」

流石に小隊長という目上の騎士相手に、そこまで乱暴な起こし方をするわけにはいかない。
シェリーは困り顔でどうしたものかしら、と呟いている。
そこでゼスが、名案を閃いたように拳を叩いた。

「……そういえば、前に読んだ雑誌でどんな寝坊する男でも、一瞬で目を覚まさせる方法がある、と見た事があるな」
「え、そうなの？　だったら、早くそれで小隊長を起こしてよ」

シェリーが促すが、ゼスは彼女に今度は視線を向けた。その視線は、まるで適任が他にいる、と語っているかのよう。

その不穏な空気に、一瞬シェリーがたじろぐ。

「な、何よ……？」

「……いや。その方法は俺では無理でな。“女”が寝坊する男に呼びかける方法なものだから、そうする対象は女性に限定される」

「つまり、私がやれってこと？」

そういうことだな、とゼスは断言した。

シェリーは一瞬眉をピクリとしたが、直ぐにまた溜め息を吐くと仕方なさそうに、分かったわ、と答えた。

「全く、アンタは相変わらずの戦闘だけが取り柄のダメ男ね。完璧超人であるこの私が仕方なく、その方法で小隊長を起こしてあげるわ。感謝することね。……それで、どんな言葉で呼びかければ良いの？」

腕を組んでふんぞり返るシェリーは頬を染めつつ、ゼスにその方法の詳細を訊ねる。

彼女の態度に全く表情を変えなかったゼスは、雑誌で見た内容そのままを彼女に言って聞かせた。

うんうん、と頷いて理解していくシェリーだったが、次第にその顔は驚愕したものとなり、さらに時間が経つとまるで赤リンゴのように真っ赤に染まっていく。

全て聞き終えたシェリーは、ゼスから素早く身を離し、未だ真っ赤な頬で睨みつけた。

「バッ……！　バッカじゃないのアンタ！？　ボク……わ、私が、そんな恥ずかしい事、できるわけないでしょ！　ア、アンタ……やっぱり本当に変態だったのね！　バカ！　エッチ！」

これでもか、という程に吠える。
ゼスにとっては全く効果がないが。

「それについては全く身に覚えがないが、効果は確かだと期待している。あの言葉を聞いた男は、瞬く間に起きた、と雑誌に書いてあったからな」
「い、いいいい、一体それで起きる男がいる、という状況の雑誌ってどういう雑誌を読んでいたのよ！」
「知らん。道端に落ちていたのを拾って、暇つぶしに読んでいた雑誌だったからな」

顔を真っ赤にして怒るシェリーと、ぷいっと我関せずと受け流すゼス。
彼は面倒な事だと言いたげに、肩を竦めて続けた。

「別に嫌ならやらなくても良い。その時は小隊長殿の言う通り、五分経って自然に起きるまで、俺たちは椅子に座って休ませてもらうだけさ」

会議テーブルまで戻り、椅子を引いてドカッと座る。
真っ赤に染まったまま睨み続けるシェリーだったが、このままでは先に進まないと思ったらしく、彼女は今まで以上に深い深い溜め息を吐いた。

「わ、分かったわ……！　やれば良いんでしょうやれば！　わ、私にできないことなんて、な、ないわ！　このままだと仕事もできないし……」

ヤケクソ気味に大声をあげて了承する。
ではよろしく頼むな、とゼスは興味がなさそうに言い返す。

シェリーは忌々しそうに彼を睨んでから、やがて深呼吸し始める。
そして腰を屈め左耳にかかった長い髪を指で梳かし、口元を未だ寝ている小隊長の耳元に近付けて、その桃色の瑞々しい唇を動かした。

「……ね、ねぇダーリン。昨夜はお楽しみだったとはいえ、何時までも寝ては男として情けないですよ？　さぁ、早く目を覚まさないとその印を――」
「――ふわぁあああ……。今、起きるに決まってるだろぉ」

唐突に小隊長が起き上がり、シェリーは驚いて咄嗟に顔を上げた。
起き上がった体躯は中肉中背、三十台半ばの男だった。寝癖がついたボサボサ像牙色の髪、無精髭を生やしているが決して不健康な体格はしていない。その上に騎士の甲冑と制服、そして胸にある階級は、士官クラスの上騎士。騎士としての能力はありそうだが、まず目についたのは彼の不真面目そうな態度であった。
流石のゼスも、この男が騎士たちを指揮する上官なのか、と疑問に思う程だった。

「――――……まさか本当に直ぐに起きるとはな」と、ゼスはボソッと呟いた。
「くぁあああ……よく寝たぜぇ。よっこらせっと……」

弛緩した筋肉を再起動させるように背伸びをして欠伸する小隊長。
彼は一番先に近くにいたシェリーを視界に入れた。

「んん？　誰だお前は？　騎士服を着ているみてぇだが……あれか、騎士プレイか？」
「騎士ごっこではなく、こちらに配属されることになった従騎士のシェリーです！　辞令に従い、指定日時に会議室に出頭致しました

！」

眉をピクリとさせながら、生真面目にシェリーは敬礼する。
小隊長は彼女の顔を寝ぼけ眼で見つめながら、欠伸を噛み殺す。

「あぁ、成程ねぇ……。で、シェリーとやら、歳は？」
「……は？」
「だから、歳は？　幾つだ？」
「じゅ、十七ですが……」
「なんだ、全然守備範囲外だな。あんな言葉をかけておいて本気にさせるなよ。全く拍子抜けだぜ」
「一体何を言いたいのか全く判りませんが、あの言葉は小隊長殿を起こすための方便ですからお気になさらずに！」

頬を赤く染めて起立のまま応える。
そんなシェリーを見ながら頭を掻く小隊長は、続けて席から立ち上がったゼスに気付いた。

「んで？　そちらの奴は何者だ？」
「ゼス。今日からこちらの小隊に配属されることになった従騎士です。よろしく頼みます」

慇懃に一礼するゼス。
小隊長はふぅん、と気にした様子も見せず、頭を掻きながら机の隅に置いてあった資料を手に取った。

「んぁ～～……。そういや、昨日資料が送られてきてたか……。確かシェリーとゼスって奴の名前があった……ような気がする」

資料の束を漁り、目当てのものを探す。紙束は全て見新しく、彼

は殆ど目に通していない事が分かる。どうやら、彼は殆ど職務に忠実ではないようだ。

やがて、小隊長がお目当ての資料を見つけたようだ。

「ああ、こいつか……。確かに新しい従騎士がこっちに所属するみてぇだなぁ。名前も同じみてぇだし。ってことは、お前らで間違いねぇだろ」

小隊長があぁ面倒くせぇ、と頭を掻いて一列に並んだゼスとシェリーを視界に収めた。

「っつっても、こいつばかりはちゃんとやらねぇと。……んまぁ、とりあえず、ようこそ第十七小隊へ。俺はアサラム・ルース。ここの小隊長だ」

シェリーが直立不動で敬礼をし、それに倣ってゼスも同じ姿勢を見せた。

アサラム小隊長は資料を手に取って見ながら、頬杖をついた。

「で、お前らの履歴を今見ているわけだが……。シェリーはあのアイオライト家の娘さんか。かの騎士家系の息女がここに来るとは、皮肉なものだが……」

アサラムの言葉に、シェリーは怪訝に思った。

「……え？　それはどういうことでしょうか？」

しかし、アサラムはそれには答えず、続けてゼスの履歴書を見る。

「で、ゼス……。お前は外国の出身でここに来るまで傭兵稼業をし

ていて各地を放浪としていたようだが、それ以前の境遇、出身地、挙句ファミリーネームなどが一切不明、と。しかし、卓越した戦闘能力を買われて騎士団に入団、か。……ククク、お前みたいな奴がまさに、ここ向けの人材だなぁ？」

「……」

彼が見せる悪辣そうな笑いに、ゼスはただ黙って見返すだけだった。

そういう事か、とその時ゼスは悟ったのである。

何故あの受付嬢が、あんな同情の視線を送ったのか、その理由を正確に理解してしまったのだ。

そんな二人を余所に、シェリーは未だ事実を認識できていないようで、両者を見比べていた。

訝しみながらも、彼女はアサラムに顔を向ける。

「ところで、アサラム小隊長。他の従騎士の方達はどちらに？」

「……あ？　そんな奴ら居ねぇよ」

キッパリと断言された。

流石に目をパチクリとさせたシェリーは、慌ててその言葉の意味を汲み取った発言をする。

「あ、ああ！　先輩騎士達は今、任務で外出されているのですね。それで今居ないと表現を――」

「だから、最初から居ねぇよ、お前らの先輩は」

「じ、じゃあ……私達以外の新人騎士は？」

「お前らしかここには来ねぇ。他の新人二人は別の部隊に行ってんだろ？」

少なくとも届けられた資料にはお前らの名前しかない、と持って

いた紙切れをヒラヒラさせるアサラム。
流石に言葉を失ったシェリーは、口をパクパクさせた。
さらにアサラムは追撃の言葉を放った。

「その様子だと聞いてねぇのか？　第十七小隊は新設部隊だ。つまり出来立てほやほや。俺を小隊長に、今回、初の二人の新人従騎士が入った。それが、ココってわけだ」
「……？？」

シェリーは混乱のあまり、アサラムの説明を理解できていないらしい。もしくは理解したくないのか。
これは単刀直入に言った方が得策だ、とゼスは補足説明を入れる。

「……つまり、新設部隊で大して実績を上げられそうにないと思われた先輩騎士達から人気も無く、期待の新人を二人入れてこれから三人だけで、第十七小隊初陣をお披露目しよう、ということだろうな。アサラム小隊長殿」
「その通りだ！　いやぁ、優秀な部下を持って俺は幸せ者だぜぇ！」

豪快に笑うアサラム小隊長。
小隊長に褒められて照れる事も嬉しそうにすることもない、ただ言う必要はもう無いと気にしていない。
そこに、ゼスの言葉の意味を理解して固まっていたシェリーが、バンッと机を両手で叩いた。

「ちょ……と。どういうことなんですか！？」

もう聞きなれたゼスは気にした様子もないが、初めて聞く淑女の大声にアサラムは結構驚いた様子だった。

「おおっと！？　……ど、どうもこうもなく、ウチはそういう部隊だ。俺以外に部隊内の騎士はお前ら二人だけっつーという事だよ。ま、少人数精鋭部隊ってところかねぇ？」

「ところかねぇ、じゃないですよ小隊長！　それってつまり、この第十七小隊って、先輩騎士も居ない、まともじゃない窓際部隊ってことじゃないですか！？」

「ま、そんなところだ。まぁ、良いじゃねぇか。新人いびりをする嫌味な先輩や階級重視の堅苦しい先輩も居ないっつーのは、気楽でいいぞぉ？」

軽い口調でニヤリと笑うアサラムだったが、シェリーは大変ショックを受けたらしく、力なく机から離れた。

毎度の事ながらシェリーの感情起伏は激しすぎるな、とゼスは一瞥した。

「どういうことなのよ……。な、なんで完璧超人である私が、こんな戦闘だけが取り柄の変態男と、明らかに騎士っぽくない上官と三人だけの部隊に配属されることのなるのよぉ……」

終いには、顔を青ざめ膝を折って頭を抱えてしまう。

まるでこの世に絶望したかのような、将来をとても見出せない雰囲気そのものであった。

シェリーの雰囲気に気圧されて、アサラムがゼスの耳元に口を寄せた。

「なぁ。シェリーっていうお嬢様、普段からあんな感じなのか？」

「……二重人格と間違えるほどの、ボク、お嬢様騎士のようで。見ていて飽きん女だな」

「成程ナルホド。ははっ、こりゃ確かに面白いお嬢様だぜ！　流石はアイオライト家のご息女ってことだけはある！」

「笑い事じゃないですよ！」

ばっ、と顔を上げたシェリーは怒気混じりの声で遮って、立ち上がる。

もう一度小隊長の席の前に移動し、両手を机上に乗せた。

「とにかく、この面々では騎士団部隊として、任務遂行に支障を来しかねません。小隊長の進言で、こちらに何人か転属してもらえないでしょうか？」

「あ、それ無理。俺、上層部に嫌われてるし」

ハッキリ、と物凄い事を言ってのけたアサラム。

それにシェリーが再び驚く事になるのも、もう予想された反応だった。

「な、なんですってぇえええええ！？　それはどういうことなのですか！」

「大声出すなよ頭痛ぇ。……なんつーかな、お前らも感じていると思うけど、俺はこんな風貌で、しかもこんな態度じゃん？　なんで騎士になったのか判らん、と当時の同僚の騎士達は評価してる。あ、勘違いすんなよ？　これでも上騎士、ちゃんと昇格するほどの戦績は出している。俺ぁ優秀なんだぞ？」

ははっ、と笑うアサラムから出す息に当てられ、僅かにシェリーが身を引いた。鼻を摘まんで、空いた手で面前を振る。

「うっ、通りで酒臭いと思ったら。小隊長、昨夜は随分飲んでいたんですね。その頭痛いは二日酔い、というものでは？」

「あ、バレた？」

悪気も反省も無く軽い調子で軽く笑うアサラムに、ゼスは確かにこれは上層部に嫌われるな、と納得して溜め息を吐いた。

「よくそんなので、上騎士どころか、騎士をクビにならなかったものだな……あやかりたいものだな」

「ちょ、ゼス！　アンタ、それはいくらなんでも失礼よ！」

これでも上官なんだから、とシェリーは強めの口調でゼスに怒鳴る。

「いくらなんでも、とかこれでも上官、と言うシェリーも相当だと思うぞ？」

アサラムの呆れたツッコミが呟かれる。

自分の失言に気付いたシェリーは、失礼しましたと慌てて詫びる。流石の予想外の事態の連続に、彼女は本性を曝け出し始めてしまったようだ。

ま、その通りだから気にせんが、とアサラムは答えて話を続けた。

「ま、本当の無能者なら騎士にすらなれんだろうが。俺は上騎士になれるほどの戦績を収めた。中には陛下から勲章を賜わった経験もある。だが上層部は、そんな軟弱者が陛下に重宝されるなど気に入らないわけだ。所謂嫉妬ってやつだなぁ。それで、俺が上騎士の地位になった瞬間、半ば強引にこの新設部隊の小隊長の任を就いた、っつーわけよ」

まるで他人事のように流暢に自分の過去を話すアサラムに、それほど過去は気にしていない雰囲気が感じられた。無論、自分を嫉妬している上層部の事も、何とも思っていない。

「要するに、そのまま主力の部隊に居て手柄を立てさせるより、士官であるという名目で、主要任務から程遠いここに押し込めた、という生殺し状態というわけだな」

ゼスの要約に、相変わらずの調子で肯定するアサラム。

手柄を実際立てている為、騎士を辞めさせる事は出来ない。ならば、その手柄を利用して昇格させてから、それを口実に態々新設部隊を作って小隊長、とさせる。流石に隊員が居ないのは拙いから、とりわけ問題な騎士を配属させて、普通の騎士は入れさせない。

成程、よくやった事だ、とゼスは思った。

つまり、第十七小隊は上官が不真面目、隊員は少なすぎて任務をまともにこなす事が難しい、という劣悪環境なのだ。これでは上層部の思惑通り、ここで功績を成す事は難しいだろう。

「ま、俺はそれでラッキーとは思っているぜ。上騎士だからヘタをしなければ給料良いし、派手な任務も来ないから思う存分にサボれる。お前らという部下も出来たが、本当に新人騎士か、と思う程、心配なさそうだし俺が出来る事は殆ど無い。これってつまりは、したい放題ってことだぜいやっほーい！」

まさにアサラムにとってはこの上ない天国の環境なのだろう。嬉しさ満点で、万歳までするほどだ。

だが、彼とは違う人柄を持つ人物は、ここはまさに地獄そのものに感じたに違いない。

「ま、待ってください！　か、仮にその話が本当でアサラム小隊長がここの上官だという事にしましょう。それは判ります。で、ですが、どうして将来を期待される我々新人騎士が、その部隊に所属することになるんですか？」

シェリーは訳が分からない、といった表情で訊ねていた。

「こっちのゼスは判りますよ？　戦闘と戦術の腕だけは良くて、女性の機微（きび）に気付かない阿呆で無表情で協調性が無い、挙句女性の着替えを堂々と覗いて痴漢を働く変態男で、騎士にあるまじき大問題児ですから、ここに配属されることになった理由は理解できます。ですが何故、戦闘も礼儀作法も協調性も魔働術の腕も完璧で、美しくしなやかな淑女で、登用試験も全ての成績が飛び抜けて優秀、まさに騎士の鑑（かがみ）と称賛される私が、この男と同じ部隊に配属されるのか、一遍も理解できません！　一体この私のどこが問題だというのでしょうか！？」

口調は丁寧でも、所々に強い語気がやたらと長ったらしい弁解に含まれたシェリーに、若干アサラムは引いてしまう。

あえて言うならその高慢ちきな態度だな、と思ったゼスだったが言葉には出さない。どうせその本性は自分以外には隠して、周りには淑やかに振舞っているのだから。

アサラムは一旦何かを思考した後、机から徐に煙草を取り出し、極小の火の魔働術を使用してそれを吹かした。

「ああ……まぁ、言いたい事は分かった。……あ～、お前自身に特に問題は無い。むしろ資料では称賛される声が多いようだぜ。お前の実力ならどの隊でもおろか、実践で実績を上げれば近衛隊からスカウトが来るぐらい、だってさ」

「だったら、何故なんです！？」

「……あ～、これは俺の推測なんだが、お前がここに配属する事になった理由。恐らく、家の事だと思うんだわ」

彼にしては珍しく、軽い調子は形を潜め、難しそうな表情をして語った。

家が理由と言われて、シェリーは心底驚いた様子だった。

「我が家の？」

「ああ。お前の生家、アイオライト家は代々騎士を輩出する最も古い家系であり、古から王族に仕える大貴族の一つだ。その血筋もあって、戦闘力と魔力は並みはずれて高く、優秀な騎士部隊を率いてきた過去を持つ。誰もが認める騎士家系。だが、騎士は代々男子がその任を受け、女子は普通に淑女として生活するのが普通のはずだ」

アサラムは語りながら資料を漁り、その中から一つの紙切れを見つけて続ける。

「大方お前は、親父さんの反対を押し切って自分の実力で騎士団に入ったようだが……。しかし後に、国家の中枢である大貴族から、しかも嫁入り前の娘に何かあっては、と騎士団上層部の責任問題は免れん筈だと理解する。恐らくは、親父さん辺りが手を回して、娘を危険度が低い部隊に配属させてくれ、とか言ったんだろうさ」

それを聞いたシェリーは、まさかそんな、と今まで以上の驚きを見せていた。

「父上が……。いえ、それなら辻褄が合います。確かに父は私の騎士団入りを終始渋っておられたし、父ほどの権力なら騎士団に何らかの干渉が出来ても不思議ではありません。……そうよ、この完璧な私が窓際部隊に配属されるなんて、おかしいと思っていたけど、父上が絡んでいるなら……」

ブツブツとシェリーが呟く姿は、事情を知らない者から見れば不審者極まりないが、次第に彼女は顔面を両手で覆った。

「……ア――――――ッ、もう！　父上は何を考えているのよ！　これじゃあ、まともな戦績なんて収められる訳無いわ！　はっ、まさかそれで私を呼び戻す口実を作ろうってことじゃ……！？」

流石に怒りのメーターが振り切って余裕が無くなったのか、お淑やかな仮面は剥がれ、本性が露わになるシェリー。彼女の表情は、既にゼスと戦ったあの凛とした眼差しを放っている。

横目で見ていたゼスは、やはり彼女はこうでなくてはならないな、と改めて自らの評価を思い出していた。

シェリーの激変に、流石に端々に垣間見ていたアサラムは既に驚く事無く、再び軽い調子で笑って見せた。

「ははははは……っ。まぁ、そう怒りなさんなよ。お前の親父さんも、お前の事を大切に思っての行動なんだぜ。感謝されこそすれ、恨み事を言うのは親父さんに失礼ってもんだろうが？」

「そ、それはそうですけれど……。このままでは、私は騎士団を辞めさせられて、あの家に帰されるかもしれないのよ……」

今回、何回目かの深い溜め息を吐き、何とか怒りを吐き出して落ち着こうとするシェリー。

そこに、ゼスがぼそっと、今回起こった事態の結論を思った事で呟いた。

「上官は不真面目で、しかし辞めさせるのも面倒だから生殺し状態で新設部隊に押し込められ、俺は素性も知れない戦闘だけが取り柄の戦士で、将来が面倒だからここに押し付けられ、同僚は大貴族で問題が起こったら重大な責任を取らされて、扱いが面倒だからここに任せられ。成程、厄介な人間は厄介な部隊に、まさに俺たちは同じ穴の狢（むじな）、という奴だな」

「私をアンタなんかと一緒に扱わないでよ！」

聞き捨てならない、とシェリーが怒鳴ってツッコミを入れた。そこにアサラムを入れなかったのは、彼女なりの目上に対する扱いらしい。

ゼスはそれをツーンと顔を逸らして受け流す。

その光景に、何が面白かったのか豪快に笑うアサラム。

「な、何が可笑しいんですか小隊長？」

その反応に、また何か変な事を聞かれたか、とシェリーは頬を赤らめて、つい少し強めで問いただしてしまう。

対してアサラムはくっくっく、と笑いながら。

「いや、気にすんなよ。面白くて頭がまた痛ぇくらいだ。お前ら、出会ってから日も短いと思っていたが、中々良いペアになるんじゃねぇか？」

「なっ……よ、よしてください小隊長。わ、私がこんな変態男と上手く行くなんて天と地がひっくり返っても有り得ませんから！」

「少なくとも、ボクお嬢様に俺の代わりが務まるとは思えん。所詮俺は、同格だと思っていないしな」

「……アンタねぇ。それをまた言うのかしら！　本当にアンタってサイテーよね！」

「高慢ちきで上から物を見たがる。弱い犬ほどよく吠える。だから俺を越えられんのだな」

「な、なんですってぇえええ！？」

二人の悪口の応酬に収まりがきかなくなって来る、その時になろうとした状況に。

「んじゃぁ、そんな優秀な二人はしっかりしてるから、俺は現場の

指揮をしないつもりなんで勝手にヨロシクゥ！」

煙草を吹かして背もたれに身体を預ける中年男は、さらなる爆薬を投じたのである。

「「……は？」」

「ああ、仕事も基本お前たちに任せる。取ってくるのも、報告も自分たちでしろ。俺は最低限の助言とこちらに回って来た任務通達しかせん。面倒くさいし」

「「……」」

机に足を下品に乗せるアサラムは遂には鼻歌を歌いだす。

最早、この不真面目な上司が率いる小隊へ配属された新人従騎士二人から何を説得しても、相手が聞く耳を持ってくれる事はなかった。

第五話　「不精な騎士」（後書き）

‥シェリーがパーティに加入しました。

ゼスは「変態男」の称号を得た。シェリーは「ボクお嬢様」の称号を得た。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

第六話　「中央通り：迷子」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第六話　「中央通り：迷子」

――同日１０時２６分

時は進んで、聖都城下町。
あらゆる喧騒が集っているこの街は、様々な階層の人々で溢れかえる。
建物の中に、鉱物資源である“働石”を動力として稼働する機械を扱う店や、薬局、図書館、酒場、果ては露店を開いている店主が大声で客引きを行っている賑やかな通りだ。往来の大半は比較的裕福な平民と商人達、そして街中を巡回する蒼衣の騎士団の騎士達である。
フェード城の正門に続く中央通りは、最も多くの人でごった返しており、最も広い大通りである。

そこに、騎士制服から軽鎧に着替えたゼスとシェリー、二人の姿があった。
二人は並ぶ事もしない。ゼスが前に歩き、シェリーがその後ろを付いていくという光景だった。

「ちょ、ちょっと待ってよ。そんなに急いだら、見ないといけないものも見れないわ」
「二人で同じ場所を見る必要は無いな。聖都はただでさえ広い。二人で分担した方が効率的だ」

二人は騎士団での初仕事として、街中の巡回警備を行っていた。
数分前に、自らは現場で指揮しないと豪語したアサラムが提案として、二人に命じたものだった。

“「そういえば、初仕事だけは与えておこうか。お前らはまだ街をそこまで巡って無いだろ？　良い機会だから、騎士として自分が護るべき街を知る為に出て回ってくると良い。所謂巡回警備だ。騎士として基本的な任務となるが、とりあえず、日が暮れるまで自ら見て、感じろ。できれば、隅から隅まで、だぞ。よし行ってこい！――――あぁ、俺みたいにサボったら上から睨まれるんで、したらぶっ飛ばすゾ～」”

と、半ば強引に会議室から追い出された結果である。

仕方なく第十七小隊での初任務に着手したゼスとシェリーは、お互いに役割分担して、全ての見渡す範囲で異常が無いか見回っている。

「そうは言ってるけど、アンタ、ちゃんと自分が見るべき場所は欠かさず見ているのよね？」

「当然だ、問題無い。担当するべき場所は隅々まで見まわしている。先ほど、その店の裏通りで犬が小便しているところまで見ているな」

「そこは例えの選択が間違っているから。……あぁ、もう良いわ、ちゃんと見ているらしいし」

シェリーは溜め息を吐いて、ゼスの背中を付いて行くように彼に任された範囲を見回していく。

少しでも異常があれば直ぐに相方に知らせて、調査に行く手筈である。

「……それにしても。相変わらずの人だかりだわ」

彼女の言葉通り、行き交う人々の間隔はそれなりにあるものの、隙間からしか奥の光景を見る事は出来ない程だ。これだけの人がい

れば、はぐれる事もあるだろう。実際、この通りは迷子になる子供が後を絶たない。

その言葉が聞こえていたのか、見回りを続けながら聞こえるように高い音程で話しかけた。

「ここに来た事があるのか？」

「ええ。屋敷（アイオライト家）に居た時代も、それなりにここへ通（かよ）っていたわ。この通りは特に素敵な服やジュエリーを取り扱う店もあって、貴族の娘達がよく足を運んでいるくらいよ。それなりの高級武具や料理もあるから、比較的裕福な通りね。……アンタはどうなのかしら？」

「俺は初めてだな。休日はアルバート通りの酒場に入り浸るか、鍛冶屋に足を運ぶか、都外に出て魔物狩りを少しやって一日を終えるぐらいだからな」

「……元傭兵のような野蛮人は私生活でも野蛮人なわけね」

シェリーが呆れたように肩を竦める。

ちなみに、ゼスの言うアルバート通りとは、中央広場から離れた、下流階級の民達が多く暮らす区画で、貧乏なゼスはそこの安い酒を出す酒場で飲む事が多い。また、ガントレットなどの武具の手入れもその通りの鍛冶屋に頼んでいる。安い代わりに、あまり出来も良くないが、壊す事のない良い腕の鍛冶職人が居る。

ゼスはこれほどの広い通りを通るのは初めてでもあるが、見回る事はあれど注目には値しない。

今はいかに効率的に回るかに重点を置いており、特に新鮮なものに興味を示す事は無い。ただ、彼が騎士にならなければ、通る機会など殆どなかったであろう。

道中、一目では見回りきれない大きな店は、店内に入って巡回を行う。

シェリーは店員に何か困り事や異常が無いか尋ねて回り、ゼスは

店内の隅々まで不審者や不審物が無いか確かめて行く。
傍から見れば、二人の人柄に合った役割分担だと思っただろうが、お互い未だ知り合って間も無く。ただ自分が出来そうな事を相談もせずにやっているだけである。
店の外に出たところで、収集した情報をお互いに報告し、問題が無ければ巡回を再開する。
同じような事を繰り返し、中央通りの探索を続けていく。時には露店の店主に話しかけたり、何か偽造している物が無いか手に取って調べたり、道行く人に場所を尋ねられてそれを説明したり。
二人の騎士は、順調に巡回警備をこなしていった。

「こうやって、おおっぴらに街を回るのって、結構楽しいわね」
「……そうだな」

再び道を歩きながら、ゼスの後ろで見回るシェリーは不意にそんな事を言った。
ゼスは適当な返事をして歩きを緩めない。

「前は付き人も居たから、行きたい場所があっても行けない事が多かったから、本当に騎士になって良かったと思うわ」
「……そうだな」
「でも、それがこのデリカシー皆無の元傭兵男と共に歩いて回っていると思いだすと、突然萎えてくるわね」
「……そうだな」

既に何も考えずに応えを返したゼスは、それを気に留める事も無く仕事に没頭する。
それによってシェリーは若干不機嫌そうになって、それ以上は言葉を出さなくなった。
二人の沈黙が続く。

彼らは一言も語らず、ただ騎士の任務をこなしていく。
そんな静寂に包まれた彼らの耳に、一人の泣き声が聞こえてきた。

「ゼス……！」
「ああ。あっちだ」

ゼスを先頭に、シェリーと共に泣き声がする方角へと走り出す。
行き交う人々を避けながら進み、徐々に声が大きくなる。
やがて出た場所は中央通りの中心地、大きな噴水がある広場だった。噴水はそれこそ通りのシンボルになるほどに広く、時折それをプールと勘違いして泳ぐ子供達も居る為、遊泳禁止の張り紙をするほど、白い彫刻のような美しい外見だ。

「パパァ、ママァ……うぁあああああああああああん！」

その噴水前で、一人の少年が泣きじゃくりながら呆然と立っている。どこに行くべきか判らず、手を引いてくれる人とはぐれて立ち往生している姿。
どうやら少年は迷子のようだ、と二人は悟った。

「迷子か……。どうする？」

ゼスが腕を組んで傍に居るシェリーに尋ねると、彼女は躊躇いなく頷いた。

「勿論、助けるわ。あの子の親御さんも今頃心配しているだろうし、早めに探してあげないといけないわ」
「だが、こういう事は“警備隊”の仕事じゃないのか？　俺達のような騎士は管轄外だろう？」
「だからと言って、騎士が見て見ぬ振りをするのは主義に反するわ。

困っている民、助けを求めている民が居るなら、分け隔てなく手を差し伸べる……。それが騎士の行動理念だと、私は思う」

その迷い無い言葉に、ゼスはシェリーを横目で見るが、直ぐに腕を解いて歩き出した。

「……仕方が無い。とりあえず、声をかけるか」

＊　＊　＊

「わぁあああああああんっ。パパ、ママ～～～、どこぉ……？」

キョロキョロ見まわしながら涙を流す少年。視界は涙で歪んでおり遠くを見回わす事が出来ず、両親の姿が無くて不安が募る。

そこに、一人の長身の青年が、少年の傍に寄って声をかけた。

「おい、そこの子供。どうしたんだ？」

「うっ……？　っ、ひっ……！」

その青年は騎士の甲冑を着こなしたゼスであったが、無駄に身長が高く表情も鋭い為、少年はゼスを一目見て一瞬で怯えた。

「おい、何を怖がっているんだ……？　俺達は騎士――――」

「うっ、うぅううう……！」

どうして子供がこんなに怖がっているのか、原因が自分であると

も気付かず、ゼスは手を伸ばして少年の肩を掴もうとする。
それを、一つのか細い腕が制した。

「はいはいストップ！　アンタ、一体何やってるのよ？」

長い黒髪を揺らす女の騎士、シェリーが呆れた表情でゼスの動きを留める。
彼のその時の表情は何故止められるんだ、と理解していない様子であり、彼女に質問に低い声で答える。

「……。子供が何故か怖がって後ろに下がると、噴水の中に落ちそうだったから、止めようとしただけだが？」
「それは殊勝な心がけだけれど、アンタは一切しないで」

まるでお説教をするように、シェリーは指でゼスを指して指示を出すが、彼は真顔で子供を見つめたまま。

「……子供に何かあったらどうする」
「何にも無いわよ！　むしろアンタの所為で何か起きるわ！」
「しかし、先ほど困っている民に手を差し伸べると、君の言葉で俺もそうしてみようと手を」
「その通りだけれど、アンタの場合は意味合いが違うわ！　まず声のかけ方からして間違っているわよ！」
「む……。そうか。では、次からは子供が噴水に落ちないように背後から声を――」
「かけるな怖い！　というか、噴水という状況を頭から外すのよ！　大体、この子はなんでこんなに怯えているわけ？　はい説明」
「……！？　俺の背後に殺気を放つ対象が居るのか？」
「アンタよアンタ！　アンタのその風貌は、立ったまま声をかけると無駄に威圧的なのよ。怖いって言ってるの！」

「ううむ……」

流石に納得がいったのか、ゼスは仕方なくシェリーの言う通りにして、一歩引き下がる。

「とりあえず、ここは私に任せて」

代わりにシェリーが前に立って、少年を見下ろす。

二人のやり取りの間に、すっかり怯えてしまった少年は、身体を震わせていた。

シェリーはまず、少年と目線を合わせるようにしゃがみ込んで、仮面を被ったようなお淑やかな態度で声をかける。

「驚かせて御免なさい。あのお兄ちゃん、怖かったでしょう？」

「……う、うん……」

少年は怯えながら、軽く頷く。

「一応あの人は、騎士の格好をしているけれど、中身は獣の本性を隠している野蛮人だから、仕方が無いの。悪気は無いから、許してあげてね」

「――――おい。どさくさに紛れて、ねつ造を吹き込むんじゃない」

ゼスが腕を組みながら、シェリーの後ろからツッコミを入れる。

しかし少年にとっては、彼女の言葉がより真実味を帯びたらしかった。

「う、うん……」

「そう、良かったわ。あ、私は違うの。これでも正義の味方である、立派な騎士の一人よ。だから、私の事は怖がらなくても良いわ。貴

方が泣いていたから、どうしたのかな、って声をかけたの」

シェリーが笑顔を崩さずに言っていると、ゼスはぶっきらぼうに付け加える。

「立派な……？　俺達は騎士になったばかりの駆け出し――――」

「ふんっ――――！」

しゃがんだままのシェリーが器用に左足を後ろに伸ばして、それがゼスの脛（すね）にクリーンヒット。

伝わる痛みに態度こそ露骨に示さなかったゼスだが、顔を下ろして人知れずに表情を歪ませた。

「……お姉ちゃん、騎士さん、なの……？」

少年が先程のやり取りに気付いた様子は無く、優しそうな年上のシェリーに向かって首を傾げていた。

「そうよ。貴方達が憧れる、立派な立派な輝く騎士さんよ。貴方達を助ける存在だから、安心して。どうして泣いていたの？　お姉さんに教えてくれる？」

「あ、あのね……ヒック、ぼ、僕……パパとママと……はぐれちゃって……ママに手を、繋いでもらって、たんだけ、ど……この噴水がきれいで、ここにきて、しばらく水を見ててあそんでいたら……ママ、どこかに行っちゃって……ヒック……」

「あら、お母さんの手を繋いでいない時に、ここに来ちゃって迷子になってしまったのね？　だったら、そう遠くないところに居るはずだけど、子供が居ないのに気付いて、もうどこかに移動したのかもしれないわね……」

少年は泣きじゃくって、それ以上有用な情報を引き出せそうにない。

とりあえず、騎士の格好は目立つからいずれ向こうから訊ねてくるだろうが、あまりにも時間がかかりすぎる可能性は高い。

だったら、この少年を連れて両親を探してみるか。流石に子供連れて探すと入れ違いになる可能性もある。

シェリーは思い悩む。

まずはこの少年を連れて子供が行きそうな店を回りながら、近くの警備隊詰め所を目的地にする、と言った。

それが一番手っ取り早い方法だと、彼女は行動に移した。

「大丈夫よ。これからお姉さん達が、貴方と一緒にお父さんとお母さんを見つけるわ。私達なら、それなりに目立つから直ぐに二人とも見つけられると思うから」

シェリーは少年の頭を優しく撫でて、今彼女自身にできる最高の笑顔を見せた。

「だから、泣いてはダメよ。お父さんもお母さんも、今の貴方をみたらとても心配するわ。男の子は元気よく、笑顔で。ね？」

「……う、うん。ぼ、僕、もう、大丈夫、です」

少年はシェリーの顔を見ながら、目元を袖でぐしぐしと拭いて泣き止む。まだ、彼が笑みを見せるのは難しい。

「ふふっ、男の子はそうでなくちゃ。……あ、お名前はなんていうのかしら？」

「えと……ティールっていいます！」

少年――ティールは、二度は涙を見せまい、と力強く返事をし

た。
　この成り行きを後ろから見ていたゼスは、鮮やかなものだな、と素直な感想を抱いた。

「じゃあ、ティール君。私がお母さんの代わりに手を引くけれど、歩ける？」
「うん」
「しっかり掴まっててね。……じゃあ、ゼスは身長が高いから、もし子供を探している風な男女二人を見つけたら、知らせて」

　シェリーはティールの手を握り、ゼスに顔を向ける。
　それをゼスは首を振らず、逆にその意見に異を唱える。

「だが、この人だかりではその判断は難しい。子供を探している風な男女二人組はそれこそ沢山居そうだからな。その子供だけが今迷っているとも限らん」
「それもそうね……。ご両親は子供を心配して、その姿を目で追いかけているかと思うし、ちょっとしたことで見逃してしまいそうね……」

　それは二人が考えていた懸念だった。
　しかもティールは身長が低く、大人が大勢行き交うところでは、死角が多いも等しい。親子気づかずに、入れ違う可能性も高いのだ。
　だからといって、ゼスはティールの両親が、どんな人相かも知らない。
　ただ、子供を探している親を探せ、というのもいくらなんでも酷な話だった。
　何か良い案はないのかしら、とシェリーが様々な案を呟いていると、ゼスはティールの傍に近寄っていた。

「……少し、子供を借りるぞ」
「……え？」

シェリーが気づいた時には、ゼスはティールの背後に回って、彼の両脇下に手を差し入れた。
そしてそのまま身体ごと持ち上げる。

「う、うわぁっ！？」
「ちょ、ちょっと一体何を！」

ティールが先ほど怖いと思っていたゼスに突然持ち上げられた為、再び恐怖心が生まれる。
それを察知したシェリーが慌てて止めようとするが、ゼスは気にせず彼を頭上まで抱えてその両脚を自らの首に跨がせる。そして、そのまま自身の肩に担いだ。
その姿は、まるで歳離れた兄が弟を肩車しているような、見るからに微笑ましい光景だったのだ。

「うわぁ……。まるで、高いところから見下ろしているみたいだよ！」

ティールが初めて見る、大勢の人々より高い目線からの光景に、嬉しそうに首を巡らせる。
ゼスの長身故に、ティールの姿は他の人間から見ても目立つし、ティール自身も彼らの顔が良く見える高さだった。

「なんだかんだ言えば、子供と親がお互いの姿を認めるのが一番だ。ならば、こうした方が効率的だろう？」

ゼスの言葉は実に単純明快だった。

背の低い子供を肩車などすれば、彼も高いところから親の姿を探せるし、両親も見つけやすくなる。

「……そうね。なら、私がどのお店に行くか決めるわ。アンタはこの通りに来た事無いだろうし、どこに行くか分からないでしょう？」
「ああ、頼むな」
「アンタはティール君の事、よろしく頼むわね」

コクリ、とシェリーの言葉に頷くゼス。
シェリーが先頭に立って、一行は噴水広場から後にする。
まず向かう先は、子供が好きそうな玩具専門店である。
道中、辺りを興味深そうに見まわしていたティールが、股下のゼスに声をかけた。

「凄いよ、お兄ちゃん！　まるで僕がみんなより背が高いみたい！」
「そうだな」

素っ気ない返答を返すゼスだったが、子供のティールは気にも留めずに言葉を続ける。

「お姉ちゃんは優しいけど、お兄ちゃんはカッコいい！」
「……そうか？」

ゼスのこの言葉の意図は自分の事ではなく、シェリーの事での疑問だったのだが、ティールは前者の意味で捉えたようだ。

「ねぇねぇ、どうやったらそんなに背が高くてカッコよくなれる？やっぱり、騎士さんだから？」

好奇心の目で質問攻めをするティール。

ゼスはそれに対して、僅かに言葉を途切れさせたが、やがて独白のような口調で口を開いた。

「……ただひたすらに鍛えた、強くなる為に。それこそ、死に物狂いで。毎日、一日も欠かさずに強くなる為の努力をした。一時間たりとも休んだ事が無く、また一時間たりとも身体を酷使した事は無いな。ただ、自分の身体を確実に知る事と、効率的な鍛え方と考え方を身に付けただけだ」

まるでそれは遠き過去の吐露。自分が歩んできた道程を見つめ直す反省文。ティールの質問に返す言葉が、偶然これだっただけ。それが、ゼスが歩んできた努力だった。

ティールはその答えに、可愛らしく首を傾げるだけだったが、シェリーは偶然それを聞き逃してはいなかった。

彼女は興味があるように目線をゼスに向けていたが、話を聞き終えると若干共感を覚えるような表情を見せていた。

「えぇ～～と……。つまり、強くなって、騎士さんになれば僕もそんなふうになれる？」

流石にゼスの難しい言い回しに理解できなかったティールは、実に簡単な答えを導いた。

先に歩いているシェリーが振り返り、人差し指を立ててティールを見上げる。

「ダメよティール君。このただの強くなる事にこだわるだけの大馬鹿のお兄さんのようになっちゃ。強くなるだけじゃなくって、皆の笑顔を守れる優しさも持ち合わせないと」

「へぇ～、そうなんだ！」

ティールはシェリーの言葉にいたく感心したようだった。
ふん、と彼女を一瞥するゼスは全く感情の変化などは無い。

「大馬鹿で悪かったな……。だが、最初は食事に気を付けると良い。食事は栄養素を補給する機会だからな。身体の機能を低下させる栄養素の補給など、以ての外だ。まずはそれからだ」
「あ……うん、分かった！」

ティールはこれには理解が早く、輝く笑顔で首肯した。
だが、ここで付け加えておくが、ゼスは今パンの一つも買えない貧乏であり、栄養素の良し悪しを語れる状態じゃないのだが……。
彼曰く、金があったのは昔の事だ、との事。

ティールを肩車するゼス、そして彼らを先導するシェリーは主に子供が行きそうなお店を中心に歩きまわる。
店の商品に興味を示し、手で触って弄ぶティールの世話をするシェリー。ゼスはティールの行きたい場所に従って移動するだけの役割。
真新しい商品に触れ、扱って、驚き、楽しみ。
中には気さくな店主が彼らのその楽しげな姿を兄妹弟、若しくは家族として見てからかった程だ。
その光景が五店舗ぐらい続き、最後の子供向けの店舗に差し掛かった時、真後ろから女性の声が聞こえてくる。

「ティールッ、ティール！」
「あ、ママの声だ！」

ティールが反応し、ゼスもその方角に視線を向ける。
そこに、人々をかき分けて走り寄ってくる、一組の男女の姿があった。

ゼスは肩車を辞めて、ティールを抱えて地面に下ろす。降り立ち走り出したティールを、母親である女性が力強く抱き止めた。

「ああっ……。良かった、ティール。無事に見つかって、良かった……！」

「ママ、ママァ……！」

泣きじゃくるティールを、彼の母親が一層抱きしめた。

「お母さんから急にお前が居なくなったと聞いて、心配したんだぞ。人攫いに遭ったのかと思って、この通りをくまなく探したんだが……。とにかく、無事で何よりだ」

父親である男性も、息子の頭を優しく撫でて安心させる。

再会の光景を眺めていたゼスとシェリーは、彼らが一段落した時を見計らって、傍に歩み寄る。

「ティール君、お父さんとお母さんが見つかって良かったわね」

「うん！　ありがとう、お姉ちゃん！」

ティールの礼に、シェリーは笑顔を見せる。

彼の父親が顔を上げて、初めてゼス達の姿を認識した。

「そういえば、貴方がたは……その格好は、騎士様でありませんか！　これはこれは、騎士様が息子を保護してくださったのですね。なんとお礼を申し上げて良いか」

「いえ、気にしないで下さい。これも、騎士の務めですから」

シェリーが穏やかな口調で対応する。

それでも父母は有難うございます、と口々にお礼の言葉と共に頭

を下げ続ける。流石にここまでお礼を言われては、シェリーですらむず痒いらしい。

そして、母親がゼスの姿も見かけると、彼に対しても頭を下げる。

「貴方も、息子を助けてくれたのですね。本当に、有難うございました」

「……気にするな。俺はそこの女にそうしようと言われたから、そうしただけだ」

「それでも、有難う、ございます……」

母親はティールの頭を撫でながら、涙ながらに頭を下げる。

流石のゼスも、彼女の姿にそれ以上の言葉は出なかった。否、視線を合わせようとはしなかった。――まるで何かから逃避するように。

代わりに、傍らに居るティールの頬に片手を当てて、彼にしては珍しい言葉を告げる。

「無事に親が見つかって何よりだが、母親を泣かせるのは感心しないな。君は、未だ子供だ。おのずと、親に護ってもらう事がこれからもあるだろう」

ゼスの言葉は、重みを含ませた声だった。

子供であるティールに、そうするべきだと教えるように。まるで、自分自身に言い聞かせるように。

「その後はどうする？　このまま親に護られながら、今のような泣きながら立ち止まるか。それとも、辛くとも歩みを止めず、強くなって両親の笑顔を自らが護るか。だが、それを強制する事は俺には出来ない。俺は君じゃないからな。好きに決めると良い」

「んと……。それは、僕がお兄ちゃんみたいに強くなったら、ママ

は泣かなくなるのかな？」

ティールが無邪気な顔で首を傾げて、相手の言葉の意図を理解しようとする。

その問いに、静かに、それでいて力強く頷くゼス。

「ああ。君がその気になれば、自分で親を護る事が出来る。もし、それを君が望むなら、一度決めた事は諦めない事だ。何があっても、決してその願いは棄ててはならない」

ティールの髪を僅かに払い、その肩に手を乗せてその思いを告げた。

「願わくは、強くなれ。……君が、俺の様に成りたいなら。何時までも親を笑顔にする努力をするといい」

その言葉はティールの耳に入って、頭に一文も漏れずに浸透した。彼がゼスのようになる為には、自分が泣かず、両親も泣かせず、何時までも護る事だと、理解する。

自らの憧れが願いとなった時、ティールは本当の笑顔となってゼスに力強く頷いた。

「うんっ！　僕、もう泣かない。パパとママも、もう泣かせない。僕、きっとお兄ちゃんのように強くなるよ！」

その言葉に、ゼスは今まで全く変化させなかった表情を、初めて笑みと言う名の感情を見せた。だが、それは僅かな表出だったが。

瞬間、ティールの父親に対応していたシェリーは口を動かしながらも、驚いた眼をゼスへと向けていた。

子供を見つけた時の状況と、今までの経緯を一通り説明したゼス達はようやく迷子探しの臨時任務を終える事になった。

ティールは母親を安心させるように力強く彼女の手を握って、空いた手で大きく手を振っていた。ティールの両親は改めて深く頭を下げてお礼を告げる。

「今度は迷子にならないように気を付けてね。もし迷子になったら、私達の格好をしている騎士さんに頼るのよ。騎士さんは、必ず助けてくれるから」

「うん！　ありがとう、優しいお姉ちゃん。そして強いお兄ちゃん。またねぇ！」

シェリーが笑顔で手を振り、去っていくティール達を見届ける。

三人とも笑顔で語り合いながら、人の海の中に消えていく。

それに、ゼスは終始彼らに目を向けないままだった。決してその光景を見届けないように、シェリーに背を向けていた。

例えるなら、遠い日の夢想（ユメ）から目を逸らすように。

「……親、か――」

呟いた言葉は、周りの喧騒で掻き消され誰にも届く事は無い。

やがて、ティール達を見送ったシェリーは腕を下して、ゼスに目を向けた。

「で、ゼス。アンタ、どういうつもり？」

「どういうつもり、とは？」

ゼスがシェリーの言葉に疑問を感じて、振り返る。

視界に映る彼女は、少し怒っているようにも見受けられた。

「あんな純粋無垢な子供になんだか色々吹き込んだみたいね。アンタ、あの子を洗脳しようとしてないわよね？　将来、アンタみたいなデリカシーがない戦闘狂（バーサーカー）にでもなったら、どう責任取るのよ？」
「それは、ティール自身が決める事だ。君の言う俺の様になるのかもしれんし、あの子供独自の成長を見せるかもしれん。全ては神のみぞ知る、という奴だな」
「あら、元傭兵さんが神頼みかしら？　アンタは女神（フィアラ）様を信仰するような、仰々（ぎょうぎょう）しい性質じゃないと思うのだけれど」
「いや。神に祈る余裕などなくなったな。そんな事をする暇があったら、トレーニングをした方が何倍も有意義だ」

さも当然のように。
ゼスは胸を張りそうな堂々さで、言い切った。
その豪胆さに、シェリーは深々と眉を寄せるしかない。

「アンタ、それを熱心な女神信者に言ったら呪い殺されるわよ……」

第六話　「中央通り：迷子」（後書き）

：ゼスは「無神論者」「お兄ちゃん」の称号を得た。シェリーは「お姉ちゃん」の称号を得た。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

こんばんは、蒼雷のユウです。

いやはや、こんな可愛い弟が欲しいですね。

夢見すぎだとは思いますが、憧れるだけなら問題ない、です（ぁｗ

ツンデレ属性は従弟だけで十分です（キリッ

皆さんはこんな兄弟が欲しいなぁ、というのはありますでしょうか？

巷でよく見かける（二次元限定で）のは、包容力のある姉、直情的だが筋を通せる兄、生意気だけど意外とシャイな弟、純情で甘えたがりな妹、などなど色んな性格の兄弟がいますよね。

え？　私が居てほしい兄弟、ですか？　そうですねぇ……毒舌のクーデレ妹ｇ（検閲により、規制されました）

第七話　「フェルド通り：疫病」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第七話　「フェルド通り：疫病」

――――同日１４時０９分

一通り中央通りを巡った二人は、昼食を取ってから次の通りの巡回へと向かっていた。

中流階級の人間が数多く住まう住宅街の区画、フェルド通り。小奇麗（ぎれい）な建物が並び、生活力が溢れる人々が寝泊まりしている。街路は一通り綺麗に整備されている。

その活気はゼスが通っていたアルバート通りより遥かに優る。

友人と共に楽しそうに走る少年達と話し合う少女達。それを微笑ましく見守りながら杖を突いて歩く老婆。買い物袋を抱えて帰宅途中の主婦など、とにかく平民のごく普通の生活した光景が広がっている。

街道を歩くゼスとシェリーは、どんな瞬間を見逃さない眼光を放っている。だが周囲に不安を抱かせないようにシェリーが穏やかな表情を振舞う。

「アルバート通りとは違って、小奇麗だな」

流石にここは興味が惹かれたのか、ゼスがそんな事を呟いた。

シェリーは得意げに応える。

「それはね。ここは誰もが職を持てる民達が暮らしている場所だもの。それなりの収益はあるし、納税も収められるぐらいの経済力は持っているわ。彼らの努力の報酬であるのは違いないもの」

フェルド通りの説明をしながら、通りかかった少年達が、騎士様だー、と歓声を上げるのに対して微笑んで見せる。
石畳の上を歩いて、蹲く様子も見せない騎士は姿勢を正しく振舞う必要がある、と念を押されているゼスは仕方なくそうしている。

少し歩けば窓を開けて、布団を干している住民も見かけられる。花壇を飾って、水を与える元気そうな少女の姿もある。
こんな平和そうな住宅でも、巡回警備の対象になっている。
ここはそれなりに裕福な家が集まっている為に空き巣や強盗と言った犯罪行為が少なからず発生するという。特にそういった犯罪者は事前に下見する事が多く、不審者を見つける為にも警備隊や騎士も見回る事が多いという。

「特に最近では定期的な巡回は意味が無いから、騎士団とは別の、治安維持を担う“警備隊”が独自に変則的な巡回をするようになった、と聞いたわね。決められた時間に開始したら、不審者は警戒してここには来ないのも当然だから。騎士も、重要な任務が無い時は自主的に見回りに来る事はあるくらい、ここは最も民を護らないといけない箇所でもあるのよ」

それも騎士の理想に準じる栄えある方(かた)だけではあるけれど、とシェリーは付け加えた。

蒼衣の騎士団は貴族出と平民出が混在する軍隊だ。
聖都や聖王国各地に駐屯する警備隊とは違い、魔働術の扱いに秀でたエリート集団の集まりだから、才能があれば平民でも登用される。それ故、狭き門でもあるが、騎士団に入った者は皆誉れ高き君主に忠誠を誓う守護者として確立する。
しかし、騎士団の三分の一を占める貴族出の者は生まれながらに

高い魔力を有している為、試験無しで登用される。その大半が貴族という権力の笠を被って、平民を見下す傾向にある。そういう者は表立った犯罪が起こりにくい貴族街区やゼス達が回った中央通りを中心に巡回警備をし、フェルド通りや平民が多く住まう処は見回らない。

専(もっぱ)らここを見回るのは平民出の騎士だけ、とシェリー。

蒼衣の騎士団も色々あるようだな、とゼスは彼女の説明を聞いて納得した。

「だが、その貴族出のボクお嬢様である君は、特異な存在と言う事だな」

「……それ、もしかしてバカにしているの？」

シェリーの声が低い。どうやら怒りの琴線(きんせん)に触れたようだ。

「いいや。少なくとも、同僚が君のようなお人よしと直情的な人柄で肩身が狭い思いを少しは抱かずに済む」

肩を竦めて、ゼスは皮肉を口にする。

暗に、シェリーの性質は同僚として見るに堪えない、と言っているわけだ。

それを理解したシェリーは再び顔を背けて、眉をきつく顰(しか)めた。

「やっぱりバカにしているじゃない。全く……」

流石に彼女自身、ゼスの性格が大体理解してきたのか、表立って怒鳴る事はしないようだった。

そもそも、ここは民達が住まう閑静な住宅街の中なのだ。近所迷惑な如く悪い意味で注目してしまうことだろう。

最中でも、勿論周囲を見回る意識は衰えていない。移動中でも、不審な光景を見逃すまい、としている。

それでも外国から来たゼスは、聖王国の性質を続けて説明するシェリーにお節介の評価も加えられるだろう、と心中鬱陶しいと思わざるを得なかった。

シェリーから聖王国の政策と経済状況、他国との関係、そしてこの国の重要な資源となっている“働石（どうせき）”の採掘量が世界屈指である事も聞かされる。

「“働石”とはその名の通り、魔働の力が溜まった鉱石の事よ。魔働エネルギーを有して動力、燃料、個人の魔力回復など日常生活と軍用品で様々な用途に使用される鉱物資源、“働石”は重要な物資で、我が国にとっては財産も等しいわ」

照明などの機械類はこの鉱石の魔働エネルギーによって稼働しており、純度の高い魔力を有する為、人間の魔力使用と比べるとより効果が良い。

何故鉱石に魔働が蓄積されているのか不明だが、魔働が実用化される以前の創世記に地中に流れる魔力を、その特殊な性質で吸収したと伝えられている。

魔力量は有限であり使い捨てになる為、重要な資源という位置づけで見られており、また国によっては“働石”の産出量が極端に少ない。その理由から、これの産出権を握ろうと戦争を起こす国すら現れるほどだ。

まさに「働石の一粒は血の一滴」とされる、人々の快適な生活には無くてはならない物質なのである。

ならば、世界屈指の働石の産出国である聖王国が、何故に今まで他国の侵略も無くここまで平和というと、それは一重（ひとえ）にこの国の歴

史と聖騎士ゆかりの地が影響している。また、過去に聖王国は諸外国の支援をした事もあり、下手に侵略しようとする国が現れたら、それこそ周囲の国家はこぞって同盟を組んで聖王国に味方するのである。

それは侵略国家にとっても良い筈が無い。同盟国を助ける為、と周辺国家は聖王国に加担し、こちらに侵略される口実を作らせるだけなのだ。

聖王国の外交戦略に成功している賜物（たまもの）だった。

「――というわけなの。その為、聖王国は千年以上も、平和に存在しているのよ。最近ではシュベルト帝国と聖王国の緊張状態が続いていたのは記憶に新しいけれど、緩和された数年前に陛下と――」

そうしてシェリーが説明をしていた時に。

突然、前方から歩いて来ていた女性が、身体を傾けて地面に倒れ伏した。

「え……！？」

シェリーが驚いて話を中断した時には、ゼスが走り出していた。

彼は倒れた女性の状態を確かめる。蹲いたわけでもなく、遠くから狙撃――ゼスは傭兵時代に、突然兵士が倒れればそういった判断をし続けた為に、相手が一般人でも考えてしまう――されたわけでもない。

さらに詳しく調べて行くと、女性に目立った外傷はない。だが、その顔色は悪く、酷い汗が流れており反応が無い。

女性はまだ若く、二十代後半と見受けられる。指に結婚指輪をつけているため、既婚者なのだろう。若奥様といった女性だった。

その直後、シェリーが駆け寄り女性を抱き起し始める。

「い、一体どうしたの！？」
「……ああ、どうやら意識が無いらしいな」
さらに驚いたシェリーは女性の手首の脈を測る。弱い脈だったがまだ生きているようだ。
だが、依然として顔色は悪く、放っておいたら命に関わるのは明白だ。
「大丈夫ですか、貴女、大丈夫ですか！？」
シェリーは大声で呼びかけながら、女性の肩を叩いてみる。
女性はその声に反応し、僅かに声を漏らしたものの目を開ける気配は未だない。
この状態から、ゼスは一瞬で判断した。
「もしかしたら彼女は、何か持病があるかもしれんな……。恐らく、今その発作が出ている可能性は十分に高い。ここは、直ぐにでも診療所などに連れていくべきだな」
「そ、そうね……！　すみません、誰か医者を呼んでください！」
住宅街で起こった異常な事態に集まっていた野次馬達も、介抱しているのが騎士と判り、ざわめきながらも担架を持ってこいと怒号が飛び交う。
その間にシェリーは女性に対して応急処置を施そうとするが、どのような持病を持っているか判らない為に、基礎的な処置しか行う事が出来ない。刺激が強い処置などをすれば、逆に身体に悪影響を与えるかもしれない危険がある。その為に、彼女は基礎的な措置しかできなかった。
騒然となったところに、騒ぎを聞きつけたのだろうか、中年の女

性が人々を掻き分けて姿を現した。

「こ、これは……あんた、マリアンじゃないか！？　またあの発作が出たのかい！？」

倒れたマリアンと呼ばれた若い女性に駆け寄る中年女性は、彼女の顔を覗き込む。この慌て具合から、危険な状態であるのは間違いない。

シェリーは突然現れた女性に訊ねる。

「失礼ですが、貴女は？」

「あたしゃ、彼女の近所に住んでいる者さね。そちらは騎士様と見受けられるけど、あんた達が介抱してくれていたのかい？」

「はい。あの、それより彼女の今の状態は……」

改めてマリアンの表情を見るシェリー。

中年女性も、困惑した表情で説明し始める。

「彼女は最近病に冒されていてね。生来は元気な娘だったのに、近頃原因不明の病が流行り出してから、彼女もそれに罹ってねぇ。こうして発作で意識が無くなる事が頻繁に起こるようになったのさ」

「近頃猛威を振るっているというあのリュスト病ですか！？　通りで……でも、あれは処方された薬を飲めば、一時的に抑えられる筈だと聞いています。薬は飲まれていなかったのですか？」

「そんなことないさ。彼女は毎日薬を飲んで何とかやっている。今日は丁度薬を貰いに行く日で、診療所に向かっていたところに発作が起きてしまったんだろうねぇ……」

泣きそうな酷い顔で、中年女性はマリアンを見つめる。

そんな時、ゼスの声がその感傷を中断させる。

「それ以上の説明は後回しだ。この近くに診療所はあるか？　案内してもらいたいんだがな」

中年女性の話によると、マリアンが目指していた件の診療所はこの近くにあるらしい。

そこの主治医が、住民と関わりが深くなるようにとフェルド通り内に居を構えているとの事だった。

ゼスは直ぐさま、彼女とシェリーに先導を任せ、自らはマリアンを背負い、群衆を掻き分けながら診療所へと急行した。

＊　＊　＊　＊　＊

近くの住人が持ってきた担架に乗せられたマリアンは、診療所に到着直後に緊急治療室に運ばれた。

直ぐに主治医が彼女の治療に当り、運び込んだゼス達は部屋の外で用意された席で、女性からマリアンの病について語られていた。

「彼女がリュスト病に罹ったのは数年前、今の夫と結婚してこれから人生の幸福を謳歌（おうか）しようとした矢先の出来事だったね。突然マリアンが倒れちまったのさ」

意識を失ったマリアンを緊急治療したところ、聖王国で近頃患者が出始めている、原因不明の難病“リュスト病”を罹っていると診断された。その患者数は決して多くないものの、明確な治療法が見つからず、対処も何もしなければ癌（がん）を誘発させて死に至らしめてし

まう危険な類だった。
患者の大半が富裕層である為、当初は牛などの畜産物の感染が疑われ、殺処分する事があったが、今ではどこからが感染源なのか一切不明のままだった。

そして、リュスト病を有名たらしめたのは、この聖王国の国政を取り仕切る君主の女王が、この病によって床に伏せっている事からだった。女王は阻害薬を取り続けている為に、辛うじて命を取り留めているが全く顔を出す事が無くなってしまっている。
今の国政は女王の息子である王子と宰相によって代行として取り仕切っているが、今は割愛する。

だが、一般人にとってはそうもいかなくなる。
抑止する方法である阻害薬は原材料が手に入りにくく、また調合方法も複雑であり専門知識を持つ医者しか作れない。その理由から非常に高価であるため、毎日処方していたら破産の一途を辿るしかない。
マリアンもその例に漏れず、自らの貯金を崩し、夫の懇意で稼いだお金で何とか繋いでいるとの事。
まさに周囲は不憫な事だと思ったものだが――。

運び込んでから一時間経とうとした時、集中治療室の扉が開いて主治医の男性が現れる。
その姿を認めた女性とシェリーが慌てた様子で立ち上がる。

「まぁ、ジェームズ先生！　マリアンの……彼女の容態は！？」
「意識は取り戻したのでしょうか？」

ジェームズと呼ばれた先生は、顔を上げて手袋を取る。
紺色の髪を整え、穏やかな表情が似合う顔立ちの眼鏡を掛けた理

知的な人物だ。ここまで白衣が似合う医師はこの聖王国内でも数名しか居ないだろう風貌である。

「とりあえず、危篤状態からの回避は成功しました。今は安静に眠っています」

ジェームズは他人を安心させる微笑みの表情を浮かべて、集中治療室から看護師によって運び出てくるマリアンの姿を見る。

彼女の顔色は元の肌色に戻っており、苦しそうな面影は既にない。彼女の動きが、正常に呼吸をしていると理解できる。

とりあえず緊急治療が成功した事に、シェリー達は安堵の息を吐いた。

「あぁ、良かったわ……。一時はどうなる事かと思ったわよ」

「ジェームズ先生。助けてくれて、本当に有難うございます！　マリアンに代わって、あたしがお礼を言わせておくれ」

女性が深々と頭を下げる。

近所に住んでいるとはいえ、彼女にとってマリアンとは娘同然の付き合いで深い情を持っている。彼女に何かあれば、泣き崩れていただろう。

それを知っているジェームズは笑顔で女性の肩を優しく抱いて、顔を上げてください、と諭した。

「全力を尽くしたまでです。それに、もう少し運ばれるのが遅ければ、こうはならなかったと予測できるほどの危険な状態でした。基礎的な応急処置が施されていたのか、病状の進行が若干抑えられた事も起因しています。――聞いた話から、迅速な判断と行動をしてくれた、そちらの騎士様達にこちらからお礼を言いたいほどです」

ジェームズがシェリーと席に座ったままのゼスの前に立つと、頭を下げる。

「患者を助けていただき、誠に有難うございました」

「いえ、当然の事をしただけです。本当に助けてくれた先生がそんなに頭を下げないでください」

「……ああ。俺達だけでは、彼女を助けられなかったわけだからな」

二人は若干沈ませた声音で応える。彼らはジェームズの言う通り、病の進行を抑えた事と早い搬送だけをしただけなのだ。治療して危篤状態を回避した医師に適うべくもない。

顔を上げたジェームズは、苦笑しながら手を軽く振った。

「いくら治療で助けられたと言っても、時間が勝負を決めるんです。手遅れになれば、僕ですら手の施しようが無かったんです。彼女の命を繋ぎ止めていたのは、紛れも無いあなた達の成果です。どうかそのように謙虚になさらいでください」

「あ、有難うございます。そのように言ってくださると、私達も騎士の誉(ほま)れと感じます」

礼儀正しくお辞儀を返すシェリー。ゼスは返事もせずに脚を組み直した。

白衣の襟を整え直して、ジェームズは診察室に向けて手を仰ぐ。

「とりあえず、ここで立ち話もなんでしょう。これからの話をあちらで話し合いましょうか」

案内された診察室は、主治医が患者の容態を文字通り診察する部

屋であり、ジェームズの執務室も兼ねていた。
聴診器にシャウカステン、喉を見る為に舌を抑える金属棒と診察寝台などが完備されている。
三人用の椅子を用意されたゼス達はそこに腰をかけ、ジェームズと向かい合っていた。

「――――単刀直入に申し上げます。今は危篤状態を回避できましたが、実際のところ前と変わりはありません。一日も経たずに再び発作が起きるでしょう。僕が出来た事は、それだけです」
「では、これからもいつも通りに阻害薬（そがいやく）を服用しないといけないのかい？」
「ええ、そうなりますね。今週も七日分を出しますので、マリアンさんが目を覚ましたら渡しておいてあげてください」

ジェームズと女性が話し合っている。
ゼスとシェリーは部外者故に、僅かに後ろで席に座っている。話には割り込む事が出来ず、ただ状況を知る為に静観を貫いていた。
否、シェリーだけが一つの疑問を問うた。

「あの、失礼ですが、リュスト病の阻害薬は用意されているのですか？」

ジェームズが彼女に顔を向けて答える。

「はい、その通りです。正確には、阻害薬はこちらで作られているんですよ」
「ええっ！？　先生は阻害薬を調合する事ができるのですか？」

目を見張って驚くシェリーは、阻害薬の存在が非常に貴重な物であるという事を物語っているようだった。

二人の話を聞いていた女性が、まるで息子自慢をするような誇らしさで説明する。

「そりゃそうさね。ジェームズ先生は医学界では権威と謳われる実力者の一人なのさ！　そもそも、阻害薬を初めて開発したのも先生なんだよ！」

この話に、シェリーは口をパクパクさせてジェームズを見張っていた。

当のジェームズは照れくさそうに頭を掻いた。

「いやはやお恥ずかしい。先人達の腕には到底及びませんし、阻害薬に関しても思考錯誤（さくご）を繰り返して偶然出来た代物ですしね。そんな誇らしげに言わないでください」

「何言ってるんだい！　それどころか普通なら高価な阻害薬を、良心的な価格で譲ってくれる事なんてそうそう出来るもんじゃないよ！」

「いや、それはちゃんと材料費と調合用具などの資金繰りで損失が無い程度にギリギリ抑えられたからであって」

「そんな事を考える人間が、自分の給料を度外視しておきながらよく言うよ」

女性の言葉に、ジェームズは苦笑する。

ゼス達が察するに、ジェームズは優秀な医者であり、阻害薬を割安で提供してくれる良識的な人間である、ということだと。自分の利益より、ただ少しでも病で苦しむ人々を助けたい、その願いが伝わる行動に、ゼスはともかくシェリーは好感を抱いた。

そんな人間でも、この病を治す事は適わない事実に恐らく歯噛みしたい想いに違いない。だからこそ、ジェームズは謙遜しているのだろう、と。

「そ、そんな事より、マリアンさんのご主人にはもう連絡が着いたのですか？」
「知り合いが仕事場へ知らせに行った筈だから、そろそろ――――」
女性が思案げに応えていると、外から慌てたように扉が開いて、男の声が響いた。
「マリアン！？　どこだ、大丈夫か！？」
その声は主の思う人物を案じる気持ちを感じさせている。
ジェームズは着たみたいですね、と席を立って診療所から後にして、新たに現れた男性に会いに行く。
ゼス達は一応ここに留まる事にしている。
「ああ、先生！　マリアンは、妻は無事なんですか！？」
「ご安心ください、一命は取り留めました。今はぐっすり眠っています。一通り説明致しますので、付いて来てください」
男性の息を呑む気配を感じ、ジェームズの動きを追う。
診療所の入り口に、ジェームズが顔を出す。
「すみません、移動しますので貴方がたも付いて来てください」
その言葉に、ゼス達三人も立ちあがって、マリアンが眠る病室に案内された。
＊　＊　＊　＊　＊

ゼス達に説明した今の状況を、新たにやってきたマリアンの夫――名をエルドというが――に聞かせたジェームズは、マリアンの検診をし終えたところだった。

「脈は良好ですね。この分なら、三日もしないうちに退院できるでしょう。今日中には目が覚めるかもしれませんね」

「あぁ……それはよかった」

不安の気持ちを全て吐き出すように、安堵の息を吐き出すエルド。彼女と愛を交わし合ってから数日で病に倒れたと聞いた時は、毎日が不安で仕方が無かったという。決して治る事のない、この病はまさに絶望を運ぶものであり、これからの幸福を奪った病魔は取り憑いた悪魔そのものだった。何時病が悪化するか判らない、それが今日だったのかと彼は随分狼狽したのだろう。

張り詰めていた緊張が抜けたように、椅子に腰を下ろすエルド。その時、眠っていたマリアンがうっすらと目を開けた。

「マ、マリアン！　体調は？　痛みは無いか！？」

「……まぁ……あなた……どうして……？　あたし……なんで……眠って……」

まだ発作から回復したばかりで、身体の活動が弱いのかマリアンの声は弱々しい。

彼女から上げられた手を、エルドは両手で優しく握りしめる。

「いつもの発作が起きて、道に倒れたんだよマリアン。本当にビックリしたさね」

「……おばさま……あたし……倒れて……ジェームズ先生の……処に」

「どうやら手術は大成功のようですね。こんなに早く目を覚ますとは。順調に回復しているようです」

ジェームズが微笑むと、それだけでマリアンの不安が溶け出して、彼女は安堵の息を吐いた。

「ジェームズ先生、毎度の事ながら助けてくれて有難うございました」

「いやいや、僕は悪化の進行を止めただけです。あと一歩遅ければ助けられなかったぐらいの瀬戸際だったのです。礼なら、マリアンさんをここまで迅速に運んで来てくれた、こちらの騎士様達に」

ジェームズはゼスとシェリーの二人に指し示す。突然話を振られた事に驚いた二人だったが、エルドはなんと、と目を見張った。

「そうですか。騎士様、有難うございました。マリアンもきっと感謝してくれるでしょう」

「……騎士様……ここまで……ありがとう……ございます」

まるで降臨した神に縋る様に、信者の如く頭を下げるエルド。マリアンも頭を動かす代わりに、目を瞑った。

「……すみません……あたしが起きれたら……ちゃんとした……お礼を」

「いえ、無理はしないでください。私達は当然の事をしたまでですから」

シェリーが慌てて、起き上がろうとするマリアンを抑えて再び楽

に寝かせる。
座ったままのゼスも、そう何度も礼を言わなくて良い、と口にする。

「身体を悪化させるような事はするな。俺達に礼をするって言うなら、早くその病気を治す事だな」
「ゼス！　そんな言い方……！」

強めの口調が剣呑の眼差しをしているシェリーから発せられるが、その通りですから、とマリアンが窘めた。

「気休めの言葉は掛けない主義でな。言葉がきついのは許せ」
「……ええ、大丈夫、です」

気にしていない、と微笑みを浮かべるマリアン。

「……それにしても……あなた……仕事は……大丈夫……？」
「そんな事を気にしている場合じゃないさ。仕事をしているのもお前を助ける為だが、それよりもお前の傍に少しでも居たかったんだ」

マリアンとエルドがお互いの手を握り、その視線を交わす。

「……でも……仕事を休むと……お給料が……減るんじゃない……？」
「それに関しては心配する事は無いよ。最近、良い仕事が入ったんだ。大分仕事時間が長くなるけど、ようやく先生が割り引いてくれる阻害薬の価格に追いつく。これで、家庭は安定する。後は、お前さえ俺の傍に居てくれれば、後は何も必要ないんだ」

エルドが妻の手をさらに握りしめた。

「俺はお前を幸せにすると誓ったんだ。闘病生活は辛いかもしれないし、俺も仕事が大変だ。だが、お前の笑顔と心を見ると、凄く癒される。疲れなんて吹っ飛んでしまう。もっとお前の笑顔を見たい。お前の傍に居たい。それ以上に優るものなんて、なにも無いんだ。だから……俺を置いて行かないでほしい」

「……あなた……。……えぇ、もちろんよ。……あたし……頑張ってみる……あなたが……いれば……何も怖く……ないから」

「マリアン……！　いつかきっと、その病を治してやるからな……！」

二人からの熱っぽい視線が交わり、お互いの距離がグッと近くなる。

その親密な雰囲気から完全に蚊帳の外である、ゼスとシェリー、マリアンのおばさんとジェームズは、二人の光景を微笑ましく見守っていた。

「おやおや～。真昼間からやるねぇ」

「素敵だわ」

おばさんのニヤついた顔と、輝く表情を浮かべるシェリーにマリアン達がようやく我に返って、恥ずかしながら振り返った。

「す、すみません……！　二人で勝手に」

「……お恥ずかしいところを……」

萎縮する二人に、ジェームズが穏やかに遮る。

「はは、大丈夫ですよ。では、我々は私用でお話もありますし。ここで失礼致しましょう」

医師に促され、ゼス達はマリアンとエルドを病室に残して後にする。

「あの……騎士様」

マリアンの呼び止める声が届き、ゼスとシェリーが振り返る。
彼女の視線は、ゼスへと注がれていた。

「俺の事か？」
「はい……。あの……ありがとうございました。あたしを……ここまで運んでくれた事と……病を治す目的を抱かせてくれた、言葉をかけてくれた……事に」
「……そうか」
「そちらの女性の騎士様も……。……また近い日に、お二人にお会いする事があったら……お礼をさせてくださいね……」
「ええ。その時は元気なお姿を見せてください」

騎士二人はお互いに違う反応を返して、病室から退出した。

＊　＊　＊

廊下で立ち止まったゼス達は、そろそろ巡回任務に戻る機会だろうと考えた。
かれこれ一時間以上は経っていることもあって今日中に聖都中を巡りたい事や、既に二人ができる事は無いと感じていた事を、ジェ

ームズとおばさんに聞かせていた。

「そうですか。お勤め御苦労様です。これからも、民達を護り、自らの仕事に誇りを持てるよう祈っておりますよ」

「有難うございます。誠心誠意、務めていきます」

お辞儀をするシェリーに、おばさんが彼女の顔を覗き込みながら、得意げな顔で言う。

「騎士の仕事は大変で過酷なんでしょ？　怪我や病気はジェームズ先生に診てもらうといいよ」

「あはは、その時はお世話になるかもしれませんね」

苦笑するジェームズの表情に、笑みを浮かべるシェリー。

ふと、何かを思い出したように彼女が医師に訊ねた。

「そういえば、先生のご専門は？　薬学ともお見受けしましたが、手術の腕も見る限り外科の腕もお持ちなのでしょうか？」

「はい。一応外科の免許も取得済みです。後は、精神科の心得もありますが」

ジェームズの濁りのない言葉に、シェリーは驚きの表情を浮かべて、「は、博識なんですね」と返した。

「ははは……。器用貧乏なだけですよ。それに、医療関係で認められるのもそう簡単ではありませんしね。滑り止めで学んでいただけです」

「あたしゃ、それができるだけでも十分なんだがね」

おばさんの一言に、さらに苦笑を深める白衣の男。

その時、今まで話に加わっていなかったゼスが、さらなる仏頂面で一歩前に踏み出した。

「先生。先ほど、精神科の心得があると言ったが……」

「ん？　はい、その通りですが……？」

ジェームズを含め、その場に居た全員がゼスの雰囲気に不思議に思っていると、当の本人は逡巡とした様子で何度も話をするべきか思い留まっていたが、暫くして言葉を紡いだ。

「……過去の出来事でそれが毎回夢に出る、ということは有り得ることなのか？」

「夢、ですか？　そうですね……記憶に残るような強烈な出来事、例えば最も楽しかった記憶や、悲しい出来事――所謂、トラウマを経験する事で、有り得る事象であると考えられていますが」

話を聞いたゼスは一瞬眉をピクリと跳ねたが、直ぐに元の表情に戻って「感謝する」と言って背を向けた。

シェリーは事態が掴めないとばかりに首を傾げる。

「ゼス？」

「気にするな、単純な疑問だっただけだ」

さて、と彼は話題を変える。

「そろそろ行くべきだろう？」

「え、ええ。そうね。では、私たちはこれで」

ゼスの後を追うように、シェリーはジェームズとおばさんに挨拶を交わして別れを告げる。

ジェームズが別れ際に、医師としての社交辞令のような言葉をかけた。

「また今回みたいな件や、その他個人的な何かがありましたら、僕のところにいらしてください。そこまで融通できませんが、騎士様には診察代をサービス致しますので」

「……また来る」

そうして、騎士二人はおばさんのお礼の言葉を受け取りながら、診療所を後にしたのだった。

第七話　「フェルド通り：疫病」（後書き）

：ゼスとシェリーの知名度が2上がった。

第八話　「聖都外周部：貧困街」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第八話　「聖都外周部：貧困街」

Ｓｉｄｅ：Ｓ（シェリー）――同日１７時３２分

時は既に夕刻。

ゼスとシェリーの二人は、せめて隅だけを今日は回らなければ、と聖都外周部へと移動していた。

ここに通りとしての名は無い。ここは聖都でも最も下流の平民が多く集う。

みすぼらしい布を包んだホームレスや血気盛んな若者がウロウロしているなど、ここは平和な聖都の中でも最も治安が悪い貧困層の地区だ。フェルド通りのような喧騒は無く、居るだけで生気を吸い取られるような、静寂に包まれている。

ひしゃげた妻屋根が、限られた土地に無理やり押し込められたようにひしめき合っていた。通りに面した窓という窓が、みな鎧戸やカーテンで閉められているが、窓の周囲はひび割れで飾り立てられていた。石畳も補修が全くされておらず土も剥き出し状態であり、ところどころで持ち上がったり傾いたりしていて、注意しないと躓（つまづ）きかねない。

「初めてここに入ったけれど……やっぱり、聞くのと見るのとでは、全然違うわね」

寄って来る虫を払いながら、通り過ぎる道を流し見るシェリー。

物が殆ど散らかっており、聖都を覆う巨大な城壁で暴風雨などの自然災害が来たとしても耐えられるが、家と物自体は自力では耐え

られない。その被害も、広大な聖都の隅である外周地区は国家権力ですら目が行き届かず、認知できていないというのが実情だ。
それ故、ここはならず者の溜まり場や全うには生きられない者達が自然と集まっている区画、それがこの聖都外周部である。

実際、長身のゼスにガン付けてきたり、シェリーを口説こうとしてきたり、二人に物乞いが金銭をせがんできたが、彼らが騎士である事を知ると蜘蛛の子を散らすように去って行っている。

「ここは、俺が住んでいたオンボロアパートと同等に、酷い有様だな」

路地を歩き、壊れかけの建物を見回しながらゼスは、そう口にした。
彼がうろついていたアルバート通りでも、オンボロアパートはありはしたが、ここのように見渡す限りがそれではなかった筈だった。
シェリーもここがあまりにも、人が住める場所ではないと思っており、隅々まで視線を巡らす。

「……よくああいう場所で生きてられたわね。それにしても、外周部はここまで整備が行き届かなくなるなんて、まるでここだけ聖都の輝きが届かずに、置いてけぼりになったような地区だわ……」

聖都の外に行けば行くほど、貧富の差が激しくなって来るような縮図は富が中央に集中しているような感覚を覚えてしまう。入りきらない、と零れ落とすように。
照明がいくつかあるとはいえ、聖都内側より数が少ないのでは夜はかなり視界が悪くなるだろう。
路地の隅で縮こまっている者達も全身が汚れていて、全体的に暗い雰囲気を漂わせている。

「このような状況を作り出したのも、紛れもない聖王国の政治からなのかしら……」

元々聖都の経済はそこまで利潤を追求したものではなかった。誰しもが様々な職業に就き、それなりの収益と他者との差を生ませず、社会保障を充実させ大半が辛うじて生活してきた約五百年近くは、まさに社会主義な国家だった。

それが、ここ数百年に多くの大国が台頭し始め、聖王国は発言力や軍事力、経済的にも衰えを見せ始めた。この国の政を司る“元老院会”はこの国が生き残る為には、効率的な利益を得る職への意欲を向上させ、競争社会を支持する政策、所謂資本主義が必要だと訴えた。

これに対し、絶対決定権を持つ国王は、聖王国は自らの利点を最大限利用する事で息をふきかえし、数多くの民の資産と生活を守る事が出来ると考え、改訂を重ねて承認した。

しかし、これには致命的な欠陥があった。

この改革案が公布されてから貧富の差が広がってしまったのである。聖都の職はこれを機に多くの利益を得る職だけに人は求め始め、就職率が減る。競争社会の中職によって利益の差が広がり、赤字が大きくなって失業率が増加する。

結果、元より広すぎて外周部まで目が届きにくく、税を殆ど支払う必要が無いこの貧困地区に、彼らの様な下流の民が流れて行っているのだ。

「……嘘、あんな子供まであんなに」

「ストリートチルドレンだな。孤児や親に棄てられた子供が、こう

した貧困街に住む事はどこの国でも見てきたが……」

シェリーは、路地に横になって毛布に包まった幼い子供を見つける。

子供は髪と顔が汚れ、ひどくやつれている。見る限り、まともに食事をしていないというのは明らかだった。放っておくと、子供が餓死する可能性が非常に高い。

元より金が無い彼らは家を持つ事も、栄養素がある食事をする事も、娯楽に投じる事も許されない。職探しをして少しでもお金を稼ごうとしても住所不定である事と薄汚れた外見では、採用するところは皆無に近いという悪循環。自然、一部は危険な仕事をしたり、無気力な生活を余儀なくされている。

そして、子供を持つ親は、養育費を確保する事も出来ない為に、こうしてこの地区に子供を棄てる事も多々あるのだ。

「大変……！」

いくらなんでも子供でこれは酷いと思った彼女が、懐から小さな金貨袋を取り出して走り出そうとする。

だが、彼女の腕をゼスの腕が素早く制した。

「止めておけ」

「ゼス……！　どうして止めるのよ！？　これだけあれば、あの子はまともな食事が摂れるようになるのよ」

シェリーは困惑の表情を露わにし、声音を強めた。

ゼスはすいと眼差しを細くした。

「それを渡してもみろ。さっきのように金を恵んでくれともっと他の奴らが殺到する事は目に見えてる。そうなればこの通りは大混乱

だ。それに、仮に無事に渡せたとしても、君はそこで子供との関係を終わりにするつもりか？　騎士から金を貰った子供は食事を取りに移動する。だが、高い確率でならず者達に襲われ、金ごと下手すれば命まで奪われかねんな。どこで誰がこの光景をみているか判らん。君は一時の感情でそんな悲惨な結果を招きたいのか？」

ゼスの今まで聞いた事が無い強く吐き捨てるような言葉に、シェリーは僅かに慄く。

「だ、だったら、子供の護衛を――――」

「問題を起こさないように俺達は巡回をしている筈だ。態々問題を作って、巡回任務を放棄するつもりか。……いいか、この場所で恵みを出すという事は、この地区全ての問題に関わってしまうと言う事だ。その瞬間、君はこの地区の果てしない闇を見せつけられる事になる。新人騎士になったばかりの俺達が、どうこうできる問題じゃない事は、分かっているだろうな」

「それはっ……っ！」

ゼスに言われたシェリーも判ってはいた。

この状態を解消するにはそれこそ、原因の根幹である資本主義制度を止めさせるか、新たに補完する政策を打ち出すしかない。それには公布した“元老院会”による反対多数による否決か法案提出、蒼衣の騎士団上層部の三分の二以上の嘆願書提出、もしくは聖王国君主による棄却と公布だ。

だが、それはどれもが難しい。

“元老院会”は、聖王国の臣民資格を持ち、入団試験さえクリアすれば誰でもその一員となれる“蒼衣の騎士団”と違い、完全に特権階級である貴族によって独占されている。その大半は野心的な思想と選民意識を持っており、自らが提案した主義を簡単に覆す事は

有り得ないだろう。
騎士団もいわずもがな、そのような行動を起こす上騎士達が居れば、とっくの昔にしている筈である。
それらも、君主の一言で簡単に覆るが、元より聖王国の存命を優先した決定だ。再び社会主義に戻せば、今度は国家全体の経済危機に陥ってしまう。新たな法案成立も、何年後の話になるか。

実家であるアイオライト家の当主、シェリーの父は“元老院会”でも大きな影響力を持っているが、彼も貴族意識と国家への忠誠心が強く、助力は期待できそうにない。それどころか、見返りとして騎士を止めさせられて家に戻らされる可能性も捨てきれない。この地区で任務を放棄し、問題を起こせば尚の事だ。
その現実に、シェリーはやるせない気持ちと共に下を向いた。
ゼスから放された腕を力なく落とし、右手を力強く握り締める。

「……それは、できない。この国は、まだまだ色んな問題を抱えていると聞いているわ。ここで騎士を止めさせられたら、誰も護れなくなる……！」
「なら、今はよす事だな。その子供の為にも、そしてこの地区に暮らす人の為にも、な。騎士がここで問題を起こして事態が悪化し、それが表沙汰になれば、彼らもここには暮らせなくなって都の外に追いやられてしまうだろうからな」

外は暮らせない事は無いが、凶暴な魔物が徘徊しており、ここより安全の保証は無い。無力な市民を都の外に追い払うというのは死刑宣告も同等である。
しかし、シェリーは内心、まだ納得がいってなかった。

「でも、でもこの子は……独りで、身体も弱くなっているのよ」

――とても長く生きられる状態じゃない、と彼女は訴えた。今助けなければ、近いうちに彼は骸になってしまうだろう、と。

すると、ゼスは目線を下げて考え込んだ。

しばしの間を置いて、その視線は先ほどシェリーが懐から出した彼女の金貨袋に向けた。

「……直ぐと言っても後二、三日の猶予があるな。今はまずく見えるが、後で良くなろう。ところで、最近食料が厳しい。給料日まで、その金の一部を俺に前借りさせてくれないか？」

「――――は？　今はそんなどころじゃ――――」

シェリーがはっとしたように、ゼスの軽鎧を見た。真剣な眼差しで彼と軽鎧を交互に見て、彼の言葉を頭の中で反芻する。

彼は「今はまずく見える」という言葉は、何の主語に向けて放ったものなのか。子供に対してなら冷血漢も甚だしいが、それがもし自分達に向けられたものだとしたら、その後に口にした前借りの件に説明がつく。

全てシェリー自身の想像だ、ゼスの心中を読んだわけでもないが、なんとなくそうあってほしかった。

「――――信じても、良いのよね？」

「無論だ。俺は元々、君が騎士には向かないと罵倒する、傭兵上がりだからな。騎士には出来んことを、俺は出来る。それに、ここで何もせずに素通りしたら、君は今後の任務に集中できず、本来の実力を発揮できなくなるだろう。俺の苦労が増えるだけだしな」

ゼスは相変わらず皮肉な言葉を口にしながら、見下した。

それに短く息を吐いたシェリーは、強めの口調で、乱暴な手つきで金貨袋を持っていた右手をゼスの胸に叩きつけた。

「全く、アンタは本当に口が悪いわね。確かに騎士に向いていない野蛮人も当然だわ。……返済も成果も期待しないわよ」
「……有難いことだな、気が滅入らずに済みそうだ」

シェリーの右手が離れ、自らの胸に抱えられた金貨袋を右手で受け取り懐に仕舞いこむ。
流石にこの場に二人の騎士が留まっていると、周囲の人間の注目の的になる。これ以上立ち止まるのは得策ではない、と二人は歩き出した。
衰弱して横になる子供を目で追いながら、シェリーは無事でいるようにと心の中で祈りを捧げたのだった。

第八話　「聖都外周部：貧困街」（後書き）

：ゼスはシェリーから１５００リオを受け取った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

第九話　「聖都外周部：奴隷」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第九話　「聖都外周部：奴隷」

Ｓｉｄｅ：Ｚ（ゼス）――

「さて、話を戻すようで悪いが」

先ほどの通りから少し離れたところで、唐突にゼスが訊ねる。

「先ほど君が言っていた、まだまだ色んな問題を抱えているというのは一体他にどんな――」

その時、彼らの耳に短い音と短い悲鳴が届いた。

「今のは……あっちの方から聞こえたわね」

「ああ、一体今度は何なんだ？」

二人は駆け出し、突き当たりのＴ字路を右に曲がる。

その先は今まで狭い路地と違い、開けた場所だった。その城壁部分には馬車が通れるくらいの広い門があり、今は開け放たれている。

そこは、馬車が通れるように広く作った通りなのだろう。

通りに、堅固な作りをした馬車が数台止まっていたのを目にした二人は、無意識に近くの物陰に隠れる。

その先を目立たないように窺うと、数十人の人の姿が目に入った。

「あの馬車は、普通じゃないな。戦時中で捕虜を本陣に運ぶ輸送用の馬車だな。それに、あそこで武装しているのはどうみても騎士じゃないな。警備隊かどこかの貴族の私兵か？」

ゼスの言葉通り、馬車を囲むように数人の兵士達が物々しい雰囲気で周囲を警戒しながら、馬車に乗り込もうとしている人の列を見張っている。
シェリーがその人の列に注目すると、驚愕した表情で目を見張った。

「ま、まさか……あれが」

彼女の態度は、考えていた推測が確信に変わった時のソレに良く似ていた。
ゼスが彼女の視線に沿って、人の列を視界に収める。
彼らは皆、髪型とその色も、肌も顔つきも全員違う老若男女だった。共通している事と言えば、みすぼらしい布地の服一枚だけで、飼い犬がしているような首輪をしており、裸足、表情から生気が殆ど感じられない。そして両腕には鎖に繋がれた手錠をかけられている。
周りの兵士達に視線という形で、馬車に乗る事を促されている。
一人ずつ馬車に押し込まれる形で、列は進んでいく。

一人、馬車に乗り込む手前で立ち止まっている男が居た。
見ると男の表情はこれからどんな未来が待っているか理解しているようであり、馬車に乗り込むという事をどこかの地獄の門か何かに例えているような、恐怖感を抱いたものだ。
彼が立ち止まり、列の進行が滞ると後ろから覆面をした異形の兵士が男に近づく。そして、持っていた鞭を振り上げ、それを男の背中に叩きつけた。
びしりっ、と鞭がうなる。

「ぐはぁっ」と、男が思わず声を漏らした。

「おらっ、さっさと乗り込め！　後がつかえるんだ。早くしないと背中にフルコースを味わう事になるぞ？」

覆面の兵士は、その被り物の下でくつくつ、と笑いながら、鞭を地面に打ち付けて音を鳴らす。

その音で効いたのか、男はそそくさと馬車に乗り込んだ。

後の者も彼と同じ目に遭いたくはないのか、迷いもせずに後へと続く。

他の馬車でも覆面を被った兵士の鞭に叩かれた人々が歩かせられる光景が見られた。

「この時代に捕虜を、ってわけでもなさそうだな。聖王国は帝国と違って侵略国家ってわけでもない。それに、外周部とは言え都内で彼らを改めて乗り込ませる事は無い筈だ。犯罪者も然り、だが……」

「……っ、隠れて」

シェリーに促され、ゼスは物陰に深く隠れる。

彼らの視界に、新たな人物が現れたからだ。

五十代の男性で顎髭は黒く、浮かべる笑みは楽しげに歪んでおり、全体的に太い腹まわりをした体型だ。細く釣りあげられている目には見下すべき他人を愉悦に浸りながら眺めるような眼光であった。

加えて、身にまとっているのはいかにも金にものを言わせた豪奢な長衣。決して市井の人間が買えるような衣服ではなかった。

それだけでも、彼が貴族の人間である事は一目瞭然だった。

「おい、早く奴隷どもを乗り込ませろ。こんな処を通るわけがないが、万が一騎士の連中に見られでもしたら、反攻材料を与えかねんからな。まぁ、平民上がりの下等騎士に見られたとしても痛くも痒くもないがなぁ、ぶわっはっはっはっはっ！」

むしろ注目されるような豪快な笑い声をあげ、貴族の男は奴隷と呼ばれた人々を眺め続ける。

彼の声は、物陰に隠れているゼスとシェリーの耳にも届いており、兵士達に見つからない程度に様子を窺い続ける。

「……空耳じゃなければ、やはり奴隷か。俺達のような騎士に見られる事を警戒しているようだが、よく言ってくれるな。しかし、まさか歴史と伝統ある聖王国が奴隷を擁しているとはな。……君は知っていた様子みたいだが」

「……」

ゼスがつぶやいてから、彼の下から様子を見ているシェリーを見下ろした。

彼女は視線を感じながらも、じっと奴隷たち、特に貴族の男に注意している。やがて、そのままに彼女は厳かに説明し始める。

「……あくまで貴族間の噂で聞いたのよ。宰相（ディル）をトップにする“元老院会”が奴隷制を設けて奴隷を確保しはじめた事。女王陛下が床に伏せっておられてから、表向きには我が国の利益と平和、治安の良い国づくりをしているわ。でも、裏ではかなりのやりたい放題よ。奴隷制の導入も、その一つでもあるわ」

「成程。するとつまり、これが聖王国の抱える他の問題、ということとか」

シェリーの説明にゼスが端的にまとめる。

彼女は黙って頷き、説明を続ける。

「莫大な借金をした債務者は返済不能になると、債権者によって奴隷として売却して貸付金を回収できる事と家族が関係者を売り払う

事が出来る事を可能にしてから、様々な境遇の奴隷が生まれていると聞いたわ。中には小さな集落を襲撃した山賊が住民を拉致して、そのままブローカーに売り渡す事もあるそうよ。奴隷たちはその通り、主に貴族達が買い取って、人権も自由権もない所有物にされる。彼らをどう扱うかは主人の裁量に任されていて、大抵は農業や家内の世話や雑用に使役されるわ」

聖王国の内情を話すシェリーの様子は、苦虫を噛み潰すような有様だった。彼女自身、奴隷制というものはあまり好ましく思っていないのだ。

その様子を見ながら、ゼスは自身が傭兵をしていた頃の仕事仲間から、帝国の奴隷制の内情を聞いた知識を口にする。

「帝国は侵略した敵国の部族を主に奴隷にしているが、それだけに容赦が無いと聞く。死んでいく奴隷も後を絶たんらしいが……。聖王国はまさか自国の民にそのような扱いをするのか？」

それについて、シェリーは首を横に振った。

「いいえ。どうやら主人が奴隷を殺害する行為は禁止されている、と一応規律に定められているらしいわ。殺人罪に同等らしく、実際奴隷を殺したある貴族が罰せられた事もあるわ。……ただ、あくまで殺意があった場合で、事故で死亡した場合は主人に非は無いとされるのよ」

「一応それなりの体面は持っているようだが、キナ臭いな。一体どれだけ事故死に見せかけているのやら。いくらなんでも、民衆から非難が起きるんじゃないか？」

「そうでもないわ。例えばフェルド通りのような聖都の中産階級の人達には、全く縁が無い事よ。聖都の大半が彼らで占めるここは、それほど奴隷制の認知度は低いわ。皆、日々に忙殺されてそんなこ

とは気にも留めない。貴族の間でも普通に知識として認知している程度だもの。恐らく騎士団はその事を知っている筈」

声音を潜ませるシェリーは複雑な心境が見え隠れしていた。

流石にこの問題が騎士団全体に広がっていれば、黙っていない騎士が一人か二人は現れるだろう。

しかし、今の今まで奴隷制があり続けている理由は、奴隷制もある程度の利益を生むからである。特に、土地開発の整備や鉱山発掘、様々な経済活動などにおいて人材不足があった場合に、それを補強する為に奴隷を使う事がある。また、貴族達の屋敷の使用人の給料に比べて比較的安い賃金で奴隷を買える事から、奴隷使用人として仕えさせて資金を温存できるという利点もある。

これらはあくまで貴族達に対する表向きの話だが、正直に言えば騎士団上層部は奴隷達が非人道的な扱いを受けている、という直接的な証拠を掴めていない。証拠が無ければ制度を公布した“元老院会”に糾弾しても、はぐらかされる可能性が非常に高く、下手をすれば反攻材料を与えかねない。

その証拠を得るまでは、上層部としても、またはそれ以下の騎士達は黙認し続けるしかないのである。

そして、騎士団には直接“元老院会”に対する干渉権を持ち合わせていない。何故なら両陣営共に双方の影響を受けて国家経営を停滞させる事を防ぐ目的で、共に隔離された状態であるからだ。これは、“蒼衣の騎士団”が設立された時代から王族が成立させた掟（おきて）であり、今の国家元首がそう簡単に無くす事は難しい。

「だが、それでは騎士団は議会に立ち入る機会なんてないだろう」

「ええ。その為に“警備隊”が居るのだけれど……。“警備隊”の事は知っているわよね？」

「そうだな……。確か、唯一の国家権力監査と治安維持を担う警察

組織だったか」

直接的証拠を掴む為に貴族や院会への家宅捜索をする権限は、国家権力に唯一干渉できる“警備隊”のみである。

「ええ。でも、そこは嫌なことに、貴族達の間で色んなしがらみがある、というのは知ってる？」

「……どういう事だ？」

彼女は噂だけど、と続けると説明する。

警備隊の上層部は、貴族からの献金（けんきん）を受けて汚職にまみれているという。その代わり、一部の貴族達の職権乱用を黙認しているという。

シェリー達が今見ている光景でも、貴族逮捕には至らない。発言力を失いつつある警備隊は、何らかの決定的証拠を突き出さない限りは動いてはくれないだろう。

これらの理由から、奴隷制は難解な問題として今も存在している。

シェリーも貴族であろうと、騎士であろうと、しかも外国人であるゼスは勿論、解決できない大きな壁だった。

「それで貴族達はそれに付け込んで、騎士の目が届きにくいこんなところで奴隷達を集めているってわけか」

「ええ。貴族達にとって、聖都外周部は忌み嫌っている場所として見られているわ。貴族がここに来るなんてことは、まず誰も考えられないもの」

「……それで、あそこで下品に笑っている貴族らしいオヤジは？」

ゼスが視線で指すのは、先ほどの貴族の男だ。

彼にシェリーが視線を向けてから、口を開く。

「彼はダリオス伯爵。“元老院会”の人間で想像通り、貴族よ。元々ダリオス伯爵は奴隷制以前から黒い噂も多かった人物だったのよ。とにかく特権意識の強い人で、性質も残忍、癒着の嫌疑も一度や二度では済まず、領地の民間人への迫害や虐待行為等で騎士団から危険視されるほどだから、仕える騎士が居ない。その代わり、彼は癒着した金で私兵を雇って護衛させているらしいと聞いた事があるけれど……。これを見る限り、真実味が帯びてくるわね。私兵をあんな事に使って武力で民を脅迫して、奴隷制にあんなに関わっているなんて」

うんざりしたような声がシェリーから漏れる。

そんないわくつきの人物が政を補助する“元老院会”の一員だというから、辟易（へきえき）としているのだろう、とゼスは思った。

しかし成程とも思う。

騎士団に入ったは良いものの、意外と聖王国という処は厄介な場所だったようだ。ここで無駄な問題に介入せず、見て見ぬフリをして騎士団の任務に従事した方が厄介事に巻き込まれずに済む。

そうすればゼスは、当初の目的通り安定した生活が約束される筈なのだ。

と、その時、奴隷達のある列から女性の金切り声が響き渡る。

見ると、声の主である若い女が手錠で両手を縛られながらも、馬車に乗るのを抵抗して暴れているのが分かった。

「嫌！　嫌よ、乗りたくない！　こんな目に遭いたくないっ！　放して、放してくださいっ！！」

「貴様、何をしている！　静かにしろっ！」

武装した兵士が幾人か女に集まり、暴れる彼女を抑え込もうと取り囲む。鞭を持った覆面の兵士も駆けつけ、暴れる女の身体に鞭を

打ちつけようと腕を振り上げる。
そこに制止を促す声が響いた。

「諸君、止めたまえよ」

彼らの主人である貴族、ダリオス伯爵の声である。彼が現れ、未だに暴れる女の傍に寄る。
覆面の兵士も彼の声に従って、鞭を持って振り上げた腕を下した。
ダリオス伯爵は女を品定めするように離れて見回してから、側近の兵士に訊ねる。

「この女はどのような境遇だったのかね？」
「はっ。Ｎｏ．７６は莫大な借金を背負い、返済不能になって売られた債務奴隷であります」

奴隷は名前を奪われ、全て番号で呼称される為、兵士が女の名前を言わずに経緯を説明した。
女はダリオス伯爵がこれらの行動を率いる指導者だと悟り、彼に視線を向けて解放を訴えた。

「お願いします！　私はこのような目に遭いたくありません！　借金も騙されて背負わされたのです。これ以上私は酷い目には――」
「貴様っ、伯爵に向かってなんという無礼な！」

近くの兵士が女を頭と肩を取り押さえ、乱暴に低身させる。
ダリオス伯爵はその光景に、笑い声を上げて歩を進めた。

「全く、女子供に鞭を振るったり、強引に抑えつける事は紳士の名が泣くぞ？　お前は、それを持っておらんのかね？」
「は……はっ。申し訳ありません」

ダリオス伯爵の顰蹙を買ったと思った兵士が、慌てて女を放す。
女は無理に抑えられた事と興奮状態で息が乱れて、ゆっくりと頭を上げる。
そんな彼女の横に立ったダリオス伯爵は大きな歯を見せながら、声音を上げた声で言う。

「分かっておらんな、お前達。こういう下賤な女には、こうして馬車に乗るよう促すのだよ！」

パァン、とダリオス伯爵の右手が、女の一枚の服越しから肉付きの良い尻へと強く叩き付けた。そのままがっちりと握り掴む。

「ひぅっ」と、女の短い悲鳴があがり、俯き加減で身を震わせた。
その態度に益々愉悦の表情を浮かべたダリオス伯爵は、女の耳元に背中越しから囁くように言った。

「ほうほう、これはなんと……元気な女であろうか。実にワシの好みだな。これ以上に元気が有り余っているようなら、今からワシが買い叩いて、存分に可愛がってやろうかの？」

口ではそう言っているが、彼の意識は右手に集中させており、思う存分に掌に伝わる瑞々しく弾力のある感触を味わっている。
その度に、女は身振いして必死に漏れ出しそうな声を抑えて、無言を貫いていた。

「そら、大人しくなったろう？　大人しく馬車に乗れば、我々のお仕置きは無いのだ。判ったかね？　――――素直なら宜しい、女は素直が一番だ、ぶわっはっはっはっは！」

馬車に乗るよう諭すように、今一度右手で思い切り叩いて女を強引に歩かせてから、下卑た笑い声を上げてダリオス伯爵は踵を返す。
彼は右手を広げると、側近の兵士がハンカチを差し出し、まるで汚らわしい細菌を拭き取るかのようにそれを使った。

「いいかね諸君。言う事を聞かない悪い女子供は鞭や暴力で傷つけるのではなく、先ほどのようにお仕置きをしたまえ！　男は――――元々ママに叩かれ慣れているから効果は無いだろう。いつも通り鞭で構わん」

そんな冗談交じりのダリオス伯爵の指示に、周りの兵士はくぐもった笑い声を洩らして、仕事に戻っていく。

その一部始終を見ていたシェリーは、憤怒の表情で意識して声を潜めながらも「あのいやらしい狸っ」と怒鳴り散らすような勢いで、物陰から駆け出そうとした。
咄嗟にゼスが彼女の腕を捕えて、

「――――ん？　今、誰か居たような気がしたが……気のせいか」

そのまま見張りの兵士に見つかる前に路地へと引き摺り込み、物陰で彼女の口を塞いで羽交い絞めにしていた。

「んんっ。んんんううんんっ、んんんぅんんんう、うんうんうんっ！（ちょ。何すんのよ、放しなさいよ、この変態っ！）」

当然、シェリーは振り解こうと暴れまわるが、ゼスの腕はびくともしない。
彼女の顔は憤怒故か、それとも別の理由か、真っ赤に染まっている。

傍から見れば、長身の男が女を後ろから抱きすくめ襲い掛かっているようにしか見えない。だからゼスに変態と言ったのだが。

「凄まじい罵倒に聞こえたが、落ちつけ。奴らは俺達騎士を警戒している。ここで出て行ったら、確実に見つかるぞ」と、ゼスと言えば至極冷静に物陰から様子を窺っていた。

「うんんんうんうんっんんんっっ、んんんんっんんうんうんんっ（そんなこと判ってるわ、いいから放しなさいよっ）」

相変わらず暴れるシェリーに、ゼスは半ばウンザリした気持ちを抱く。

「全く、先ほどまでの冷静さはどこにいった？　君はとことん直情的なのだな、俺達が出て行けば何が起こるか忘れ去るほどに、な」

「んぅ……」

それでようやく暴れるのを止めたシェリーを、ゼスはゆっくり彼女を解放する。

しかし、彼女は未だその怒りが燻ぶっていたのか、ゼスに向き直って低く言い放つ。

「ええ、分かっているわ。でも、彼女があんなことをされて、黙って見てろと言うの!?　きっと他の人たちもあんなこと以外の非人道的な事をされる、その前に助け出さないと」

「ふざけるな」強いゼスの声が遮った。「頭を冷やせ……。ここで俺達が彼らを救って何になる？　成程、彼らを助ける事は出来るだろうがしかし、あの“元老院会”寄りの貴族が俺達を危険視する事は目に見えている。上層部に働きかけて、俺達に折角の騎士団入りを取り消し――いや、悪ければ貴族に剣を向けた反逆罪として、

罰せられる事も有り得るだろうな。最悪口封じで死罪だ」

「それが何よ！　大体、“元老院会”は騎士団には干渉できないという掟があるわ。いざとなったら父上に頼めば、私は無罪放免になれるわよ」

「親に頼ると騎士団を辞めさせられる可能性がある方法を？　笑わせるな。第一、干渉できない点で言えば、騎士団も同じはずだ」

ゼスは彼女の主張を直ぐに伏した。

「君は良いかも知れんが、俺はどうなる？　例え君と共に放免されたとしても、俺は確実に騎士団から放りだされる。またそうでなかったとしても、今、君が出て行けば、同じ部隊の人間もその関係を疑われ、出世にも響く。そんなリスクを背負うのは御免だな」

「だったら、このまま彼らを身捨てろと言うの？　ボク達、騎士の理想に反しろというのかしら！？」

「それがなんだ。理想と言えども、ここで出て行ったら、それすら潰えると言ってるんだ。例え彼らを助けられても、根本的な問題を解決できなければ、また第二、第三の奴隷が生まれる。君は騎士として力を付けて、根本的な解決をしたくはないのか？」

シェリーを諭すように言うゼスの口調は厳しかった。

言葉を失い、狼狽しつつ俯いてしまうシェリー。

「……そ、それは……ボ……わ、私は……」

「落ち着いたか……。ここは少しでも監視して、弱みなどの情報を握られれば儲けものと考えようか。下手に今一部を助けるより、まとめて助ける事が一番リスクは少なく効率的だからな」

再びゼスは物陰から奴隷達と貴族を注意深く窺う。シェリーには

一度も振り返らない。

「……」

無言で唇を噛み、シェリーはゼスが背を預ける向かいの壁に額を押し付ける。

今の表情を彼女は誰にも見られたくないのだろう。

自らの感情と自らの理想や夢との葛藤に苛(さいな)まれる姿は、見るも堪えないものなのだから。

そんな彼女の姿を気にする素振りを見せないゼスは、ただ注意深く状況を監視している。

貴族に何かしらのヘマを見せれば付け入る隙が出来るのだが、流石に静観を貫いており、全く貴族らしい傲慢な振舞いだけを見せていた。

仕方なく、馬車に乗り込む奴隷達の姿を見て覚えるぐらいは最低限やっておくべきだと判断し、不意にある一列の奴隷集団を捉えた。

彼らの中にはまだ年端もいかない少女の姿もあった。

他の奴隷と同じ布一枚の服と首輪だけを着け、年齢は十三、四歳ぐらいだろうか。緑色の髪の上から頭巾を巻いている。小柄な体格で凹凸は少なく、まだ発育途上なのが目に見えて分かる。全体的に泥だらけで、その顔立ちを窺う事は出来ない。だが、しかし――

「……？」

ゼスは一瞬気のせいか、と思った。

何故か生気の無い瞳をしている他の奴隷達と違って、彼女だけは全く感情が感じられなかった。奴隷としての絶望感も、人間として生きる希望も、その全てが無関心なように。

そんな事を考えていたところに、不意にその少女の顔が動き、一

瞬遠くから窺っている筈のゼスと視線が合った。

「……！」

突然、ゼスの脳裏に明確に少女の目が一瞬浮かび上がった。その瞳はまるで真意を見透かされたような、真っ直ぐとした黄緑色をしていて――――。

「くっ……！」

我に返ったゼスはその目から逃れるように慌てて物陰に隠れた。
これ以上、あの瞳を見つめてはならない――――！
彼が再び物陰から少女をゆっくり窺うと、彼女は丁度、馬車に乗り込んで姿を消すところだった。
あれから、不思議な感覚は全く感じられなくなった。

「……気のせい、だったか」

ゼスは全く気にする事は無かった。
その少女の事も、日を追う毎で次第に忘れていくことになる――――。

第九話　「聖都外周部：奴隷」（後書き）

：ゼスは「皮肉屋」の称号を得た。シェリーは「お人よし」の称号を得た。

第十話　「シェリーの理想」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

※この話は、初期の頃に第八話と一緒に書いていた終盤部分を独立させた話です。

第十話　「シェリーの理想」

同日１８時１３分――――

結局、何かしらの情報を掴む事は無かった。
奴隷を全員馬車に乗せたダリオス伯爵は、兵士達と伴って貧困街から去って行った。
静寂に包まれた外門へと続く通りに歩み出た、ゼスとシェリーは馬車が去った方角、フェード城の高く聳える尖塔へと目を向ける。

シェリーはそれまでダリオス伯爵や兵士達に斬りかかって奴隷達を助け出す事は無く、静観するしかなかった。
自分が彼らを助けてどんな事が待ち受けているか、そして奴隷制を無くさない限り、同じ事が別の場所でも起きてしまう事、これらの結果から全員を助けられないと理解してしまった彼女はしかし、苦しむ今の奴隷達を見て見ぬフリをした事に激しく自己嫌悪に陥っていた。
彼女にいつものような凛々しさは無く、力なく聖都のシンボルを眺めるだけだった。
そんな彼女にゼスが掛けてやれる言葉は、結果論しかない。

「君が出て行ったとしても、首尾よく助けられるとは限らない。ダリオスの私兵がどのような戦力なのか分からない内は、君も捕まってしまう可能性もあっただろう。今度は、リスクの少ない方法でより多くの奴隷を救えばいい。そんなに気を落とすな」
「……大丈夫よ。もう、過ぎた事だから」
なら良いが、とシェリーの言葉にゼスはそう応えた。

既に日は沈みかけている。そろそろ巡回任務も終わりを迎える時になっていく。

暗くなる前に、アサラム小隊長に報告をする事もあるし、早めに騎士団本部に帰還した方が良いだろう。だが、ずっと城を見つめるシェリーにどう促そうか、とゼスは分からなかった。

元々彼は女性とあまり日常会話をした事が無い。傭兵として各地を放浪としていた彼に出会いなど殆ど無かったのは仕方が無い。ましてや、落胆している女性を慰める方法なんて知る由もない。

辺りが沈黙に包まれる。元より生気のないこの貧困街では喧騒も無く、本当に静寂した場となっていた。

聞こえるのは、空を飛ぶ黒い鳥の鳴き声ぐらいだ。

「――――私は、騎士って護りたい者を護る力強く優しい光だと思ってた」

呟くように、シェリーが自身の想いを口にした。

ゼスはそれに耳を傾けるだけ。お互い、視線を交わる事は無く同じ方角を見つめている。

「苦しむ人々を助け、尊き者に敬意を払い、弱き者を庇い、強き者に決して屈しない。そんな人の理想を体現する、力と正義の守護者と思って、今日まで頑張って来た。あの騎士のように、身体を張って助けられる騎士になりたいと思ってる……」

シェリーは決してゼスに言い聞かせたいと思っているのではなく、ただ自分に言い聞かせるような諭す口調で続けた。

「でも、騎士とて人の子。女神様（フィアラ）のように全ての人を平等に助けられるわけじゃない。どうしようもない厳しい現実に阻まれて、苦悩

することだって覚悟していたし、改めてその格差にガッカリしたわ。まだ騎士になったばかりで、その理想を行動に移せるほど傲慢じゃないって分かってる……でも」

自身の言葉で再び奮い立たせ、彼女の眼差しが次第に凛々しさを取り戻していく。

「それでも、私は決して諦めない。騎士になることが目標じゃなく、ここからスタートするの。今、苦しむ人が居て助けられなかったとしても、いつか必ず救い出してみせる。彼らだけじゃない、全ての不幸な人を救済して、笑顔で幸せを抱く事ができるように。例え、私自身が危険な事になったとしても、私は私の夢と理想を貫く」

その為に騎士になったのだから、と。

ゼスはシェリーの言葉を一字一句逃さすに聞き終えた。

それが彼女の結論であり、今まさに新たな目標を立てて希望を見出した少女。今救えなかった後悔で立ち止まるよりも、それを認めて未来へ踏み出す第一歩として抱いた決意。揺るぎない信念であった。

「それが、君の目指す道か」と、ゼスは淡々に言った。

「そうよ。だから落ち込んでもいられないし、頑張れる」と、シェリーは力強く答える。先ほどの弱さは、もう無い。

「だから、ゼスは運が良いわよ。この私の同僚になったのだから。アンタは冷静で、達観していて、きちんと論理的に将来を考えられる。それ以上に不躾で、野蛮で、馬鹿で阿呆で、デリカシーの無い変態男だけど。私と一緒に騎士になったのなら、アンタはきっと更生できるし理想が実現する事もできるわ」

シェリーは微笑みを浮かべて振り返り、真っ直ぐゼスに向かって見つめる。
そんな彼女の姿が眩しそうに、ゼスは腕を組んで目を逸らした。

「元々そんな気は無い。期待せずに聞き流しておこう」
「ふぅ、全く私がこうまで言っているのに、野蛮人はこれだから理解できないわね……。まぁ良いわ。これから長い付き合いになるだろうし、一緒に民達の為に頑張りましょう。勿論、あの奴隷達も全員救うのよ！」

意気込むように握りこぶしを作るシェリーは、ゼスの言葉をさほど気にしていない。むしろいつもの彼の皮肉の言葉として受け取っていた。

「さぁ、暗くなる前に隊長の処に戻りましょう。奴隷達の件はダメ元で話したら何とかしてくれるかもしれないし、まだ方法は沢山あるわ」
「……。……ああ、そうだな」

ゼスが曖昧に返事をすると、シェリーは騎士団本部がある方面へと歩き出した。
彼女の後に続き、その長く黒い髪が流れる後ろ姿を見つめながらゼスは息を吐いた。

（全ての苦しむ人を助ける、力と正義ある理想の騎士、か……。よく臆面もなく言えるものだな）

彼の脳裏には、微笑みを浮かべて強い眼差しを向けるシェリーの姿が思い浮かぶ。
聞いた彼女の行動理念を、改めて頭の中で反芻（はんすう）させる。

（だからこそ、彼女はここまで努力してきたのだろう。そしてこれからも、その夢を実現する為に、諦める事無く一生懸命になって騎士を全うするのだろうな）

初めて彼女の強さを判った気がした。いたいけな少女が、高貴な貴族の道を棄て、騎士団の門を叩かせるような先に何があるのか。全ての人を護る、その夢をひたむきに追いかけているから、彼女は強いのだ。

例え現実を突きつけられても、決して屈しない。

（成程――君は素晴らしいな。今なら登用試験での君の強さが理解できる。俺には真似できない。天高く、陽射しのように強い光。理想の騎士を目指す、純粋な少女。俺には、決して手が届く事が無い夢――全ての人を助ける、だからこそ）

だがゼスは、強いシェリーの考えが、この時どうしても理解できなかった。認めなかった。肯定しなかった。

いや、むしろ――

（――反吐（へど）が出るな。無情（くらやみ）の現実を知らない愚かな小娘故に）

――その理想を拒絶したくなるほど、嫌悪した。

第二章　第十七小隊　ＥＮＤ

第十話　「シェリーの理想」（後書き）

‥ゼスは「リアリスト」の称号を得た。シェリーは「理想の騎士」の称号を得た。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

こんばんは、蒼雷のユウです。

ここで第二章は修了です。第二章は、主人公達が一か所の立場に根を張って、これからどのような出会いが待っているのか、どのような障害が立ち塞がろうとするのか、世界観や動きをピックアップした話となっています。

人は多く、活気がある。しかし、都会と同じく他人に関心を払う余裕は無く、日々に忙殺される。国内に蔓延る流行り病と解決方法は高価な阻害薬のみ。広がる貧富の差と、一部貴族の横暴と奴隷制度。

これからゼスとシェリーは、図らずも通常任務の傍ら、直面することになっていきます。

第三章は、配属から二週間後、彼らが初めて聖都外出任務を遂行するところから始まります。

また、次は間幕として登場人物と用語を簡潔にまとめて紹介する機会を設けています。

知識の整理はそちらで見ていただければ一目瞭然です。但し、ここまでのネタばれを含んでいますので、目を通す場合はご注意を。

それでは、また第三章にて。皆さまの心にこの小説が届く事を祈

りつつ――。

登場人物・用語紹介（おまけ話追記）（前書き）

※第二章終盤までのネタばれを含みます。初めて読まれる方は、第一話から読まれるのをお勧めします。

登場人物・用語紹介（おまけ話追記）

聖王国レイザーランス

本作の主な舞台。

古の時代の約千年前、邪神の侵攻から唯一生き残った当時の“邪魔戦争”当事国。現在は、伝統と歴史ある国家として成長している。

元々、女神信仰が強い宗教国家で宗教家達にとっては聖地である事や、世界的に重要視されている物資“働石”の豊富な産出国な事に加え、“邪魔戦争”を終結するに貢献した聖騎士出身ゆかりの地として、諸外国から敬意を込めて“聖王国”という名を冠せられる。大陸南部に位置し、中部に存在するシュベルト帝国と東部にあるアルト連邦と巧みな外交によって対等な関係を結んでいる。また、古代から受け継がれる魔働の血が色濃く残っている民族が大半を占め、強力な魔働国家としても知られる。

現在の国家元首はヴィレア・シャルロラ・ド・ダイアート＝レイザーランス女王だが、近年謎の流行り病によって床に伏せっている為、その息子であるウィグス王子が代理とし、その補佐に宰相のディル・エンメイスが現在の政を動かしている。専制君主国だが、貴族制も布いている。政務を補佐し、実質的な法律や憲法を作る行政議会“元老院会”と、聖王国守護者の軍隊“蒼衣の騎士団”、そして治安維持と国家権力監査・干渉を担う“警備隊”という、三大柱が国家を支えるが、騎士団と院会は後述するその体制の違いから折り合いが悪い。

元は社会主義国だったが、近年大国が台頭するにつれて国力が弱くなり始めた為、資本主義体制に移行し回復したが、貧富の差が広がってしまう。また、宰相が提唱した“元老院会”による奴隷制の導入により、様々な奴隷が生まれているなど、裏ではかなり問題が多発している。

ゼス

蒼衣の騎士団第十七小隊所属。年齢二十歳。身長百八十二ｃｍ。戦闘タイプ：重戦士。称号：「銀狼」「従騎士」「変態男」「無神論者」「お兄ちゃん」「リアリスト」「皮肉屋」

本作の主人公。その境遇、出身、ファミリーネームが不明の男性。女性なら誰もがふりかえる精悍な相貌であり、その碧の鋭い瞳には確固たる刃の様な意志が宿っている。見事な銀髪を首まで伸ばしているが整えてなく無造作、長身のせいでスマートに見えるものの、よく見るとかなりがっちりとした体躯。

性格はクール、皮肉屋で強いリアリストの持ち主。人の気持ちを汲まないという悪く言えば、空気が読めない。しかし、言っている事は常に正論で効率的。他人と極力関わろうとせず、また理想論を嫌っている為に、協調性が無くしかも寡黙。女性がか弱いという偏見から、女性が戦う、ましてや自分と同格に強いということに懐疑的。外見からなのか子供に怖がられるが、不器用な接し方で最終的には懐かれる。

事ある毎に訓練したがるが、そのお陰で身の丈ほどの、異形の形をした漆黒の大剣を軽々と振り回す膂力があり、格闘術も心得ている。大剣を自在に振うことにより、その破壊力は随一。懐や袖口、さらには靴の内側を改造して暗器を忍ばせ、それを急所に向かって投擲する能力も備えている。また冷静な観察眼と戦略眼で様々な状況に対応できる。何故か魔働術を無効化する事が出来るが、それは大剣の力であるらしい。

かつて、大剣を肌身離さず抱えて世界中を放浪とし、傭兵まがいの事をしては、お金を得て何とか生活していた状態だった。安定した生活を得る為に、蒼衣の騎士団に入団し、新設部隊であるアサラ

ム小隊長下の第十七小隊に所属する。同僚となったシェリーとは、思想の違いから溝が深まるばかり。傭兵時代からの経験から生活力はあるが、カビの生えた食パンを平気で食する事ができるなど、美食より生きる為の食材を主に使う。癖なのか、よく語尾に「～～な」と発言する。

シェリー

蒼衣の騎士団第十七小隊所属。年齢十七歳。身長百六十ｃｍ。戦闘タイプ：魔働軽騎士。称号：「従騎士」「ボクお嬢様」「お姉ちゃん」「理想の騎士」「お人よし」

本作のヒロイン。本名シェリー・アイオライト＝ブランシェ。代々騎士を輩出する古の家系、アイオライト家の息女。

背中まで伸びる絹糸のようなストレートヘアの黒髪が印象的で、日焼けしていない端正な顔立ちの美少女。凛とした眼差しを見せる。小麦色の肌に、鍛えているためか、多少の筋肉はあれど無駄な肉は付いていない。スタイルは全体的にバランスが取れている。

性格は明るく淑やかに振舞いまさに令嬢そのものだが、本性は直情的で負けず嫌い、高慢ちきな態度が玉に瑕。しかし、一種の清廉された雰囲気を持つ。効率より感情論を優先しがち。だが、その分勘も鋭く、危機感や他人の感情の機微には敏い。感情が高ぶると「ボク」という一人称を使ってしまい名家の令嬢らしからぬと父親に注意されている為、普段は「私」と使うように心がけている。本性での物言いは乱暴だが、本来は心優しく、困っている人を分け隔てなく手を差し伸べるというかなりのお人よし。歳相応の少女らしい一面もあり、男であるゼスに下着姿を見られて赤面し、涙目で半狂乱に襲い掛かったことも。

騎士を目指していただけあって、かなりの実力を持ち、細身の片

手剣と純白の盾を持って、速力を活かした撹乱戦を発揮する。強大な魔力を持ち、魔働術も使いこなすオールラウンダー。また、名家の出身からか、様々な交渉術と幅広い知識を併せ持つ。しかし、苦手分野は徹底的に弱い。

目指すべき理想と現実の厳しさとの間に苛まれながらも、ひたすら理想に順ずる――しかしゼスからは「現実を知らない愚かな小娘」と心中で拒絶されている――。同僚であるゼスとは登用試験の際での彼の態度から気に入っておらず、前述の件からよく「野蛮人、変態男」などと呼んでいるが、彼の実力は素直に認めている。

アサラム・ルース

蒼衣の騎士団第十七小隊長――上騎士。年齢三十代半ば。

新設されたばかりの小隊を率いる（？）無精髭を生やす、中肉中背の男性。寝癖がついたボサボサ像牙色の髪、決して不健康な体格はしていない。

普段は面倒くさいと言って憚らない不真面目な、ゼスとシェリーの上司。現場の指揮はせず、全て部下の騎士達の裁量に任せる方針が広まっているのか、あまり彼には重要任務が回ってこない。その性格から騎士団上層部からも疎まれており、上騎士に昇格した途端半ば強引に小隊長に任ぜられて押し込まれた。

何故騎士になったのかも定かではなく、功績を得られる機会は無くとも、給料が良く堂々とサボれる第十七小隊はこの上なく天国な環境だと感じている――勿論、功績を得ようとするシェリーにとっては地獄の環境だが――。

ディル・エンメイス

聖王国宰相兼元老院会議長――。年齢三十代。
黒い宰相服を身に包んだ男性。歳は三十代前半ぐらいだが、童顔なため若く見られることが多い。黒い服と同じ漆黒の艶やかな髪で、男性としては華奢な体躯な、まさにインドアな印象の人物。
国王に任ぜられて君主を補佐し、宮廷で国政を担う、いわば政治家の首相である。また“元老院会”の議長も務めている。立場に相応しい知識と政治手腕を持っており、民衆の大半の支持を勝ち取っている。また貴族制の先駆者でもあり、貴族達にも支持されている。聖王国を諸外国から長年牽制で守り抜いているが、ヴィレア女王の代理である王子を傀儡にしては次々と貴族が有利になる政策を打ち立てて行き、奴隷制を導入するなど、一部で黒い噂がある人物。

その他の登場人物

シュナイダー・アウグスト＝蒼衣の騎士団長。王族護衛の近衛大隊を指揮している。
ティール＝ゼス達が城下町で出会った迷子の少年。
マリアン＝リュスト病に冒される若い女性。既婚者。
エルド＝マリアンの夫。
ジェームズ＝マリアンの主治医。リュスト病の阻害薬を初めて開発した名医。
ダリオス伯爵＝“元老院会”に所属する貴族。選民意識が強く、シェリー曰く「残忍で、いやらしい狸」。奴隷制に深く関わっている。
ウィグス王子＝女王の息子で、王位継承権第一位。まだ幼く純粋無垢。

ヴィレア女王＝現国家元首。現在はリュスト病で床に伏せっている。

組織

蒼衣の騎士団

聖王国が擁する騎士団。王族の隷下であり“元老院会”とは権限も規律も隔離されている為、独自の体制を敷いている。世界最高峰の騎士団と知られ、本部は聖都にある。聖騎士が着こなした蒼い衣に由来して、現在の名前で設立された。騎士団長シュナイダー・アウグストを筆頭に、現在三人の将騎士、約五十人の上騎士とその下に正騎士――その中でも階級が細分化されている――と従騎士が属する。主な任務は聖都防衛と巡回、各地の領地に駐屯して領主の守護だが、有事の際は率先して戦時中の主な軍隊となり集権化する。騎士団に入る条件は登用試験において、求められる素質を発揮する事だが、魔力が生まれつき高い貴族ならば無条件で加入できる。殆どが魔働術を使える者で、三分の二が平民出だが、残りは貴族出の騎士となっている。騎士団の部隊の大半は、聖都に集中している。

ちなみに、王族の警護は騎士団長率いる近衛大隊が務める。

元老院会

行政を司る議会。宰相ディル・エンメイスをトップに特権階級である貴族達によって運営されている。その為、聖王国の臣民資格を持ち、登用試験さえクリアすれば誰でもその一員となれる“蒼衣の騎士団”と折り合いが悪い。ここで法律や憲法を提示できるが、最終的な決定権は国家元首が持っている。しかし現在、ヴィレア女王は床に伏せっているのを良い事に、まだ幼いウィグス王子を傀儡としてディル宰相が実質的な立法をしている為、表向きには国の為にしているが、裏ではやりたい放題である。

警備隊

国家の治安維持を主任務とする、現代で言う警察組織。聖都警護の他に、各地の町、村、集落などに点在して駐留し、民の安全を守る。犯罪者の逮捕権は勿論の事、賊の襲撃には武装し対抗する。騎士団と元老院会との間が隔離されている中では、唯一国家権力双方に干渉できる存在だが、院会による大きな権力で覆われやすく、現在は発言力を弱められている。

文の元老院会、武の蒼衣の騎士団、警備隊で聖王国を支えている。ちなみに、騎士団と警備隊の違いは、護るべき対象の規模と、国家権力に干渉できるか否かである。

働石

その名の通り、魔働の力が溜まった鉱石の事である。魔働エネルギーを有して動力、燃料、個人の魔力回復など日常生活と軍用品で様々な用途に使用される鉱物資源、“働石”は重要な物資である。魔力量は有限であり使い捨てになる為、また国によっては“働石”の産出量が極端に少ない。その理由から、これの産出権を握ろうと戦争を起こす国すら現れる。まさに「働石の一粒は血の一滴」とされる、人々の生活には無くてはならない物質なのである。聖王国はこの働石の豊富な産出国。

魔働術

所謂、魔術。魔力を攻撃手段として、術者に備わった魔力を放出することで、魔力の塊を相手にぶつける術である。古代ラルク語をキーに、自らの血の特殊な成分を媒介にして魔力として行使する物。これはその成分が強いことで魔力の大きさそのものとなる。術式によってその種類と強弱が決まるが、魔力が大きいことで例え初級魔法でも高威力を発揮する。

その見分け方が、術者の周囲に発生する風の強さである。魔力が弱い者は微々たる風が吹くだけだが、魔力が強い者は猛々しい暴風が吹き荒れる。

魔働術には属性があり、術者の魔力によって得意分野が分かれる。専門属性の術者はその属性の高度魔法を唱えることができ、効率化が可能。しかし、それ以外の属性魔働術は初級魔法しか唱えられず、効率も悪い。属性は火、水、風、地、幻、星、闇がある。

リュスト病

作中では聖王国内の中産階級の人々を中心に蔓延る、謎の流行り病として記述する。

その患者数は決して多くないものの、明確な治療法が見つからず対処も何もしなければ、癌を誘発させて死に至らしめてしまう危険な類。患者の大半が富裕層である為、当初は牛などの畜産物の感染が疑われ、殺処分する事があったが、今ではどこからが感染源なのか一切不明のままだった。抑止する方法である阻害薬は原材料が手に入りにくく、また調合方法も複雑であり専門知識を持つ医者しか作れない。その理由から非常に高価であるため、毎日処方していたら破産の一途を辿るしかない。また、聖王国国家元首ヴィレア女王も、この病によって床に伏せっている。

シュベルト帝国

大陸中部にある国家。平原にある帝都を中心に、世界最大の国土を誇る。皇帝をトップに絶対君主制を布いている。商業系が盛んで経済的に恵まれているが、働石の採掘量が少なく資源が不足している。しかし、大規模な軍事力を保有しており、その歴史は侵略によって繁栄した。作中ではしばしば、帝国と呼んだり侵略国家の代表的な一国として扱われる。

アルト連邦

大陸東部にある共和制国家。海に面していて、海運業が盛ん。東洋様式を取り入れ始めており、近年「カタナ」という武器が流行ってきている。シュベルト帝国と覇権を争う二大国家の一つで、しばしば衝突を繰り返している。各領地からの領主による議会で行政が決定される為、いつも帝国の後手に回っている。その代わり各国とのパイプを数多く敷いており、聖王国もそれなりの関係を築いている。また、技術力もそれなりに高い。

リオ

この世界エクスペリアの共通通貨。我々の世界と同じ通貨の形式で、日本円の一万は一ケアリオ、一億は一ケイリオ、一兆は一ケウリオとして扱われる。

奴隷

聖王国の宰相が発案した奴隷制の公布後に生まれた下流身分。主人に買われて生を得て多額の取引が行われる代わりに、発言権や自由権、人権まで失われる。大抵は莫大な借金（債務奴隷、債権者は返済不能となった債務者自身を奴隷として売却し貸付金を回収する）、人身売買（自国の民、特に貧困層の住民が身売り、集落を襲撃して拉致、家族が関係者を売り払う）などで、貴族などが買って他人の所有物となる。主に農業などの経済活動、家内工業における職人や雑用役、愛玩用などに使役される。

奴隷をどう扱うかは主人の裁量に任されているが、奴隷を殺害す

る行為は一切認められておらず、厳しい処置がされる。しかし、あくまで事故による奴隷の死亡は対象外であり、明確な殺意が無かった場合は主人に罪には問われない。中流階級層などの平民は縁がない為に、認知度は殆ど無い。
　清廉さを求める騎士団で、この奴隷制を良く思わない者は居るが、貴族出の騎士も多く嘆願書の提出の条件３分の２の人数には至らず、また確固たる証拠がないのが実情。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

１１月１５日２３時１１分―――巡回警備が終わった数時間後

―――聖都外周部

薄暗く、既に肌寒い季節となった。
家を持たないホームレス達は、この時期をいかに乗り越えていくか、頭を巡らす。
だが、ストリートチルドレンは穴のあいた毛布にくるまって、ただ我慢するしか方法が無かった。
　既に弱くなり始めている、男の子も震えた身体を抱いてただ冬が越すのを待ち侘びていた。だが、どの道これだけ弱っていたら数日

後には持たなくなっていると彼は理解している。
こんな苦しい思いをするなら、いっそ永遠に眠ったほうが――

「……？」

空耳だろうか。
不意に路地から何かを砕く音と共に、人が倒れた音も響いてきたのは。
次第にその音は止み、静寂に包まれてしばらく、足音が響き渡る。
直後、脇道から姿を現したのは、薄汚れたコートを身に纏った、銀髪の青年だった。
視界が定まらない男の子でも、その姿は見覚えがある。
確か夕方、蒼い衣と白銀の甲冑を着こなした騎士の一人だった筈。
あの時は同じ服装の黒髪の少女騎士と同伴していたが、今は一人のようだ。
しかも今は、輝かしい鎧は着ておらず、むしろこの辺りにどこにでもいるような、むすぼらしい服装を着て、一瞬夕刻と同じ人物だろうとは思い浮かばなかっただろう。
銀髪の青年は、右手を振って舌打ちしながら、こちらに歩み寄ってくる。

「チッ……手間掛けさせるな」

青年は、毛布に包まって横になっている自分の前に立つと、しゃがみ込んだ。
彼の左手には、なにやら包装している紙袋が一つ。
次の瞬間、男の子は一気に覚醒する。
その袋から、食欲をそそるような香りと湯気が立ち込めていたからだ。
弱った身体を奮い立たせ、起き上がる。

「君のだ。受け取れ」

そのタイミングを見計らったように、青年は袋を差し出してくる。

男の子が思わずそれを受け取り、中を開けるとさらなる香りが鼻腔をくすぐった。

中に入っていたのは、膨らんだパンの生地を乗せた長方形の器が一つ。だが、ただのパンではない。生地の中に、温かいクリームシチューが入っており、中央通りで人気を博す冬定番メニューの一つだった。

丁寧に中にはスプーンも入っており、それを使って食べるようだ。

男の子はその味を想像しただけで喉が鳴る。思い切ってスプーンを手に取りたかった。

だが、直前で思いだしてしまう。

ここは貧困層が集う外周部。自分と同じ境遇の人や、ならず者が数多く存在する。

もし、ここで施しを受けているのを誰かに見られでもしたら、自分は睨まれるどころか、この青年でさえ危ういかもしれない。

そう考えると、全く手を付ける事が出来なかった。

「……」

「……君が食べ始めないと、俺は帰れんのだがな」

「……」

青年の呟きに、男の子は顔をあげて、じっとその顔を見つめる。

その表情に、青年は納得したようにあぁ、と言った。

「周囲の事なら安心しろ。ここら辺は先ほど全て黙らせた。今は早い就寝だな。この辺りで目を覚ましているのは、君だけだ」

「……！？」

「君には生きて、諦めないと考えてくれないとこちらが困るな。阿呆な小娘にボクを騙したな、って殺されてしまうからな」
「……」
「それでも心配と言うなら、食べ終わるまで俺が居てやる。ここら辺に近づく奴が居たら、早めに寝てもらうな」
「――――」
「だから、食え。残すな？」
「っ！」

青年の言葉を理解した男の子は、何かに突き動かされるように、スプーンを手に取り、パンの生地を破った。
目の前に飛び込んでくる湯気と白い温かな液体。パンの生地を先に口に入れ、その後に一心不乱にクリームシチューを喉に通す。
美味しかった。冷え切った身体に良く通る暖かさだった。たった一つの食事が、ここまで生気を取り戻すとは男の子は驚いた。
シチューが無駄に零れないようにゆっくりと、だが素早く口に放り込んでいく。
青年はただ静かにその様子を眺めている。無表情で男の子の食べる姿を何の感慨も無く、視線を逸らさず。
やがて、男の子の視界は急に歪み始める。
口の中は熱いくらいに温かいのに、頬に伝わる滴は冷たく、舌に含んだらしょっぱかった。
それでも、スプーンを手にする右手の動きは止まらない。
何かの拍子で消えてしまう前に、ただ喉に通したかった。

「……うっ……あっ……あっありっ……ありがっ……とう……っ！」
「……美味いか？」

スプーンを咥えたまま、男の子はただ無言で青年の言葉に応えた。

登場人物・用語紹介（おまけ話追記）（後書き）

何か質問がありましたら、感想版にどうぞ。

ちなみに、男の子が口にしていた食べ物はかのケン○ッキーの冬定番メニューのホットパイと考えて頂ければ良いと思います♪

第十一話　「力の元と優先順位」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第十一話　「力の元と優先順位」

――家が燃えている。

荒々しい足音が迫ってくる。

女性が面と向かって言ってくる。

「大丈夫よ。お母さんが付いているから。だから、貴方は彼女と一緒に逃げなさい。一緒に、安全な処に連れて行ってあげて」

女性の傍には、武器を構えた二人の男女の姿と、一人の少女の姿がある。

「……母さん。また、会える？　おじさんとおばさんと一緒に」

自分が何かを言っている。女性は息が詰まる。しかし、答える。

「ええ、約束よ。私はちゃんと、二人と一緒に追いついて来るわ。それまで貴方は、この娘をお母さんの代わりに護ってあげてね」

女性の右目から、小さな滴が出ていた光景を――。

少女は息も絶え絶えだった。血の臭いがした。嫌な音がした。

「っ……や……やめて……いた……い……っ」

目の前には煌めく金属。不吉な赤色が先端に。
それを何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度の何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何どもなんドモナンドモナンドモナンドモナンドモナンドモナンドモ――――

少女は弱々しくこちらを見上げるようにして。最後の気力を振り絞るように。

「――――……逃げてっ」

人は変わる。何が起こったのか。判らない。分からない。解からない。理解不能。
ただ、変わり果てた少女が。涙して。

「……もう、終わり。だから、あたしは貴方を――――」

その手に、全てを貫く煌めきが、迫り――――

「――殺す――――――――――っ！」

――ゼスは飛び起きた。

その表情は歪み、衣服は汗でびっしょりだった。掛け布団は乱れ、彼の動悸によって、布団は上下する。乱れた息を整える。状況を確認。

朝陽が差し込まれる窓と机、そして生活用品。それ以外は何も無く、ただ僅かな居住スペースがあるのみ。

ここは――ゼスが下宿している、騎士団員の宿舎だ。騎士団員である彼に貸し与えられた、居住区画。ここで何時も寝泊まりし、朝起きたら仕事である騎士業をし、仕事を終えたら帰ってくる、家の様なもの。

そして今日も彼は起床し、これから再び騎士の一日が始まる。

――決して、あの日あの場所ではない。もう、起こる事が無い。

そう、もう起こる筈が無いのだ。

「――俺は、変わる。これはその為の一歩なんだ……」

唱えるように独白したゼスは今日も騎士になる。

生きる為に――――

第三章　護送任務

――――11月28日9時――――残り、1カ月と3日、15時間

兵舎食堂で朝食を済ませたゼスは、出勤の為に騎士制服へと着替え――――鉢合わせた経験からなのか、シェリーは更衣室には来ずに寮から直接着替えているらしい――――第十七小隊の会議室に足を運んだ。

既に先着していたシェリーと合流し、後からやってきた小隊長アサラム・ルースと共に朝の朝礼と本日の予定の確認が行われた。

「鉱物の護送任務、ですか……？」

シェリーが、アサラムより告げられた上層部から伝達される任務に怪訝そうな表情を浮かべる。

資料を見ながら煙草を吹かす上官は、あぁ、と答えた。

「本来は別の部隊がやる筈だったんだが、緊急の任務が入ってウチに回って来たみたいでなぁ。『鉱山町タルテルドから聖都に物資を運ぶ道中を護衛』。ま、配属から二週間経ったお前らには丁度良い

任務じゃないか？」

興味が無いように、机の上に資料を放り投げるアサラム。

その姿を見届けたゼスは、思った疑問を口にする。

「その別部隊の緊急任務、とは……？」

「んぁ、あれだ。最近やたらと魔物が凶暴化してきているらしいんだわ。それだけなら良いんだが、その群れを率いていると目されている真っ黒な獣がエラット村に現れたらしい。現地の警備隊から要請があった」

「真っ黒な獣？」

「正確には狼の姿をしたモンだが。聞いた話だと、いくら攻撃してもまるで実体が無いように効かないらしく、魔働術でようやく手応えがあるって奴だと。しかも生命力があって強いってらしいが……。ま、俺は実物見るまで信用しない性質なんで。本当かどうかは知らんが」

警備隊には魔働術を備える者が絶対的に少ない。魔力ある者の殆どが、騎士へとなるからだ。

稀に物好きな魔力持ちが警備隊へ配属する事を好むのだが、戦力的にも騎士には及ばない。

騎士と違い、聖王国中の町村各地に点在し、民を守り治安維持に務める警備隊。その標準装備は物理的な物が多く、賊と魔物を想定して訓練されている。

しかし、稀に魔働術を使う敵が現れ、歯が立たない場合は、騎士に増援を要請するのだが。

今回、エラットという農村に現れた黒い狼は騎士ですら苦戦する相手である、という話だ。一小隊如きは、無傷で済まないのではないか。

「……失礼ながら隊長。仮にその話が本当なら、我々も現場に赴いて少しでも加勢するべきだと思います」

シェリーが丁寧ながらも、今回の自分達に課せられる任務に異を唱えようとした。

彼女の提案を聞いたアサラムは吹かしている煙草を口から離して、笑みを浮かべた。

「ほう？　それはまた何故だい？」

「聞く限り、相手は相当な防御力と体力を持っているようです。姿が狼という事は、機動力もかなりあるかと思われます。騎士の平均魔力では、僅かなダメージが期待できる、という事ですが一個小隊では長期戦になる事は想像に難くありません。少しでも味方は多い方が良いかと」

「それはつまり、遠まわしにこの護送任務を蹴って増援に向かうつもり？」

「……私が覚えている範囲では、鉱山町タルテルドは徒歩で行けば二日かかる距離です。あの鉱山で採れる鉱石は確かに価値あるものですけれど、働石が採れるのはごく僅かです。発掘した貴金属を聖都に運び込むにせよ、護衛が必要だとは思えません。警備隊ならば対処してくれると思います」

シェリーはあくまで人の命がかかる優先順位を決めているだけなのだろう。彼女の行動理念から考えれば、想像に難くない。

感情の篭った説得が続く。

「対し、エラット村には人の脅威が出没しています。大勢の村人の命も懸かっている状況に、助けに行くのは騎士の義務です」

迷いの淀みなく言い切るシェリーは一種の清々しさもあった。
彼女の横顔を一瞥したゼスが、人を護ることを理念とする騎士なら至極真っ当な考えだろう、と感じていた。
しかし、あえてその意見に口を挟む。

「助けに行くのは良いが、だからと言ってエラット村へは馬を飛ばしても一時間はかかるな。俺達従騎士はまだ乗馬許可が下りない。徒歩で向かう事になるが、時間がかかりすぎる。それに、相手は魔働術しか有効打が無い敵だ。俺達二人では、助力になるとは到底思えんが……」
「確かに二人ならそう見えるかもしれないけれど、私は強い魔力を保持しているわよ。ゼスには見せたと思うけど、私が唱えた火属性魔働術は『ファイアボール』と言って、初級中の初級よ。あれの他にも上級魔働術を唱えられるし、私の魔力なら相当ダメージを負う筈よ。だから私が行く事はかなり戦力になるわ」

誇らしげに、フフンと笑うシェリー。普通の人なら、ここで胸を大きく張るところだろう。
実際彼女が胸を張れば、その服越しの曲線が強調するな、とゼスは邪な考えを巡らせた。
彼はそれが邪なものだという自覚は無いが。
さらにシェリーは自信の根拠をもう一つ説明し出す。

「――それに、アンタだって相当な実力を持っているじゃない？
あの時は手加減されたといえ、この私と対等に渡り合っている。
そして、私のあの魔働術を掻き消したゼスの反魔働術式は、高度な知識と実力が無いとできるものじゃないわ。だから、私は本当に屈辱的に思ったもの、アンタが魔働術すら行使しなかったぐらい手加減されてた、ってことに。でも、それは逆に言えば十分な戦力たり得るのよ」

成程、とゼスは思った。
シェリーの主観では、あれがゼスの実力の一端だと考えたのだ。
披露しなかった真の実力は魔物相手なら出す必要があるし、彼女の援護に向かう自信の一つは、彼の魔働術に期待している部分もあるのだろう。

だが、しかし――。

「――言っておくが、俺は魔働術を一切使えない」

隠すことなく、自身の秘密を暴露した。

「――――――――」
「――――――――」

その場の時が凍結したように静止する。
シェリーもアサラムも、ゼスを見つめるその表情のまま、一言も発さずに硬直していた。
まるで、二人は呪詛か何かで石化したかのような――。

「――え？　今なんて？」

シェリーが目をパチパチ瞬きをしながら、よく聞こえなかったと

言う。
もう一度臆面も無く、ゼスは言ってやった。
「俺は魔働術を使えないし、君の言う反魔働術式とやらも、俺自身の実力でも無い。あれは俺の剣の力らしい。あの剣を使いこなしてから、魔働術が一切効かなくなったな」
「――――」
もう一度、シェリーは動かなくなった。
(お。まるで想像していなかったみたいな顔だな)
アサラムと言えば、まるで気を落ち着けようと煙草を口に咥える。そして、この後起きるであろう面倒事に素知らぬフリを決め込もうという態度だった。
そんな空気に関わらず、ゼスはさらに一言付け加える。
「物心ついたときには、既に魔力は感じられなかったな。魔働術の知識も殆ど無い。故に、俺はこの件の助力は不可能と判断するが……」
そもそも未だ反魔働能力の真意を測れないその剣、果たしてゼスの実力の内と言えるだろうか。
何せ、それが判らなければ上手く使いこなせずに、ただ魔働術を防ぐだけの役割しかないのだから。
「――――あ。あ、え、ええ。そ、そうなの。だ、だったら、この件は隊長と私の二人でも援護に――――」
シェリーはショックを受けたが、何とか場を取り繕うとした。
同僚が戦力にならない以上、彼女の根拠や自信は一つ失った事に

なる。アサラムを説得する材料が減れば、それだけ心証を悪くさせ説き伏せる事は困難になる。
彼女は一縷の希望を抱いて、アサラムに視線を向ける。
上司はあからさまに目線を逸らして。
「やだ。面倒だし、管轄外の事はやらん主義」
子供の様な純粋さで、シェリーの要望を却下した。
「アンタ達、それでも騎士!?」
流石のシェリーもこれには愕然とするしかなかった。
「……コホン。と、とにかく……。私は一人でも、援護に向かいます」
そして、何時までも驚いていられない。
彼らの行動は予想の斜め上に行くのは分かり切っているのだから、ここで何時までも説教などしていられない。ゼスの件については、事態が収拾した後に問い詰めればいい。
シェリーは持ち直し、改めて自分の意見を主張した。
「馬に関しては問題ありません。従騎士はその経験の浅さから乗馬許可が下りないという話ですが、私は嗜みとして同様に操れます。それに、私なら戦力としても申し分ないはず。ですので、行く権利は十分に――」
「それは良いとして、その後はどうするつもりだ?」
彼女の主張を遮って、ゼスが淡々とした口調で訊ねた。

「勿論、住民を全員助けて、仲間の援護を」

その答えをさらにゼスが遮る。

「君のやろうとしている事は、立派な上層部からの命令違反だな。それに、急行している部隊が元々護送任務を受ける予定だった」

勿論、それを引き継ぐのはゼス達だと知っている筈。

引き継ぐ部隊の人間が助力に来れば、命令違反していると感づかれるだろう。

あくまで厳しい物言いに、シェリーを諭すという態度はない。言う事を聞かない子供に、親が説教をしているようなものだった。

「そうなれば、益々昇進への道が遠のくな。さて、先日騎士団内で力をつけて、奴隷などを含めた数多くの問題を解決して全ての人を救う、という理想を語った君はその夢を叶える時が何年先になってしまう事か。君は、目先の人を救いたいが為に、他の多くの人をその間に見殺すのか？」

「……っ、ボ……わ、私、そんなつもりじゃ……」

一歩後ずさって、苦しそうな顔をするシェリー。

ゼスはふぅ、と嘆息。

「ようするに落ち着け、ということだな。君の気持ちは分からんでもないが、冷静さを失っては、あまりにも非効率的だ。自分以外がなんとかしてくれる、という他力本願も、性ではなかろう？」

「――――まぁ、大方ゼスの言うとおりだなぁ。シェリーが少しでも早く昇進する気なら、命令違反は大きな足かせになるのは間違いないぞ」

片や、アサラムは俯いているシェリーに気を使うように、諭すように言う。

彼は机の隅に置いてあった急須を手に取り、机から新しく出したコップに緑茶を注ぐ。

彼がよく愛飲している、大陸東部にあるアルト連邦から取り寄せたお茶らしい。曰く、これを飲むと心が落ち着くという。

注ぎ込んだ湯気がたちこめる緑茶入りのコップを、シェリーに勧めるように手渡した。

「……有難うございます」

呟くようにお礼を言ったシェリーは、差し出された緑茶を両手で僅かに口に運んだ。

「んまぁ、俺は別にお前らが石に躓いたりしても一切関係ねぇんだが、下手に動いて大けがさせては目覚めも悪ぃし、身内に命令違反されたとあっちゃぁ俺も監督能力が問われちまうしな。俺から言えるのは、急行している第九小隊は魔働術師が多く編成されている部隊だから、援護は必要ねぇってことだ。あそこには、防御と回復魔働術を備えている奴らも居るし、住民の救助と敵の撃退は大丈夫だ、問題ないさ」

椅子の背もたれに深く背を預けたアサラムが目を糸のように細める。

「それに、護送任務に関しても軽視すべきではないとも思えるぜ。確かに搬送する鉱物は重要なものじゃねぇが、それでも聖王国内の経済に関わるものだ。近年、魔物と同様に山賊の活動も活発化しているし、鉱物の強奪や違法転売も報告されている。警備隊だけでは回りきれんくらいに、だ。騎士が護衛を請け負うのも、国の為でも

あるんだぜ」
「……そう、ですよね」

彼の言葉に頷き、緑茶を少し喉に通したシェリーはあらかた落ち着いた返事をした。

「緑茶の効果はすげぇだろ？」
「はい。お陰さまで心が楽になった気分です」

ニヤリと口の端を伸ばしたアサラムに、シェリーも自然笑みを浮かべる。
彼女はまた一口、緑茶の入ったコップを傾けると、それを机の上に置いた。

「……申し訳ありません。出過ぎた真似を申しました」

彼女は深く頭を下げる。
民が危険にさらされている、それを聞いただけで居ても立ってもいられなかった。直ぐにでも彼らを助けに行きたいと思っていた。しかし、先行している第九小隊でも信じていなかった事と、目先に拘って理想を遠のかせる自分に深く恥じていた。自分の愚かさを隊内で見せた事を詫びたい気持ちだった。
アサラムはそれに再び煙草を咥えて。

「ん、気にすんな。若けぇ内はそんなこともある。その時はゼスがフォローしてくれるさ。言葉はきっついがね？」
「む……」

上司からの意外な一言に、ゼスは困惑の表情を浮かべた。
それに、シェリーは意外とばかりに失笑した。

「隊長、フォローは流石に買いかぶりすぎですよ。何故なら、きついだけじゃなくてデリカシーすらないんですから」

――自分はそこまできつく言ったつもりはなく、当然のように何時も通りに言ったはずだがな。

ゼスは内心真面目にそう言いたがったが、また余計な何かを言われて面倒な事になりそうだったので自重する。

気を取り直したアサラムは、再び机上に置いた資料を二人に手渡した。

「んじゃ、そういうことで護送任務、引き受け宜しく」

資料を受け取り、中を一通り目を通す二人。

しかし直ぐに、「ん?」とシェリーが顔を上げた。

「隊長。なんだかさっき、明らかに『俺は出ないから二人とも頼むな』的な意図を感じたのですが、気のせいでしょうか?」

「気のせいでも何でもないぞ? 俺は数多くの酒場で美味い酒を見つけるっつー、重要な仕事があるからな。手が離せないんで、二人で行ってきてくれや♪」

「あぁぁぁぁぁぁっやっぱりいぃぃぃぃぃっ!? さっきは大人だわって感心してたのに、不真面目な面が優ってたわ!」

アサラムの前で、シェリーは思い切り悲鳴を上げて頭を抱えた。

ゼスも、眉を寄せて呆れた口調で続ける。

「いくらなんでも露骨すぎるな。単なるサボりと言いたいだけだろうに」

「んじゃぁ、別件があるんで後は任せた的な!」

それを聞いたゼスは頷いて、

「ん。なら仕方がな――――」

「ないじゃない！　そういう問題じゃないです隊長！」

同僚のあるまじき発言を遮ったシェリーが、バンと机を叩きそうになって抑える。机に置いたままの緑茶が零れてしまうと考えたからだ。

「今日こそは上官らしい行動をしてください。ここに配属されてから一度も現場指揮を執られた事が無いのは私達も納得がいきません。初めての外での任務ですし、この時くらいは指揮を執ってみても」

「だってぇ、馬なしの二日の行程はオッサンには堪えるしぃ、疲れるしぃ、めんどいしぃ、つーか働きたくないしぃ」

「さりげに本音言ったな……」

「といいますか、三十代かそこらの方が何を仰っているのやら……」

アサラムの態度に、ゼスとシェリーが二人してジト目で見つめる。それに対して、陽気な上官は急に頭を押さえて呻く。

「アイタタタタッ、一日一回酒を摂取しないと死んでしまう病が！　二日も酒を断ったら頭がトロンとなっちまう！」

「アルコールで脳の活性が低下するだけです。むしろ断った方が健康にも良いと思いますが」

「俺にとっちゃぁ、酒は切っても切れない存在になっているのサ」

「既に病みつきになってるわよねぇ！？」

「そして、数ある酒の中でも……とっておきの舌を打つような美酒を見つけ出して味わうのが、俺の仕事――――いや、責務なんだッッ」

「要するに、ただの飲んだくれよねぇ！？　何を（キリッ）、みた

いなドヤ顔をしているの！」

令嬢騎士は、アサラムの言葉を聞いた全世界の紳士淑女が答える台詞を放っていた。

徐々に彼女の威圧感が強くなり始めると、アサラムは急に真剣な眼差しで、別の話題を持ち出す。

「――お前らが知らせてくれた、奴隷達の件だが、どうやらとある貴族邸の地下牢獄に全員収監されているらしい。今のところ、大した証拠は見せてくれねぇ。何より警備も厳しくてな。魔働トラップも仕掛けられているからそこまでの情報取得は難しい」

その話は、先日ゼスとシェリーが見聞きした問題を報告した際に、彼が「成程ねぇ。ま、奴隷制に関しては面倒な問題ではあるが、考えておくわ」と答えた件だった。

シェリーが緊張した面持ちで息を呑み、ゼスは上官を真正面から見つめた。

「だが、今のところ奴隷達が苦痛を与えられたり、その数が減っている様子は無い、とは言っておこう。俺の知り合いである看守から聞いた話だが、最低限の事はされているらしいから、当分は問題起きねえだろ」

貴族のやっこさんもこればかりは慎重になるからな、とアサラムは煙草を灰皿に押しつけて火を消した。

シェリーが安堵の息を吐き、まだ時間がある事を考える。早めに従騎士から抜け出して、奴隷達を少しでも助けられる道を探さなければ、と改めて固く自らに誓った。

その時、まるで話題が途切れたのを見計らったように、会議室のドアにノックがあった。

「失礼します！　アサラム・ルース小隊長殿はいらっしゃいますか？」

入ってきたのは一人の男性騎士だが、その腕には伝令役を表す腕章が付けられていた。

その声に反応した当人は顔を上げて「おう、いるぞ」と答えた。

伝令は直立不動のまま、伝令内容を告げた。

「例の件についてお呼びがありました。直ぐに第五執務室に来るようにとのお達しです」

「おぉっと、今から行こうとしていたところだ！　今すぐ行くからと、酌の用意をして少し待たせてくれ」

「はっ。失礼します！」

杓子定規に答えた伝令は、ドアを閉めて急ぎ足で駆け去って行った。

それを追うように、アサラムも立ち上がる。

「んじゃ、俺はこれから別件があるんでな。後はお前らの好きにやれ。何、尻拭いだけはしてやるから大火傷せんぐらいに行ってこいや」

んじゃな、とヒラヒラと手を振ったこの部屋の主は早々に後にした。

まるで突風のような行動に、ゼス達は呆然と部屋の中で立ち尽くしていた。

「流石は上騎士ね……。最後にかけた言葉はアレだったけど、慌ただしく動いていたわね」と、シェリーは半ば感心したように呟いた。

ゼスは嘆息して、彼女の言葉に答えるように口を開いた。

「そうか？　先程隊長が出ていく時、心なしか笑みを浮かべていたように見えたな。それに、さっき伝令に『酌の用意をして少し待たせてくれ』と、言っていなかったか？」

「……」

シェリーは目をパチクリとして硬直し、やがて気がついたように机の上に置かれたままの護送任務に関する書類に目をやった。

そしてアサラムが去った方角へと目をやると、彼が何をするつもりだったのかを思い出して頭を抱え始めた。

「しまった、時間稼ぎ……。逃げられたぁ」

一生の不覚とばかりに、溜息をつくはめになった。

第十一話　「力の元と優先順位」（後書き）

・・ゼスとシェリーは「遠征用荷物」「馬」を手に入れた！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

第十二話　「都外の旅」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第十二話　「都外の旅」

――数時間後、同日１１時４７分。
聖都より六ケアオリュ（＝六キロメートル）地点。

羽根音が五月蠅く響き渡る。その数三十。
小型とはいえ、人間の顔の大きさを誇る昆虫型魔物（スワームバグ）はその機動力と圧倒的な大群で襲い掛かり、生き血を残さず吸い取ると言われている。旅人にとっては、道中に襲い掛かってくる魔物の中ではランクＢに入る危険度として認知している。
これまで数多くの骸を生み出してきたその昆虫（スワームバグ）は、

――その機動力すら勝る剣技によって、両断されていた。

「はぁっ！」

襲い掛かる昆虫大群（スワームバグ）に対して、一つの黒とその周囲を細身の剣が舞い踊る。
蒼い衣の上に、白銀の軽鎧と甲冑を着こなした長い黒髪の少女、シェリーは苦も無く周りの昆虫達（スワームバグ）を一閃に伏していく。彼女の剣技は周囲に幾重もの銀閃が生まれ、全く敵を寄せ付けない。その戦法から乱戦に秀でたものであり、大群相手でも退けはとらないと見てとれる。
周りの敵を払うように切り裂き、隙を狙った攻撃には左手の純白の盾で防ぎきって反撃する。決して無謀に暴れているのではなく、彼女の剣技は鋭い上に鮮麗である。

その様は、まさに嵐そのものだ。常に移動をし続け、決して物理的な物では掻き消えず周りの物は全て薙ぎ払われる風の如き刃。

彼女の嵐の様な動きを見れば、態々乱戦に持ち込もうなどという事は早々に出来はしまい。

羽虫（スワームバグ）の方は僅かに増援が来ているが、数は大分減っている。これらの敵相手ならば、シェリー独りだけでも十分に勝ち取る事はできるだろう。

「――――っ！」

僅かに顔を上げたシェリーが駆け出す。自身に群がる蟲ども（スワームバグ）を薙ぎ払いながら疾走していく。

彼女の視線の先には、大型のワームが地面から飛び出してくるところだった。

その巨体はまさに怪物と形容しても差し支えない。牙が長く、およそ全長の三分の二ぐらいある。狂暴で人間に有害であり、口から猛毒や炎を吐き、長い身体を巻き付けて締め付ける。翼を持つが脚を持たないドラゴンの亜種を指す場合や、ドラゴンの中でも年経た強大なものを指す場合もあるが、このワームはミミズや芋虫の姿を巨大化したもののソレだ。

それがシェリーにとっては最も脅威と感じたのか、昆虫を剣で払いながら跳ぶように肉薄する。

「ふ――――――ぁっ！」

巨体を相手に素早い斬撃など不毛だと理解しているのか、昆虫（スワームバグ）の大群を抜けた令嬢騎士はワームの懐へと深く踏み込む。

裂帛（れっぱく）の気合をもって、叩き下ろすような渾身の一撃をその剣で放つ――――！

「――――くっ！？」

しかし、剣はワームの身体を僅かに斬り裂いただけで、深く切り込む事は不可能と言えた。

巨体という利点と身体の頑丈さから、細身の剣は深くえぐり取る事が出来ず、鈍い音を立てて動きは止まった。

「浅いっ！」

シェリーが状況を即座に判断するや、剣を引き抜いて一端距離を取る。

報復とばかりにワームはその口から毒液を彼女に浴びせかける。

「はっ」

その毒液にシェリーは飛び跳ねるように回避し続ける。僅かな一滴も浴びることなく、消えるように後退し続ける。

しかし、後方には未だ生き残っている羽虫（スワームバグ）が大挙して迫りくる。

意識をそちらに向けざるを得ないシェリーは、振り返った際に不意に気付いたように視線が敵から逸れた。

彼女は羽虫群（スワームバグ）の奥に悠然と突っ立っている、銀髪をした長身の青年を視界に収めたのだ。

「ちょっとゼス！　サボってないで、ボクが倒せなかったワームを撃退するのを手伝ってよ！」

羽虫（スワームバグ）の大群を相手にしながら、シェリーは怒声をあげた。

普段は「私」と言う勝気な令嬢騎士（シェリー）の一人称も生死を賭ける極限状態における戦いでは、「ボク」と言うのを抑えるその暇すらない

のだろう。
　一方、ゼスと呼ばれた銀髪の青年は、相方の騎士の戦いぶりを眺め続けていたが、この時漸く背中に背負う取っ手に手をかけた。

「……やれやれ。鮮やかな剣舞だったが、やはり非力ではあるか。ま、それは仕方が無いだろうな。太腕でもあれば或いは少しは出来るだろうが」
「何か言った!?」

　風を斬る音と共に、さらなる怒声が響き渡る。
　ゼスは僅かの手を捻ることで袋の縄が解き、その取っ手の全貌を露わにさせた。
　彼の手に握られているのは、異形の無骨な大剣「銀狼の牙」と呼ばれるものだった。
　身の丈ほどもある重剣で、刀身が真っ黒に染められており、切っ先と刃の二か所に半円状に欠けている箇所がある。だが、そんな形状でも重さを加えた切れ味は抜群のモノだ。それをゼスは片手で振り回せるほどの筋力を備えている。
　漆黒の大剣を構えた彼は肩を僅かに竦め、

「いいや。なんでも?」

　それだけ言い放って、疾走を開始する。大剣を僅かに下しつつ、シェリーが相手にしている羽虫（スワームバグ）どもには目もくれず、一直線にワームへと向かう。
　狙うは喉元。そこを切り裂けば、後は両断すれば良い。
　ワームは新たな敵を認知し、大剣の騎士に毒液を吐き出す。それを一滴でも浴びれば、身体は一瞬にして溶け出すだろう。
　それにゼスは大剣を地面に刺して、一気に振り上げて土砂を掻き

出す。土砂が毒液を浴びて、腐敗を起こして溶け出す。それらを盾にし、再び肉薄する。

接近される事を嫌ったのか、ワームは尾を使って薙ぎ払いにかかった。

まるで鞭のように撓る尾は相当な打撃力を発する事だろう。

それを銀髪（ゼス）の戦士が大剣で何とか防ぎきると見るや、狙ったようにその牙で鎌首をもたげて襲い掛かる。その先端にも猛毒があり、その致死量は液状よりもさらに危険だ。

大剣はしなる尾の鞭を止めるのに使っている。それと同時に迫りくる牙に対応することなど不可能。

一秒後には、その頭蓋（ずがい）に牙が喰い込む――――！

「――――フ。俺の武装がコレだけだったら、まさにその通りだったな」

不敵に笑みを浮かべたゼスが、左手で懐から銀色の物を取り出すと同時に、それをワームの喉元へと放った。

鋭利な刃物をしたソレは、投擲用の暗器である。職業柄、僅かではあるが全身に暗殺用で使用する短剣が仕込まれている。

彼は大剣が使えない状況も見越して、その一札を切ったのだ。

投擲された刃物が狙った箇所に逸れる事無く命中する。

切っ先で急所を抉られたワームは慄くように首を逸らした。

僅かに出来た隙を、ゼスは今度こそ漆黒の大剣をもって追撃する。

大剣で完全に止めた尾に今は攻撃する威力を発する事はできない。

そうする為には、尾を一端引かねばならない。それで引けたとしても、その前に大剣が首を両断する――――！

「――――はっ！」

剣先を猛烈な勢いで強襲。暗器で抉ったワームの喉元の傷口を広げた。

喉から口を大きく広げるワームは激しい痛みに天を仰いだ。

ゼスは、振り上げた大剣を上段に構え、無言で裂帛（れっぱく）の気合いを込める。

「――――――ッ！」

音の無い咆哮をあげて、一気に跳躍する。

全ての力を大剣に注ぎ込み、切り裂いたワームの首へと叩き下ろすように一閃する。

「ッッッ――――――！！」

漆黒の大剣はさらなる傷口を広げさせて、ワームの胴体を一刀両断にした。

真っ二つになった巨体は、重い音を轟（とどろ）かせて地面に伏す。既に息は途絶え、綺麗な断面を残すのみだった。

地面に着地したゼスは、漆黒の大剣を音速で汚れを振り払い、肩に担いだ。

「中々のものだったな。……さて、向こうの加勢に行くべきか否か――――」

「残念ね。もうこちらは終わっているわよ」

耳に声が聞こえたゼスが振り返ると、僅かに目を見張った。

そこには赤色の陣を虚空に出現させていた、シェリーの姿があったからだ。彼女の周りには、真っ二つになった羽虫（スワームバグ）が数多く転がっている。

「待て……！　君はその魔働術で何をしようとしていた？」
「何って――ゼスがワームを仕留めそこなっていたら、“ファイアボール”を放つつもりだったのだけど？」
「明らかに、その魔働陣の方角は俺に向けられてはいないか？　ワームどころか俺も巻き込む射程だったな」
「あら、別にそんなことないわよ？　ただ、私が一人で羽虫達と戦っている間に観客のつもりでやらしく眺めて、非力だの太ければ良いと言ったアンタは、良い御身分だなぁ、と思っただけよ。ちょっと怒って手が狂いそうだったけれど」

笑みを浮かべている黒髪の騎士が、細い人差し指を魔働陣に着けて横に払うと、まるで陣は陽炎のように消えていく。
（――手元が狂って、ファイアボール？　白々しいな。その魔働陣はファイアボール以上の広範囲火属性魔働術だった筈だ）
ゼスは傭兵時代、様々な魔働術をその眼で見てきた。知識は無いものの、術の形式は描かれた陣によって大きく違っている。
前に見たシェリーのファイアボールの陣ではなく、広範囲形式の陣を組んでいた事は、明らかに理解していたのだった。

「手元が狂っていたのは最初からだろう。俺には“ファイアボール”の陣には見えなかったがな」

そう言いながら、地面に落ちている大剣を包む麻袋へと歩を進めるゼス。

「あら、意外。知識は全くないと思っていたら、流石は元傭兵さん。それなりの修羅場を潜り抜けているみたいね」

シェリーの感心した声を聞きながら、麻袋を手にとって漆黒の大剣を仕舞う。それを再び背に背負うと振り返る。

「……それより、次はどの方角に向かえばいい？」

シェリーは彼の問いに応えるように、地図を取り出す。

聖都を中心に記された個所から人差し指が伸びて、目的地の鉱山町までの道程を測量していた。

そこから導き出す結論で、目の前にある分かれ道で左の方角を指し示す。

「ここから東の方角ね。そこからサイア河川の橋を越えてイザーク森林を通り抜け、その後の荒野の先に鉱山町があるわ。早ければ、一日半で着ける距離ね」

「ならば、早く出発するぞ。できれば次の休憩は河川までは取らない。依頼主にできるだけ早めに会うのが良いからな」

ゼスは肩を一回しした後、近くに止めていた一頭の馬へと寄り、杭に結んでいた手綱を解く。

馬はその背に旅行用の荷物が載せられている。食糧、寝具、雑貨など道中で必要になるものだ。騎士達は遠征に向かう時は、馬を連れていく事が出来る。乗る事は勿論だが、多くの荷物を預ける事と万が一負傷者が出た場合はそこで休ませる事にもなる。

正騎士になれば、一人一頭ずつ所有する事もできるのだが、二人は従騎士な為に、一頭しか連れていけれなかった。それでも、馬が居ただけでも大変助かる事だ。

手綱に引っ張られる馬を連れ、ゼスは歩き出す。彼の反対側にシェリーが付き、騎士二人が馬を挟む形で分かれ道を左に進んだ。

「……河川で休憩、それは異存ないけれど。先程みたいに道の真ん中で魔物が現れても、休憩する場所は増えないのかしら？　いくら

なんでも戦闘続きで河川まで持つほど、アンタより体力ないわよ」

アサラムが逃走して、結局二人で護送任務着手の為に鉱山町へ行く旅支度をし、聖都を出立してから六ケアオリュ。

道中小型の魔物が出るのは当然と言えたが、まさか道の真ん中で滅多に現れない大型ワームに出くわしたのはつい先ほどだ。大型魔物が街道に現れると言う事は、魔物の活動が頻繁になっているという事である。

これからも魔物が立ち塞がる可能性が十分にある疑問に対して、ゼスは至極当然に言い切る。

「気合で」

「阿呆ね！　いくら同じ騎士でも体格差がありすぎるじゃない！　タダでさえ、アンタはこういうことが得意そうで……どうせ自分自身の物差しでしか測れないんでしょう？」

「……俺と同格と名乗るなら、それくらい当然じゃないか？」

「時間が出来ればただトレーニングに興じるアンタと一緒にしないでよ！　私はそこまで同じじゃないんだから。……ただ、そこまで焦る必要は無いんじゃないの？」

首を傾げるシェリーに、ゼスは僅かに眉を潜めた。

「何……？　それは君は……一刻も早くこの任務を終わらせて、救援に行きたくは無いのか？」

「ええ、あの件は今は置いておくわ。どの道今は行きたくても行けないし、この任務は最低でも五日はかかる行程。だったら、どうせなら完璧な任務をこなしてより良い成果を上げて直ぐに昇進するだけよ。第九小隊を信じる事、そう思う事にしたわ」

「……。思い切りが、いいんだな？」

「そうじゃないと、任務に集中できないのは判っているからかしらね。だから、別に私を気を使って焦らなくても良い……いえ、自分に無理してまで先に進まなくても良いんじゃないかしら？」

「――――」

彼女の言葉に、何を言っているんだ、とゼスは思った。

――俺が無理をして先に進もうとしている？　何を馬鹿な、俺は必要以上に身体を酷使した事は無いし、一度でも身体を壊した事も無い。自分が考え得る身体の稼働時間を考えての行程の筈なのだがな。

風になびいた長い髪を指で梳かして、シェリーは真っ直ぐと彼の目を見る。

「ゼスがどうしてそこまで自分を厳しく律するのかは判らない。ソレは個人の問題でもあるだろうし、私が口を挟める事じゃないのは理解してるわ。同僚になってから、まだ二週間かそこらの私が言うのもなんだけれど……騎士なら騎士っぽく、周りに気を使うべきよ」

それは、彼女が抱く理想の騎士の理念であった。

弱き者には手を差し伸べ、強き者には屈しない。他人に気を使うこともまた彼女の目指す騎士であると。

彼女も騎士でありそれなりに体力を持っているものの、ゼスよりは劣っている。必然的に彼女が先に休息を必要とするだろう。その際、ゼスは自身の体力を限界を鑑みて予定していた休憩地点に到達できなかった時は、その性格から彼女を置き去りにするだろう。

この場合、シェリーはゼスに、自身の調子に合わせてほしい、という事だろう。

「……それは、アレか。ここで断ったりすれば、騎士の資格ナシで辞めてしまえ、と怒るのだろうな」

「当然でしょ？　……あ、別に私が淑女だから紳士的に振舞え、とかそういう意味じゃないから」

さも当たり前の様に言うシェリー。ゼスの視線から逸らす彼女は渋い表情だった。

銀髪の大剣使いはそんな様子の彼女に目を向けて、それが本気であった事を悟ると、毛嫌いしている癖に彼女らしいと嘆息した。

「自分に甘くするな。君の限界が、次の休憩場所だ」

それだけ告げて、再び歩を進めた。

彼の言葉に、その意図を察したシェリーは、当然よ、とこれもまた当たり前のように笑みを浮かべて後に続いた。

第十二話　「都外の旅」（後書き）

‥シェリーの「ストームダンス」！　スワームバグに合計６００のダメージ！

ゼスの「暗器投擲」！　ワームにクリティカルヒット！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

第十三話　「イザーク森林川での一幕」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第十三話　「イザーク森林川での一幕」

Ｓｉｄｅ：Ｓ――――同日１６時２３分
聖都から二十五ケアオリュのイザーク森林。

近くに塔でも建てれば、頂上から見ても一面に広がるこの原生林群はふとしたきっかけで迷いやすい。
太陽も木々で遮られる為、方向感覚が狂わされ、地図を持ってしても簡単に自分の位置を見失う。
実際、初めての森の中で地図を持っていたシェリーが首を傾げながら歩いていた。

「うぅ～ん……。これ、方角はこっちであっているのかしら？」

地図を回転して、どちらが正しい方角なのか測りかねているようだ。
そんな物に頼らず、ただ一つの樹にナイフを傷を付けて来るゼスは息を吐きながら、シェリーの傍を通り越した。

「地図から見たところ、鉱山町への方角は森の入口からは南東だ。このまま真っ直ぐに向かうぞ」
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！　なんで地図をあまり見ていないのに解るのよ？」

シェリーが慌てて制止の声をかける。
足を止め、振り返るゼスの表情は面倒な事だ、と言いたげに苦いものだった。

「あれだ」

ただその一言だけを告げて、先程自分が傷をつけた樹へと指をさす。

促されるままにその樹へと顔を向けたシェリーは首を傾げていた。

「結構目立つように刻んだわね……。あれがどうかしたの？」

「それだけではない。もっと奥の樹を見ろ」

指示されるままにシェリーがさらに七オリュ先の樹に眼を向ける。

「あら……？　あそこにも、そのまた奥の樹にも同じような傷跡があるわね。しかも、遠目から見てもギリギリ目立つ大きさの」

傷を付けられた樹は数オリュの間隔で直列していた。三つめの傷が僅かに視えるのだが、それ以後の傷は既に小さくなりすぎて見えなくなってしまっている。

その列は、多少歪んでいるものの、確かに自分達が歩んできた道の筈だ。

「あれは間違いなく俺が刻んできた。一定の間隔を空けて、その時一番近い樹に傷をつけたからな」

「どういうこと？」

「所謂道標だな。森の入口から傷を付けてきた。その時に、鉱山町の方角に向いて入り、後ろを振り向くと直列になっていると真っ直ぐに歩いていると確認できる」

迷った時は直ぐに帰れるようにもしているしな、と付け加えた。

世界中を放浪していたと言う元傭兵は、サバイバルに関して博識

なのだろう。
シェリーは感嘆の声をあげる。
「へぇ、凄いわね。そういうのは学校で習うものなの？」
彼女の問いに、ゼスはいや、と首を振った。
「正直餓鬼だった頃ではないな。独学だ」
そう言って振り返り、再び鉱山町へと足を向ける。
「さて、先に進もう。森は暗くなると視界も悪く、魔物も活発化する。出来るだけ長く進みたい」
「そ、そうね」
二人は、傷の付いた樹から反対側に歩を進める。
ゼスが一定の間隔で傷を刻みながら、大森林を突き進んでいく。
茂る草や、僅かな獣道を通りながら、ナイフで切り払って進む。
暫くすると、二人は流れるような水の音を耳にする。
音の正体へと向かった彼らの目の前には、緩やかに流れる川が現れる。水は透き通るように綺麗であり、浅瀬と判るほど底が見えている。
「わぁ、水だわ。綺麗だし、気持ち良さそう」と、川を一目見たシェリーは目を輝かせる。
「……ふむ。どうやら腰まで浸かる深さではないようだな。面倒だが、このグリーブを履いたまま対岸に行く事は出来るだろう」
対岸へはかなりの幅があり、どう考えても一足では跳べない距離である。金属製の靴であるグリーブのまま水に浸かっても問題は無

いのだが、進むには時間もかかり水の抵抗力を直接受けてしまう。
屈伸をし始めたゼスに対して、シェリーは左右に首を回して、右側へと走り出す。

「ちょっとゼス。多分、そんな面倒な事にはならないと思うわ」
「……？　どういうことだ？」
「ほら、あそこに岩があるわ。しかも、丁度対岸へと続いている感じよ」

見ると、シェリーが指摘する通り、川には丁度足場になるような岩が点在しており、跳んで渡れば対岸へと至る事ができるようだ。
だが、ゼスの表情は乗り気ではなかった。

「確かに跳べば渡れるようだが……。君は跳んで渡る、という事をやったことがあるのか？」
「何よ、その顔は？　これでもアスレチック場で丸太の上から何度か跳んだ事はあるし、それと同じでしょ？」
「……いや、愚問だったな。忘れてくれていい」

ゼスは鼻頭を指で押さえながら息を吐き出した後、川の中にある岩の前に立ち、地面を蹴った。
彼が岩に足を付けた瞬間に足首を捻って進行方向を変え、次々に前の岩へと移っていき、進んでいく。十秒経たずして対岸へと着地した。

「あ、鮮やかなものね……」

呆けるシェリーを余所に、対岸に居るゼスが振り返って声を上げる。

「どうした、早く来い。日が沈んだら移動が出来なくなるからな」
「わ、分かってるわよ」

慌てたシェリーが返事をするも、その表情は少し硬い。
恐る恐る一つ目の岩につま先を付け、まずはその上に乗る。

「よし。丸太と比べると乗れる面積は小さいけど、これなら渡れそうね」

続いて、離れた岩に跳び移ろうと跳ねる。次の岩に辿りついた時、大きくバランスを崩した。

「っとと!?　岩って傾斜があるから転びやすいのよね。気をつけないと」

さらに次々に別の岩に跳び移っていくシェリーは、今度はゼスの真似ごとをしようとして直ぐに跳ねる技をしようとする。
しかし、勢いがありすぎたのか、ある岩に着いた瞬間、足が滑り足場を失う。

「あわわ……わわわわわっ!?」

重力に逆らえず、シェリーは奇声を発しながら、ばしゃーんという音と共に川へと落下した。

その様子を対岸から見ていたゼスは溜息を吐きながら、やはりなと肩を竦めて見せた。

「全く……。調子に乗るからな。君の経験した丸太跳びとは違い、

岩は傾斜もあって濡れているから滑りやすく、同じ要領ではいかないのにな」

呟いた後、彼は再び岩へと跳ぶ。

川底に尻もちをついて、腰まで水に浸かっていたシェリーは落ちた時に全身が濡れてしまい、黒い長髪が気持ち悪く張り付いているのを払う。

「うぅ……。びしょ濡れ……しかも冷たいし、色々動きにくいし。なんで訓練の時みたいに上手くいかなかったのよ……。岩が濡れているなんて聞いてないわ」

いかにも不満そうな表情で彼女は髪を梳かす。

「実地も実践も訓練の様にはいかんということだな。マニュアル思考はそこで辞めにすることだ」

頭上から降ってきた声にシェリーが顔を上げると、彼女が滑らせた岩の上に悠然と立って見下ろすゼスの姿を捉える。

睨みつけるような眼で見返す。

「堅い頭と言って、馬鹿にしに来たのかしら。そんな簡単に立っていられて、良い身分よねホント」

「訳の分らん事を言ってないで、手を出せ」

バランスを保ちながら、ゼスから右手が差し出される。

その様子に、シェリーは困惑の表情を露わにして、舌が回らなくなる。

「え……！？　は、え、あ、う……？」
「遂には元ボクお嬢様の矜持すらも忘れた阿呆な発言か？　良いから何も言わずに手を出せ」
どういう意味よそれ、と内心怒鳴りながら、シェリーは言われた通りに差し出された手を握る。
ゼスが一気に肘を引いて彼女を素早く抱き起した。その状態でも、バランスが失われる事無く、勢いもあり過ぎずに岩の上へと留まっている。
「え……え、え、えええええぇ――――――！？」
川から釣り上げられた魚のように、ゼスが立つ岩の上に足を着いたシェリーが、釣り人の間近な姿に酷く狼狽する。
顔が僅かに赤いのはきっと彼の暴言に怒りを露わにしただけに違いない。
掴まれ、と呟くように言われた直後、彼女の身体が宙に浮く。膝の関節に彼の手の感触があり、肩にももう片方の手が付いて身体を支えられている。
（――ちょ、ちょっと……！　こ、これってまさか……お、お姫様だっこってやつじゃぁ……！？）
姫を護る騎士が登場する騎士道物語にそのような描写がある事を彼女は覚えている。読んでいた当時は随分憧れたものだが、まさか自分がその被験者になるとは露とも思っていなかった。
ちょっとした緊張と共に、怒りとはまた別の――簡単に言えば、されているというのはかなり恥ずかしい。
騎士道物語では人前で抱っこをされていたのに比べれば幾分マシ

なのだが、そうでなくてもかなり恥ずかしすぎた。
シェリーは何かを言おうとしたが、ゼスが岩を蹴って跳んだ為に、口を閉ざす。
抱きかかえたまま次々と岩へと跳び移っていき、対岸へと辿り着く。

「降ろすぞ」
「……え、えぇ」

ゼスの言葉で我に返ったシェリーが濁した答えを返すと、足からゆっくりと降ろしてもらう。改めて彼に向かったものの、引き起こされた時の事を思い出したくない理由から、顔だけは逸らす。

「……あ、ありがとう」

シェリーの言葉を聞いたゼスは首を傾げる。

「何がだ？」
「だ、だから……！　その、なんて言うか。意外と、こ、こういう事だけは、任せても大丈夫そうね！　ええ、私も安心するというモノだわ」

頬が熱いのは恐らく水が冷たくてまだまだ外が熱いからよ、そうに違いないわ、とシェリーは一人納得する。

「それは光栄に思えばいいのか。それは良いが、俺にとっては君の方が安心できんのだがな」

じっと見下すゼスの姿に、視線を向けるシェリー。

「どういうこと？」
「濡れたままでは風邪をひくだろう。戦士にとって、健康管理は一番大事な要素だしな」
「あ、そうね。うっ、服が張り付いて気持ち悪いわ……」
対衝撃防刃魔働軽減伸縮仕様の騎士制服が水気を含んでベッタリと、シェリーの身体に張り付いている。
彼女の眉が潜められ、張り付いた服を指で掴んで引っ張る。
「ふむ……そうして見ると、膨らんだ風船に空気をさらに入れた感じだな」
ゼスの呟きを聞いたシェリーが首を傾げながら摘まんだ服を戻すと、彼の視線がどこに向けられているか気がついた。
水を含み張り付いた騎士服は、彼女の身体の輪郭を明確に表現させている。全体的に細身ながら、女性らしいやわらかな曲線を描く胸部は、よりハッキリと主張していた。
今度こそシェリーの赤みは頬だけでなく顔面にまで広がった。
彼女の指が素早く、炎の魔働術式を描く。
「――――こんの……水ごと灰燼と化しなさぁあああああああああああああいっ！！」
彼女の怒声が森林に木霊した直後、火柱が上がったのだった。
後にゼスは自身の服を見て「あぁ、袖が灰になったな」とぼやいたという。

第十三話　「イザーク森林川での一幕」（後書き）

‥ゼスとシェリーは乾パンと水を美味しくいただきました。

シェリーは魔働術「フレイムピラー」を唱えた！　ゼスはガード！

ゼスの服の袖が焼き焦げた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

第十四話　「野宿」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第十四話　「野宿」

Ｓｉｄｅ：Ｚ――同日１９時４９分

既に辺りは暗くなり、結局イザーク森林を抜ける事が出来なかった二人は、ここで一晩明かす事になった。

街道や見渡しの良い平野ならまだしも、日が沈んだ森林は深い闇の帳が下り、視界が悪くなる。それに、森林地帯は危険な魔物が多く生息し、大半が夜で活動的になる為、安全上からもこれ以上の進行は不可能と判断したからだ。

幸いにも、シェリーは明かりを照らす術と邪を払う結界術式を心得ていた為に、寝泊まりに困る事は無かった。

唯一あるとすれば、森林内でそれほど広い場所は無く、部屋に例えるなら三畳スペースぐらいでしか確保できなかった事だろう。結界術式は周囲の草叢の奥まで及んでいるが、これは着替える時や何か用をたす場合のスペースの為に、実質動き回れるのはそれほど無い。せいぜい、中央で爛々と照らされる明かりの周囲を回るぐらいだった。

「良い！？　絶対に動いちゃ駄目よ！　動いたらコロスから」

「……息するのも駄目なわけか。どの道死ぬな」

「誰も微動だにするなって言ってないじゃない……。とにかく、その場所から絶対に動かないで。直ぐに済むから」

「たかだか服を着替えるだけで、どうしてそこまで神経質になるのか……」

「返事は！？」

「……判った」

その気だるげな返事をゼスから聞いても、シェリーは警戒心を解く事が無いままその手に荷物を持って、茂みの奥へと身を隠した。

流石に濡れた服を着たまま一晩越すのは体調を崩すと考えた彼女が、着替えたいと言った事で今の状況になっている。

ゼスの着替えは私服の一着だけだが、シェリーの荷物は彼のより多く、二着も替えを持ってきていたようだった。

正直、五日の行程に二着も用意する必要があるのか、とゼスは思ったものだが、彼女曰く「これでも少ない方」とのこと。

女の生態はよく理解出来ない。荷物が少ない方が移動の際効率が良いと言うのに。ただ、女は準備と片付けに時間をかけるということは経験したことがある。

――――（正直、忘れたい経験だがな）

それは一年前の話になるが、とある商業都市で秘密裏にある貴族の四十代の婦人から依頼があった。

「夫が政界の著名人とコンタクトを持つ機会である宴に出席するとかこつけて、浮気をしている。自分も乗り込む為、同伴してほしい」という依頼だった。

何故、傭兵である自分だったのかは推測の域を出ないが、一番有力だったのはあまり表沙汰にしたくなくて、あえて関係者ではなく無関係の傭兵を雇いたかったのだろう。

また、これは彼自身知らないことだが、貴族婦人は華やかなパーティーに向けて外面も重要視していたらしく、都市内に居た傭兵の中で最も良かったゼスに白羽の矢が立ったのである。

報酬が良く、楽そうな仕事だったと当時の彼は受けたものだが、

後になって後悔の連続だった。

まず身だしなみや立ち振舞いから五月蠅くチェックされ、パーティ用の衣装を着るのに苦労し、婦人の準備を長時間待たされ、彼女の着るコルセットが入りきらず小言を聞きながら手伝わされたり、いざパーティに入れば余計な事は喋らなくて良いとか、ここは何かフォローすべきと、色々無理難題を押し付けられたものである。

極めつけは、本題である浮気現場だった。実際、夫は若い女性と共にパーティに来ており、その光景を見つけた婦人は怒り心頭になって、その場は泥沼修羅場となった。

夫は自分の事を棚に上げて、婦人と共に居たゼスを嫌らしく非難してきたり、色々罵詈雑言を浴びせた。

結局、夫婦は別れる事になり、紆余曲折がありながらも依頼は達成したかに見えた。

しかし、屋敷に帰った直後、飲み物に睡眠薬を入れられたり、婦人が夫と正式に別れたのをよい事にツバメであるゼスに色目を使い始めたり、妖しい道具を手に持った彼女のお仲間が何やら出てきて、身の危険を感じたゼスは報酬を受け取ること無く、都市から逃げたしたのだ。

所謂、彼自身の黒歴史、その顛末だった。

――――（思い出しただけで震えてきたな。何かで気を逸らさねば）

茂みの奥からの衣擦れを聞きながら、暇つぶしに地図を開いて今後の予定を確認する。

地図を見てみると、聖都から目的地の鉱山町まで、現在地のイザーク森林で全体の三分の二を踏破したことになっている。この分ならば、明日の夕方前には到着は確実と言えるだろう。

その時間に到着するなら、明日は早起きして早めに大森林を抜けたほうが良い。明日も迷子にならずに順調に森を出れるとは限らな

い為だ。特にシェリーは信頼できる付き人もなしに自分の力で外に出るのは初めてと見受けられるし、少し目を離せば途端に迷いかねないだろう。

その後は丘陵が続く荒野へと出る。

高低差があるのかどうか不明だが、あるとすれば森で神経を使った分そこで体力を消耗される。効率のいい動きをしないと速度は落ちてしまいかねない。いざとなれば、シェリーは馬に乗せるのが良いのだが、果たして頭が堅そうな彼女にその言葉が通じるかどうか。

ゼスは頭の中で描いた計画に嘆息していると、ようやく着替え終わったシェリーが茂みから出てきた。

「もう、動いていいわよ。って、地図を広げていたのね。どこまで行ったんだろう」

「……君は野宿を何だと思っていたんだ？」

地図を見下ろす為に出てきたシェリーの格好に、ゼスは眼を丸くした。

彼女の装いは白を基調とし、首元に模様――――家紋なのか、金の刺繍が施された上質なシルクのパジャマだった。とても外で寝る格好とは思えず、どうやら彼女は普段の生活と一緒に考えて着替えを用意してきたらしい。

「え？　寝る時って、私はいつもこれだけど？」

「寝る時がいつもどこか建物の中のような口調で言われてもな……」

それから二人は明日の経路を確認しつつ、移動中に木々から採集したアイノールという酸味が味わいの木の実と乾パン、動物などを狩猟し、それを捌いて火を通した煮物に、そして水を夕食にして、

早めに休むことにした。
二人は大樹を挟む形で毛布二枚を地面に敷き、その間に入って就寝する事になる。夜の森林は異常に寒くなるが、シェリーの結界術式で結界内の温度は一定に保たれるのが、非常に助かる利点だ。

ゼスが毛布に入って横になろうとした時、大樹の奥からシェリーの顔が覗く。その表情は先ほどの着替えに行く前と同じ、警戒心を露わにしていた。

「良い！？　絶対にこの樹を超えちゃ駄目よ！　もし間違って越えてもコロスから」
「……。前にも同じような台詞を言ったよな？」
「それはそれ、これはこれ、よ！」
「……その警戒した表情もなんとかならんか？」
「アンタが私の完璧な容姿に目が眩んで、寝ている隙に獣にならないとも限らないからよ。越えた瞬間に処刑確定よ」
「俺が君を襲うと？」
「その可能性が高い……いえ、もう確実に襲うわね！」
「……君を闇討ちして、俺に何か得があるのか？」

ゼスの他意の無い言葉を聞き、シェリーは驚きの表情を露わにして、次第にしどろもどろな口調になっていく。

「あ……え、えぇ～と……。闇討ちじゃなくて、夜ば――じゃなくて、その……」

顔を真っ赤に染め上げ、視線を彷徨わせる。やがてその詰まりが耐えきれなくなったのか、一瞬ゼスを睨みつけると、大樹の奥に引っ込んだ。

「とにかく、私が寝てるからって変な事はしないでよ！」
「……何が言いたかったんだ？」
「お休み！」

それ以上の会話は不毛とばかりに大声で遮ったシェリーは、樹から顔を出さずに毛布の中に潜り込んだ。
最後まで彼女の話を理解できないまま、ゼスはうつ伏せで横になって毛布を掛ける。
自分の両手を枕代わりにして、樹幹に沿って見上げた。伸びる幾本もの枝に生えるかなり葉が夜空を遮っているが、僅かな隙間から星の煌めきが見える。
闇夜に浮かぶ、僅かな光。全てが暗闇だからこそ美しく、目立つものもある。それが、幾重もの光を放ち、幻想的な光景を生み出していた。一つひとつの煌めきは闇の帳では小さいものの、その数だけ輝きを増していくようだ。
まるで、周りが絶望の闇によって捕われても、人の数だけの希望で、一人の光が増すように。
その光景を気まぐれに思い描いて、ゼスは右手を虚空に伸ばす。掌に覆われる光、しかし届きそうで届かない。それは、一条の光をその手で掴み取りたいように、腕を伸ばしていく。

それを鼻で笑い、ゼスはゆっくりと右腕を下ろした。
何と無駄な努力なのだろう、と代弁するように力なく下ろした右手は地面へと堕ちる。
しかし、その鋭い目つきを決してその星の光から逸らす事は無い。目指すべき目標を見失わず、ただ進む努力を惜しまずに日々を過ごしていく。そのような力強い意志が放たれていた。

――――そうして、何十分の時間が経ったろうか。

「――ねぇ、ゼス。起きてる……？」

不意に大樹の奥で横になっている、シェリーの消え入るような声が聞こえてきた。

恐らく、初めての長旅に緊張の糸が切れ、気持ちが軽くなっているのだろう。

ゼスと同じく仰向けになっている彼女はどこか物憂げな表情であった。同じように星空を見上げようとして、木々の葉で遮られて所在なさげな瞳が僅かに揺れている。

同僚の声を聞いたゼスは横になったまま、樹幹の奥に居るであろうシェリーに視線を向けた。

「俺は起きているな。何かあったか？」

「いえ、大した用事じゃないわ。初めての外での泊まりに、少し……眠れなくて」

「子供っぽい傾向だな」

「……」

馴れない場所――例えば旅行で宿屋など――に、それに赤の他人と寝泊まりすると、心の中が僅かに興奮して眠気が来ない、そんな様子によく似ている。子供の時によくある事だが、それをゼスはハッキリと言い切る。

当然子供だな、と言われたシェリーは押し黙って、冷めた目つきで樹幹の向こうに居る銀髪の青年を睨みつけた。

何だか幻想的な光景の下での雰囲気が台無しだった。

「ふぅ、もう疲れて怒る気にもなれないわ。疲れるのは覚悟していたけど、ここまでとは少し予想外だった」

嘆息し、呆れた表情でシェリーは言う。

ゼスはその言葉に変わらぬ様子で答える。

「嫌になったら帰っても構わんのだが」

「冗談。臨んできた事だもの。ここで諦めるなんて出来るはずもないわ。むしろ後悔なんてないわよ」

バカにしないで頂戴、と突き刺す物言いで返すシェリー。

「……まぁ、それは良いとして」

仕切り直すようにコホンと咳をする。

ゼスは切り替わった空気に、首を傾げた。

「何だ？」

「眠気が来るまで良い機会だから、話でもしましょう」

「俺が話せる話題など、そうそう無いのだがな」

僅かに嫌そうに眉を潜めたゼスだが、相手はそれを許さない。

「大丈夫よ。アンタでも話せる話題にするから」

軽い口調で言ってから、その話題を口にする。

「ゼスは、どうして騎士になったの？」

単純明快な問いだった。

ゼスでも話せる話題、経験した彼の行動、頭に過ったその理由。

それを改めてシェリーは訊ねていた。

銀髪の男は、彼女が訊ねた内容を頭の中で反芻し、訝しんだ声で、

「……何故それを訊ねる？」と、質問で返した。
「別に。今まで詳しい理由とか聞いてなかったから、気になって訊ねただけよ」

ゼスは、彼女の質問に思案に暮れる事になった。
最初に自分と会った時は同じ思想を持つ男だと思っていたらしいのだが、その昔は傭兵として世界中を放浪としていた、という話は違和感を抱かせただろう。この二週間、共に行動していて、ゼスが決してシェリーと同じ理想の騎士を目指してはいない、と悟らざるを得ない。
それを思い至らせた切っ掛けは、聖都の巡回警備の際に奴隷達を見かけた時に取った、彼の行動だ。
目の前にいる人間を救うより、後顧の憂い無くより多くの人間を救った方が効率が良い、という言葉。しかし、その多くの中にあの時見かけた奴隷達が含まれているとは限らない。助ける時には、彼らは手遅れになっている可能性も十分に考えられた。
助ける意志は感じられても、将来を見据えての小より大を取ろうとする行動方針。決して、関係無く全てを取ろうとする思想とは違うものだった。共感できるものではなかったが、ならば何故どんな気持ちでゼスは騎士になろうとしたのか。
彼女は、それが一番前々から気になって、思い切って訊ねたのであろう。

彼女と初めて会った際、軽い話題でこの問いに答える機会はあったが、その時は彼女が勝手に勘違いをしていた。そんな彼女に自分の志望動機を本当に話して良いものか悩み、結局その話は流れている。
しかし、今回はそうではない。シェリーはあの時とは違い、本当に理由を知りたがっており、かつて交わされた考えは勘違いだと気付いたのだろう。

これは言い訳はできないな、とゼスは観念して、その理由を口にし始める。

「――単刀直入に言えば、安定した生活を得たかったからだ」

その答えに、シェリーは呆気にとられた。

「――なんですって？」

「給料が良いから騎士になった。それだけだ」

「……あぁ、やはり空耳ではないわけね。で、お金の為だけに動いた元傭兵さんが騎士になろうとした切っ掛けってあるのかしら？」

若干冷めた物言いで、続きを促すシェリー。

彼女があまり驚かなかった事を理解しつつ、続きを聞きたがる様子に訝しみながら口を開く。

「俺がかつて傭兵だった事は話したな？　俺は各国を巡りながら、僅かな生計を立てる為に様々な仕事を請け負っていた」

あらゆる土地を越え、あらゆる国と関わりながら、彼は傭兵として生きていた。

時に捜し物をし、時に魔物を退治し、時に用心棒を引き受け、時に人を殺した。依頼人に騙され、追われる身になった事もある。

しかし、彼にとってはこの上ない天職でもあった。それまで生きる為に戦い続けた彼が取れる道はそれしかなく、また馴れきった事で何の失敗もなかった。

「俺はかなり傭兵寄りだったかもしれないな。だが、それも生きるには厳しすぎる環境であった事も確かだ」

過去を引き合いに出せば、かつて同業者と共に依頼を引き受けた彼は、依頼の目的であるとある凶悪な魔物を退治することに成功した時だ。

その魔物は巨大で、特殊な毒を吐き出す危険種であった。

退治に成功した彼らだったが、同行者の一人が魔物の毒に冒されてしまう。

達成報告と共に、他の同行者が依頼人に仲間の治療をして欲しいと頼んだ。解毒するには、彼ら傭兵たちでは買えない額の薬を入手する必要があったが、それさえ飲めば必ず助けられた筈だった。

しかし、依頼人はかなりの臆病者だった。当時、魔物の毒は感染症で、肌に触れるとその者も感染してしまう、という噂が根強かった。無論、実際はそんな事が無い偏見だったが、傭兵の一人に毒を持っていると知った依頼主が感染を恐れ、報奨金だけ投げてそのまま帰ってくれ、と顔を合せなかった。

結果的に報酬では薬一つ買えず、毒に冒された傭兵は暫くして息を引き取ってしまった。その事に他の傭兵が依頼人に殴り込みを行おうとしたが、相手が貴族だった事や、警備の兵士が控えていた事もあって、それは留めざるを得なかったのである。

その時、ゼスは悟った。傭兵はその場限りの契約でその後の保障など何もない。自分もいつかはそうなるとも限らない、保障も何もなく成功した恩恵を受ける事もなく死んでしまう事は避けられないのだと。

そこまで話を聞いたシェリーは、そこで話を打ち切る。

「なら、どうして傭兵以外の全うな職に就こうとしなかったの？アンタほどの長身と力があれば、雇ってくれる場所がそれなりにあると思うわよ？」

彼女の意見はごく自然な考え方だ。
戦うだけ、それも人の命を奪う事も辞さない傭兵稼業は、常に綱渡り状態の職業だ。それに比べて、接客業や飲食店のアルバイト、工事など職業は保障はあるのだし、怪我した時は国によって労災保険の適用もある。何より、平和的だ。人と触れ合い語り合い、決して傷つけあう事もない。
それはシェリーだけでなく、誰もが言う事だろう。

「……それはできない。俺は、どの職業からも受け入れられなかったからな」

しかし、ゼスはそのまともな助言を、首を振って否定した。
その言葉に、シェリーは驚きの表情を露わにするしかなかった。
何故、と。

「俺はある事情で常にどんな時でも、この大剣を肌身離さず身につけなければならない。手放す時、それは俺が死ぬ時だけだ」
「そ、それは先程とどういう関係が……？」
「つまり、仕事中でも剣を背負うという行為自体がどこも嫌われた、ということだな」

ゼスは人生で一度も、今麻袋に包まれている漆黒の大剣を手放さない。例え寝る時も、風呂に入る時もまるで身体の一部であるかのように持ち込むのだという。
そして、全うな職で剣を背負ったまま就くというのは、仕事仲間や客に威圧感を与え、多大な影響を及ぼしてしまう。面接官もそれを聞いて剣はどこかに預ければ良いだろう、と説得をしてもゼスは聞く耳を持たなかった為に、彼を不採用にせざるを得なかった。
傍から聞けば馬鹿馬鹿しい話である。
しかし、ゼスが彼の持つ大剣に抱く愛着――――否、異常な執着を

込めた説明に、即座に抗議する事をシェリーはしなかった。

「その大剣、なんなの？　あの反魔働術式もその大剣の能力だと言うし、それ自体の破壊力も尋常じゃないわ。一体、それはアンタにとって何なの……？」

それはどこで手に入れたの、とシェリーは訊ねざるを得ない。鋭い視線が、大樹を通してゼスへと突き刺さる。

「――これは、俺が俺である為の、唯一の物だ。俺の生涯はこの剣と共にあり、この剣無くして、俺の生涯に意味は無し」

まるで大きな予言を謳うかのように、その手に噂の大剣を持ち上げて仰々しく問いに答えるゼス。

その意味深な答えに、シェリーは真剣な表情へと変える。

「それはつまり、その剣が無いと、ゼスはゼスでなくなってしまう、ということ？」

「……ああ」

「もっと言えば、過去その剣を失くしていたら、アンタは今ここに居ないという事？」

「ああ」

二つ目の答えが即答だったことに、シェリーは息を呑む。

この話で、彼の過去はその剣が関わっており、彼は大剣に異常な執着を持っていることには間違いない。

過去、彼がどんな境遇かはシェリーは知らないし、履歴書でも一切不明。

シェリーが一回咳払いをして話を切った。

「話を戻すわ。アンタは大剣を手放さない姿勢で職に就けず、世界を放浪しながら不安定な傭兵稼業を続けていたわけね。それで、唯一安定な生活を得るために見つけた職が、騎士――つまり、“蒼衣の騎士団”に入団する事だった」

浮かぶ疑問は答えを聞くたびに思い浮かばせるだろうが、シェリーはこの件に関してもう追及しなかった。ゼスが遠まわしに答えたということは、これ以上は触れられたくない話題だと直感で彼女は理解してくれた。

「その通りだな」

「でも、アンタが奴隷達を助けると言ったのは、どんな気持ちでそう言ったの？　安定した生活があると言っても、それは騎士としての言葉なの？」

「それとは全く関係なしに、それが効率は良かっただけの事だ。あの時、冷静さを失った君を止めるには、リスクの少ない多くの人間が救われる道を取った方が良いと思ったからだ」

一見、彼は人を守る騎士の姿勢を持っていない。騎士であって、傭兵寄りの姿勢を隠すことなく露呈する。

元々彼に、騎士道精神や良心の呵責等とは無縁のものだった。それに殉ずるより、生きて多くの利益を得る人生ばかりだったのだ。

ただそれでも、戦うことしかできなかった彼は、不安定な生活の傭兵稼業を全うするしかなかった。生きる知恵を働かせ、あらゆる戦闘技術を身に付け、時には勝つ為に裏切りや騙し打ちすらもいとわなかった。

そんな彼が安定した生活を得る為、という口実で騎士になったとしても、一度形作られた思想はそう簡単には覆せられないものだ。

いずれ同僚にはバレる事でもある。ゼスは、自らの本心をこれを機に打ち明けたのだった。

第十四話　「野宿」（後書き）

‥ゼスは過去のマダムを思い出してしまった！　ゼスに１０００の精神的ダメージ！

ゼスとシェリーはアイノール、乾パン、鹿肉の煮物、水を美味しくいただきました！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

第十五話　「切っ掛けと夢」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第十五話　「切っ掛けと夢」

――――同日２１時０３分

同僚の騎士になった動機を聞いてシェリーが考えを巡らそうとした時、間髪入れずにゼスが言を紡いだ。

「むしろ解せないのは俺の方だ」

「……？」

シェリーが首を傾げる。一体何の話であろうか、と。

「君は今後の事も考えず、目に映る苦しむ人をその場で助けようとしたな。それにより負うリスク、その他多くの苦しむ人間を助ける機会が失われる事になろうとも。それどころか君は、全ての人を救う、それが騎士の理念であると言う。何故、君にその気持ちを抱かせた？　君を突き動かすものは何だ？」

彼は問う、汝は何故騎士を目指した、と。

一国の大貴族である令嬢が、その豪勢で優雅な道を棄ててまで、武の道を志したのは一体何が原因か。ゼスの実力に迫る、女性としては秀逸した実力を持ち、その動力源はどこからきているのか。

それは、ゼスがシェリーの立場を知ってからの疑問だった。

聖王国――――否、どの国でも選民意識の強い貴族というのは数多くいた。自らの地位を誇りに思い、下流の民を見下す傾向にある、

というのはゼスは感じていた。下流の民でもある彼自身も、その事を直に経験して貴族の事は嫌悪感を抱いている。

だが、貴族令嬢だと言うシェリーはどうだろうか。貴族特有の選民意識も無ければ、下流の民も含めて全ての人間を救いたいが為に、騎士になったという。お人よしだから、の一言で済まされる性格だが、彼女の行動理念はそれ以上だと感じている。貴族らしからぬ言動は、何か理由がある筈だ、と。

彼女が何故騎士になったか、そう訊ねた時は確かに良い機会だな、とゼスはこれまでの疑問を投げかけたのだ。

「私が、騎士になった理由、全ての人を救いたいと願う事になった原因、ね……」

シェリーが目を細め、その声音からまるで懐かしい過去を思い出すような、郷愁の気持ちを感じさせた。

「ま、私だけ応えてもらっては不公平だもの。ただ、その為には切っ掛けを話さないといけないわね――」

＊＊＊＊＊＊＊＊

――今から九年ほど前。私、シェリー・アイオライト＝ブランシェが当時八歳の出来事よ。

当時聖王国は、帝国と連邦の二大国家による衝突の激しさに少しずつ巻き込まれつつあった時代。

私はそれまでは、聖王国に仕える大貴族アイオライト家の娘として、普通に暮らしていたわ。普通に嗜みの範囲で剣の扱いを習っていたし、貴族らしい行事もこなし始めた年齢だった。

ある日、二大国家を含めた各国との首脳会談が聖王国で開かれたの。その夜には饗宴の場も設けられていたわ。

その当時、聖王国は外交として各国とのコネクションを維持し、広げる事が目的で集めたのよ。私から見れば、“元老院会”の貴族達で必死に媚びている思えたわね。大国に狙われない為にも、仕方のない事だとは思うけれど。

私は父上と母上と共に宴に参列する事になった。正直に言えば、あの時ほど緊張した事は無かったわ。なにせ外国の権力者が一堂に会する場だったんですもの。粗相がないように振る舞うのが精一杯だったわ。

そんな華やかな宴に、それは起こった……。

蒼衣の騎士団所属のある一人の高名な騎士が自らの小隊を伴ってクーデターを起こしたのは。

動機は単純なものだったわ。相次ぐ貴族腐敗とおざなりにされる下流の都民達、そして各国にみっともなく媚びる聖王国を憂いての事だった。

その場は流血と悲鳴の場にとって変わられた。前国家元首である国王陛下が殺され、首脳達も怪我を負った。彼らの傍には信を置く騎士が控えていたけれど、首謀者は前々から年密な計画を立てていたのか、僅かな一瞬だけ足止めをされて、事態を防ぐ事が出来なかった。

影響は参列した参加者にもおよび、私の母上も斬られて亡くなった。羨望の的であるはずの蒼い衣の騎士がその剣を振り上げて、傍に居た私も母上と同じ道を行く寸前だったわ。

――その瞬間、迫りくる剣をある一人の紅い色をした基調の制服の上に、漆黒の鎧を着こなした男性が遮って、私を助けてくれたの。彼は帝国の人間で、その国の君主に仕える騎士だった。漆黒の鎧なのに、逆に綺麗な銀の髪が映える、物凄く強くて輝くような騎士よ。

彼は反乱の騎士をその圧倒的な剣技で返り討ちにして、駆けつけた各国の騎士達と共に瞬く間に一個小隊もの反乱を鎮圧した。

静けさを取り戻した会場で、冷たくなった母上をその銀髪の紅い騎士は律儀に弔(とむら)ってくれたわ。

その時、私は思わず問うたの。

“「どうして主に仕える騎士が、外国の人間まで守ろうとしたの？」”

――って。

彼、なんて言ったと思う？

――“「それも騎士だからだ」”

たったその一言で説明したのよ。単純すぎて、今にして思えば笑いそうになる言葉だった。

でもあの時、私にとって衝撃的な言葉だったのよ。彼が考える騎士は、君主に忠義を誓い、その力と心の強さで国と人を護る存在だって。

母上を喪った悲しみも相まって、私は死んだ首謀者の騎士と、母上の様な存在を生みださない、国と人を護れるあの人のような騎士になろうって決めたの。

その頃から、ただの趣味だった剣の稽古に没頭し始めて、魔働術にも力を入れて着々と魔力を制御するようになったわ。大きくなった時は騎士に入れる実力と自信も手に入れて、父上に直談判すらし

たわ。
　これが、私が騎士になった経緯よ――――。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　過去の出来事を話し終えたシェリーは一端息を整えた。
「ちなみに、あの一件で帝国と聖王国は一時期冷戦状態に陥ったわ。他国の宴で国家元首が死にかけたんですもの、報復として武装蜂起しようとするのは無理ないわ。主権を受け継いだ女王陛下の気苦労は絶えなかった事でしょうね」

　結果的に聖王国と帝国が衝突する事は回避されたものの、それまでどのような和平交渉がなされたか、現在は床に伏せっているヴィレア女王だけが知る。
　その話に、ゼスはさらなる疑問を投げかけた。
「話は判った。だが、君の会ったという銀髪の騎士というのは何者だ？」
「話した通り、帝国に仕える騎士よ。皇帝からも結構信を置く実力派みたいだったわ。外見は……そう、ゼスみたいな立派な銀色の髪だったわ。と言っても、彼の髪はまるで絹のように長かったけれど。だから、ゼスを初めて見た時は、あの人の髪に似た人だ、って思ってつい気になったのよね」
「……その男はどうなった？　他に何かなかったか？」
「う～ん、何分幼かったし、母上を喪った直後だったから髪しか印

象に残っていないわ。あの後直ぐに避難する君主の後を追ったから、名前を訊く暇も無かったし……」

今はどうなっているのかしら、と呟くシェリー。

そして、短い銀髪の青年は、自らの髪に触れて無造作に弄っていた。

「……」

彼は、シェリーの過去を聞いて深い思案に暮れていたが。

――いや、不確定要素だな。今はよそう。

「どうしたの？　急に黙りこんで」

「気にするな。しかし、そうか……。君は母親を喪ったのだな」

「ええ……。良い母上だったわ。それが私の将来を決定付けたのは、皮肉としか言い様がないけれど」

シェリーは哀愁を帯びた表情を露わにして、目を向けた天の先に居る女神の元へと逝った母親に祈りを捧げる。

「――これが、私の騎士になった理由の全てよ。判ってくれたかしら？」

「ああ……」

その後に一拍おいてから。

「まるで夢見る乙女らしい理由だったので、驚い――ッ！？」

シェリーから割った木の実が放物線を描いて飛んできて、ゼスの股間へと正確に直撃した。

奥からフン、という息が聞こえた。

「……な、なにを――」

「アンタがそんな感想を言うと、何かバカにされたように感じるのよね」

「別にバカにしたつもりはないがな……」

「ああそう。ということは素で言ったわけね。ま、それならまだ許せるけれど、今のは少しは自重しなさい、というメッセージよ」

「？？？」

言っている意味が判らない、とゼスはひたすら首を傾げるしかなかった。

それきり、二人が居る場は静寂に包まれる。

森の奥から響く蟲の鳴き声だけが響き渡り、話題にキリがいった会話はそこで終わって、二人の声は響かない。

しかし、シェリーが新たな話題を持ち出す。

「そういえば、これを訊こうか迷っていたんだけれど、良い機会だから……。ゼス、アンタは私の事、初めて会った時から一度も名前で呼んだ事、無いわよね？」

その瞬間、場の空気が変わったように感じられた。

それが、ゼスの反応が露骨に変わったとシェリーに理解させた。

「私は、『アンタ』と呼ぶ事もあれば、『ゼス』と呼ぶ事もある。アンタは、私の事はいつも『君』と呼んでいるわ。でも、一度も『シェリー』と呼んだ事は無い。でも、隊長には時々『アサラム隊長』と呼ぶ事があったわ。この違いはなんなの？」

「――――――」

ゼスは答えない。訊ねられているのに答えようとしない。
しかし、彼の思考はその言葉の真意を測っていた。
――成程。ただの感情的なボクお嬢様と思っていたが、あの戦いから見てもどうやら勘は人一倍に鋭いらしいな……。
静寂に業を煮やしたシェリーが起き上がって、樹の奥で横になっている銀髪の青年に視線を突きさす。

「アンタは意図的に、私の名前を呼ばないわよね。それは何故？私が“貴族”の出だから？　アンタが私を“同僚”として認めていないから？　それとも……ボクの事を、気に入らないからなの？」
「――それは全く関係が無い。君が考えている推測に準じた事も、俺が抱く君の印象も、関係無いな」

いつも通りの達観したような口調で横になったまま答えるゼス。
その際、一度もシェリーに振り向く事は無い。
シェリーはその答えに納得しなかった。

「なら、どうしてアンタは名前で呼んでくれないの……？」
「――。……明日は早い、今日はもう休め」

ゼスの身体が身じろぐ。話は終わり、今から寝るとばかりに。

「ゼス！　まだ話は――」
「明日は陽が昇る前には起きる。今から休んでおかないと、荒野越えは厳しいぞ？　睡眠時間を減らして先にバテたら、今度こそ自業自得で置いて行くぞ」
「……」

ゼスはまた、分の悪い話題をはぐらかす道を選んだ。
正直言って、自分が彼女の名前を呼ばない理由は分かりきってい

る。しかし、単純だが見方を変えれば非常に難解な事なのだ。それを答えても彼女は理解を示すだろうか。
しかし、既に時間は夜遅い。最初に寝ると決まってから、かなりの時間が経っている。
これ以上起きたら明日の体力が持たない。それは本末転倒だ。
シェリーもゼスの言わんとしていた事を思い至ったのか、俯かせたまま横になる。

「……解ったわ。遅くまで付き合ってくれて有難う。お休みなさい……――――」
「――――ああ」

シェリーはそれ以上言葉にする事が無いまま、静かに毛布に包まった。
その気配を感じていたゼスは、どこか遠いところを見つめるような眼をしていた。
そうして、彼は瞼を閉じて、その意識も闇の帳に閉ざしていった――――。

＊＊＊＊＊

周囲は紅く。渦巻く圧倒的な熱量は全てを焦し、そして焼き尽くす。
天井を支配するは黒。不吉な闇のように、黒々とした天雲。

――――ここは……。

その場所に、銀髪の青年は立っていた。
可笑しい。自分は森の中で眠っていたはずなのに。どうしてこんなに周囲は燃えているのだろう。
ああ、そうか……。寝ているからこれは夢なのだ。夢に違いない。他に誰もいないし、音も炎が焦すナニかの音しか聞こえない。何故なら、そうでもなければ――

――俺が見えている血痕が、流れ落ちているわけがないのだから。

燃え盛る炎の内側、彼の周囲に点在する、いくつもの紅い水溜り。これは、何時頃落ちたものだろうか。もっと前か、それともついさっきか。
青年はただ呆然とその光景を眺めていると――

「――――や……て……！」

――この声は！？

耳に聞こえた青年は一目散に駆け出す。声がした方向へと、真っ直ぐに。
長い長い道を駆け、青年の息は周囲からの熱量と相まって息を激しく乱す。
そうして、声が徐々に鮮明になり、その光景が視界に飛び込んできた。

――――！？

それは、栗色をした長い髪の少女が、全身を漆黒に染めた彼女と同い年くらいの体格をするナニかに倒され、馬乗りにされた光景だ

った。

「や……だ……やだ……やめ……て……痛い……痛いよ……」

嗚咽が混じった声に、頬を濡らす水滴。少女の衣服は引き千切られ、身体から紅い液体が流れている。

「……っ……お……お願……い……助け……て……苦し」

自分の上に乗っている黒いものに、必死に手を伸ばす少女。

彼女が目指す先には。

――ま、まさか……。

青年は愕然とした。

あの少女の事は知っている。その少女は――で、実際は――になって。

そしてあの全身を黒く染めている者。その輪郭は見知っていた。

あまりにも馴染みすぎる、その風貌と体格。

――よ、よせ……。やめろ――！

まるで、子供だった自分が陽に照らされた、全くそのままの姿をした影のようで。

影は、その手に漆黒の大きな剣を両手に持ち、その切っ先を少女に向けていて――。

――「やめろ……そうじゃない。違う。こんなのはな――」

漆黒の人影は口元の白い歯を大きく見せて、一気にその両手を振

り下ろして。

――――「止まれ……！　殺すんじゃない。殺すな、殺すなぁあああああああああああああああああああああああ……ッ！」

「……ゼス、ゼス！　しっかりして、ゼスッ！」

「ッ――――！」

身体を揺すられながら、目を開けたゼスはその詰まった息を一気に吐き出した。

視界に入って来たのはまだ薄暗い原生林群。そして、黒髪を垂らして顔を覗き込んでいる、同じ騎士であるシェリーの姿。

「大丈夫なの！？　気をしっかり持って！」

彼女の表情は緊迫した雰囲気を露わにしている。

一体何故彼女が、自分に向かってそのような顔をしているのか、目が覚めたばかりのゼスには見当がつかなかった。

「……俺、は」

「目が、覚めたみたい、ね？」

「……何故、君が……」

ここに居る、と。

確か自分は夢の中で紅い色を見て――――。

「何って……それはこっちの台詞よ。急にアンタが大声を出してうなされていたから、急いで起きて声をかけたんだから」

「……うなされて、いた？」
「ええ。あまりの具合に暴れ出しそうな勢いで……。しきりに『やめろ』って苦しそうに言っていたわ」
「……」
荒れた息の整え、次第に落ち着きを取り戻していく。
「――俺は、どのくらい、寝ていた？」
「もう日の出前よ。あれから大分寝ていたと思うわ」
「……そうか。なら、もう起きないとな」
左手で目頭を押さえながら、ゆっくり起き上がるゼス。
その姿を、揺らめく双眸で何かを訴えようとする黒髪の少女。
「――悪い夢でも、見たの？」
何があったの、と問うた。気遣うようなひどく優しい言葉で。
「ああ……。見たくない、夢だったな」
下らなさそうに答える。
両目を抑えた左手は、痒みを取ろうとして力を入れた。
「アンタ、そんなに眼を掻いては駄目よ。目を悪くするわ」
慌ててシェリーが声を上げた。
ゼスはその言葉から左手を顔面から外して。その時には既に落ち着いた表情で、シェリーを一瞥する。
「すまない。つい、癖でな」

「……その癖、矯正した方がいいわよ、悪い事言わないから」
「ああ、そうした方が良いだろうな。だが、しかし――」

右手に持っていた麻袋に包まれた大剣と共に、ゼスは立ち上がる。森林の奥、これから向かう先へと真っ直ぐに視線を突き差しながら。

懐から取り出したナイフを投擲し、奥で樹に昇っていた蛇を一瞬で刺し仕留めた。それが、今回の朝食である。

「――俺が強くなれば。あんな夢も、癖も、もうすることはないな」

強い意志を込めた声が、森林の果てまで浸透していった。

――11月29日4時37分――残り、1カ月と2日、19時間23分

第十五話　「切っ掛けと夢」（後書き）

‥ゼスとシェリーのHPとMPが全回復した！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

第十六話　「鉱山町」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第十六話　「鉱山町」

あれから、数時間後。

替えの衣服から軽鎧へと着替えたシェリーと方角を確認したゼスは、イザーク森林を越える。

それと同等の広さを誇るサイアット荒野は高低差がある渓谷地帯だった。道中は突如として突風が吹き荒れたり、大型の鳥類魔物が急襲して来たり、とにかく今までの中では多くの疲労を被るような地区だった。

そして、二人は目的地である鉱山町タルテルドへと到着する。

――――11月29日15時51分
鉱山町タルテルド入口――――

「はぁ～～。やっと着いたわねぇ……」
「俺にとっては馴れた事だがな」

初めての長旅に心身ともに体力が吸い取られた娘と、六十ケアオリュもの道すら短いとばかりにピンピンしている青年。

炭坑や鉱山に囲まれ、煙突のある家が数多く並ぶ。基本的に油臭い町だが、岸壁に張り憑いている建物の屋上に金属板を貼り、町の通路として活用させており多重構造となっている為だ。これにより、谷間の中にある狭いスペースでも、コンパクトに確保し十分に動き回れる。また、宿屋や酒場もあり生活感が溢れている。奥にある入

り口は炭坑があり、鉱夫が詰めているようだ。
町を見下ろす形で見回す二人は、張り詰めた緊張からリラックスに身体を伸ばす。

「さて、まずは依頼人に接触することね。どこで待っているんだっけ？」

シェリーの言葉に、懐から一枚の紙を取り出すゼス。任務の詳細を記した書類だ。

「この町の町長のようだな。彼の自宅に行くのがいいだろうな」
「じゃあ、先ずはそこね。行きましょう」

馬の手綱を引き、坂道を降りて行く二人。途中で土を踏む音を発する地面から独特の金属音を発する金属板へと感触が変わっていく。

町中に降りると、安全メットを被った鉱夫達が鉱物を運びながら飛び交っている姿が多く見られた。また、見かけられたのは彼らだけでは無く、道具屋で生計をたてる青年や、仕事中の夫に弁当箱を持って行く女達、そして、冒険者と思しき者も見かけられた。
彼らはゼス達が騎士である事を認めると、羨望であったり、刺々しかったり、そんな眼差しを向けた。特に冒険者にとっては、騎士は厳格で法の象徴であるため、あまり友好的な印象がない。

途中で見かけた宿屋は比較的大きく、ここが一瞬町長宅だと思ったほどだ。だが、扉が両開きだった事や、人の出入りが激しい事からもその予想は外れている。
二人は近くの町の人間に町長宅の所在を訊ね、案内された場所に辿りついた。

「ごめんください。聖都から参りました、蒼衣の騎士団の者です」

シェリーが扉にノックして呼びかける。直ぐに中から反応があり、扉が開かれる。

現れたのは、壮年の女性だった。恐らく町長の奥さんなのだろう。

「お待ちしておりました。さぁ、どうぞ中へ。主人が、仕事の話はそちらでとのこと」

「はい。失礼します」

シェリーが一声かけ、ゼスも軽く一礼して後に続く。

中に入り、廊下を進むとリビングに出た。中央に広いテーブルに四方を囲んだ長椅子がある。普通の生活で使うほかに、来客があった場合に対応する席として機能しているようだ。

そこに座っている町長は七十代になったばかりの男性だ。鉱山の経営を一手に担っている。

「おぉ、よくいらっしゃったの。君達が……？」

「はい。聖都から参りました。蒼衣の騎士団第十七小隊所属のシェリーです。こちらが、同じ部隊のゼス」

「よろしく」

シェリーに紹介され、ゼスが簡単に挨拶を済ますと、町長は椅子から立ち上がる。

「ワザワザご足労かけてスマンかったのぉ。わしがこの鉱山町の町長じゃ。伝書鳩での連絡があったのは昨日じゃったが早かったの？徒歩での道中大丈夫じゃったか？」

「ええ。お待たせしてはいけないと、予定より早めに到着した次第です。道中なんの問題もなくこうして参上しました」

「やや、若いのに大した心がけじゃ。無理をせずとも急いで来る事もなかったのにのぉ。ま、立ち話もなんじゃ、今お茶を出すから座りたまえ」

町長に促されシェリー達は、失礼しますと長椅子に腰かける。

町長夫人が二人の前にお茶を置いて行き、それを切っ掛けに町長が話を始める。

「重ねて騎士の諸君にはこのような遠いところまで足労かけてくれた事を労おう。しかし、ふむ――――」

お茶を口に付けるシェリーと全く手をつけないゼスの二人の表情を窺うように、じっと見つめる町長。

それに反応したのはシェリーで、彼女は何事かと首を傾げる。

「あの……なにか？」

「あぁ、いやスマンの。若いのが来ると聞いていたが、ここまでの若者が来るとは思わなんじゃ。特に黒髪の娘さん――――シェリーさんだったかの？　まだ十代ではないかね？」

「ええ、十七歳です。確かにまだまだ若すぎる未熟者ではありますが、今回の依頼は精一杯臨む所存です」

黒髪の騎士は淑やかに微笑んで見せる。

シェリーの普段は、貴族の令嬢の振る舞いそのままに、騎士として大きく歩み寄る気持ちで接する。彼女の本性は今と似ても似つかない口調だが、それは一度その姿を見ているゼスだけが知っている。

町長は大いに感心した様子を見せた。

「いやいや、その歳で騎士とは大したもんじゃよ。徒歩でここまで来たのも実力のうちじゃ。そんなに卑下せんでもよい」

恐れ入ります、と黒髪を見せるように頭を下げるシェリー。
町長は頷き、続いてゼスへと目を向ける。

「そこのゼス殿も、実に良い体格をしておる。さぞかし、多くの仕事を経験していると見える」
「……昔から傭兵だからだな。それから騎士へと転向することになったわけだが」
「なんと。傭兵から騎士に取り入ってもらったのか。さぞかし高い能力をもっておるのじゃな」

ゼスの答えに、大きく驚く町長。
傭兵を経験した人間は、並大抵では騎士になれない。何故なら傭兵で一度戦場などを経験してしまうと、戦の思想が完全に固定化されてしまうからだ。常に厳格と法を順守する騎士としては、純粋な思想を持つ者を一から叩きこみたいのが理想なのだ。傭兵の思想が騎士の思想と相容れるとは必ずしも限らない。
そういう意味で、ゼスがそれに囚われない大きな実力を持っている事を理解した町長が驚くのも無理は無かった。

「成程。だとするとじゃ……年齢的にもゼス殿がシェリー殿より上のようじゃから、彼が世話係ということで付き添っているのじゃな？」
「っ……ごほっ、ごほっ！」

シェリーが飲んでいたお茶を咽る。

「おや、違ったのかの？」
「え、ええ……。彼とは、同僚です」

なるほどのぉ、と町長はいたく納得した様子だった。
口元を僅かに汚したシェリーは町長夫人からナプキンを貰い、両手で拭っていく。
横目で一瞥したゼスは、僅かに口元を緩ませて、
「ふっ……、お世話係とは言い得て妙な。確かに、手のかかる子供で――――」
ギロっ、と睨みつけられたシェリーに呟いた口を閉ざした。
町長は何かを納得するように頷き続け、二人を交互に見定める。
「しかし、たった二人だけの騎士じゃが、どちらも期待できそうじゃな。傍から見れば仲の良い男女二人じゃし……。もしかして、職場内恋愛という奴かの？」
「ごほっごほっごほっ！？」
シェリーが今度は盛大に咽た。あまりの衝撃に呼吸が止まり、お茶が詰まってしまったからだ。
これには町長も意外とばかりに、表情が驚きに満ちた。
「おや、違ったかの？」
「ち、違いますよ！　彼は確かに同じ職場の同僚ですが、それ以上の関係ではないです。あ、あまり仲は良くないです、ええ」
そうかのぉ、と町長は納得いっていない顔をしているが、シェリーは渋い顔をするしかなかった。
「そうだな。俺にとって彼女はただの乱暴なだけの――――っ！？」
恋人説を失笑に伏そうとして口にしようとしたゼスは、シェリー

の鋭い踵で足を踏まれた。
そこへ、三人を窘めるように、町長夫人が席に腰掛ける。

「こらこらお前さん。あんまり若い人たちをからかっちゃダメですよ。そろそろ本題に入ってはどうです？」
「おお、そうじゃったなスマンスマン。早速任務の詳細を説明しても良いかね？」

苦笑しながら町長はお茶を啜る。
顔を強張らせたゼスを余所に、シェリーも苦笑しながらそれに応じた。

「え、ええ。お願いします」
「うむ。知っての通り、今回騎士団に依頼したのは『鉱物を聖都まで輸送護衛』じゃ。普段は冒険者達に頼んで護衛してもらうのじゃが、最近魔物が凶暴化しているのも含めて、山賊が鉱物を狙って襲撃する事も多くなってきての。冒険者だけでは間に合わんのじゃ」
「奪った鉱物は裏ルートで高く転売されるとか？」
「うむ、その通り。無論、その資金はわしらには渡らぬから、奪われたと言っても良い。そうなれば多大な損失を生みだすんじゃ。これが長く続けば、鉱員達の生活も立ち行かなくなるじゃろう」
「同時に、鉱物の発掘意欲が無くなり、仕事にもならなくなる可能性もある。そういうことですね……？」

その通りじゃ、と町長はシェリーの問いに肯定する。
彼の真横に座る町長夫人が困った顔で補足を加えた。

「これまでも、何度も輸送中に山賊達に襲われて、その何割かは奪われているんです。それが巡り巡って、裏ルートで国外で高く売買されていると聞いた時はショックだったの」

「そうでしたか。心中をお察しします……」

姿勢を正して語気を僅かに下げるシェリー。

町長が話を続けた。

「現れる山賊達はその風貌から警備隊が調査したところ、この地区を根城にしている“山紅猫団”じゃ。チンピラ共が寄ってたかった数多い集団だが、一人の錬度は大したこと無いらしい」

烏合の衆なのだな、とゼスは推測する。

数の多さで圧倒的に優位になり、その数にものを言わせて恫喝する。恐らく、一人の戦闘経験は少ない筈だ。ゼスは勿論、騎士団なら引けを取らないだろう。

「成程。冒険者より、錬度の高い騎士団に護衛依頼をしたというわけだな？」

「ああ、その通りじゃ。お前さんら相手なら、山賊共を追い払えるじゃろう。何より、信用も出来るからな」

「騎士団に依頼する金額は冒険者のソレとは高くなりますが、鉱員たちの生活もかかっていますので……」

町長と夫人の言葉を聞き、シェリーは満足げにうなずく。

「判りました。この依頼を承ります。必ずや、鉱員達の生活を保証致します」

「おぉ、そうか！　有難う、助かるのぉ！」

町長が感激したように、テーブルから身を乗り出してシェリーと握手を交わす。

「いえ……無事に送り届けられるかは判りませんが、最善を尽くさせていただきます」

それから数時間かけて、四人は明日の護送に関する段取りを話し合っていく。

荷馬車の走行ルートの選択、同行者の詳細、ゼス達の方針、襲撃された際の対応や注意などを深く話し合う。

全てが話し終わった時には、町長宅の窓から橙色の光が差し込んできた頃合いだった。

有難うございました、と席を立つシェリーが荷物を手に持った。

「早速、今から準備しますので搬送物を用意してもらっても良いですか？」

「おぉ、それには及ばんぞ。搬送物と荷馬車などの準備は全てこちらがしておくから、お前さん達は宿屋でお休みになってくだされ」

「え？　そ、そういうわけには――」

シェリーが困惑の表情で慌てて首を振った。

町長をフォローするように、夫人も口をそろえる。

「貴方達は昨日からの長旅で疲れているでしょうに。それに、ハードな仕事を押しつけてしまうこちらの身としては、お二人にはぜひ万全の態勢で臨んでもらいたい、というのもありますから」

「ん、まぁその通りだな」

ゼスも夫人の言葉に至極納得していた。

特にシェリーは人生初めて野宿した身として、かなり披露している筈だ。馴れていかないといけないが、初めての時はどうしようもない。

シェリーは自らを納得させようと言い聞かせるように、鷹揚に答

えた。

「――ん……判りました。ここはお言葉に甘えさせて、今日はお世話になります」

「うむ、そうと決まれば早速準備をせねばの。わしは明日の用意をして来るから、お前さんは宿屋の手配を頼むぞ」

「はい。さぁ、皆さん。宿屋へと案内しますね」

町長夫人に促され、二人は席を立って町長に挨拶を交わしてから、彼女の後に続く。

町長宅を後にし、宿屋に寄る前に馬を馬小屋に連れて行き、そこに預けた後で二人は手分けして手荷物を持つ。再び町長夫人と合流し、馬小屋の向かいにある宿屋へと直行する。

既に辺りは夕日で橙色に染まり、鉱員達も終業となって、酒場に集まっている光景もある。

辿りついた宿屋に町長夫人が、気軽な感じで両開きの扉を開ける。彼女は宿屋の人間とは面識がある――町長の奥さんなのだから当然――ようだ。

宿屋に入ると一階のロビーと共に、二人の夫婦が受付前に立ち話をしていた。夫人の後に続いてゼス達が中に入った時に、夫婦が振り返る。

「おぉ、奥さん。御機嫌よう。今日は集会の日だったっけ？」

中年の男性が町長夫人を認めるや、首を傾げる。

「いいえ。実は今日は鉱物輸送の護衛をする為に到着された、二人の騎士様を連れて参りましたの」

「あら、そうだったのですか。ようこそ、『魁椋亭』へ。騎士様は、男女の二人組？」

「ええその通りよ。二人には別々の部屋を用意してくれる？」

判りました、と宿屋の女将はカウンターから離れて、二階の部屋へと向かう。

彼女を見届けてから、宿屋の主人は騎士の二人に視線を向ける。浮かべた表情は町長と同じく意外そうなものだ。

「この人たちが、鉱物を護送してくれる騎士達？　ずいぶん若いねぇ」

「ええ、うちの主人も大層驚いていたけれど、人は見かけにはよらないということを実感させられたの。まぁ、話してみれば解りますよ」

町長夫人が変わらぬ笑顔でそう言うと、促すようにゼス達と宿屋主人の間から離れる。

それをどうぞ話して、という意思表示と受け取ったシェリーが前に進み出た。

「ご紹介にあずかりました、蒼衣の騎士団第十七小隊所属のシェリーです」

「同僚の、ゼスだ。宜しく頼む」

シェリーの挨拶に合わせて、ゼスも続ける。

「おぉ、これはどうもご丁寧に」

「今晩は明日の護送の為に、町長さんの推薦も相まってここまでの疲れを癒やさせてもらおうと、一泊しに参った次第です」

「成程ねえ。そういう事情なら喜んで歓迎させてもらうよ。ああ、お代に関しては騎士団から諸費用として支給されるから必要ないよ」

「はい、お世話になります」

一礼するシェリー。
元々貴族令嬢である彼女は礼儀作法がしっかりしている為、基本的に一挙一動が実に優雅そのものだ。それに加えて輝く白銀の軽鎧と映える蒼い衣、そして艶やかな黒髪と整った顔立ちが普通の騎士というよりは美貌の戦乙女に見えて、主人は感嘆の息を漏らす。

「いやぁ、若くて礼儀正しく、しかも美しい騎士がこんな辺鄙な鉱山町に歩いて来てくれるとは恐れ入った。しかも、後ろに居る同僚さんも、良いガタイをしているようだし、これは確かに見かけによらんな」
「最近は魔物も凶暴化してきているというのに、それを怪我もなく来てくれている事も流石は騎士様と言えるの」
「違いねぇ」

その場に笑いがこぼれたその時、二階に行った女将が帰ってきて部屋の用意が出来たと報せる。
町長夫人から労いの言葉をかけられて別れの言葉を交わした後、ゼスとシェリーは女将に部屋を案内される。
道中、女将とも挨拶と自己紹介を交わしながら、歩くとカンカンと金属で出来た建築特有の床音が鳴り響く。二階に上がると廊下が続く。その両端には宿泊部屋の扉が立ち並んでいる。
二人は、廊下を渡って一番奥の部屋に案内された。

「こちらになります。左がゼス様の、右がシェリー様のお部屋となっております。荷物はそのまま部屋に置く事が出来ますが、貴重品は各々で管理して頂くようお願いします。夕食はお取りになりますか？」
「どうする、ゼス？」
「……食事代も諸費用から出されるのか？」

「諸費用からですと、こちらが決めたお食事しか出せず、お選びになる事ができませんが宜しいですか？」

女将の答えに、ゼスは即決だった。

シェリーはというと、金額より食事の内容が気になったらしく、それを質問した。

「基本的にこの鉱山町で珍しい魚介類の定食ではないものになります。鶏肉の串焼きとお野菜、スープとパンなどになっております」

「では、私もそれで」

「畏まりました。食堂は、カウンターの左隣にある階段を少し降りるとございます。営業終了時間二十二時、三十分前がラストオーダーになりますので、早めにお越しください」

女将の説明に頷く二人。

他に何かご質問はございますか、と女将が訊ね、二人は特にないと首を振った。

女将から部屋の鍵を受け取り、ゼスはシェリーの一部の荷物を返す。改めて、彼女の荷物がゼスより多いというのが判る量だ。

「では、ごゆっくりおくつろぎ下さい。何かありましたら、カウンターに居る私どもに何なりとお申し付けくださいませ」

「はい。有難うございます」

一礼した女将は踵を返して一階へと降りていく。

シェリーは部屋のドアノブに手をかけて振り返った。

「それじゃあ、また後で。何時頃夕食にするのかしら？」

「……一緒に食うのか？」

「当たり前よ。明日の段取りと配置を決めないといけないし、私達

はまだ組んで二週間だから、お互いの事をもっと知るべきだと思うから。で、何時頃が良い？」
「――――。……君の好きにすればいいさ」
「じゃあ、行く時は呼びに行くわね。私、疲れたから少し休むわ。ゼスも、疲れたら休んでいていいわよ、起こしてあげるわ」
「結構だ。そちらこそ寝過ぎてラストオーダーぎりぎりは止めてくれよな」

ゼスの軽口に、シェリーの視線が鋭くなる。

「そんなことしないわよ！」

彼女の声を背に、ゼスは口元を歪めて何も言わずに部屋の中へ入っていった。
残されたシェリーは未だにあの忌々しい背中を不意打ちぎみで今度蹴ってやろうか、と語るような視線で閉じたドアを睨みつけていた。

＊＊＊

部屋に入って扉を閉め、甲冑を脱ぎ捨てたゼスは窓際に寄って、置いてあった椅子に腰かけた。
背もたれに深く腰掛けて、ゼスは暗くなった窓の外を見る。窓には部屋の逆光で自分の顔が映っている。
その表情は、心なしか一瞬疲れ果てたように見えた。

「……知られては、いないはずだよな」

そう呟くのは、今朝彼が寝ていた時の事だ。

シェリーが言うには、暴れ出しそうな勢いで寝言を呟きながらうなされていた。あの時どこまで呟いたかは、彼女の話でそこまで核心に迫った言葉を言っていない様だった。

正直、夢の内容を連想させる事はどうしても避けたい。それで彼女が自分を判った気でいさせるのも癪に障る。

そして、二週間も共に行動して理解した。それは彼女とは決して考え方が合わない事と、きっとそりが合う事がない事。

彼女の考え方と行動は所詮は理想論。理解できないし、聞いているだけでも非常に腹が立つのだ。きっと彼から仲良くなるなんて事態は考えられない事である。それでも同僚として組んでいられるのは、シェリー自身のひたむきな行動力、自身と理解し合おうという態度故か。

確かに彼女には自分が持っていない部分がある。

他人の感情の機微を察知でき、それを理解して有利な交渉をする術。淑やかな演技は全く違和感なく、人を和やかにさせる。対人関係が苦手なゼスにとっては、この上ない貴重な存在だ。また、魔働術も扱える彼女は、物理攻撃が効かない敵に対しても有効だ。剣技の腕も決して見劣りするものでもなく、恐らくは立派な相棒と言えるかもしれない。

しかし、そこに信頼関係が生まれているかと言えばそうではない。実際相容れない関係、思想だ。同じ話題で盛り上がる事も無い、考え方に相違がある、そもそも貴族を嫌う彼は、シェリーをあまり気に入ってはいなかった。

そもそも、女性が男性に匹敵する強さを持つ、ということ自体が信じられない。その証拠に、男性の方が女性より遥かに腕力がある。

シェリーは速度で補っているようだが、それでゼスのような男性に勝てるかどうかは、怪しいものだった。
彼女の決定に乗り気ではない状況に、なんとか宥めて修正させたり、渋々付き合う羽目になったことも何度かある。

今は露骨に自らの心中をシェリーに伝えてはいないが、彼女の考えに合わせるのも非常に疲れてしまう。
拒絶したい事を無理やり我慢して、馴染もうとするその異物感を受け入れるのは、反動が大きすぎる。
これからもそれが続く事になると思うと、心底溜め息を吐きたくなった。

「――――考えるだけでは仕方がない。とりあえず、風呂に行ってサッパリ洗い流すか」

ゼスは椅子から立ち上がり、荷物から着替え一式を取り出す。そして、相変わらず大剣は手放せないと背中に背負うと部屋の扉を開ける。
そこで、不意に立ち止まった。

「……風呂、この宿にあるのか？　宿屋の主人に聞いてみるかな」

第十六話　「鉱山町」（後書き）

‥ゼスとシェリーはタルテルドに到着し、体力が3あがった！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

第十七話　「鉢合わせ事故」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第十七話　「鉢合わせ事故」

Ｓｉｄｅ：Ｓ――――同日１８時１９分――――

部屋の中は小ぢんまりながらも、綺麗に整えられており化粧台やクローゼット、ベッドが置かれている。

令嬢として住んでいた屋敷の部屋に比べると雲泥の差だが、昨晩で野宿の経験をしたシェリーにとって、この部屋は可愛らしいと思うほど、順応性があった。

「さて、と。なんだかドッと疲れが出てきたわね。甲冑が重いと感じたのも初めてかもしれないわ」

手に持っていた荷物を置き、まずは甲冑を取っていく。それを綺麗に机の上に並べて、荷物をクローゼットの中に入れる。

その後は、着替えをハンガーにかけて何時でも着替えられるようにし、昨晩使用した着替えは、クローゼットに備えられている籠に入れて後で洗濯しようとその場に置いた。

一通りの片づけを済ませたシェリーは、ベッドに腰かけてそのまま横になった。

「ふぅ。本当に大変だったわ今日は。初めての外、初めての野宿、初めての別の町。新鮮で、とても心躍ったけど、やはり馴れない事は凄く疲れるわね」

誰かに聞かせるわけではない、ただ今までの出来事を整理したい為に一人呟く黒髪の少女。

輝くような微笑みを浮かべていた彼女だったが、やがてその表情は硬くなる。

「それに……初めての、近しい歳の男性との対等な行動、か」

彼女の頭の中に思い描いたのは、先程皮肉を投げてくれた銀髪の青年。頼もしいところがあると思えば、急にセクハラをしてくる謎の同僚。

あの生意気な言動を思い出すたびに頭にくるシェリーだったが、同時に今朝の事を思い返していた。

「……ゼス、『殺すな』って、言ってた……」

それは、今朝彼がうなされている時、聞いた寝言だった。

盗み聞きするつもりはなかったのだが、ゼスは気付かないうちに大声で口に出してしまっていた為、その言葉がシェリーの耳に入ってしまったのだ。

本人曰く、「怖い夢」。しかし、彼がうなされるほどの恐い夢とは一体なんであろうか。

“「止めろ、殺すな――――!」”

何か、戦場に関する夢でも見ていたのか。しかし、不謹慎だが元傭兵であるゼスに、戦場で味わう恐怖は殆ど馴れている筈だ。普通に恐怖する夢を見ていても、あそこまでうなされる事など無いだろう。

ということは、彼がその道を歩むきっかけになる夢だったのか。過去にトラウマになるような事が起こり、それが夢として現れてしまったのか。

憶測の域を出ない。だが、ゼスのあの冷静な性格と皮肉を口にす

る態度は、きっと最初からではなく、その夢を通して形作られたのではないか、と思ってしまう。

「……彼が時折見せる、冷酷な態度もそれが影響しているのかしら？」

考えれば考えるほど、頭の中が憶測の深みに嵌ってしまう。

それに、彼の髪の事。昔自分を助けてくれた、銀の長い髪の帝国騎士と同じ髪の色をした青年は、何故か彼と雰囲気も似ている気がする。素気ない感じや、どんな状況でも動じない姿勢とか彼の姿をダブらせる。

その後ろ姿を見る視界が、徐々に歪んで――――

「――――――――――――――――はっ！？」

一気に意識が覚醒して、身体を起こす。

窓から差し込む光景は既に暗く、部屋にある時計の歯車が規則的に回っている。

「――――１０分進んでる……。何時の間に寝ちゃったのかしら……」

シェリーが眼を点にして、時計を注視しつつ頭を抱えた。

「そういえば、旅でかいた汗が染みついた服をそのまま着て寝てしまったわ。……気持ち悪いし、夕食前に入浴してこようかな」

呟きながら着替えを持って、部屋の外を出る。

目の前にパートナーの部屋への扉が見えるが、ふとシェリーは扉の前に立ち止まる。

「……気配がないわね。どこかへ出かけたのかしら？」

シェリーは首を傾げながら二階を後にし、受付で風呂について訊ねる。

受付にいた女性は応える。

「こちらはお風呂は無いのです。シャワーが主なのですが、それは一階にあって、あの通路を行って奥の右側の扉がシャワー室です。一人用しかありませんので、確認の為にこちらの名簿にお名前とご利用時間をお願いします」

「あら、なるほどね。書く物はあるかしら？」

女性が持っていたインク入りのペンを受け取り、空欄の名簿に流れるような達者な筆で情報を埋めるシェリー。

「有難うございます。タオルは必要ですか？」

「ええ、お願いします」

シェリーは、受付の棚から取り出したタオルを女将から手渡される。女将にお礼を告げて、彼女はシャワー室へと鼻歌交じりに向かっていった。

＊＊＊

ごゆっくりとシェリーを見送った女将は、再び業務へと戻る。
暫くして、彼女の夫である、この宿のオーナーが受付へと戻ってきた。

「いや、急な交代すまんな。インクがなくなったから補充しに行っていたら手間取っちまった」
「あなた、いいかげんにインク入りペンを常駐しないと。羽ペンは色々不便よ？」
「俺は羽ペンが好きなんだよ。そう言うなって」

全く聞く耳を持つ様子がない夫の姿に、結婚してから何度目になるか判らない溜息を吐いた。

「いつか面倒な事が起こっても知りませんからね？」
「へいへい」

陽気な笑みを浮かべて答えたオーナーは、新しいインク瓶の蓋を開けて、羽根ペンの切っ先を入れる。
そして、左手でテーブルに置かれたシャワー室利用者の名簿を引き寄せた時に、女将が若干狼狽したように声をかけた。

「ね、ねぇあなた。今から何をしようと？」
「何って……シャワー室の利用者の名前を書くに決まっているじゃねぇか」

何を当たり前の事を、と言うオーナーに、女将が続ける。

「そうじゃなくて。誰か、シャワー室を利用する人が居たの？」

「ん。あぁ。つい数分前にシャワーを使いたい客が居てな。先程の騎士の片割れなんだが、名簿を書こうとした時にインクが切れちまってな。仕方ねぇから、名前と利用時間を聞かせてもらってから、インクを取りに行ったんだ」

オーナーのその言葉を聞いた瞬間、女将の顔は青ざめていく。

「あなた、そのお客様はどうしたの？」

「いや、まだ宿泊客は今のところあの騎士二人だけだし、もう一人の事を聞いたら『あの女は今寝ているから問題ないな』と言っていたんで……使っていいって言ってからインクを――」

「バカッ！　そういう事をなんで少しの間だけ交代して欲しいと頼んだ時に言ってくれなかったの！？」

女将がロビー中に響き渡るような怒声を発して、オーナーの迂闊ぶりを非難した。

流石のオーナーも妻の突然の反応に驚いて、まだ事情を知らない彼は、その理不尽な怒りっぷりに眉を潜める。

「べ、別にそんなに怒鳴る事じゃないじゃないか。新しいインクを取りに行くのも、そんなに時間はかからなかったんだし」

「あの後、女性の騎士様がいらっしゃって、シャワーを使いたいと、書いて行ったばかりなのよ？」

「……げ。マジで！？」

ようやく事情を理解したオーナーが慌てて、名簿に目を落とす。
確かに自分が席を外した僅か数分の間に、新しいページの一番上にシェリーの名前が記載されてある。オーナーがインクを取りに行った後は、自分が対応した客の情報を記載するはずだった欄に、だ。
元々、この宿で客が風呂を利用する為に名簿を使っているのは、女将の言葉通りで宿にはシャワー室が一つであり、狭い故に一人しか利用できないのが理由だった。無論、男女別ではない為、他の客との接触を防ぐ事を目的にし、宿側が常に管理するようにしているものなのだが。
オーナーの男はみるみる汗を大量に流していく。

「お、起きるの早くないか……。いや、それよりまだあの銀髪の騎士が入ってからそんなに経ってねぇから、今頃――」
「……だから面倒な事になるわよ、って言ったのに……」

女将がシャワー室に駆け出そうとした時には、既に彼らの予想は的中していたのであった。

＊＊＊

2分前――

宿屋のシャワー室前にある脱衣所に入ったシェリーは一人分の狭さに僅かな驚きを見せていた。

「……元々一人の人間が着替える為だけの用途だものね。ここで、

洗濯物を洗うのかしら？」

傍に置かれているのは、洗濯用に使う大きな桶。中には、男物のコートが置かれており、恐らくこの宿の人が洗濯の途中で放って置いているのだろう。

それを気にしつつも、シェリーは着替えを空のバスケットに入れ、騎士制服を脱いでいく。

タイトスカートのベルトを外し、その後で椅子に座って黒いタイツを一足ずつ取っていって、下着姿に。宿の人から与えられたバスタオルを持って黒い下着を脱ぎ、そのしなやかな肢体を露わにする。

女性らしい細い肩と腕、特にそのすべらかな両脚は常に使うのか鍛え抜かれており、見る者によっては魔性の魅力を感じさせるだろう。

シェリーは曲線を描く身体をバスタオルで巻いて隠し、脱いだ服をしわが出ないように折り畳んだ。

「さて、と。屋敷ではお風呂だったけれど、宿の人はシャワーだけって言っていたわね。構造は屋敷のと同じなら良いのだけど……」

初めての屋敷の外での浴室利用に内心気分が高揚しているシェリーだったが、ふと何らかの違和感に気付いた。

「――――？」

肌がその感覚を直接感じている。この先のシャワー室に、何かよく判らない気配がある。

もしかして、従業員がシャワー室の掃除でもしているのか、それとも動物が入り込んでいるのだろうか。

だが、扉の奥の気配は、まるで陽炎のようにはっきりしない。確かめるには、直接確認するしかない。

シェリーは僅かに身構えつつ、ゆっくりとシャワー室の扉を開けた。

室内は白い湯気が立ち篭っており、非常に視界が悪い。水気を鼻腔が感じ取り、つい先ほどまで使用された形跡がある。

彼女が室内の状態をそう認識した瞬間。

黒い一閃が真下から迫り、その切っ先がシェリーの面前に突きつけられた。

「……動くな」

「っ――――!?」

白い湯気の奥から響く声に、硬直するシェリー。

彼女の面前にあるのは、無骨で巨大な黒い大剣の切っ先。シェリーは見覚えがある。持ち主は「銀狼の牙」と呼称する、威力が未知数の武器だ。

そして、声の主はこの大剣の持ち主だと推測できる。

湯気の奥からうっすらと、銀髪を濡らし、鋭い視線を向けるゼスの姿があった。

「――――ゼ、ゼス!?　な、なんでここに」

「君か……。見ての通り、シャワーを浴びていたところだ。脱衣所に入る人の気配を感じて、俺自身は気配を消して襲撃に備えていたのだが」

「け、気配を消していたって……。そ、それでさっき感じた気配は陽炎のようにハッキリしなかったのね……」

突然の遭遇に動揺しているシェリーは、今耳に入った情報を無意識に処理して、独り言として呟いた。

大剣を構えたままのゼスは、彼女の独り言を偶然耳にし、剣を下

ろすと同時に僅かに意外そうな表情を浮かべる。

「ほう。俺が気配を消せば、まず一介の兵士には気付かれないものなのだがな……。君は僅かな俺の気配を感じるとは」

シャワー室の扉を開けられた事で、呟くゼスの姿が見えるくらいに湯気が薄まる。

今度はゼスが問い返した。

「部屋を出る時は寝ていたから先に入っていたが、早いお目覚めだな？」

「え、えぇ。食事前に、入ろうと思っ――――」

そうしてシェリーは今目の前に見える光景を冷静になりつつある頭で認識する。

外に逃げた湯気は、徐々にゼスの姿を公に晒していく。

彼女の目に入ってきたのは、彼の鍛え抜かれた筋肉と逞しい胸板、引き締まった腹筋と両腕。そしてその下の――――。

「！？！！！！？」

目の前の光景に激しく動揺するシェリー。彼女の顔は真っ赤に染り、脳の機能が完全に停止する。

対し、ゼスは彼女の様子に首を傾げ、不意に視線を下ろすとある一点に向けて止まった。

「……何を動揺しているのかは知らないんだがな。とりあえず、自分の様子を見てみた方が良いんじゃないのか？」

「――――？」

ゼスの言葉を聞く形で、辛うじてシェリーが我に返り、自分の様子を見る。

彼女が巻いたタオルは両断されたように切り裂かれ、上から捲れるように落ちている。先ほどゼスが大剣でシェリーを牽制した時に、タオルを裂いてしまったのだろう。

タオルによって覆い隠された形の良い胸のふくらみが外気に晒される。対照的に引き締まる腹と腰回りでバランスの良い造形とした自分の身体が目に入る。

やがて、重力に逆らいきれないタオルは裂かれていない部分までもが緩み、そのまま床へと落下した。

――――み、見られ……ッ！――――

「き――――きゃぁあああああああああああああああああああああああああああああああああっ！？」

瞬時に今の状況を理解したシェリーが悲鳴を上げながら無意識で魔働術式を組み上げるのと、脱衣所の扉が開いて宿の女将が飛び込んでくるのはほぼ同時だった。

「お、お客様！？」

「なっ！？　壊す気か、よせっ！」

ゼスが珍しく驚いた表情で静止の声を上げるが、気が動転したシェリーに最早その声は聞こえていない。

ただ、今のこの状況を無かった事にしたいが為に、彼女は目の前

の光景を吹き飛ばそうと魔働術を発動した。

「――――“ファイアボール”ッッ！」

「チッ！」

最早制止は不可能と判断したのだろう、ゼスが持っていた大剣を魔働術式の前に突き出す。

その直後にファイアボールは撃ち出されたが、大剣に衝突し、炸裂する前に弾かれるように離散した。

シェリーの後ろに居た女将が魔働術の発動に驚いていたが、気付いたように直ぐに駆けだす。彼女は二人の間に立ち塞がり、直ぐに暴走しているシェリーを取り押さえた。

「お、お客様落ち着いてください！　と、とりあえず替えのタオルがここにありますから！」

女将は左手に持っていたタオルを羞恥で赤く染まるシェリーの顔から覆い、同時に左足でゼスが居るシャワー室の扉を閉めた。

その時のゼスは初めて暴走するシェリーに対して冷や汗と、苦い表情で見つめていて、彼女の視界から外れたのだった。

第十七話　「鉢合わせ事故」（後書き）

機会があれば感想を頂ければ、原動元になります。対なる剣を宜しくお願いします。

第十八話　「戦術傾向」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第十八話　「戦術傾向」

同日１９時２８分――

あの鉢合わせから数十分後。

ゼスとシェリーは軽装に着替えて、宿屋と併設している食堂へと足を運んでいた。

大衆用に造られた食堂は、丸い大型テーブルが大半を占め、カウンター席と個別席は少数派として置かれている。三十人は入れる広さであり、既に二人の後から宿泊の手続きをしてきた数人の冒険者達が広いテーブルへと腰掛けて、乾杯の音頭をとっていた。

ゼス達は集団の邪魔にならないように、窓際の二人席を陣取って、運ばれてきた食事に手を付けていた。

「……」

「……」

無言。

彼らの周りには、近くの喧騒と食器の音だけが無情に響く。

運ばれてきたトレイの上には、女将が言った通りの鶏肉の串焼きと野菜、スープとパンが載せられた皿がそれぞれある。

ゼスは串をそのまま持って直接食べているが、シェリーは態々フォークとナプキンを使って鶏肉を串から全部外して一個ずつ口に入れている。

元々の育ちが、そのままテーブルマナーに現れている二人は、まさに対照的であると言えた。

シェリーがパンを一口大に千切って、ナイフにバターをつけてい

たその時に。

「……そろそろ何か話したらどうだ？」

ゼスはようやく口を開く。慇懃な口調で、まるで先程の件をさほど気にしている様子は無い。

だが、シェリーからの反応は無く、黙々とパンの欠片にバターを塗っている。

「先程の事なら気にするな。別にお互いの身体を見回しても減るものなど無い――」

ガッ――！

その音は、シェリーが勢いよくナイフをバターが入っていた箱に振り下ろしたものだ。

「……」

流石のバター箱に刺さっている風に見えるナイフとシェリーを見比べて、それ以上口を開く様子がないゼス。

だが、代わりにようやくシェリーが反応を示す。

「気にするな……？　ええ、気にしない方がどれだけ良い事か……！　アンタにはドサクサに紛れて、私の身体を隅々まで見られたのも許せるものじゃないし、というか今すぐにでも記憶ごと殺したいけれど、後でお詫びがあるのなら我慢することはできるけれど……ボ――わ、私、男の人のカラダを見るの、父上以外では初めてだったのよ？　あの時は幼かったから別に気にもしてなかったけれど、今なら漠然と理解できる。あんな……あ、あんな！」

「……落ち着け。結局は不可抗力だったのだろう？　君も、見たく

て見たわけではないしな」
「当然よ！　そんな人がいたらどんな……えぇっと、そういうのを痴女って言うのかしら――と、とにかく、どんな人なのよ！？　宿の人から不注意だって物凄く謝られたけど、やっぱり、凄く――」
顔を青ざめて右手を震わせ、悪寒を感じているように眉を潜ませている。
そんな様子のシェリーに、ゼスは仕方ないとばかりに窘める。
「判った。判ったから、落ち着け。いくらなんでもそれ以上声を大きくすれば、他の客に聞こえるんだが」
「うっ……」
ようやくシェリーは冷静さを取り戻し、ひとまず傍に置かれた茶を一口喉に通す。
飲み込んだのを見計らい、ゼスは間髪いれずに言う。
「確かに一声かけず、君をそのままにして勝手に入浴しに行って、さらにいきなり剣を構えた俺の落ち度もあった。宿側の不手際もある。決して君の所為ではないな。しかし、もう過ぎた事だ」
今更何を言われても、ゼスはシェリーの記憶を消す事なんて出来ないし、過去に戻る事なんて不可能だ、と。
「それに、君に恋人が出来たら時や結婚した後の事はどうする？　一つ屋根の下で生活すれば、先程のような事が何度かあるかもしれないな。その都度君はそうするのか？」
「う、嘘！？　いえ、でも……確かにそうだけど――」

頬を羞恥に染めたシェリーが俯き加減に反論しようとする。
相変わらず自分の弱い分野はとことん弱いな、交渉や世渡り術は俺より得意そうなのだか、とゼスはそんな感想を抱いた。

「こう言っては何だが、今のうちにそういうのを馴れていた方が良いと思うがな」
「ちょっ……そ、そういうものなの？」
「良くは知らんな。だが、もう気にするのは止めにしろ。明日は気を引き締める任務が待っている。仕事に支障をきたさない程度に頭の底に引っ込ませればいいだろう」

もしくは考えられないくらいに仕事に集中すれば良い、と。
なんていう無責任な台詞だろうと、シェリーは思ったほどだが、確かにその通りだった。
今後もあの光景が無意識に頭に浮かぶかもしれない。それも仕事中にそうなって、集中を乱すだろう。ゼスはその事を案じ、至極真っ当な意見をストレートに言ってくれる。
仕事に打ち込む、成程確かに自分の得意分野であり、まさに望むところ。元々立派な騎士になる為に戦績を上げ、理想を体現する為に上にのぼっていくのが目標だ。今更そんな事を気にしている場合ではない。
かかずらわっている間にも、あの奴隷達がどんな目に遭うのかも全く分からないのだ。それに比べたら、先程の羞恥など些事に過ぎない。
彼らを直ぐにでも助けるためにも、早く従騎士から脱しなければならない。シェリーはその気持ちを大きくして、そう言い聞かせた。

「判ったわ。とりあえず、今は明日に集中する事にする」
「そうか……」
「――――で、その為にも今から段取りを話し合うけど良いわね？

では早速だけど」
「返事を待たずだな、おい」
まるで早く過去の出来事を忘れようと、仕事一心に取り組むシェリーに、ゼスは頭を掻くしかなかった。
その後、二人は少しずつ食事に手をつけながらゆっくりと明日の護送の段取りを話し合った。
――事前に得た町長からの情報によると、鉱物を運ぶのは荷車一台とそれを引く馬、町からは御者と鉱物関係に詳しい鉱夫の若者が同行する手筈である。
ゼスとシェリーは彼らと鉱物を護りつつ、無事聖都まで送り届ける事が任務だ。
行きは二日の行程であったが、聖都へは荷馬車の速度も考えると一日長くなる予定で組んでいる。また、移動時間もあまり遅くまで行動できない制約もある。荷馬車を安全に停められる場所を確保する事は勿論、寝処も早急に準備する必要がある為だ。
また、騎士である二人は昼夜問わず常に臨戦態勢にする必要がある。相手は数が多い山賊で、一人ひとりの実力は騎士の相手ではないが、その分どんな手段で襲撃するか分からない、というゼスの見解によって常に緊張状態となる。睡眠時間も交代制にする必要があるので、行きより大分削られる事になるだろう。
それ故、この任務に求められるのは迅速で柔軟な対応、如何にして体力を温存して護送を続けるか、にかかっている。
「――と、ここまで決めたわけだけど、私から提案があるわ」
話し合いの途中で、唐突にシェリーが切り出した。

「何だ？」
「ここまで私達は、各々の得意分野を駆使して、味方の事を気にせず勝手にやってきたけれど……。この任務では、互いの体調に気を配りつつ、それぞれの提案には無条件で受け入れる事にしたいわ」
ゼスは眼を細めて、その提案に直ぐには反応しなかった。
「……要するに、君の無理難題な命令を受け入れろということか？」
「違うわよ！　ほら、魔物が襲撃された時は、大して作戦も立てずにそれぞれで撃退したじゃない？　でも、この任務は護衛対象者も居るし、そこも気を配らないといけない。これまでとは勝手が違ってくるわ」
行きでは好き勝手に魔物を撃退してきたが、体力を温存して効率的に戦う以上は有効打になる攻撃が効果的である。
その為、フォーメーションや作戦の実行を円滑に行い、互いの長所を生かした戦法にしたいということだ。
今のままで任務をすると、互いの足を引っ張ったり、護衛対象者や対象物を護り切れるか怪しい、という彼女の意見だった。
その提案にゼスは、あまり乗り気の様子ではない。
「あえて言う。その方法はいくつかの条件によって最大限に発揮されるものだ。まず一つ、戦術や戦略を共有し、それを使うということは、互いの事を知る、ということだな。相手の事を知り、理解を深める事で初めて効果が発揮される」
そこは理解しているか、と彼の鋭い視線がシェリーを射抜く。
彼女の対応は、是だ。
「ええ。勿論そのつもりよ」

「……君は、俺の事を知りたいと？」
「っ……べ、別にそんなんじゃないわよ。ただ、アンタの戦術傾向や性格などを把握したいだけよ」

ゼスの解釈に、頬を染めて否定するシェリー。
彼女自身は、言われて初めてそういう解釈もできるのかと思い至った程度である。純粋に、口に出した事しか他意はない。
再び二人の間に沈黙が下りる。しきりに考え事をしているゼスと、彼の答えを待ちながら食事を進めるシェリー。
やがて――

「理解した。しかし同意はしかねるな」
「……それは何故？」

シェリーが表情を顰めながら問うた。

「君が俺の事を知りたがる物好きなのは分かった」
「だから違うって言ってるでしょ！」
「声が大きいな……。で、俺が同意できない最大の理由は、君のスペックが、俺が考える戦術に付いて行けるかどうか、だ」

シェリーはゼスの答えに、呆然とした。
言っている意味が、よく、理解、できなかった――。

「えっと……私の空耳じゃなければ、私ではアンタの作戦の役不足、って言いたいのかしら？」
「――――」

ゼスは交わる視線を逸らさなかった。
それが、沈黙の肯定だということに、シェリーの中で何かがあが

った。

「……騎士登用試験の時も、今までも、アンタは私の実力を見下していたわね。手加減はされる、女扱いはする、挙句に役立たずと言うつもり!?」

「そこまでは言っていないのだがな……。だが、全て否定はしない。まず、俺自身の戦術が大抵はどういったものかは分かるか？」

ゼスは激昂しそうなシェリーを落ち着かせつつ、質問で理解してもらうように試みる。

それは効果があったようで、シェリーは首を傾げて冷静に考え始めた。

「ゼスの戦術傾向って事？」

「そうだな」

「……そうねぇ。でも、私はゼスのソレは登用試験の時しか見ていない訳なのだし、そういうのはハッキリとは言えないわ。周りのオブジェクトを利用したり、大剣をその道具に使ったりするぐらいしか――」

「それだな」

唐突にゼスが肯定して、シェリーが唖然とした言葉を漏らした。

ゼスは取ってくる物がある、と言って席を立ち、食堂の隣にある宿のロビーへと足を運ぶ。やがて彼が戻ってくると、白紙と筆記用具を持って席に着いた。

「大抵俺の戦術は俺自身が出来る事を前提に考える。大剣を利用した戦術、暗器や周辺の物を利用した戦略、そのどれもが扱い馴れ、俺が最も効率よく最小限の労力で事を済ませられると考えられる手法だ。長年傭兵生活をしてきた所為か、あらゆる敵と戦ってきた経

験から来たものだな」

ゼスは一つずつ、彼自身と思われる線人間と彼が使う武器や手段を絵で表現し、シェリーに説明していく。

彼が説明する内容と、彼の絵は何の問題も無く理解するシェリーは、ある一つの疑問を返した。

「アンタ自身が出来る事がアンタの戦術……。つまり、他の人にとっては、難しいわけ？」

「俺の様な傭兵や騎士なら可能だろうな。だが、一般の兵士や……君のような女性はどうだろうか？」

「なんですって……？」

「俺の戦術に適応できる為には、前提として腕力や体力が伴う。力仕事が大半だからな。だが、女性は良くも悪くも男性より非力だ。君の闘いぶりを見てきたが、その剣閃速度で力そのものを補っているのは評価できるな。だが――」

やはり非力なのだ、とゼスは抑揚なく答えた。

その意見に直ぐには否定できなかったとシェリー。昨日のワームとの戦いで、頑丈な皮膚を前に剣が弾き返された経緯もある。彼の言わんとする事は理解できる。

だから、彼は続けざまに言った。

「非力な君に、力仕事が要るような俺の戦術に付いて行けないだろう？」と。

「非力なのは認めるわ。でも――私でも、できるような作戦が一つか二つくらいはあるんじゃないかしら？」

「例えば？」

シェリーの反論に、ゼスは応じる構えだ。
お互い視線を逸らさず、自らの意見を相手にぶつける。

「例えば、私のように機動力を活かした戦術。敵を撹乱して注意を逸らし、隙を見てアンタが一撃を与える作戦とか、魔働術で一網打尽を狙い、その間はアンタが敵の注意を逸らすとか――色々やりようがあるわよ」

実にもっともらしい作戦に、ゼスは成程と頷き返す。
確かにそれはシェリーらしい戦術を考慮した作戦だった。ゼスにはできない奇策で敵を翻弄し、きっとゼス以上に効率よく敵を撃退する事も不可能ではないだろう。
だが、それでもゼスは是としない。

「だからこそ、俺はその戦術は取らないな。何故なら、慣れない作戦は通常よりはその性能が半減すると断言できるからだ。これは、その戦術を可能にする要――つまり、君の戦術傾向を理解していないと本来の力を発揮できない」

不可能と断言するには早計じゃないの、とシェリーは思った。
確かに慣れない戦術は怪我も元でもあるし、互いの足を引っ張る可能性もある。ゼスの言う通りだが、それは決して不可能だと言えるのだろうか。
彼が、自分の提案を否定する要素や理由がそれだけであるとは思えないのだ。

「それのどこが問題なの？　そんなの、これからアンタが私の事を知れば良いじゃない。チームワークも育む良い機会なのだし」
「正論だな。だがしかし――俺は、他の人間の事など知りたくないな」

それこそ唖然とした。一体彼は本当に何を言っているのだろう、とその場で問いたくなるほどに。

知るのが難しい、ならまだアドバイスの余地があるのだが、最初から相棒の事を知る気が無いとは、どういうことなのか。

シェリーは落ち着きを払って、辛うじて問うた。

「それじゃあ、私と連携した作戦は殆ど取れないんじゃないかしら？」

「その通りだな。だから、俺は君の案を承認しない」

「あぁ、もうっ！　――無理、限界、我慢ならないわ。こんなこと言われて落ち着いてられないわよ！　理由を教えて！」

あまりにも理不尽な答えに、シェリーは冷静ではいられなくなった。

これまでも、ゼスの言葉に反応しながらも我慢をしていたのだが、「シェリーの事を知りたくない」と言われれば、これ以上我慢なんて出来る筈も無かったのだ。

こんな酷い回答がこれまであっただろうか、いや無い筈だ。

シェリーは最早周囲の事を気にもせずに、ゼスへと問いただした。

目の前の彼は、抑揚無い声で即答する。

「理由か……そのような大層なものはないな。ただ、知る必要性を感じないだけ、それだけだ。連携と言えども、相手が俺の策で足を引っ張るのは好まない。俺自身だけならば如何にすれば戦術を成功に導けるか、臨機応変に対応できる」

そこで一旦言葉を切ったゼスが、僅かな間言葉を選ぶように思案し、その言葉を告げる。

「……信じられるのは、自分だけだ」
「――――何よ、それ。それは、あまりにも……」

陰りを見せるシェリーの表情。
途中まで出していた言葉は喉につかえたように、中々出てこない。
これは一体、彼にどういう感情を自分は抱いているのだろうか。
的確な言葉が出てこない。強いて上げるなら、同情か。
しかし、ゼスはこれ以上シェリーが何かを言う前に、話を切り上げようとした。

「故に、作戦などは必要ないな。下手に協力するよりは、自分の信じられる、自分が出来ると思う事を自信を持ってやればそれで良いんじゃないかな？　どの任務に失敗を意味するのは死だぞ。やり直しは無い事を、よく理解するといい」

突っぱねたような言い方に、シェリーはゼスが再び食事を進めるのを黙って見守るしかなかった。

第十八話　「戦術傾向」（後書き）

・・ゼスとシェリーは鶏肉の串焼き、野菜、スープ、パンを美味しくいただきました！　体力が４あがった！　腕力が３あがった！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　誤字脱字、誤った設定などがあれば是非ともお知らせください。
気づき次第修正します。

第十九話　「魔働念話と定時連絡」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第十九話　「魔働念話と定時連絡」

同日２０時１７分――

食事を済ませたゼスは早めに席を立って「話が終わりなら、食後のトレーニングしに行く」と言って、外へと出て行った。
後から席を立つシェリーは、彼の背中を見送りながら、宿の従業員と一言二言話してから、自分の部屋へと戻る。
宛がわれた部屋のベッドに腰掛け、先程の同僚の言葉を思い出す。

「……やはり、ゼスは私の事を、信用していないのかしら」

女性は前線には立たない、どんな優れた戦略でもそれを実現可能な兵が居なければ実現できない、シェリーの実力ではゼスの戦術に対応できるか判らない。
彼はそう言って、自らの提案を否定した。
彼曰く、自分が出来ると思う事を自信を持ってやればそれで良いんじゃないかな、と。
全くもって、気に入らない返事だった。どうしてそこまで仲間に――女である自身に頼る事をしてくれないのか。
確かに時と場合によっては、作戦成功する確率は低いには違いない。自身はそこまで実力がある人間ではない。
だが、それを彼が一人で抱え込む事は無いのではないかとも思う。一人で出来ることには限界があるのだ。そして、そんな彼を手助けする事もして良いんじゃないのか。どうしてそれがいけないのか。
真っ直ぐに自身に頼ってほしいという、気持ちがひどく強い。
シェリーは悶々としながら、内心で同僚の態度に愚痴る。

「確かに……ゼスは強いけど……一人で出来ない事は、他人に頼っても良いじゃないの。本当に、あの態度は不愉快そのものよ」

自分では理解し難い。

今までの二週間、彼と行動を共にして色々理解したつもりだったが、彼の思想だけは本能的に受け入れがたい。まるで、自分の考えている事とは全く異質そのもののように。

彼の強さへの執着もそうだ。なにやら一人で強くなろうとして、何かを成し遂げようとしている。その事に他人を関わらせず、また他人と関わろうとしない。

その行動の切っ掛けやモチベーションは何なのだろう、と疑問が湧いてくる。ここに来るまでも思ったが、かなり気になって仕方がない。

「本当にもう――あの分からず屋っ！　そんなに私の事弱いって決めつけるのかしら！　冗談じゃないわ、あぁ全く。下に見られるなんて、まっぴら御免だわ！」

考える度に頭にきて、踵を床に叩き下ろす。

何度か叩いている内に、次第に弱まって、仕舞いにはシェリーは溜息を深々と吐き出した。

「なにやってるのかしら、ボク……。怪我なく任務を良い形で終わらせようとして、こんなに考えて、挙句に頭にきて八つ当たりなんて、どうかしてる」

自分には大きな理想がある。

民を、国を、全ての人間を護りたい――そんな騎士なら誰もが憧れる立派な理想。それを実現したく、その第一歩として騎士の道

を歩み始めた。
本当なら、同僚が話を聞かない事に頭にくるなんて事は、理想の実現には殆ど関係がない筈だ。

「なのに――――放っておけないのよね、何故か彼の事……」

謎めいた同僚ゼス。
これは直感だが、彼は一種の危うさを持っているんじゃないか、と感じている。
だから、本能的に放っておけないのだ。自身が手助けする事で、彼の重荷が軽くなれば。
どうしたら、彼が自身の言葉に耳を貸してくれるだろうか、と思案している時だった。

「――――――っ！」

頭の中に、何かが繋がった感覚を彼女は認識した。

《蒼衣の騎士団第十七小隊所属のシェリー・アイオライト・ブランシェ殿ですね？　こちらは、蒼衣の騎士団直属魔働情報部の者です》

頭の中に、女性の声が直接響いてくる感覚。
この感覚をシェリーは知っている。

魔働念話と呼ばれる、魔働術の一種だ。
主に遠くの人間に術者の想念を直接伝え、相手の想念を感じ取る遠距離用情報伝達手段である。
魔働術でも基本の部類で、使いこなせれば伝達する相手の射程距離を延ばし国外まで届く事が出来る他、特定の人間だけに伝える事が可能になる。魔働術を使う者なら、使い方ぐらいは学ぶことにな

っている。
しかし、それを上位へと昇華する事は難しく、専門の術者でなければ魔働念話を本当に手軽に送信する事は出来ない。
シェリーは魔働念話を使う事ができる。だが専門的に学んで修練したことはない為、使う度に結構な労力を伴う。距離も半径十ケアオリュぐらいしか届かないだろう。
この魔働念話の送信者である魔働情報部は、魔働念話のスペシャリストが駐在しており、主に連絡係や伝令の役割として存在している。職員は一日中の交代制で勤務しており、騎士団内でも重要部署でもある。

シェリーは額に意識を集中させるように、眼を僅かに細める。
魔働念話を使って、相手に情報を送信するには、頭の中に言葉を思い浮かべ、送りたい単語だけを相手に渡すように想像する。
しかし、これだと思いがけない言葉を送ってしまうという事故が発生するため、実際は口に出した方が確実性を増し、労力も抑えられる。

「はい、確かに第十七小隊所属のシェリーです。どうかしましたか？」

こんな時間に魔働情報部からの連絡とは珍しい。
何か、騎士団本部からの緊急伝令なのだろうか。シェリーに緊張が奔る。
相手の返答が届く。

《第十七小隊長、アサラム・ルース上騎士より通信です。定時連絡が要件である、と》
「ああ……」

内容を理解して納得するように頷くシェリー。
上記の説明通り、騎士団内の情報伝達は大抵魔働情報部を介して円滑に行う。
騎士団に所属する者の大半は、近距離でなら個別で離れた相手に魔働念話を使う事が可能だが、それが遠距離だった場合は、魔働情報部という交換手を介して通信距離を延ばす手法がある。
恐らくアサラム小隊長は、まず魔働情報部に魔働念話を送り、その職員が彼の魔働念話を遠く離れたシェリーに再送信する手段を取って、連絡を試みようとしているのだろう。
任務の経過が気になって連絡してきた彼の行動に納得しつつ、シェリーは頷いた。

「分かりました。繋げてください」
《了解しました。それでは――――接続（コネクト）します》

職員の返答の直後、一瞬のノイズがあってから、別の人物から念話が届く。

《よぉ、シェリー。お疲れさん》
「えぇ。お疲れ様です、小隊長」

頭に伝わる聞き覚えのある、気力が感じられない声。昨日聞いた声音と同じ、アサラムその人だ。
第一声早々、相変わらずの気だるさでシェリーを労う。

《応答したってことは、時間はあるってことで大丈夫だよなぁ？》
「はい。大丈夫です。ここまでの任務の経過を報告いたします」

シェリーは簡単に自分達の行動を報告する。
一日目は魔物を駆除しながら、イザーク森林で一泊した事、サイ

アット荒野を越えて鉱山町タルテルドに無事辿りついた事、鉱物を奪取する山賊は“山紅猫団”という名前な事、明日の朝早くに聖都に向けて鉱山町の人間と共に出発する事など、一通りを告げる。
アサラムは欠伸を噛み殺しながら、報告を終えた後にようやく反応する。

《んぁ、ご苦労さん。道中はやはり問題なしみてぇだから、遠慮なく俺は飲み明かせるってもんだぜ》
「小隊長、こちらは真剣に任務をしているというのに……。少しは上司らしい態度を見せてください」

シェリーが呆れた表情のままで、赤い顔の飲んだくれアサラムの姿を思い浮かべる。

《最低限のことはやっているつもりだがなぁ。サービス残業は遠慮したいところだぜ》
「全くもぅ……」
《そう呆れんなよ。酔い潰れる前にはきちんと“山紅猫団”っつー山賊の情報を集めておくからよ。それで上司っぽい行いじゃね？》
「朝早くから出発するので、その前に連絡が欲しいところです。そうすれば上司らしいですよ」
《二日酔いが心配なんだがなぁ……手厳しいぜ？》

抗議の色を含ませた子供っぽく反抗してみるアサラムに、シェリーは一蹴した。

「自覚があるのでしたら、お酒を飲まずに仕事して下さい」
《そいつぁ切っても切れない存在だから止められねぇんだよ、残念ながら。……ま、それより、ゼスはどうした？》
「彼なら今、外でトレーニングしてくるとこの場には居ませんが…

…連絡はしてないんですか？」
《あぁ。というか、最初は奴に連絡取ろうとしたんだが、何故か知らんが繋がる前に弾かれたらしいんだわ》
「弾かれた？　魔働念話専門の魔働情報部職員が？」

シェリーの疑問に応えるアサラム。
強力な念話はその分送信する力が強く、受け手は必ず受け取る事になり、着信拒否などは対魔力がよほど強くない限りは不可能だ。
ゼスは職員の魔働念話を受信する前に着信拒否するように弾いたらしい。だが、彼は魔働術の知識がシェリーより乏しいため、任意に弾いたとは考えにくい。恐らく、対魔働障壁を持つというゼスの性質そのものが働いたのだろうと推測できた。

「あぁ、それで私に直接連絡してきたんですね？」
《ん、そういうことだ。ま、居るんならそれで良いんだぜ。奴に知らせておくべきことはねぇし。後は……そうだな、何か他に問題はねぇか？》
「そうですね……」

アサラムの問いに答えようとシェリーがベッドから立ち上がり、扉の傍にある照明のスイッチを落とす。
その後、窓へと寄って、まるで外から目立たないように窺った。

「これは私個人の勘なんですけれど……今日朝から一日、私達を尾行している人がいます」

外の鉱山町は薄い照明が付いており、鉱夫の姿は殆ど見当たらない。全員、自宅に帰っているか、酒場に入り浸っているのだろう。
殆ど闇の帳が下りて全域を見渡す事は適わない。
だが一見、人は見えずとも、確実にその目立たぬ闇の中に人の気

配を感じ取れる。
　自分達を見張っているような気配の存在を、彼女の勘が告げている。

《ほぅ、勘なのにいやに断言するか》
「なんとなくですが、相手はワザと尾行している事を報せている感じでしたから。ただ、姿までは確認できません。恐らく男性だと思いますが、襲撃する気配すら今のところ見せません。……これはどういう事なのでしょう？」
《成程ねぇ。相手は尾行に気づかれていながら、隠れるのは上手いって奴か。まぁ、よっぽどの素人か、本当にワザとか。お前らが尾行されている事を認識させる為、とかだったりかもしれんぜ？》
「何の為に？」

　首を傾げつつ、アサラムの言葉が意図する理由を訊ねる。
　相変わらずの気だるげの男は、僅かに唸ってから例え話を持ち出す。

《例えばだ、お前らが城下町で巡回警備に出ていたとしよう。そこに偶然、一人の青年がお前の姿を見て一目惚れをしちまう。一日中シェリーの姿を見ていないと荒ぶる心を抑えきれない青年は、危険と知りつつも彼女の任務へと後をつける》

　何やら訳の分からない話を持ち出したアサラムに、シェリーはさらに疑問符を重ねていく。

《「嗚呼、なんて美しい女性なんだ。僕が、きっと君の心の輝かして魅せる。勿論、僕の雄姿でね」と、青年は後ろから目立たぬように、しかし娘を舐めまわすような目つきで見守ると》
「な、舐めまわ――――！？」

シェリーがそんな視線を想像した途端、顔が真っ青になる。
まだ続く、アサラムの推測。

《そして青年は見た！　鉱山町の宿屋に入っていく想い人の女と、彼女の同僚である男。それはそれは邪推をしてしまうもんだ》
「な、何が!?　どういう意味で――」
《「なんなんだ、あの男は……。ま、まさか奴が僕のシェリーたんを奪おうって腹か!?　彼女は僕のものだ！　ハニーは誰にも渡さない。邪魔をする奴は容赦しない。そして、もし彼女が手に入らないならいっそ……ひひひひ――」な、展開に！》
「ひっ――ちょ、ちょっと小隊長、いきなり怖い話をしないでください！　というか、シェリーたんとかハニーって何なんですか!?」

窓辺から青ざめた顔を引っ込め、背筋が凍った身体を抱きしめる。
念話の向こうに居るアサラムはまるで愉快そうに笑い声を漏らした。

《おぉ、怖がってる怖がってる。あまりこういう系は経験ないみたいだぜ》
「……もしかしてからかってます?」
《くくっ。ならば、こういうのはどうだ?　愛娘の初めてのお使いを心配して、思わず後をつけてきたアイオライト家パパが宿の窓の外から、こっそり覗いた。するとどうだろう、愛娘が見知らぬ男と一緒に居るではないか！　「け、けしからぁ～んっ！　どこの馬の骨だ、あの男は!?　娘が男と一緒に宿に居る、だと!?　間違いが起きる前に、排除しなければ」と、血の涙を流すアイオライトパパ》

シェリーの父とは似ても似つかない真似声だったが、何やら真に迫った演技力にシェリーは喉を鳴らしてしまう。

「それは……あり得る話かも、しれません。父上は結構私に構っていたので」

《決して0ではないっていうのがすげぇや。ま、存在を認識してるってんなら、問題はねぇだろ。例えどっかの野盗だろうが犯罪者だろうが、奇襲なんて通じるお前らではねぇだろ?》

軽い調子で話題を変え、シェリーの不安を拭うように念話で言ってくる。

本当にこの人、話の作りが唐突で上手い人ね、と思いながらシェリーは答える。

「決まっています。私達騎士が、犯罪者に屈するなんてあり得ません。私達は、民を護る存在であらねばならないのだから」

それを聞いたアサラムは、面白い話を聞けたように笑った様子だ。

《ん。なら良いさ。とりま、道中怪我だけはすんなよ? 経費が治療費で落とされる、なんてのは避けてぇし》

「……全く、嫌な台詞です。ですが、分かっています」

《では、これだけは言っておくか。任務の成功を祈っている、ってよ。ゼスにも宜しく伝えとけ~》

その言葉を最後に、アサラムからの魔働念話は切断された。

脳内が自由になったシェリーは、背中を壁に預ける。魔働念話の受信者も送信者ほどではないにせよ、ある程度の負担を伴う。何度も、しかも長時間魔働念話を使用するのが難しい為、実は便利な術式ではないのだ。

息を吐き出して、無意識に溜めた力を抜いていく。
やがて、彼女は先程のアサラムの話を思い出していた。

「……そんなことは、ないわよね」

想定される事に眉を潜めながら、真っ暗の部屋でクローゼットからガウンを取り出し、それを羽織ってから部屋を後にした。

第十九話　「魔働念話と定時連絡」（後書き）

・・シェリーは「宿屋用のガウン」を手に入れた！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

第二十話　「募る不安」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第二十話　「募る不安」

同日２０時５７分――

「――ハァ、ハァ、ハァ」

何度目かの腕立て伏せを終え、荒くなった呼吸をゼスは整える。

夕食を終えてから、全く休むことなくストレッチに励んでいた彼は、肩にかかったタオルで汗を拭う。

日課にしているストレッチは普段より少ない内容ではあったが、常人では彼に付いて行けるのがやっとの厳しさだ。彼自身は、それほどの事をしてもまだ体力が有り余っている。

だが、今日は限界まで、何時もの量をする気にはなれなかったのだ。

何故なら――

「――――ふむ」

目立たぬように、最も暗闇へと染まっている物陰へと視線を移す。

そこに、僅かに人の気配を感じ、ずっと見られていると感覚を抱く。

彼もシェリーと同じく、尾行者の存在には気づいていた。昨日の時点では気配を感じられなかったが、今日になって感づいた。その事実をシェリーに報告しようかと悩んだが、初めての外出任務に余計な情報は要らないだろう、と判断して何も伝えていない。

しかし、その気付いた時期で言えば、実はシェリーが一番早く気付いたという事実を彼は知らない。お互い、気付いていながら尾行

者の事は何も話していないのだ。

「問い詰めても良かったんだが、ああいう気配を晒している輩が一番手が出しにくいな……」

素人なら気配を隠せなくて当たり前なのだが、もしその道のプロだった場合は一番厄介な部類である。理由は、誘っている可能性が高いからだ。

尾行している事をワザと相手に分からせるという事は、見つかる事を承知の上である。尾行者が襲撃を受ける事を勿論想定しているし、その対抗策も完ぺきに講じている筈である。

無闇に尾行者を拘束しに行く行為は、罠へと自ら入る事と同義だ。手痛い返り討ちに遭うというのが最も危険なものだ。

それに、尾行者はただ気配を晒していても、姿を見せる事は無いし、手を出す様子もない。実際、ゼス達が魔物と戦っている間でも、背後から奇襲する事は無かった。尾行者はただ観察するように二人を見張り、一定の距離を保っているだけだ。

尾行者の正体を勘繰るとするなら、恐らく監視の類だろう。

一体どこの勢力からなのかは判断つかないが、振り切る事も拘束する事も無理なら、今は大人しくそのまま見張られているのが最善だとゼスは判断したのだ。

万が一の為に、体力は温存して、少しトレーニングを減らしている。

「さて、どうするかな――」

そんな時、宿の扉が開いて、ガウン姿のシェリーが姿を現した。

多少不安げな様子だった彼女だが、ゼスの姿を見て自ら納得したような表情をした。

「……？　どうした？」
「いえ、なんでもないわ」
ゼスの問いに、シェリーは何事もなかったかのように、いつもの表情で首を振る。
（――そうよね。父上が態々こんなところまで足を運ぶわけがないもの。なんだかバカみたい）
アサラムの話を鵜呑みにしたわけではないが、一瞬だけ父親が血の涙を流してゼスを半殺しにしている光景がシェリーの脳裏に浮かび。
それが本当の事になったら、あまりにも不憫だと思って様子を見に来たのだ。
実際はそんなことが無く、彼はいつも通りのトレーニングをした後であった。アサラムの話は冗談以外の何物でもない。
「外に出歩く気なら、一応武装して行くんだな」
ゼスは彼女の様子に気付くこと無く、外出するものと思ったようだ。
尾行者の事もあるからか、臨戦態勢をすることだけは心がけるべきものと考えているのだろう。
首を横に振るシェリー。
「出歩くつもりは無いわ。ただ、アンタがどんなトレーニングするのか、見てみたくてね」
「どんなも何も、ただのストレッチだ。基礎的な体力は付けておくべきだからな。本来なら、格闘術とこの大剣《銀狼の牙》を使った自主訓練を入れるんだがな」

「何故、今日はしないの？」
「……気分が乗らん」

珍しい事もあるのね、とシェリーは呟きながら歩みを進める。同僚の横を通り抜け、鉱山町から見える夜空を見上げる。
イザーク森林で一泊した時は、木々が多くて殆ど見えなかったが、今は町の灯りがだいぶ減っているからか、輝かしい星が広がっている。
見上げているシェリーの後姿を、見守るゼスは何も言葉を発しない。
やがて、先に声を上げたのは彼女だった。

「この任務、出来そう？」

そう問われたゼスは、怪訝な表情を露わにしつつ、律儀に応えた。

「さぁな。だが、護衛の仕事は傭兵時代で幾度も経験してきたことだ。任務自体に不安など無いな」

彼が傭兵をしていた頃にこなした任務は数え切れない程だった。百件以上はしてきたのだ。
どのような任務でも馴れれば不安という感情など抱かない。彼はそうして自分を過酷な仕事へと後押ししてきたのだ。

「私は――――少し、不安ね。何事もなく終わってくれれば、それで良いわ」

だが、シェリーは違う。
元々彼女は令嬢だったわけでもあり、初の本格的な騎士としての任務を不安ではない、とは思う筈がない。

人を護る、聞いただけなら簡単に思えるが、実際は難しい事は良く理解できている。独りでその理想を体現するのも、不可能に近い事も認めざるを得ない。

やり通す自信はある。しかし、これから起きる事が全く予想できないという不安は人間誰しも抱くものであり、彼女とて例外ではない。

賊の襲撃を備えても、どういった方法で現れるのか、自分でも予想がつかない方法で襲撃されたら、全てを護る通せる事が出来るのか。

彼女はぽつぽつと、自身の考えをゼスに伝える。

「護れなかった時は、どうしたらいいのかしらね。きっと、ショックで何日も寝込んでしまうかもしれないし、怒ってしまうかもしれない。まるで、自分の理想が遠のく感覚がして、怖いのよ」

「……誰しもが望むとおりに行くとは限らない、それが現実だ。その気概は良い、だが、そんなに追いつめると逆に参ってしまうと思うな」

気にする必要は無い、とゼスは言う。

そんなに気負う必要は無い。最善を尽くせれば、それで後悔など生まれる事は無い。

だが、そんな結果で納得できるのか、と言われればそれは否だ。痛みを被った人は苦しむ筈だ。護れなかった人の家族は悲しむ筈だ。

誰かが悲しむのは悲しいし、誰かが苦しめられている姿を見ると怒りたくなる。それを見るのは嫌だと、シェリーは考えていた。

「それは分かっているつもりよ。でも、そんな自分を楽にする為にも、周りは心からの笑顔を浮かべていて欲しいの。聞こえは不謹慎だけれど、そう望んでいる事もある。だからこその恐怖よ」

その望みに届かなかった時、自分はいかなる行動をとってしまうのか。
そして、その失敗がどんな悲惨な結果を招いてしまうのか。
考えれば考えるほど、沼に足を取られるような感覚。シェリーは俯いたまま、ゼスの心の内に訊ねる。

「アンタは、そういう思いとかは、本当に無いの？」
「他人の事を過剰に思っていても、より体力を損耗させるだけだと思っているな。生きていれば、いつかはそういう事が成功するとは思っている」
「今までその指針で、苦悩した事は無いの？」

この質問と同時、ゼスの真意を測ろうとシェリーは振り返った。
ゼスは彼女の視線を真っ向から返して。

「無いな。それが正しいと信じている。むしろ、苦悩したからこそこの考えに行き着いた」
「……それ、どういうこと？　苦悩したからって……」

怪訝に眉を寄せるシェリーに一瞬視線を逸らしたゼスは、また話を切りにかかる。

「とにかく、全員を過度に気になっていては、誰も救えない。戦士には、そういう割り切りが必要だという事だな。最善を尽くせばいい、それだけだ」
「っ……。でもそれが、私が騎士になった理由だから」
「ならば安心しろ。君が取りこぼした敵は俺が対処する。君がショックで仕事にならなくなったら俺も困るしな」

それなら問題あるまい、といつも通りの皮肉で、安心させたいのか怒らせたいのか分からない口調でゼスは続けた。

「……そう……よね。私は一人じゃないもの。敵がいれば、ゼスは対応してくれるのだし。私は民間人の護りに徹していればいいのよね」

「そうだな。君は、それが一番合っている。敵の殲滅は任せておくといい。それが最善だ。お互いに作戦を練るまでもないな」

「それは……！　できるのかしら？」

「あぁ。だから不安に思う事は無い。君はいつも通り、俺に見せたその闘いぶりで任務をこなしていければいいだけだ」

それは、護りの面は任せるに値する、ということだ。

音速による剣技は牽制にもなり、ゼスは登用試験の際に大剣の力を防ぎきったシェリーの盾の硬度を認めている節がある。いざとなったら、遠く離れた護衛対象者に護りに行くことだって可能でもあり、魔働術でゼスを援護すればいいのだ。

シェリーの事を戦力として度外視していない、と判っただけでも彼女の不安は表情から抜けていった。

「そうね。そうしてみるわ」

息を吐き出して、内心のうやもやを一気に取り除く。

これで気持ちよく寝れそうかも。乗り気はしなかったが相談して良かった。

そんな事をシェリーが考えていた時。

「だが――――」

ゼスが補足を加えようと、口を開いた。

「俺も人間だ。対応しきれない数が来たら、本気を出さざるを得ない。相手が手加減なしであれば尚更だ。だから――」

「――後顧の憂いなく、襲撃者は機会がある限り二度と襲撃してこないよう、徹底的に息の根を止めるがな」

「――――っ！」

背筋が凍る。

ゼスは怖いくらいに澄まし顔。

彼は間違いなく、再び別の手段で襲撃されないようにと、誰一人として見逃すなどしないだろう。その為に例え敵でも命を躊躇いもなく奪うのだろう。

それが、シェリーに何よりも恐ろしく感じさせた。彼の行動が、傭兵時代で既にしてきた事と考えると、寒気を覚えると同時にひどく動揺した。

例え敵でも、無慈悲に命を奪っていいのだろうか。勿論自分とて敵には容赦しないが、相手が同じ人間で、手加減する余裕があるのなら、悪い事は止めるように説得する機会があって欲しい。見逃せる機会があれば、できるだけ命は奪いたくは無い。

だが、ゼスのそういった葛藤が無いという発言は、辛く感じた。

それが、自分の為に思って言ってくれた事だとしても。

「――――」

シェリーは頭が真っ白になって何も考えられなかった。それほど、彼の言葉は衝撃的すぎた。

何かを言おうとして、しかし喉に何かが引っ掛かった様に擦れた声が漏れるだけ。

「相手の錬度が低いと言っても、油断はできない。明日の任務は、決して気を抜かない事だな。情と油断は、それを生む」

敵は斃すべきだと。

違う、と言いたかった。何もそこまではしなくても良い、とも思った。

だけど、それこそが誤りだ。

敵は鉱物を奪いに襲撃し、時には一般人に刃を向ける。万が一の事があれば耐えられない、というシェリーの不安がゼスの答えでようやく解決されたばかりだ。

ここで反論すれば、議論は再びふりだしに戻りかねない。

なにより、シェリーが彼の考えを否と言えば、きっと彼は呆れかえって怒りだすだろう。

そうしたら、もう気にも留めずに自身を放って、独り戦場に駆けるだろう。信頼しないだろう。置いて行かれるだろう。

――――言える、筈がないわ。

この所属した部隊で生き残るには、同じ騎士とのチームワークが不可欠だ。相手が例え非協力的でも、自身がそれに合わせられれば問題ない。だが、ゼスは特出すぎて、逆にこちらは付いてこれない。何も知らずにフォローしようとしても呼吸が合っていなければ、足を引っ張って命取りになるだけだ。

そして――――気まずい雰囲気のまま過ごせられない。この同僚とは、一定の繋がりを維持したかった。

貴族である自分に無遠慮に接し、自分も遠慮なく心中を言えるこの同僚との関係、貴族同士の付き合いでも、上下関係なのでもなく、

この仲間意識を崩したくは無い。
独りでは――無理なのだ。

「――そろそろ肌寒くなるだろうな。体調を崩さないように、少ししたら部屋に戻って休んだらどうだ。俺は部屋でクールダウンしたら休むとする」

……なんでこの男はボクの気持ちに気付いて、自分の行動を悔い改めるということができないのかしら。
そんな罵倒を浴びせたかったが、自分にできない事を相手に悟らせるというのは傲慢でしかない。
このような自分の考えは、実に身勝手だ。
相手は、対等に自分を見て、言ってくれているというのに……。
ならばボクはどうしたらいいの。自分が納得する方法で、ゼスの行動を変えるにはどうしたらいいの。
そんな考えが、シェリーの頭の中で駆け巡る。

「では明日な。君は、君が後悔しない方法で任務を乗り切ると良い」

ザッ、とゼスは足音を鳴らしながら踵を返して宿屋へと向かっていく。
去っていく背中に、シェリーが語れる言葉は見つからなかった。
ただ、夜風が彼女のガウンを揺らし、僅かに晒された両足が寒く感じたぐらいだった。

――それが正しいのか、誤りなのか。もしこの時未来が分かる事ができたのなら、きっと答えは直ぐに出せただろう。

人生はどの選択で未来が左右するのか。分からないのだとしても――その時は答えなんて見つかりようがなかった。

＊＊＊

既に肌寒く、街灯も当らぬ闇夜に一人の黒い衣装を身に包んだ男が、ある建物の様子を覗いながら魔働念話を発していた。

「――こちら参。《銀狼》は宿屋に入ったのを確認した。《同僚》は宿屋前に居るが、特に異変はない模様。これ以上の接近は襲撃の可能性を想定する」

《解かった。引き続き一定距離を開けつつ監視を続行せよ。明日には、彼らの実力の程を把握できるかもしれない。くれぐれも、姿だけは見られるな。例の動きを見せたら、直ぐに排除しろ。確実に事を進める為に、アノ使用を許可する》

「――了解した。マイ・マスター」

第二十話　「募る不安」（後書き）

：ゼスとシェリーのＨＰとＭＰが全回復した！
シェリーが睡眠時間が通常より短かったため、精神が１さがった！

第二十一話　「任務開始」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください

第二十一話　「任務開始」

――――――――11月30日8時51分――――残り1か月と1日、15時間9分

鉱山町タルテルドの入口前には、大勢の鉱夫と住人が集っていた。
彼らの視線の先には、運ばれる鉱物が積み込まれた荷馬車と、それに同行する二人の町の人間と、二人の騎士の姿だ。
特に騎士への注目が多い。鉱山町の大半の女性達は銀髪の男性騎士に熱い視線を注ぎ、多くの鉱夫は美しく佇む女性騎士を滅多にない目の保養として扱っていた。
無論、ゼスとシェリーである。
彼らは全ての鉱物を積み終えた後、見送りに出てきた町長と挨拶を交わしていた。

「それでは、任せてくださった鉱物は責任を持って聖都へと送り届けますので」

丁寧に町長の頼みを請け負うシェリーは、出発前の一言を伝えた。
町長は鷹揚に構えて返す。

「うむ。お二人とも、道中気をつけてな」
「はいこれを。アタシが特別に作ったピーオエードよ。さっぱりとした味わいと疲れを癒やすピーオの果実を飲料水にしたものよ。休憩する時に皆と一緒に飲んでらっしゃいな」

町長夫人から彼女が作ったというピーオエードを入れた容器を手

渡される。
　他にも鉱山町の人々から心ばかりの支援物資を受け取ったゼスは、頭を少し掻いた後、頷いて返した。

「すまないな。有効利用させてもらう」
「いえいえ。アタシ達はこれだけしかできないけれど……頑張ってらっしゃいね」
「勿論だ」

　それだけゼスは答えると、素早く荷馬車に容器を置きに向かう。
　シェリーと一通り段取りを確認し合った町長は、町からの同行者二人に檄を飛ばした。

「これお前達！　きちんと鉱物を聖都に届けるんじゃよ！」
「任せて下さいよ、おやっさん！」
「りょーかい！」

　応えたのは荷馬車を引く馬を御する中年の男性御者と、軽く陽気な性格をした若い男性鉱夫の二人だった。
　彼らはゼス達が護衛だけに集中できるようにと町長が手配した、荷馬車の制御と鉱物の専門知識を有する者達だ。

「それから、騎士様の指示にはきちんと従って、迷惑をかけんようにするのじゃよ！」
「へいへい、分かってますって♪」

　鉱夫の若者が軽い返事をすると、町長は苦笑だけで済ましたのだった。
　今度は、ゼス達が泊まった宿の主人と女将がやってきて、詰めるだけの食料を荷馬車に積みこんでいく。それが終わると、シェリー

の前に挨拶をしに来た。

「昨晩はよく眠られましたでしょうか？」

「え、ええ。まぁそれなりです」

女将の問いに、シェリーは濁った回答を返すしかない。

実は、彼女は昨晩あまりよく眠れなかったのだが、それを他の人間に悟らせる態度は見せなかったのだ。

普段はあまりしない化粧で、うっすらと出来た隈を隠している。

「昨晩は迷惑かけてすまんかった。お詫びと言っては何だが、色々な食材を余分に載せておいたから、モリモリ食って元気付けてくれ」

宿の主人が頭を下げて、昨晩のシャワー室鉢合わせを引き起こした不注意を詫びる。

シェリーも、もう気にしていませんから大丈夫です、と何度も答えたのだが、宿の主人は事の重大さを理解している為か何度も謝る。

だから、彼女は彼が用意したという食材を利用すると宣言する事で、完全に事をチャラにした。

「有難うございます。全員で美味しく頂きますね」

「ああ、そうしてくれ。物資にもなるしな！」

「全くもう、調子が良いですから、ウチの旦那は」

女将のツッコミに、苦笑をするシェリー。

そこに、準備をし終えたゼスが彼女の元へと戻ってくる。

「準備は完了した。何時でも出れるな？」

「ええ、大丈夫よ」

頷くシェリーに、ゼスは改めて宿屋の主人と女将に顔を向けた。
ゼスは世話になったな、と無愛想に一言告げた程度だったが、宿屋の女将には伝わったようだ。

「いえいえ。気をつけて行ってらっしゃいませ」

女将の返事に、シェリーが会釈してゼスと共に荷馬車へと向かう。
彼らの背中に町長の檄が飛ぶ。

「お前さんたち、成功を祈っておるぞ！」

その言葉を受け、シェリーは振り返って会釈し、ゼスは左手を挙げて応えた。
かくて荷馬車は御者の手によって出発し、ゼス達は警護する形で追随する。
天気は朝靄で、今は視界が悪い。二人は初っ端から警戒心を上昇させる。二人の背中に、何時までも鉱山町の人々からの声援が伝わっていた。
ゼスとシェリー、二人の騎士は二人の護衛対象者と鉱物を積んだ荷馬車と伴って、南西にある聖都へと旅立つ。
護送任務の開始だった――。

＊　＊　＊　＊　＊

――同日１６時４５分

荒廃した荒地が続く、サイアット荒野。
朝は露で視界が悪かったが、それはほんの一時だったようで、今は殆どが見渡せる状態となっていた。
出発時には徐行していた荷馬車も、視界が良くなった事を受けて、通常のスピードで進んでいる。
荷馬車を護衛するゼス達も、速足で並走しているが、彼らの視線は遠くに向けて見回している。

靄がかかっていた時は、奇襲を警戒して迫る気配を探っていたが、視界が良くなった事で逆に彼らの警戒心は上昇する一方である。
何故なら、彼らは襲撃者の偵察と狙撃を警戒しているからだ。
高低差が激しいこの荒野は高い丘が数多く存在している。荷馬車は丘に挟まれる形で行進しているが、丘の上から見れば、その存在はハッキリと視認されてしまう。
相手から見れば、偵察や狙撃にうってつけのポイントだ。靄がかかったままならそうでも無かったのだが、視界が良好な以上はそこは絶好の襲撃ポイントだろう。
昨晩の会議の際、ゼスは別ルートから聖都に向かった方が良い、と意見したことがある。
だが、荷馬車を安全に進める道幅が確保されているのは、このルートしかないらしく、他のルートは崖を通る場所であったのだ。
襲撃者から避ける事は出来ても、荷馬車そのものを危険に晒すことはできないとして、あえて発見される可能性がある道へと進路をとる事になったのだった。

お昼休憩を挟み、再び万全の態勢で荒野の踏破を目指す一行。
吹き通る風も強くなり始め、照りつける太陽も徐々に傾き始めた頃に、一行は丘陵から見下ろせる広い森をようやく目視できる距離まで到達していた。

「こうしてみると、やっぱ広いよなぁっ！　話だけは聞いてたけど、外はすげぇ広いぜ！」

丘陵の先に立ち、前方見渡す限りの地平線に若者は興奮気味だ。
若者はそれまであの鉱山町で鉱夫として働き始めた年頃だったが、町の外は危険が一杯だからとあまり出た事がなかったのだ。
それに、騎士になるまでは同じ立場のようだったシェリーも、共感したように話しかける。

「あら、貴方もなのね。私も、騎士になるまではずっと聖都に篭っていた方なので、実は都の外に出るのは、初めてなの」
「おぉっ！？　もしかして君、聖都の出身？　通りで、佇まいが都の女らしいと思っていたんだよ！」
「都の女性……という基準がよく分からないのだけれど、私はそうして育ってきましたので。でも、外は凄く広いのよね。自然も多くて見目新しい物ばかりで、驚いたわ」
「そうなんだよー。俺も鉱山町に篭っていた方なんだけどさ、真新しいもんが殆ど来ない訳よ。だから、なんか仕事して、いつか町の外に出てぇと思ってたんだ」
「あら、私と同じだわ。但し、あくまでついでですけれど」
「マジで！？　……共通の話題ゲトッ♪」

歓喜するように若者は影でそっと拳を握りしめた。
シェリーはと言えば、今の光景を見回すのに夢中になって、彼の様子を気にしていないようだった。
そんな二人の様子を眺めながら――

「ゼス君。どこで休む事にしますかね？　陽もかなり傾き始めたし、そろそろ近くで野営を考えるべきだと思うのだが」

常備する銀時計を一瞥して懐に仕舞う御者から予定を訊かれる。

「そうだな……。前提としてこの荒野では野営は向かない。森林に入ったら広い場所を確保して、そこで休む事にしようと思うのだが」

「うん、異存ないね。じゃあ、五分くらい休憩したら早速その方針で出発しようか」

御者の提案に頷き返すゼス。

少し水分補給をしようと、自分用に宛がわれた飲料入りの容器を取りに荷馬車の中を覗く。

全員分の飲料容器は隅っこにまとめて置かれていて、少し手を伸ばせば直ぐに取る事が出来る。容器の蓋を開けて、中から鼻が透き通るような香りと共に、出発前に町長夫人から渡されたピーオエードの液体が目に入る。

それを口に付けると、確かにさっぱりした味が疲れた体によく通った。同時に喉も潤され、本当に何度でも口に運びたくなる。

だが、無限にあるわけではないので、この先の為に少しだけしか口にしないゼスは、そのまま量を温存して蓋を閉めようとすると。

「あら」

「ん――――？」

声に反応して振り返ると、荷馬車の陰から出てきたばかりのシェリーがこちらを見つめていた。

「君も水分補給かな？」

「え。え、ええ……」

「そうか」

淡白に頷いて、自分の飲料容器を置くついでに、シェリーの飲料

容器を手にとる。
それを彼女へと手渡すように伸ばした。

「ほら、君の分だ」
「あ……ありがと」

とは言いつつも、彼女は腕を伸ばすがまるでそこに見えない壁があるかのように、受け取ろうとしない。それどころか、彼女の視線がゼスを避けているようにも思える。
まるで、彼自身を見る事で何かを思い出す事を回避したいような。

「どうした？」
「べ、別に……。い、今受け取るから」

それでも彼女はゼスを見ようとせず、腕は容器から外れた見当違いの方向へと延ばされる。
……全く、しょうがない女だな。

「投げるぞ、受け取れ」
「え？　ちょ……！？」

シェリーが咄嗟に振り返った時には容器が宙を舞っており、慌ててそれをキャッチする。

「ちょっと。せめて私が反応してから投げてよ。言って同時に投げるなんて」
「それくらい反応しないと、奇襲などのいざという時に冷静に対応できんと思うがな」

唸りながら蓋を開けるシェリーを一瞥しながら、肩を伸ばして腕

を組むゼス。
飲料容器を口に運んでいく彼女は、やがて息を吐いて心底嬉しそうな表情を浮かべた。

「はぁ、やっぱりこれは良いわね。寝足りない身体をスッキリさせるから、何杯でも飲みたい気分だわ」
「寝足りない？　やはり、あまり寝てないんだな」
「……あ」

しまった、と気を緩ませていたシェリーは口元に手を当てるが既に発した言葉は戻すことは出来ない。
代わりに彼女がとった行動は、開き直りである。

「えぇ、そうよ。馴れない所だったから、普段よりは短い睡眠時間だったわ。でも、やはりって何よ、アンタは気付いていたの？」
「まぁ、普段より気が抜けていた様子が少々目に入っていたからな。どうせ野宿した時と同じで、初めての外にワクワクしてて眠れなかったクチだろうな？」
「なっ……そんな子供みたいな事、何度もあるわけないでしょ！」

シェリーが慌てて誤解を解くような口調で言う。
彼女はゼスからふいと顔を逸らすと、蓋を閉めた飲料容器を荷馬車へと置きに行く。
まだ荷馬車の傍にゼスは立ったままの為、自然とシェリーが傍を通って飲料容器を置こうとした時にそれは偶然聞こえた。

「……言えるわけないじゃない。昨日のあの姿を結局忘れる事が出来ずに寝付けなかったなんて――――」
「ん？　何か言ったか？」
「っ！？　な、なんでもないわ！」

顔を紅潮させてシェリーは容器を倒したまま逃げるように去って行ったという、らしくない行動に首を傾げながら、ゼスは彼女の容器を丁寧に起こして置いたのだった。

＊＊＊

休憩時間が終わった後、荷馬車は丘を降りて森林に続く道なりへと進んでいる。

「――しっかし、相変わらずここは進みにくいね。不規則な突風や揺らす荒地、そして飛行型の魔物……。自然の要塞って感じがするよ」

荷馬車の馬を操る御者の男性が、立ち並ぶ丘を見回しながら呟く。馬の右横に並んで歩くシェリーが彼の言葉に反応して、剣の柄に手を置いたまま見上げた。

歩きにくい荒い地面に、狭い道幅、突風に魔物による強襲を経験した事があるゼス達としては、確かに進みにくい道だと感じていた。変則的な気圧によってこのように形作られた荒野は、とても農作業のみでの生活は不可能であるし、野宿するにも向かない。出来る限り、陽が沈む前には抜けてイザーク森林へと入らなければならない。

また、進む際も注意が必要だった。例の飛行型魔物――フォールイーグルという、上空からの強襲を得意とする鷲型の生物がいる事が理由だ。鋭い鉤爪と目利きの良さは、獲物がどこに逃げても上

空から見つけ出して延々と追いつめる事で知られる危険な大型魔物だった。
一回だけ、ゼス達は昨日フォールイーグルと戦い、勝利を収める事が出来たものの、今回護衛対象がいる限りでは苦戦するだろうと二人は考えた。
上空にフォールイーグルを見かけた場合は、直ぐに荷馬車を止めて車内に隠れてやり過ごすという方法を取った。この事から、進行速度は遅れてしまったと御者は言う。

「よくご存じなんですね」
「いや、何度も通った事のある道だからさ。聖都に鉱物を運ぶ仕事はずっと前からやっているもんでね」

シェリーの笑みに、自然と御者は和んだ表情で胸を張った。
その様子を耳にしながらゼスは殿(しんがり)を務めていた。
周囲を警戒しているものの、人との関係にも意識している彼女に対して、少し呆れかえりながら後方と上空に視線を動かす。

(――――全く、そんなのであの女は咄嗟の襲撃に対応できるのか？いくら不安を解消する為と言ってもな……)

彼がそんな風に思っていると、荷馬車に乗っていた若い鉱夫が顔を出してゼスを探していた。

「よう、兄さん」
「――――俺は君の兄さんではないのだがな？」
「そういう意味じゃねぇって。名前が咄嗟に思いだせないんだよ」
「……ゼスだ」

ぶっきらぼうに答えるゼス。

若い鉱夫はあまり興味なさそうに頷いたまま、自分からの話題をまくしたて始める。

「いやぁ、いいよね彼女。綺麗だし、スラッとしたスタイルだし、騎士になるほど強いし、しかも優しい性格ときてるよ。俺、先ほど色々話してみたけれど、彼女も俺と同じで聖都から出た事が無いんだってさ。いやー、彼女と一緒に世界中を冒険できたらそいつどれだけ幸せなんだっつーの」

俺も騎士になろうかな、なんて呟いている若い鉱夫の話に、ゼスはさして興味がなさそうに周囲を警戒し続ける。

若い鉱夫は何かを思い出したように、手を叩いた。

「聖都って処はそれは鉱山町にはいない魅力的な女が一杯いるって聞いていたけれど、本当その通りだよな！　そういえばさ、騎士って貴族の連中も成れるもんなんだろ？　あのシェリーって娘の佇まいとか、礼儀正しくて優しい性格とかさ、もしかして彼女って貴族？」

彼は自分の話をするのではなく、ゼスに対して純粋な質問を飛ばしている。

風貌と素っ気ない態度であまり人に話しかけられないゼスは、彼が陽気な性格で馴れ馴れしく語りかけてくるのが好きでもないし、嫌いでもない。

慣れというのは怖いものだな、とゼスはかつて同じような人間が昔、別にいた事を思い出した。ゼスが騎士に成る為にその人物とは別れたっきりだ。確か最近は、傭兵業界では『火蜥蜴（サラマンダー）』という仰々しい二つ名を付けられた有名人になったとか。

そんな事情から、ついその人物と同じような対応をゼスは返す。

「確かに、そう聞いているな」
「おっほマジで!?　結婚とかできたらマジ逆玉の輿じゃねぇか！　あんな美人で性格良くて、しかもお嬢様。至れり尽くせりじゃねぇかコノヤロー♪　よっしゃ、マジ燃えてきた。良いところ見せるチャンスがあったら積極的に狙うしかないなこりゃ！」

握り拳を作り、若い鉱夫は嬉しそうな表情で意気込んでいた。
ゼスはといえば、あんな女のどこが良いんだか、と語るような視線を若者に向けている。
そこで鉱夫は何かを思い出したように、ゼスへと見つめ返した。

「そういえば、兄さんさ。シェリーさんと同僚なんだって？」
「……そうらしいな」
「じゃあ一応訊いておくけど、兄さんは彼女と付き合っているわけじゃないよな？」

一体彼は何を言い出すのかと思えば、とゼスは心底溜め息を吐きたくなった。
鉱山町の町長にも問われたが、男女二人が同じ部隊に居て共に行動する事にそのような意味があるとは思えない。
……そもそも俺は彼女の事を同僚として信用していないし、思想も相容れない。雑誌や街中でよく見かける、カップルなどに発展するなど万に一つも有りはしないというのにな。それに、俺の態度を感じて、向こうも嫌いになっているだろうな。さっさと昇進してくれれば、俺は楽ができるというのに……。
そのように考えながら、荷馬車の前方に意識を向ける。当のシェリーは御者と楽しく世間話で談笑しているようだった。
ちゃんと周囲を警戒しているのか怪しくなってきたな、と思いつつも。アレなら俺達の話は耳に届くまい、として溜め息混じりに問いに答える。

「違うな。そもそも俺は彼女の事を認めてはいないからな。ただの同僚以下、それだけでしかない」
「つまり、今後発展する事なんて無いって？」
「……そうだな。だから、君が彼女にどういう態度で接しようが、俺には関係な――――」
言い終える前に、馬の啼き声と共に荷馬車が急停車した。
不安定な姿勢で荷馬車から顔を出していた若い鉱夫は、突然の停車にバランスが崩れて地面へと不時着した。
「っ……あいたた……な、なんで急に止まるんだよ……」
鼻を打って擦る若者を一瞥して、ゼスは荷馬車の前方へと足を向ける。
今の様子からすると、御者が手綱を引っ張って意図的に急停車させたのだろうが、一体何故停車させたのか、それを探る必要がある。
「おい、どうして停車――――」
ゼスがそこで口を閉ざす。
荷馬車の前方には、馬の手綱を引いて困惑した表情を見せている御者と、右腕で制止のサインを出したまま遥か前を向いているシェリーの姿を見たからだ。
――――まさか、今の話を聞かれて怒鳴り散らすつもりか？
そんな危惧を抱いたが、それは杞憂だということを知る。
何時まで経っても、シェリーは前方から目線を外さない。ゼスには一度も振り返らずに、ただ真っ直ぐに。
特にまだ何も違和感を感じていないゼスにとって、それは不審に思わせた。

「どうした。急に荷馬車を止めるとは何があったんだ？　前方に障害物は無し、森林までもう直ぐなのだがな」

そう言いつつ、ゼスはシェリーの隣に並ぶ。

前方には森林が見えており、数分もせずに辿り着く。そんな位置で彼女が荷馬車を止めるということは何かあると思ったのだが、特に不審な場所が見当たらない。

だが、シェリーの手が腰に差す剣にかかった瞬間、ゼスは彼女の思惑を理解し、意識を周辺の気配を探る事に集中する。

すると確かに感じたのだ。彼女が抱いているだろう違和感。

自分は集中しないと感じられない事が、彼女には無意識で感じて先んじたらしい。あの談笑の中で、だ。

「……成程。俺も気付いた。どうやら、来たようだな」

「――ええ。気を付けて」

シェリーは呟くように、ゼスに注意を促す。

困惑のまま状況を理解できない御者は、物々しい雰囲気の二人の騎士に思わず問う。

「い、一体何がある――」

その時、森林の方角から複数の馬の啼き声が響き渡った――。

第二十一話　「任務開始」（後書き）

・・ゼスとシェリーは「ピーオエード」を受け取った！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

第二十二話　「山紅猫団」（前書き）

本作は残酷な描写、暴力や下品な言葉遣い、セクシャルを含む場合があります。Ｒ－１５として指定していますので、十五歳以上の方だけ続きをお読みください。

第二十二話　「山紅猫団」

同日１６時５９分――

森林の方角から複数の馬の啼き声が響き渡り、砂煙が舞い上がっているのが見える。

御者と若い鉱夫はその正体が何であるかを理解し、表情を強張らせる。

地面を揺るがす地響き、地鳴り、そして迫り来る複数の気配。森林から、その姿がようやく確認できた。

ざっと三十人いるだろうか。

汚い身なりで肌を露出させている。全員が武装し、明らかに軍隊や傭兵、若しくは輸送団でもない。明らかに友好的な印象は、雰囲気や表情から何も感じない。

先頭の馬に乗る長身の男が剣を引き抜くと、後ろの全員がそれぞれの得物を取り出し続ける。

「例の山賊です！　二人とも、下がって！」

「あ、ああっ！」

「マジで出やがったよクソっ！」

御者と若い鉱夫がシェリーの声に従って、荷馬車の中に乗り込む。

それと同時、既に姿がはっきりと見え始めた距離に達した、先頭の馬に乗る長身の男が恫喝する。

「オラオラァッ！　命が惜しかったら、その荷馬車の荷物を置いてとっと失せろっ！」

彼の大声にはシェリーが剣を抜く事で応える。
その姿を認めた山賊達は半円状に広がって馬を止める。馬から降りる者も居れば、馬上のまま身構える者もいる。その全員が、獲物を狙う鋭い視線と共に、下卑た笑い声をあげつつ、威圧させていた。

「オラ、どうしたぁ！？」
「俺達にビビって、声も出ねぇか！」

だが、ゼス達にそれは効果がない。
あくまで山賊達に抵抗する姿勢を露骨に見せている。
荷馬車から覗き見る御者は、襲撃者の多さに恐れ戦いていた。

「こ、これほどの人数じゃ、どこへ逃げても追いつかれてしまうよ……っ！」
「大丈夫です。荷馬車から出ないで」

シェリーが再び注意を促して避難させる。

「早くしろっ、ぶっ潰されてぇのか！」

先頭に立つ一番長身の男が再度恐喝する。
どうやらその男がこの山賊達のリーダーらしい。山賊の必須アイテムなのかバンダナを頭に巻き、顔は整っているが見下すような視線と威圧するような表情で良い印象を与えない。顎には傷痕があり、肌は浅黒い。その手には非常に刃の薄い湾曲した片刃の刀身を持つシミターと呼ばれる曲刀を持っている。
長身で屈強揃いの中では目立つ長身で、恫喝するには恵まれた体格だった。

「……君たちか。この辺でうろつき、荷物を強奪しているという山賊“山紅猫団”というのは」

山賊達に注目されるゼスが、第一声に確認を取った。

彼らの服装は紅色が目立つ。視覚的にも彼らが要注意集団であるのは間違いない。

だが、慎重な彼は直接本人から確信を得たい。確信を得られない限りは、ここで殲滅するのは得策ではない為だ。

「あぁッ！？　うるせぇんだよ！　てめぇからぶっ殺すぞゴラ！」

「……否定しないということは、肯定とみなしていいんだな」

「チッ――てめぇは見たところ騎士か。だが、俺達とこの人数に対して、たった二人で敵うと思ってんのか？　だからよぉ、騎士さんは大人しく逝っちまいな」

ゼスと同じか、もしくはそれ以上の身長の山賊がシミターで虚空を斬る。

対し、背中に仕舞っている大剣の柄を手に掛ける。

あの殺気が再び身体から噴き出して、今まさに開戦になろうとした瞬間。

「――断るわ。民間人がいる前で、騎士が逃げ出したり、負けることなど有り得ない」

シェリーが遮るように声を上げ、二人の行動を制止させた。

噴き上がったテンションに水を差され、ゼスと山賊のリーダーは呆けた声をあげながら彼女に注目する。

彼女は背伸びでもしているかのように、あくまで堂々とした面持ちで山賊達と対面した。

「アンタ達が“山紅猫団”ね。私達は蒼衣の騎士団に所属している騎士よ。アンタ達に提案なんだけれど、私達が持っている荷物は殆ど益の無いものだわ。強奪するほどの価値はないものを求めて、これ以上罪を重ねて欲しくないわ。ここは穏便に道を開けてくれないかしら？」

「おい……！」

シェリーの思いもよらない発言にゼスは引き留めようとするが、逆に彼女が左手を挙げて止める。

こんな奴らがそんな提案をのむと思っているのか、このボクお嬢様は……！

ゼスの思った通り、山賊のリーダーは失笑して返した。

「んな事お前が判断することじゃねぇよ！　価値があるかないかは、俺達が奪った後に判断して金にする！　それを目的にしてるっつーのに、そんな要求を受け入れると思ってんのか！」

「まぁまぁアンちゃん、アンちゃん。見てくださいよ、その女。結構べっぴんですぜ」

怒鳴り散らす山賊のリーダーである、アンと呼ばれた男がその声に反応して振り返る。

彼の傍らに留まり馬上でボウガンを持っている、一見未成年と思しき青年が陰のある笑みを浮かべていた。

山賊達の中ではアンという男とは逆に目立たない、あまりに低い身長だった。やや黄色い肌と釣り目が印象的の男。体格から見ても、力仕事が得意ではなさそうだ。だが逆に、それが一団の中ではキレ者だと想像させる。

人の話を聞かなさそうなアンも、この小柄な男にだけは意見を聞くらしく、相変わらずの口調で応じた。

「だからなんだっていうんだ、ドゥ？　俺たちの仕事は、邪魔する奴は一人残らずぶっ殺して、荷物を全て持ち帰ることだろが」
「考えてもみてくださいよアンちゃん。確かに俺たちの仕事は邪魔する人間を削除して、荷物を奪うことだけだけど、ノルマとしてはそれで十分。後は俺達の自由でさぁ。報酬ついでに、女をおこぼれとして戴いて、俺たちの好きに扱っても文句は言われんのではないですかい？」

小柄の男であるドゥの言葉の意図を理解したのか、周りに居る山賊達がさらにその口元を歪め始める。
アンも彼の言葉に、確かにその通りだ、と至極納得したようだった。
話題の本人であるシェリーは彼らの話を理解はしていないようで頭を一瞬傾げていたが、その後何故か肩を震わせて一歩だけ後ずさった。

「な、何の話か判らないけど、私、とてつもなく嫌な予感がするわ……」
「……話から察するに、君が負けたらあの山賊達に良いように使われる事だけは理解できるな」

そんな騎士二人の呟きを余所に、山賊達の中で一人乗り気ではない人間がいた。

「で、でも……アン兄ちゃん、ドゥ兄ちゃん。あ、あの女、銀髪と同じ騎士だお。そう簡単には捕えられてくれないんじゃ……。そ、それに、下手に手を抜いたら、返り討ちにあうんじゃ……」

弱々しい声で異論を発したのは、なんと巨漢の男だった。
アンより身長が高く、数値にすると二オリュ以上。しかもず太い

腕と足、そして腹筋と背筋を持っている、力仕事に最も向きそうな巨人である。その見た目とは裏腹に、彼自身の内面は凄くひ弱に感じられてしまう、そんな雰囲気を発していた。

「何を言ってる、トゥワ。いくら相手が騎士だろうがあの格好、従騎士さんだぜ？　恐らく成り立てなんだろうけど、そんな奴が俺達相手に返り討ちにできるとは思えないぜ。何より、女相手に引けをとるはずがねぇ」

呆れ果てた表情でドゥが、トゥワと呼ばれる大男に偉そうに見上げながら一瞥する。

見下す立場でありながら大男は萎縮する。

「だ、だけどさぁ……。僕は、誤って身体を傷つけてしまうかも」

「ならトゥワ、お前はあの見るからに強そうな銀髪の騎士さんを狙うんだ。お前なら大丈夫の筈だぜ」

「……う、うん。分かったお」

大きく素直に頷き、トゥワの視線はゼスへと注がれる。

腕を組んだまま、二人の様子を眺めていたアンが舌打ちをしつつ、切り出す。

「話は纏まったのか、テメェら？」

「はい、アンちゃん。既に他の奴らもワタシの提案に乗り気ですぜ。後はアンちゃん次第だけど」

「馬鹿野郎、あの女に手を出すのは俺が最初に決まってんだろが！」

アンは吐き捨てるように断言してから、再び荷馬車側の騎士と対峙する。

先ほどのアンをリーダーに、参謀の役割を持っているドゥ、そし

て力専門のトゥワ。この三人が山賊達の中では特にしぶとそうだな、とゼスは判断した。それに、彼らは他と違って特別な関係にあるらしい。

「と、いうわけで俺たちの目的は、積まれた荷物全部とそこの女だ。後はそれらを置いて大人しくどこかへ行っちまえ。さもなくば、全員残らず殺してやるぞ！」

「女って……なんで私までいつの間にか目的に数えられているのよ！？」

「自分で女らしいとか判断するとはな。嘘はいけな――――」

「何か言ったかしら？」

「何も言っていないから魔働術式を作ろうとするのはやめるんだな……」

「おいテメェら、俺たちを無視するとはいい度胸してんなゴラァ！？」

短気なアンは、ゼスとシェリーの息の合った掛け合いに、地団駄を踏む。

彼は改めて舌打ちし、黒髪の騎士へと注目した。

「まぁ俺も鬼じゃねぇ。せめてもの情けはある。おい、女。大人しく武器を棄てて俺達の処へ来い。そうすれば、お前にも楽しい事を教えてやるよ」

「……どういうことよ？」

「ハッ、どういうこともねぇ。騎士でこれからの汚い仕事一筋に生きるよりは、俺達と居た方が何倍も楽しい事が待っている、って言っているだけさ。まぁ、俺の女になってはもらうがな」

荒野に吹き荒れる風の中でも、堂々と腕を組んで踏ん反り返るアン。言葉の端々には有無を言わせぬ音色が込められており、普通の

人ならば思わず怯えて従ってしまう程の威圧感を放っている。
だが、シェリーは感性だけで答えを出した。
「嫌よ。考え方の相違どころか、生理的に受け入れられないわ」
明らかな本心からの拒否に、ゼスは違った意味で感心したくなった。
「なん……だと……？」
眉を振わせるアンに、シェリーはさらに続ける。
「騎士に降伏なんてありえないわ。騎士は常に、人を護り、彼らに害なす存在を退ける権利と義務を併せ持つ存在。私はその行動理念を忠実に行って人々を幸福にしたい。だから、騎士としての自分を辞めるわけにはいかないわ」
凛とした彼女の態度に、後方の荷馬車から覗き見る御者と若い鉱夫が感極まった様子でその後ろ姿に視線を注いでいた。
「それに、アンタ達の話は聞いているわ、“山紅猫団”。メンバーの殆どが職に着かずに流れていった結果で意気投合した者たちである事。それを煽ったのが、リーダーであるアンタだという事も。こんな事は今すぐに辞めて、国の為に働きながら真っ当な生活を送ってほしいわ。そうすれば、何時か誰かから認めてもらえる日が来ると思う」
黒髪の令嬢騎士は、その突き差すような視線を一度も彼らから逸らさず、また臆さず。山賊達に改心を呼び掛けた。
彼女が何故彼らの背景を知っているのか疑問に思ったが、彼女が

出る前に魔働念話と呼ばれる遠距離通信魔働術でアサラムからの調査結果を受け取っていた、という事を思い出した。

――本当にこの娘はこうであって欲しいという願いをストレートにぶつけるものだな。

しかし、その説得で簡単に改心させる事ができれば、彼らが賊業をここまで続けられるなんて事は有り得ない。

事実、“山紅猫団”のその殆どが呆然とした後に、シェリーの言葉に失笑するが如く大笑いした。

「これは傑作だっ！　誰かから認めてもらうだと？　んなチャチなもん必要ねぇんだよ俺達にはな！　毎日が楽しけりゃそれで良いんだよ」

賊達の言葉を代表するように、アンが仰け反りながら一蹴。

ひときしり笑った後、舌舐めずりをしながら俯いた顔を上げてシェリーを睨みつける。

「だが……そうでなくては面白くねぇ。優しいぃ俺の提案を蹴ったって事は、例えどんな鬼畜な扱いされても、文句は言えねぇよなぁ――――っ！」

叫びながら彼が臨戦態勢に入ると、もはや問答は不要とばかりに賊達が一斉に続く。

……やはり無駄か。仕方ないな。

賊達の反応に、シェリーが再び説得を試みようとするのを、ゼスが無言で制する。

「ゼス……！　邪魔をしないでよ」

「もう無理だ。この衝突は避けられん。覚悟を決めるんだな」

背負ったままの大剣の柄を握り、その姿を露わにさせて身構える。
その瞬間、勢い立っていた賊達が畏怖するように怯んだ。恐らくは、自分から発せられる闘気にあてられたのだろう。
だがアンだけは、辛うじて威勢を取り戻し、仲間に叱咤する。
「怯えてんじゃねぇ馬鹿野郎が！　あっちはたったの二人、俺達はそれ以上、何を恐れる事がある！」
やがて賊達が落ち着き始めた頃、アンがゼスに向かって振り返る。
「へっ、俺達とやろうってか？　後悔すんなよ、無残に殺されてもよぉ」
「……ならば、お前達も俺に殺される事は覚悟しているんだろうな。それに、あまりそうやって恫喝すると、負け犬の遠吠えに聞こえるな」
「っ――――言うじゃねぇか色男が。テメェは考え得る限りのやり方で逝かせてやる」
鋭い眼光を放ち、傍から見れば鬼気迫る表情を浮かべ握り拳を作った。
ゼスの隣で、シェリーが遂に剣を持ち上げ、切っ先を彼らに向ける。そして、強い態度のままこれ以上は後がないように訴えかけるような口調で。
「これが最終通告よ。今すぐ武器を棄てて、投降して！　さもなければ、アンタ達を生きたまま確保する事はできなくなるわよ！」
「……へっ。強気で意気の良い女だな。だがよ、そんなキツメの表情が俺達の手によって苦痛に歪む瞬間は楽しみでもあるんだがよぉ！」

アンが、シェリーの意図を理解すること無く、仲間に下す命令。

「これ以上は話す事もねぇ！　テメェら、やっちまえ――――！」

その一声で、賊達は武器を構えて一斉に荷馬車へと殺到し始める。

彼らの動きは統率されてはおらず、思い思いの疾走でゼス達に襲い掛かる。

その中でも特に注目するのが彼らの後方から追随する、巨体。トゥワと呼ばれたあの巨漢の男だ。あれは要注意人物だ。油断すると肋骨を折られかねない。

「ドゥ、援護は任せたぞ！　俺は戦いに夢中になりたいんでなぁ！」

「判ったよ、アンちゃん」

「良いかトゥワ！　テメェは銀髪をやっちまえ！　俺もそいつだけはやっておきてぇ」

「わ、分かったお」

「黒髪の女は大人数で取り押さえろ、間違ってもガッついてその場で手を出すなよ！　荷馬車だけは絶対逃すな！」

オオッ――――！

彼らの雄叫びは自らを鼓舞させるものだ。

ゼスに迫ってくるのは、十人の山賊達とリーダーのアン、そして巨体のトゥワ。

身の丈程の大剣「銀狼の牙」をぴたりと水平に構えて迎え撃つ。

平衡感覚は良好、筋力に異常なし。いつも通りの戦闘を心がける。

あちらの主戦力が二人ほど、それで下っ端は少ない方で十分だと踏んだか。

――――だが……甘いな。むしろ大人数だからこその利点を使えばまともに戦えたものの、大半以上は女である奴に注目しすぎて致命的な欠陥が生まれている。自らの戦術利点を手放すとは既に勝負が

決まっているようなもの。
俺とまともにやり合う気なら、今の数倍は持ってくるんだな――
――！

小さく、ほんの小さい不敵な笑みを浮かべ、ゼスは大剣の柄を握り直し敵に向かって駆けた。

第二十二話　「山紅猫団」（後書き）

‥山紅猫団のアン、ドゥ、トゥワ他３０人が現れた！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2251w/

対なる剣～光と闇の狭間で何を見るか？～

2011年10月3日17時49分発行